平成二十七年度学位請求論文

王朝物語文学の研究―女房の機能から

学習院大学大学院人文科学研究科
日本語日本文学専攻博士後期課程
千野裕子

目次

序章・・・

補遺　王朝物語論
第一節　漂流譚―『うつほ物語』を起点に・・・

序章

物語は、どのような力によって動かされるのであろうか。主人公に何らかの目的や欲求――たとえば、「この姫君を獲得したい」――があるならば、それに向かう行為・行動があるだろう。それにともない、障害となるべき他者との対立や、自己の葛藤もあるだろう。そしてその障害が、主人公のさらなる行為・行動を喚起することになるだろう。しかし、それだけではない。主人公が何らかのゴールへと向かう過程には、無数の脇役・端役の登場がある。彼らは主人公と直接に接触し、その行動を変化させることがある。主人公以外の登場人物に影響を与え、そこから主人公の行動を変化させる結果を生むこともある。また、脇役・端役同士のつながりが出来事の引き金となることもある。むしろ、脇役・端役の機能こそが、物語を動かす力学になり得るのだ。とすれば、脇役・端役の機能を考えることは、物語そのものを論じることにつながるのではないか。

本稿では、こうした問題意識のもとで、王朝物語文学を論じていきたい。脇役・端役のなかでも女房[1]たちを中心に、彼女たちがどのような機能を果たしているかを考察し、物語の方法を明らかにしていく。「中心に」と述べたのは、作品によっては女房だけでなく、男性従者も対象としたいからである。それは脇役・端役としての対象を無数に広げようとしたいためではない。女房を考えていく場合、男性従者の存在を排除することの方が無理だからである。とはいえ、主として考察の対象となるのは女房の方である。貴公子と姫君の恋を主軸として展開する王朝物語において、姫君が貴公子たちのように自ら動くことは少ない。そのため姫君の手足となる女房は不可欠な存在だからである。また、姫君の傍に仕えていれば時として重大な情報を握ることもあり、男女の仲のみならず情報をも仲介する存在となる。女房たちの動向そのものが、物語を展開する原動力となり得る。

本稿で扱うのは『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』の三作品である。これらを対象に、女房たちがどのような機能を果たしているかという作品内部からの分析を行い、それぞれの物語の方法を解き明かしたい。大雑把な言い方になるが、「どのような女房たちの、何が、この物語の力となっているだろうか」というところになるだろうか。そのためには作品によって多少異なるアプローチが必要となる。

第一章で扱う『うつほ物語』は、女房の役割が物語の進展とともに変化していることが注目される。まず全体を見通した後、物語後半部の女房・従者たちを、情報の媒介者という視点から考察し、立坊争いの物語がどのように作りあげられているか論じていく。

第二章で扱う『源氏物語』では、女房の召名を鍵として論じていく。『源氏物語』において、同名別人の女房は似た造形がされる傾向にある。そして、その傾向の強い名を負う女房は、いずれも浮舟の周辺に登場している。それぞれの名の女房が正篇から作りあげられてきた造形を継承することによって、物語は何を描こうとしているのだろうか。女房名を起点とした新たな宇治十帖論を目指す。

第三章で扱う『狭衣物語』は、女房たちが情報の媒介者となり得ないことや、情報網が機能しないことが注目される。しかし、だからといって女房たちが物語の展開に関わらないわけではない。むしろ、「機能しない」ことによって物語が展開することがあるのではないかという視点で、その方法を探っていきたい。また、そこには『狭衣物語』の先行物語への意識が介在する。本稿とのテーマとはややずれるものの、第三章の後半では、『狭衣物語』における『源氏物語』引用についても考察する。

これら三章で、『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』の三作品について論じていく。それぞれの物語の方法を解き明かすなかで、王朝物語史の一側面も見えてくるはずである。

なお、女房・従者を対象とした先学は多く――主要人物を中心に据えた研究に比すれば少ないといえようが――その方法・視点も多岐にわたる。それらは各論にて触れさせていただくことになる。

＊引用本文は、特に断りのない場合、以下の通りである。

『うつほ物語』…室城秀之『うつほ物語　全　改訂版』（おうふう　一九九五）

『源氏物語』…新潮日本古典集成

『狭衣物語』『竹取物語』『伊勢物語』『枕草子』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『とりかへばや物語』…新編日本古典文学全集

『奥州後三年記』…野中哲照『後三年記詳注』（汲古書院　二〇一四）

『皇代記』…『青森県史　資料編　古代１文献資料』

『日本三大実録』『本朝続文粋』『朝野群載』…新訂増補国史大系

『古事談』…新日本古典文学大系

和歌は新編国歌大観を用いたが、表記を私に改めた箇所もある。

注

1 そもそも、「貴人に仕える女性」全般を指すものとして「女房」という語を用いるには問題があることは指摘されており、佐久間洋子・池田大輔・古田正幸などは論考に「侍女」という語を用いている。特に『源氏物語』において「女房」は高い身分の家に仕える者として他の侍女と区別されるということを指摘した古田正幸「『源氏物語』における光源氏と侍女の関係―「女房」「御達」「女ばら」の表現の差異―」（『平安物語における侍女の研究』笠間書院　二〇一四）が注目される。しかし、本稿ではこうした語彙の問題に立ち入るつもりはないので、「貴人に仕える女性」として一般的な「女房」の語を用いることとする。

第一章　『うつほ物語』論

第一節『うつほ物語』女房論

はじめに

『うつほ物語』には多くの女房たちが登場するが、固有名を持つ者を主人別に列挙すると次のようになる[1]。（括弧内の巻名は登場巻を示し、絵解や話題にのぼるのみでも登場として数えた。また、乳母・乳母子などである場合は括弧内の最後に示した）

あて宮……兵衛（藤原の君、祭の使、菊の宴～内侍のかみ、蔵開・下～国譲・下／乳母子）、木工（藤原の君、嵯峨の院～祭の使、菊の宴～あて宮、蔵開・下～国譲・上）、宮内（藤原の君、祭の使）、中納言（藤原の君、祭の使、菊の宴～あて宮、国譲・上）、少納言（藤原の君、あて宮）、殿守（藤原の君、祭の使、国譲・中）、孫王（春日詣～吹上・上、あて宮、蔵開・上～楼の上・上）、帥（祭の使、あて宮）、宰相（あて宮）、中将（あて宮）、小弁（あて宮）、小大輔（あて宮）、少将（あて宮、国譲・上）、左近（あて宮）、右近（あて宮）、衛門（あて宮）、内蔵助[2]（あて宮）

源忠澄……長門（藤原の君／乳母）

今上帝……叡負（あて宮／乳母）

大宮……大弐[3]（内侍のかみ）

朱雀院女一宮……叡負[4]（沖つ白波）、宰相（沖つ白波、蔵開・上）、右近[5]（沖つ白波、蔵開・中／乳母）、孫王（蔵開・上、国譲・上～国譲・中）、宮（蔵開・上）、中務（蔵開・中）、中納言（国譲・上）、按察使[6]（国譲・下）、左近（国譲・下／乳母）、帥（楼の上・下）

朱雀帝……叡負（蔵開・上～蔵開・中／乳母）

いぬ宮……大輔（蔵開・上～蔵開・中、国譲・上～国譲・中／乳母）、宮（楼の上・上／乳母）、源氏（楼の上・上／乳母）、稚児宮（楼の上・上）、兵衛（楼の上・上）、ちやは[7]（楼の上・上～楼の上・下／乳母）、中納言（楼の上・下）、侍従（楼の上・下／乳母）、大弐（楼の上・下

／乳母）

嵯峨院女三宮……右近[8]（蔵開・中～蔵開・下）

さま宮……兵衛（蔵開・下）、中将（蔵開・下）、孫王（国譲・上）

嵯峨院の小宮……左衛門（国譲・中）

朱雀院女二宮……中納言（国譲・中）、越後（国譲・下／乳母）

宰相の上……大輔（楼の上・上）、少将（楼の上・上）

俊蔭の娘……侍従（楼の上・上）

源涼……帥（楼の上・下）、中納言（楼の上・下）

これらの女房たちには、同じ主人に仕える同名の女房でも必ずしも同一人物ではない可能性があったり、異なる主人に仕えているが同一人物の可能性があったりする者もいるが、仮に同名の人物が同じ主人に仕えていれば同一人物、異なる主人に仕えていれば別人として整理した。

こうして整理すると、登場する女房に偏りがあるのが分かる。まず、あて宮が入内するまで固有名を持つ女房はあて宮づきの女房しか登場しない。唯一の例外は忠澄の乳母の長門であるが、これもあて宮との仲介を期待して頼まれる女房の一人である。

その後、あて宮が入内すると様々な主人のもとに女房たちが描かれるようになる。特に蔵開・上巻以降に特徴的なのは、乳母が多く登場するようになることである。あて宮[9]、女一宮、さま宮といった女君たちが次々に出産していく中で乳母の登場は必然ともいえるが、生まれた子だけでなく、女一宮や女二宮の乳母も新たに登場してくる。

また、物語の後半に至って新たに登場する女房が多い一方で、長きにわたって登場している女房もいる。あて宮づきの孫王の君や兵衛の君である。彼女たちの機能は物語の進展とともに変化しているとおぼしい。

本節では『うつほ物語』において固有名を持つ女房たちがどのような機能を果たしているかを物語の進展とともに考察していきたい。

一　あて宮求婚譚における女房

（1）実忠と兵衛の君

『うつほ物語』の前半部においては、固有名を持つ女房たちはあて宮と求婚者たちの仲介としての機能に終始する。登場する女房の数は限られ、そのほとんどが常に同じ求婚者との仲介をしている。

初めに登場するのはあて宮の乳母子の兵衛の君である。彼女は「かたちも清げに、心ばへある人」（藤原の君　七〇）で、源実忠との仲介役となる。この若く美しい兵衛の君と実忠のやりとりは軽妙で、兵衛の君もあて宮に返事を書かせるために熱心に働きかけている。また、「祭の使」巻には実忠の兵衛の君に対する「などか、一夜は、下り給はずなりにし。今は、君さへつれなくなりまさり給ふこそ、わびしけれ」（祭の使　一三四）という発言がある。夜、兵衛の君が局に下がったところに実忠が訪れようとしていたのは、ただ仲介を求めるためだけではあるまい。兵衛の君と実忠との間には性的関係が疑われる。兵衛の君は実忠と性的関係を結んだ、いわゆる召人の女房であるように描かれているのである[10]。もっとも、実はそうではなかったことが国譲・上巻に至って明かされることになるのであるが、少なくともあて宮求婚譚の範囲においては、兵衛の君は実忠の召人であるかのように描かれているというわけである。召人であれば、その性的な結びつきゆえに兵衛の君が女房としての職分以上に実忠への肩入れをしてもおかしくない。兵衛の君が召人であるかのように描かれるということは、実忠が兵衛の君との結び付きによって、他の求婚者たちよりも有利にことを進めていることを示しているのである。

この兵衛の君の尽力によって、実忠は求婚者の中で最も早くあて宮から返事をもらうことになる。さらには月夜の晩にあて宮の住む寝殿に立ち寄って、ちご宮と歌を交わすことにも成功している。この時には木工の君という「労ある者」（藤原の君　七七）も協力しているほか、実忠の詠んだ歌に対して「皆人あはれがる」（藤原の君　七七）とあり、実忠はあて宮の側近女房たちを味方につけていることがわかる。

この月夜の場面まで、実忠は求婚者の中で最有力候補のように描かれている。返事をもらうのも、近くまで寄ることができたのも、多くの求婚者たちの中で実忠が最初である。それは実忠が兵衛の君を召人にしていると思しいからである。しかも、兵衛の君はただの女房ではない。彼女はあて宮の乳母子である。乳母とともに乳母子は幼いころより主人の傍にある。兵衛の君はあて宮の最側近の女房なのだ。仲介をする者の中で最もあて宮に接近できる

者を味方につけたことが、実忠を有利にさせたのだろう[11]。

しかし一方で、月夜の晩以降、実忠の形勢は不利になっていく。文の取次を頼まれた兵衛の君は実忠に「さ思ひ給ふれど、『故郷ものし給ふ』とこそ思しためれ」（藤原の君　一〇〇）と言う。兵衛の君の発言によって物語は実忠に妻子がある可能性を初めて語るのである。その上、兵衛の君は「さらに見給へじ。『何にか参りつる』とのたまはむものを。召しありとも、今は参り来じ」（藤原の君　一〇〇）と言う。兵衛の君は乳母子という最側近の立場にあるからこそ、あて宮の機嫌を損ねるわけにはいかない。乳母子である兵衛の君を仲介にすることで他の求婚者に一歩先んじた実忠であるが、彼女が難色を示し、また、実忠の妻子の存在を語ることによって、求婚者の中で最有力候補であるかのように描かれてきた実忠に影が落とされたのである。

（2）三春高基・滋野真菅と女房たち

あて宮求婚譚において女房を仲介に使う求婚者の場合、どの女房を味方につけることができるかによってその後の展開も左右される。実忠とは逆に到底側近とはいえない女房を頼って失敗するのが、三奇人のうちの三春高基と滋野真菅である。

高基が頼るのは宮内の君という女房である。彼女はどの程度の格の女房であるか判然としない。ただ、あて宮巻の絵解に、入内したあて宮の周りの女房が列挙される箇所がある。この中に宮内の君の名はない。高基が仲介に頼んだこの宮内の君は側近の女房ではないのだろう。

真菅が頼ったのは、近隣に住む嫗に紹介された長門という老女房である。長門は忠澄の乳母である。あて宮求婚譚に登場するあて宮づきではない女房の唯一の例であるが、ここはあて宮づきではないということに意味があろう。真菅はあて宮づきの女房を頼ることができなかったのである。いくら長男忠澄の乳母とはいえ、あて宮からは遠い。しかも、長門は「殿には、人、いと多かれども、我らが友達にすべき人もなし」（藤原の君　九六）と発言する有様である。邸内に友もない長門は孫のたてきを使って真菅からの文をあて宮に渡すが、案の定返されてしまった。それは文の酷さゆえであるが、そもそも長門に仲介を頼んだ時点で結果は見えていたといえるだろう。次に真菅はやはり老女房である殿守を頼る。この殿守はあて宮づきであるが、高基が頼った宮内と同じく、あて宮巻の絵解には名がみえない。殿守もやはり側近ではなく、この女房を介しての求婚は困難であろう。

高基にしても真菅にしても、側近の女房を仲介に使うことができない点で既に他の求婚者たちから大きく出遅れているのである。他の求婚者たちは、

実忠のように側近女房を使う他は女房ではなくあて宮の兄弟を仲介にしている。側近女房でもあて宮の兄弟でもなく、到底見込みのなさそうな女房を介させることによっても、物語は高基や真菅が求婚者としては問題外であることを示しているのである。

なお、高基と真菅は女房のもとへ行くのではなく、自邸に女房を召していることでも共通している。実忠の場合は正頼邸に入り浸りであったので、兵衛の君のもとをしばしば訪れている。嵯峨の院巻から求婚者として登場してくる仲忠も同様である。しかし、高基と真菅は自邸に女房を呼ぶばかりである。真菅にはあて宮入内の噂を聞いて殿守の曹司へ行く場面があるが、そこには「殿守の曹司に忍びて入りて」（藤原の君　一〇三）とある。「忍びて」ということから、真菅は正頼邸への自由な出入りを許されていないのだろう。高基も真菅も、正頼邸に出入りできないために、女房たちをわざわざ自邸に呼ぶしかなかったのだと考えられる。ここからも、他の求婚者たちより不利な状況にあることがわかる。

（3）仲忠の登場と孫王の君

春日詣巻に年立上先行する嵯峨の院巻で、仲忠はようやくあて宮の求婚者として登場する。彼が仲介に頼ったのは「孫王の君とて、よき若人」（嵯峨の院　一六〇）であった。この孫王の君は仲忠があて宮求婚譚に参入にするにあたって初めて登場した女房であるが、『うつほ物語』中で最も登場回数の多い女房でもある。

彼女は兵衛の君と並ぶ最側近の女房である。あて宮は瀕死の仲澄と対面するときにこの孫王の君と兵衛の君のみを連れているし（あて宮）、春宮があて宮の里下がりを許さなかった折に他の者との取次として指名されたのも孫王の君と兵衛の君と女の童のあこきであった（蔵開・下）。

しかし、乳母子である兵衛の君に対して、孫王の君は何をもってして最側近でいるのだろうか。吉海直人は、孫王の君を嵯峨院の血脈につながる者ではないかと想定している[12]。国譲・上巻において孫王の君には女一宮、さま宮にそれぞれ仕える妹があり、さらに上野の宮の子であることが判明するが、上野の宮を嵯峨院の皇子と仮定すれば、上野の宮と孫王の君姉妹とそれぞれの主人が全て同じ系譜に収まるとし、信頼できる親類の女房としてとらえているのである。また、それに類する例として『浜松中納言物語』・『松浦宮物語』の女王の君、『源氏物語』の王命婦を挙げている。

吉海は『源氏物語』の王命婦を「もちろん皇族出身だからといって、それだけで藤壺（先帝）の親類であると断定することは無理であろう」とした上

で「その可能性を読むことによって、信頼できる側近であることが納得しやすいというだけなのである[13]」とする。とすれば、『うつほ物語』の孫王の君も無理に系譜を特定する必要はあるまい。この孫王の君も王族であるらしいということで、父源正頼が一世の源氏であり母大宮が嵯峨院の皇女であるあて宮の親類の可能性があると読むだけで充分なのではないか。彼女は春日詣巻から登場していながら、妹の存在が示された[14]のも系譜が示されたのも国譲・上巻に至ってであった。孫王の君の系譜は後から付与されたものなのだから、あて宮求婚譚に登場した時点では「孫王」というその名によってあて宮の親類の可能性が示されているにすぎない。むしろ、「孫王」という名によって親類の可能性を暗示していることが、孫王の君の存在意義を考える上で重要なことではないか。

孫王の君の登場は、仲忠があて宮の求婚者として初めて登場してくるのと同時であった。仲忠が登場するまで、求婚者たちの中で最有力候補として描かれていたのは、あて宮の乳母子である兵衛の君を仲介にした実忠であった。そこに仲忠が求婚者として入っていくには、兵衛の君と同等、あるいはそれ以上に有力な仲介者が必要だったのではないか。もちろん、仲介者がなくても仲忠は既に正頼や大宮からも一目置かれ、あて宮からも拒否されていない。しかし、実際に文を送って求婚していく様を描く上で仲介者の存在は必要である。そして、仲忠を求婚者の中で最有力候補として描くためには、その仲介者もやはりあて宮の最側近の女房にする必要があったのではないだろうか。兵衛の君がいる以上、乳母子という手段はもはや使えない。そこで「孫王」というきわめて珍しい女房名[15]をつけることによって、あて宮の親類である可能性を暗示し、最側近の女房として登場させたのではなかろうか。

かくして、仲忠は孫王の君という最側近の女房を介して求婚を開始することになった。ともに最側近の女房を仲介としている仲忠と実忠のやり方はよく似ている。そして、似ているところがあるからこそ物語はその差異の部分でこの二人の求婚者を確実に描き分けている。

実忠と兵衛の君の関係同様、仲忠もやはり孫王の君を召人にしているとおぼしい。「かたちも清げ」（藤原の君　七〇）である兵衛の君に対して、孫王の君も「よき若人」（嵯峨の院　一六〇）であった。仲忠は吹上の土産をあて宮に贈る際に、孫王の君にも心ざしとして贈り物をしている（吹上・上）。もちろんそれだけでは孫王の君が召人であると判断できないが、後に蔵開・上巻で仲忠は孫王の君に対して「私心をあらむものを」（蔵開・上　五二九）と発言しているし、国譲・上巻でも孫王の君は「右大将、昔、思ひて語らひしかば、それをのみ思ひて、よき人・君達のたまへど、耳にも聞き入れず」（国譲・上　六五八）と説明されている。あて宮求婚譚において兵衛の君・孫王の君はいずれも実忠・仲忠の召人であることをにおわせているが、後になって実は実忠の召人ではなかったことが明らかになる兵衛の君と、仲忠の召人であったことがはっきりした孫王の君というように、真相は対照的に示

される。

祭の使巻の夏神楽の場面では、孫王の君・兵衛の君は中納言の君・帥の君らとともに岩の上で楽器の演奏をしている。ここでも、仲忠が孫王の君に、実忠が兵衛の君に歌を詠みかける姿が描かれている。仲忠の方は孫王の君から返事があったが、あて宮からの返事の有無は描かれない。一方、実忠の方はあて宮が「物ものたまはず」（祭の使　二一九）であったことがはっきりと記されている。似た場面を持ちつつも、二人の間には差があることが示されているのである。その後も仲忠は孫王の君の尽力もあってしばしばあて宮と贈答をしているが、実忠の方は菊の宴巻に至ってついに兵衛の君に仲介を断られるに至ってしまう。その菊の宴巻において実忠は「兵衛の君を局に呼びて」（菊の宴　三四一）、「兵衛の君を呼びて」（菊の宴　三四三）と二度にわたって兵衛の君を呼んでいる。それはあて宮入内直前の状況をかんがみれば当然であろうが、かつては自由に兵衛の君のもとを訪れていたのに対して、もはや絶望的な状況になったことを示している。この後、実忠は一家離散に追い込まれ、求婚者のうちでも特に悲劇的な結末を迎えることになる。

いよいよあて宮が入内する時の実忠と仲忠も対照的である。仲忠は孫王の君に、実忠は兵衛の君にそれぞれ心ざしとして装束を贈り、あて宮宛の歌を取り次がせている。しかし、実忠は兵衛の君にのみ贈り物をしているのに対して、仲忠はあて宮にも贈り物をしている。この後もあて宮と良好な関係を保ち続ける仲忠と、小野に隠棲してしまう実忠との差異は、この贈り物にも表れているといえよう。

以上のように、あて宮求婚譚においては女房たちは求婚者たちとの取次に終始するが、どの女房がどのように対応するかによって、その求婚者の求婚譚における位置づけがなされているといえるだろう。

なお、実忠・高基・真菅・仲忠の他に、女房を取次にした求婚者としては仲頼がいるが、女房を介して求婚する具体的な描写は他の者ほど多くない。仲頼は木工の君を介しているが、この木工の君は月夜の晩に実忠とちご宮の贈答をはからった（藤原の君巻）女房であり、祭の使巻で実忠に対して冷たいあて宮に「なども、人に情けなく」（祭の使　二三九）と言った者である。その同情的な姿勢のためか、実忠も菊の宴巻でこの木工の君を頼る趣旨の贈答をしている。仲頼との関係においては、嵯峨の院巻の賭弓の節会で仲頼が話しかけたのが始まりと見られるが、その後はあて宮巻まで描かれない。あて宮巻で仲頼は木工の君に涙を流して対面し、木工の君は出家を思いとどまるよう言っている。木工の君は特定の求婚者の担当というよりは、求婚者に対して同情的な女房として描かれているようである。

また、仲澄もあて宮の住む寝殿で泊る際に中納言の君・少納言の君といった女房たちと話をしている（藤原の君）。仲澄は女房を仲介にしているわけで

ないので一概にはまとめられないが、女房を仲介にした求婚者のうち仲忠を除く実忠・高基・真菅・仲頼に仲澄も加えれば、いずれも求婚者の中で特に悲劇的な結末を迎えた人物たちであるといえる。

春宮入内によってあて宮求婚譚が終わりを告げると、仲介の女房も一応の役目を終える。あて宮巻の絵解には、「ここは、大将殿の御局。ここに、あて宮、中納言の君歳十九、孫王の君二十一、帥の君十七、宰相のおもと十八、兵衛の君二十、中将・小弁・小大輔の御・木工の君・少将の御・少納言・左近・右近・衛門などいふ人、いと多かり」（あて宮　三六〇）と女房が列挙されている箇所がある。ここにしか名の見えない女房も多いが、あて宮求婚譚を終えて、今まで求婚者たちとの仲介をしてきた女房をまとめ直すかのような箇所である。あて宮が入内するまで固有名を持つ女房は長門を除いてはあて宮づきの女房しか登場していなかったが、これ以降、他の人物に仕える女房も登場し、物語における女房の機能も変わっていく。

二　物語後半部の女房

（1）召人ではなかった兵衛の君

あて宮求婚譚が終わりを告げると、あて宮づき以外の様々な女房たちが新たに登場してくる。その一方で、兵衛の君・孫王の君は引き続き登場する。齋木泰孝は、

ふつう、物語の端役としての侍女は、一人が一つの役割を荷って登場する。例えば、恋物語で男性を女性に仲媒した侍女は、その物語の終了とともにそのまま姿を消してさしつかえない。主人公は同じであっても、場面が変り別の話になれば、また新しい侍女を登場させればよい。物語の侍女は、主人公のある限られた側面の分身であると言ってよかろう。貴宮の孫王や兵衛は、仲媒の役割を終えた後も登場しつづけるのであるが、このようなことは、物語に登場する大多数の侍女からすればむしろ例外的なことである[16]。

としている。兵衛の君や孫王の君が求婚者の仲介の役割を終えた後も登場するのは、確かに例外的なことかもしれない。しかし、新たな役割をもって引き続き登場することの意味を考える必要はあろう。物語後半部における兵衛の君や孫王の君の役割は、別の女房では果たすことができない。やがて立坊

争いへ進展していく物語が、彼女たちの存在を必要とするようになる。

孫王の君も兵衛の君もあて宮の最側近の女房として登場していたが、それはあて宮巻以降さらに強調されている。先に述べたようにあて宮巻であて宮が瀕死の仲澄に会う場面は「兵衛の君・孫王の君ばかり」（あて宮　三五六）を供としているし、あて宮が仲澄に宛てた文を密かに渡したのも兵衛の君であった。内侍のかみ巻では、藤壺で仲忠は兵衛の君を介してあて宮と話をしている。また、蔵開・下巻であて宮の里下がりを許さない春宮が取次として指名したのは孫王の君・兵衛の君・女の童のあこきであった。なお、この時、孫王の君は正頼の命を受けてあて宮の退出を求めに行って、これを拒否する春宮に蹴られるという憂き目を見ている。その後、あて宮の里下がりの場面でも「兵衛の君・孫王の君などぞ候ひける」（国譲・上　六三三）と、この二人の名が示されている。求婚者たちの取次という役割を終えても、彼女たちは常にあて宮の側近として働き続けており、むしろ側近であることは次第に強調されていく傾向にあるのである。

さらにこの二人は、この二人でなくては果たせない役割を担うことになる。かつての求婚者との再びの仲介である。

国譲・上巻、実忠は正頼とあて宮によって政界復帰を要請される。まず「兵衛の君の、兄の童なりしが、今は春宮の蔵人になし給へる」（国譲・上　六四四）というこれはたが実忠と対面し、かつて兵衛の君が菊の宴巻で実忠に返した箱を再びあて宮宛に受け取る。その後、この箱をめぐってあて宮の前で孫王の君・兵衛の君・木工の君・少将の君が噂話をする。木工の君は以前より度々登場している女房である。少将の君はあて宮巻の絵解に名があった。そこで兵衛の君は「あはれ、この頃こそ、昔思ひ出でらるれ。宰相の君の思し惑ひ給ひしこともこそ、つれづれと思ひ出でらるれ」（国譲・上　六五八）と言う。古参の側近女房らによる、あて宮求婚譚の回想が行われているのである。しかし、そこで兵衛の君はさらに「宰相の君よ、人し給はざりしは。一所おはせし御曹司に、召ししに、常に参りしかど、『と聞こえよ。かう聞こえよ』とのみこそ。いささかなる私戯れをこそし給はざりしか」（国譲・上　六五八）と言う。あて宮求婚譚において実忠の召人のように描かれていた兵衛の君であったが、実はそうではなかったことがここに至って初めて明らかになるのである。これには他の女房たちも半信半疑の反応を示しているが、これ以降、実忠が兵衛の君を召人にしなかったことは繰り返し語られるようになる。

実忠は中納言に昇進し、正頼に礼を述べに来る。そこであて宮とも言葉を交わす仲介になったのは、やはり兵衛の君であった。正頼は兵衛の君に向かって「兵衛は。ここにものし給ひつつ、『対面せむ』とありし昔人、ものし給へり。聞こえよ」（国譲・上　六七八）と言う。正頼は兵衛の君に実忠の召

人であったかのような扱いをするのである。しかし、実忠自身はあて宮に「殿に侍りしまでは、女をよそに見給へき。それも、兵衛の君に物聞こえつるなむ」（国譲・上　六八〇～六八一）と兵衛の君との関係を否定する。ここでの対話は、妻子とのよりを戻してほしいと願うあて宮と、厭世感を見せ続ける実忠の平行線で終わる。その時、実忠は兵衛の君との関係までも否定して、女を寄せつけないことを語っている。一方、正頼は実忠との対面に兵衛の君を使い、あて宮も「時々、兵衛がもとに訪はせ給へ」（国譲・上　六八二）と言う。あて宮は償いの表明とともに政局をにらんで実忠の政界復帰をはかるが、実忠にはほとんど通じない[17]。その時、あて宮は実忠との間をつなぐために兵衛の君を使おうとし、それを拒否するために実忠は兵衛の君との関係を否定する。しかし、実忠はこの対面の後、兵衛の君と語り明かすし、後に文を送ってくる時もやはり兵衛の君を介している。また、結局は政界に復帰し、妻子とのよりも戻す。とはいえ実忠は北の方に向かって「この西の院にありし時、物聞こえし人の御もとなりし兵衛といひしになむ、物聞こえ継がせしかど、ゆめに近きことも言はずなりにき」（国譲・中　七三八）と言っている。実忠は北の方にまで兵衛の君との関係を否定して女を近づけたくないことを主張するのである。政界復帰と妻子との関係修復は成功したかのようにも見えるが、実忠自身は煮え切らない。その時に言い訳に使われているのが兵衛の君との関係だったのである。

あて宮求婚譚において、あて宮の乳母子として実忠の求婚を取り次いでいた兵衛の君は実忠の召人であるかのように描かれてきた。しかし、物語が再び実忠を語ろうとしたとき、政界復帰と妻子との関係修復に煮え切らない実忠を描くために、兵衛の君が召人であったという設定は否定された。かつてあて宮だけを想い、あて宮を得られなかった後も女を受けつけないという頑なな実忠像を描こうとする物語の要請によって、兵衛の君は召人ではなかった女房としてとらえなおされたのである。

（2）召人としての孫王の君

あて宮求婚譚において、兵衛の君を使う実忠と孫王の君を使う仲忠のあり方は時に対になって語られていた。物語の後半に至って兵衛の君は実忠の召人であったことが否定されたが、これとは対照的に、孫王の君は仲忠の召人であったことがはっきりとし、強調されていく。

あて宮が入内して後、孫王の君が初めて登場するのは蔵開・上巻である。仲忠が春宮に右大将昇進の礼を言うために藤壺へ行ったところで、孫王の君

を仲介にする。そこで仲忠は孫王の君に向かって「おほかたこそ、ともかくもあらめ。私心をあらむものを。などか思し捨てたる」（蔵開・上　五二九）と言っている。孫王の君は「それも、今は、何か」（蔵開・上　五二九）と切り返し、仲忠はさらに「昔に思しなすか。よろづ、忘れずながらこそ。いかにぞ、宮の御心は」（蔵開・上　五二九）と言う。孫王の君が仲忠の召人であったことがはっきりした場面である。しかしそれと同時に、仲忠がすかさず「いかにぞ、宮の御心は」（蔵開・上　五二九）と言っていることを見逃してはならない。仲忠は昔の関係を持ち出して個人的なつながりを確認した上で、孫王の君から情報を聞き出そうとしているのである。それに対して、春宮の寵愛が深くてよからぬ噂があることを語った孫王の君に、仲忠はさらに「このよからぬ言の筋には、梨壺をも安からざらむかし。これを思ふこそ、かたはらいたけれ」（蔵開・上　五二九）と言うことによって梨壺の情報をも聞き出すことに成功している。仲忠はこの応酬によって初めて梨壺の懐妊の可能性を考えることになる。孫王の君は仲忠に初めて梨壺の情報をもたらす存在として機能しているのである。

ここに孫王の君の役割の変化が示されている。仲忠とあて宮の仲介をすることが役割の中心であった孫王の君は、ここから単なる仲介を越え、仲忠に情報をもたらし、双方の政治的な結びつきを取り持つ役割を果たすことになる。これは仲忠自身が確認しているように、召人として個人的な結びつきのあった孫王の君だから可能なことである。頑なで後ろ向きな実忠像の造形のために、兵衛の君は召人であったことが否定された。一方、仲忠は将来の国政を担う者として前に進んでいる。大井田晴彦が述べているように、仲忠は「青春の思い出を胸に封じ込め、藤壺との新たな関係を模索する[18]」のであり、そのためには孫王の君との関係を確認しておく必要がある。実忠と兵衛の君との関係と、仲忠と孫王の君との関係の描かれ方は対照的であるといえるが、それは物語後半部における実忠、仲忠のあり方によって要請されたものであるといえるだろう。

（3）血脈・人脈と噂話

孫王の君は、仲忠の召人であったことが確認されただけでなく、姉妹があったことも明らかになる。兵衛の君が召人でなかったことが発覚した場面として確認した、国譲・上巻における女房同士の対話の場面である。ここで物語は、孫王の君の系譜を語る。

この孫王の君の母は、帥の君、優にいますがりて、この源中納言殿の渡り給ひぬるをとなして、いとどかしこうおはす。娘は三人、大君これ、中の

君は大将殿の孫王、三の君は源中納言殿の孫王。この御方の、昔、かたちなんどよくて、髪丈にあまりて、ものものしう清げなる人の、心憎く、心あるなり。右大将、昔、思ひて語らひしかば、それをのみ思ひて、よき人・君達のたまへど、耳にも聞き入れず、君の御身に添ひて、御前片時離らであり。紀伊国のをば、よろづに労はりて、局なる童・大人・下仕へまで労る。大将も、忍びて、をかしきやうにて、物心ざしなどし給ひしかど、宮の御後は、さもあらず。

（国譲・上　六五八）

この孫王の君は三姉妹の長女であり、母親は「帥の君」と呼ばれていたらしい[19]。次女は蔵開・上巻に既出の女一宮づきの孫王の君で、三女はここに名がみえるのみで実際に登場しないが、さま宮づきであるという。長女の孫王の君は仲忠の召人であったが、関係が昔のものとなっても独身のままいるという。「右大将、昔、思ひて語らひしかば、それをのみ思ひて、よき人・君達のたまへど、耳にも聞き入れず、君の御身に添ひて、御前片時離らであり」（国譲・上　六五八）とあるように、孫王の君は仲忠への想いとあて宮への忠誠をあて宮に誠実に仕え続けることによって示している。それがここに語られることには意味がある。先に仲忠は孫王の君から梨壺の情報を得たが、この後も仲忠とあて宮の交流は常に孫王の君が仲介している。物語が次第に立坊争いへと焦点を絞る時、あて宮と仲忠は対立してもおかしくはなかった。しかし、仲忠は梨壺腹皇子の擁立をせず、むしろあて宮との結びつきを強めていく。この時に二人の仲介となる孫王の君は、仲忠とあて宮の双方から信頼されている女房でなくてはならない。国譲・上巻に至って、孫王の君が仲忠の召人であったこととあて宮から片時も離れず仕えていることが示されているのは、それを確認するためなのではなかろうか。

それとともに、孫王の君に二人の妹がいることが示されているのも重要である。それぞれ異なる主人を持つ三人の孫王の君によって、あて宮、女一宮、さま宮の結びつきが確認される。実際にあて宮と女一宮が対面する場面では双方に仕える孫王の君姉妹も対面している。そこではさらに、彼女たちが上野の宮の子であることが明らかになる。仲忠の召人である美しい孫王の君が三奇人の一人である上野の宮の子であったというのは意外な展開である。実際、あて宮づきの孫王の君は仲忠からの評価を気にして「面恥づかしけれ」（国譲・上　六六二）と言っている。これに対して女一宮づきの孫王の君は、仲忠が「かの親王の御子にて、そこたち、いかで、かうだにあらむ」（国譲・上　六六二）と言ったことを伝えている。上野の宮という奇人を持ち出した笑い話のようになっているが、このように孫王の君姉妹によって情報がやりとりされていることに注目しておきたい。女房たち姉妹がそれぞれの主人の情報を交換することがあることが示されているのであり、あて宮と女一宮や仲忠との結びつきを示している。

さらに、仲忠があて宮腹の若宮に書の手本を贈った時に、双方の孫王の君が取次として気が利かず、仲忠もあて宮も「心地なき」（国譲・上　六五六・

六六二）と偶然にも全く同じ言葉で叱った話もここで交わされている。このすぐ後に、仲忠は女一宮を迎えに来て、あて宮の琴を聞く。その奏法は仲忠のものと同じで、女一宮も仲忠もそれに気づく。琴の奏法でもって仲忠とあて宮のつながりを示すこの話の前に、孫王の君の失敗談を載せるのは偶然ではあるまい。琴の奏法が同じであるように、仲忠とあて宮のもとでは同じように女房が失敗をし、同じように叱られていたのである。孫王の君は、仲忠の召人としてだけでなく、姉妹でもって仲忠とあて宮の結びつきを強調する役割を果たしている。

なお、孫王の君姉妹にはさらに四女もいたことが楼の上・上巻で明かされる。この四女はいぬ宮の秘琴伝授の噂をあて宮にもたらす役割を果たす[20]。孫王の君姉妹の対話も含め、物語後半部には女房同士の親戚関係が明かされることが多く、そこから情報が伝わっていく様が描かれるようになる。それは、梨壺腹皇子立坊の噂に振り回される正頼をはじめとして噂を多く行きかわせて立坊争いを描く国譲・上中下巻や、秘琴伝授の噂に人々が次々と期待をふくらませていく姿を描く楼の上・上下巻といった、噂話や情報を多く行きかわせた物語後半部のあり方と連動していよう。三田村雅子は「出来事そのものの面白さよりも、出来事の受け止め方を、その噂がひきおこす波紋そのものを、物語は描いていこうとしているようなのである[21]」としている。女房たちの親戚関係は情報の伝達のために張り巡らされたネットワークなのだ。兵衛の君の弟のこれはたが東宮の蔵人として登場したり（国譲・上）、実は在原忠保が兵衛の君の親代わりであったことが明かされたり（国譲・下）、宮の君の親族の少将の君と俊蔭の娘づきの侍従の君が従姉妹であったり（楼の上・上）することは無意味な設定ではない。人物同士が近い関係にあることを示すことで、物語は情報の行きかうネットワークを暗示していくのである。これは物語の進展とともに女房たちに新たな役割を求めた結果であったといえるだろう。

（4）身分の高い女房たち

物語の最終盤、国譲・下巻から楼の上・下巻にかけての女房の特徴として、身分の高い特別扱いの女房が多いということが挙げられる。

国譲・下巻には仲頼の妹が按察使の君という女房として女一宮に出仕することが語られる。兼雅の妻妾の中で三条殿に引き取られなかった彼女は、仲忠に引き取られ、女房となった。このことから齋木泰孝は「昔の一条邸での彼女の地位は、むしろ召人に近いものであったのではなかろうか[22]」としている。

似たような例が「楼の上・下」巻に登場するいぬ宮の乳母の侍従である。彼女は、

嵯峨院の親王の、兵部卿におはせしが御娘なり。故源侍従の、童にて、忍び相手なりし、一の宮の御はらからの宮の、いと忍びて、かたちいみじくうつくしげなれば、通ひ給ひしに、乳をただしばし参りけれど、「乳母とすべき様ならず」とて、名はつきたれど、宮のいとらうたき者にし給へりけるなり。

（楼の上・下　八八五）

と説明される。嵯峨院の孫で、仲澄の忍び相手で、女一宮の兄弟の宮の恋人でもあった。その身分の高さと縁で、召名のついた女房であるが別格であるという存在である。また、いぬ宮の乳母には「宮の君」、「源氏の君」という女房名としては珍しい名の者が見える。彼女たちの系譜は不明だが、その名からは王族出身であることが想定できる。

他にも、涼のもとには「いとやむごとなく、大納言の御娘にて、心殊にして、『我だに、賄ひもせさせず』とのたまひしものを」（楼の上・下　八九六～八九七）と説明される帥の君がいる。やはり身分柄、特別扱いの女房である[23]。

物語の最終盤に至って、このように身分の高い例外的な女房が出てくることは注目される。その登場はわずかであるが、他の女房たちと違う役割がみえるからである。『源氏物語』も蜻蛉巻において式部卿宮の娘が宮の君という女房になった悲哀を描いているが、『うつほ物語』に登場するこれら身分の高い女房にそのような悲壮さはない。むしろ、これら特別扱いの身分の高い女房によって仲忠やいぬ宮は彩られ、賛美されているといえるだろう。涼づきの帥の君が仲忠のもとでは特別扱いを解かれて賄いをさせられたのも、その資格のある人物としての仲忠を描くものである。身分の高い女房たちの登場は、彼女たちが仕えるにふさわしい人物としての仲忠を示す役割を担っているのである。

おわりに

このように『うつほ物語』において女房たちは物語の進展とともに役割を変えて様々に機能している。あて宮求婚譚においては、あて宮づきの女房が求婚者たちの仲介をするのみであった。しかし、特に長きにわたって登場する兵衛の君、孫王の君といった女房たちは、実忠、仲忠それぞれの物語の要請によって別の役割を果たすようになっていった。また、あて宮が入内してからはあて宮づき以外にも多くの女房が登場し、その中で親類関係の示され

る者も現れ、情報のネットワークともいえるものを形成した。これも噂話や情報を多く行きかわせた物語後半部のあり方によって成立したものである。『うつほ物語』の女房たちの果たす役割は、物語のあり方と深くかかわっているのである。

注

1 女房を含め女性の登場人物をまとめたものに齋木泰孝の「宇津保物語の女性登場人物　索引と呼称一覧」（『物語文学の方法と注釈』和泉書院　一九九六）がある。

2 あて宮の第一皇子出産の折の湯殿役の女房である。ここにのみ登場する人物で、正頼邸の他の人物（大宮など）が主人の可能性もあろうが、あて宮づきとしておく。

3 大宮の指示で相撲の節会の装束のための染め物を任されている女房である。正頼邸に仕える女房で、正確には主人が誰であるのか判然としないが、大宮の指示で働いていることより大宮づきとして数えておく。

4 新編全集の頭注（二九五頁）では「靱負の君」を衛門佐である源連澄とした上で、「女一の宮づきの女房とみる説もある」としている。

5 『うつほ物語　全　改訂版』（室城秀之校注　おうふう　二〇〇一）に底本「たんこ」とあるところを「うこん」と校訂した箇所がある（蔵開・中　五六二）。文脈上妥当であると思われるのでこれに従う。

6 源仲頼の妹のことである。国譲・下巻で按察使という召名で女一の宮づきの女房となる。それ以前は蔵開・中巻～国譲・中巻に登場している。

7 楼の上・下巻では「ちや」とあるが同一人物と取る。

8 前掲注5『うつほ物語　全　改訂版』に底本「左近」とあるところを「右近」と校訂した箇所がある（蔵開・下　五九一）。左近としても問題はないが、右近の方がよりふさわしいと思われるのでこれに従う。

9 ここでは入内後なので「藤壺」と呼ぶべきところであるが、本稿では全て「あて宮」の呼称で統一する。

10 齋木泰孝も兵衛の君を実忠の「召人ではなかったかと想像される」と指摘する。（「物語文学の求婚譚の型―源氏物語以前と以後」（『物語文学の方法と注釈』和泉書院　一九九六）。

11 吉海直人は「『宇津保物語』の乳母達」（『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』世界思想社　一九九五）で、「これは作戦としてはすばらしいもので、めざす女性の最も親しい側近として、乳母及び乳母子を味方にできたら、この恋はもはや半分以上成就したようなものである」と指摘する。

12 吉海直人「親類の女房」（『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』おうふう　二〇〇三）。

13 前掲注12吉海論文。

14 女一宮づきの孫王は蔵開・上巻に登場するが、それがあて宮づきの孫王の妹であることが明らかになるのは、やはり国譲・上巻に至ってである。

15 他に例がない。齋木泰孝も「教養重視と個性化―按察使の君、孫王の君、侍従の乳母など」（『物語文学の方法と注釈』和泉書院　一九九六）において、「今のところ、侍女が「孫王」と呼ばれている例を他に見つけることができない」と指摘する。

16 前掲注15齋木論文。

17 大井田晴彦「実忠物語の位相」（『うつほ物語の世界』風間書房　二〇〇二所収）。

18 前掲注17大井田論文。

19 前掲注5『うつほ物語　全　改訂版』は底本に「はらから」とあるところを「はゝは」と校訂している。「はらから」の場合、孫王の君姉妹のうちの誰かが「帥の君」ということになろうが、帥の君の説明の後に「娘は三人」とあるのだから、「はゝは」と校訂する説に従いたい。

20 この場面の解釈は難解で、四女が誰の女房であるのか諸説ある。しかし、情報をもたらす役割を果たしていることに変わりはない。なお、帥の君の娘は三人なので、この四女は孫王三姉妹とは異腹ということになる。

21 三田村雅子「物語文学の視線」（『源氏物語　感覚の論理』有精堂　一九九六）。

22 前掲注15齋木論文。

23 前掲注15齋木論文にも、いぬ宮の乳母の侍従、涼づきの帥の君に関する指摘がある。

第二節　『うつほ物語』「蔵開」「国譲」巻の脇役たち―情報過多の世界の媒介者

はじめに

『うつほ物語』の国譲の巻々は藤壺[1]腹皇子と梨壺腹皇子を中心におこる立坊争いをえがいたものである。后の宮の過激なまでの暗躍によって、正頼が塗籠に籠るまでの事態になるが、結果として藤壺腹皇子が立坊する。春宮は藤壺を寵愛しており、藤壺腹皇子の立坊は予想できた結末である[2]。にもかかわらず激化する立坊争いの物語には、人物たちの思惑のすれ違いによる機能不全の会話や真実をとらえていない世間の噂によって「精神的喧噪に覆われた闇の祝祭世界」が立ち現れているとされている[3]。

立坊争いを大きくしていくものとして国譲の巻々における噂の機能は非常に重要である。国譲の巻々には「人々」という曖昧な表現による出所不明の噂が多くえがかれ、正頼らはそれに振り回されている。しかし、その一方で、固有名を持ち、確かな設定を与えられた女房や従者といった脇役たちが媒介となって情報をもたらす場面もある。特に藤壺は彼らを使って情報収集に励んでいる。真実をとらえていない匿名の人々による世間の噂の一方で、これら固有名を持つ脇役たちがもたらす情報が存在すること。それは立坊争いの物語の中でどのように機能しているのだろうか。本節では蔵開から国譲にかけての巻々を、情報の媒介者たる脇役たちに注目することで、立坊争いをえがき出す『うつほ物語』後半部の方法を見い出していきたい。

一　靭負の乳母

『うつほ物語』には情報の媒介者として重要な働きを見せる女房たちがいるが、彼女たちは物語の最初からその機能を果たしていたわけではない。物語の前半部、いわゆるあて宮求婚譚においては、女房たちの活躍は限定され、藤壺と求婚者たちの仲介の役割に終始していた。その徹底ぶりたるや、藤壺づき以外の女房が登場しないという有様であった[4]。しかし、藤壺が入内すると、典侍のような内裏女房をはじめとする、藤壺づき以外の女房たちが多く登場することになる。そして、その役割も男女の仲介にとどまらないものとなる。特に多く登場してくるのは乳母たちである。藤壺・女一宮といっ

た主要な女性たちが次々と出産していく中で乳母の登場は必然ともいえようが、しかし、生まれた子供以外の乳母も多く登場し、重要な役割を果たすことになる。そのひとりが、蔵開・上巻に登場する靭負の乳母である。

蔵開・上巻、仁寿殿女御は女一宮の出産に際して里下がりした。やがていぬ宮が誕生すると各所から産養の贈物が届けられることになるが、以下に引用する仁寿殿女御の行動に注目したい。

また、女御の君、梨壺より奉れ給ひし黄金の瓶に供御を入れ替へて、それに添へたりし鯉、小鳥・日乾し、餌袋に入れながら、藤壺より奉れ給へりし雉添へて、内裏に奉れ給ふとて、心ざしありて仕うまつる靭負の乳母といふがもとに、御文遣はす。「日ごろ、もの騒がしくて、聞こえずなりにけれ、などか、それよりも訪ひ給はぬ。さて、これは、子持ちの御残り物なり。いと寒き頃なめるを、『風邪も遣らひ給へ』とてなむ。この雉などは、上に参らせ給ひて、交野にも御覧じ比べさせ給へ」とて、乳母のもとには、沈の高杯を五つ、白銀の壺の小さきに黒方入れ、蜜入れたる黄金の蒜五つばかり、沈の寄せ切りたりし、紙に一包、青き色紙どもに包みて、五葉につけて奉り給へれば……

（蔵開・上　五〇五）

このように仁寿殿女御は梨壺と藤壺からの贈物を朱雀帝に献上しているが、その際、「心ざしありて仕うまつる靭負の乳母」を仲介にして、彼女にも別に贈物をしているのである。「乳母」とあるが、彼女は朱雀帝の乳母である。わざわざ「心ざしありて仕うまつる」と語られるあたりに、仁寿殿女御の宮中における処世術がうかがえるが[5]、これは見事に成功する。先に引用した箇所の直後には、こうあるのだ。

乳母たち、台盤所に候ふ折にて、見れば、異命婦たち、「いづこよりあるぞ。興ある物どもかな」と言ひ騒ぐ。乳母、「仁寿殿の女御の、『女一の宮の御産屋の残り物』とて賜へるぞや」とて、引き開けつつ見て、「いとをかしくしたりける物どもかな」、「ことわりぞや。左衛門督の君の御産屋の物、いかでかはかからざらむ」など言ひ合へり。

（蔵開・上　五〇五～五〇六）

このように贈物は台盤所にいた内裏女房たちの目にさらされ、「興ある物」であると評価される。さらにこの騒ぎは朱雀帝の耳にも届いていたようで、靭負の乳母が文を届けに来ると、朱雀帝は「靭負が語りつらむは、何ごとぞ」（蔵開・上　五〇六）と台盤所での先の会話に興味を示し、靭負の乳母は「この、鰹を押し寄せて切りて侍りつる物なんどぞ、これかれに賜ひつる」（蔵開・上　五〇六）と報告する。

ここに、仁寿殿女御の狙いがうかがえる。仁寿殿女御は内裏女房たちの世界がどのようなものか、後宮での生活の中でよく知っているはずだ。そのため、朱雀帝宛の贈物のほかに靭負の乳母宛の贈物も用意すれば、それは台盤所で他の女房たちの目にさらされ、分け与えられ、評価されるということも

見越していたのだろう。『うつほ物語』の後半部において、女房たちは狭い貴族社会で噂を撒き散らしていく存在として機能している。そして、仁寿殿女御は帝の乳母という、女房たちのなかでも特に地位の高い者を味方につけることによって、宮中で高い評価を得続けようとしているのだ。その上、靭負の乳母らが台盤所で騒いだことにより、仁寿殿女御が内裏女房たちへの配慮を怠らなかったことが朱雀帝の耳にまで入ることになった。朱雀帝の「靭負が語りつらむは、何ごとぞ」という問いも、仁寿殿女御の狙い通りのことだったのではないかと思われる。無論、「心ざしありて仕うまつる靭負の乳母」もそれを承知なのだろう。仁寿殿女御と靭負の乳母はある種の共犯関係にある。靭負の乳母は朱雀帝からの返事を仁寿殿女御に送る際、自らも文を書き、「賜はせつる風邪薬なむ、欲しく侍るべき」（蔵開・上　五〇六）と贈物の礼を伝えるとともに「御消息、『かくなむ』と奏し侍りつれば、御時よく御覧じて、御文侍り」（蔵開・上　五〇六）と朱雀帝の反応を報告するのだった。

ただし、ここでひとつ注意せねばならないことがある。確かに仁寿殿女御の評価は高いものとして内裏女房たちに共有されただろう。しかし、それ以上に、この贈物は「左衛門督の君の御産屋の物、いかでかはかからざらむ」と仲忠の評価につながっている。いぬ宮の産養の贈り物の再贈与なのであるから、仲忠の評価につながるのは当然のことだ。しかし、いずれおとずれる立坊争いを視野に入れたとき、娘婿ではあるが梨壺の異母兄である仲忠の高い評価は、仁寿殿女御（もしくは正頼一族）にとって諸刃の剣である。

この場面の時点では、まだ梨壺の懐妊は明らかになっていない。しかし、蔵開・中巻によれば、なぜか仲忠が知るより先に后腹の五の皇子が知っていた。仁寿殿女御が知っているという可能性も捨てきれない。それでなくとも、ここに並んでいる藤壺と梨壺からの贈物は、両者の春宮をめぐる争いを象徴するものとして読み取れる[6]。仁寿殿女御が藤壺からの贈物であった雉を朱雀帝に献上してほしいとした指示は「藤氏への牽制を込めた贈り物として再編成し、再贈与し」たものであるという[7]。とすれば、この贈物が乳母たちに「左衛門督の君の御産屋の物、いかでかはかからざらむ」と評価されたということは、仁寿殿女御の行為が裏目に出たということになりはしないだろうか。

続く国譲の巻々で藤壺が里から様々に春宮の情報を得ようとしたように、ここではそれに先駆けて、仁寿殿女御による乳母を使った情報戦略がえがかれている。そしてそれは、やがて訪れる立坊争いの構造を浮かびあがらせるものとなっているのである。

二　典侍

靭負の乳母以上に『うつほ物語』後半部で注目すべき女房といえば、典侍であろう。伺候名は示されず、「典侍」とあるのみの人物である。彼女は、

この典侍は、院の大后の宮の人、若くより、かく、よき人の御子生みに仕うまつり給ふ人なり。歳は、六十余ばかりなり。（蔵開・上　五〇七）

と紹介されている。蔵開・上巻は嵯峨院の大后の宮の六十賀から五年が経過しているので、典侍の「六十余ばかり」という年齢は、嵯峨院の大后の宮とほぼ同世代ということになる。嵯峨院の大后の宮の女房であり、若くから多くの出産に立ち会ったというが、随所にある典侍の発言を総合すると、彼女は藤壺・女一宮・師澄の子・仁寿殿女御の子[8]の出産に立ち会っているようであり、大宮との強い結びつきがうかがえる。おそらく大宮の出産にも立ち会っているのだろう。また、乳母経験者が典侍に任じられることが慣例化されるのは後一条朝以降であるが、早い例を求めれば、円融天皇の乳母の良岑美子が典侍になっていること[9]や、『枕草子』にも「御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば」（「位こそ、なほめでたきものはあれ」段　二一八）とあることなど、『うつほ物語』の成立時期と近しいこの背景を考えると、この典侍は朱雀帝の乳母であった可能性もある。

この典侍は情報の媒介者としての役割をたびたび果たす。女たちの容姿を比較して「ただ今の人は、三条殿の北の方ぞ一、藤壺二、宮三にこそおはすめれ。男は、御前」（蔵開・上　五〇九）と言うところは、藤壺を第一としてきた物語の転換点として従来も注目されている[10]。

典侍は仲忠に「いみじうも、もの言ふものかな」（蔵開・上　五〇九）、女一の宮に「いとよくもの言ふ姥」（蔵開・上　五〇九）と言われるが、非常に重要な情報をもたらしている。

宮、おはしまして、何ごとにかありけむ、聞こえ給へりしかば、うちむつかりおはしまして、御髪を繰り出でて、御座のままにうち滑させ給へりしを見奉りしかば、瑩しかけたるごとして、筋も見えず、隙もなく、同じやうに見え給ひしかば、よろづのこと忘れ、齢延ばはる心地こそし侍りしか。さるは、この頃、御気色にやあらむ、例のやうにも思したらざめり。（蔵開・上　五〇八）

おそらく典侍は藤壺の髪の素晴らしさを語りたかったのであろうが、藤壺が「うちむつかり」と機嫌を損ねたことを語っていることに注目したい。典侍は「御気色にやあらむ」と懐妊による影響であると考えているが、春宮との夫婦仲に関しては、後に藤壺自身が祐澄に、「むつかしきままに、目も見合はせ奉り給はずむつかれば、『心よからず』とは思されためり」（蔵開・上　五一二）と語っていて、実際に衝突らしいことがあったことが分かる。

一方、朱雀帝の三の皇子（仁寿殿女御腹）は「先つ頃、召しありしかば、内裏に侍りしついでに、かの御局にまうでたりしにも、いと思ふやうにてお

はすめりき」（蔵開・上　五二一）と証言している。三の皇子は春宮と藤壺の夫婦仲を理想的と見ているのだ。こうした人物による認識の違いが描かれるのは、会話文を多用する『うつほ物語』の方法がなしえたことだろう[11]。この場合は、藤壺の発言から考えるに、典侍の方が三の皇子よりも藤壺の自覚している実情に近い認識ができていることが分かる。藤壺の自供だけでなく、三の皇子の誤認が描かれることで、典侍の情報は信頼性が高いものとして位置づけられている。

典侍は仲忠のもとにのみ情報をもたらすのではない。忠雅の北の方である正頼の六の君にいぬ宮のことを問われると、「ただ、父おとど、今少し小さくて、気近きにこそおはすめれ。日に二度三度はありし御文に、『人に見せ奉り給ふな』とのみありしかばこそ侍りけめ。藤壺の御方よりも、生ひまさり給ひなむかし」（蔵開・下　五八四）と答えている。しかし、やはり仲忠に語るものとは情報の質も量も違う。正頼の六の君に対してはいぬ宮の美質しか語らなかった典侍は、仲忠のもとに帰るや、正頼の六の君・五の君・八の君について語り、さらに、以下の情報を語る。

いかなるにか侍らむ、大納言殿、御仲違ひにて、日ごろは、夜ごとにおはして、簀子になむ居明かし給ふめる。御格子は、とく下ろして、鎖し巡り、人、物聞こゆれば、いみじうさいなめば、ただ一所なむ。一夜は、いとほしがりて、中納言の君対面し給へりしかば、それも追ひ出でられてなむ。

（蔵開・下　五八六）

典侍は仲忠に聞かれてもいないのに、忠俊と八の君の不仲を語るのである。これに対して仲忠は、「この君の御かたちは、いかがおはする」（蔵開・下五八六）や、「さて、源中納言殿は」（蔵開・下　五八六）と、八の君やさま宮といった女たちの容姿について聞くとともに「中納言と君との御仲は、いかなるぞ」（蔵開・下　五八六）と涼とさま宮の夫婦仲についても問うている。春宮と藤壺、忠俊と八の君の夫婦仲を聞かれもしないのに語ってきた典侍は、他からは聞き出しえない夫婦仲についての情報をもたらす者として認められ、仲忠も典侍にそれを求めるようになったのだ。

『うつほ物語』の後半部において夫婦仲は非常に重要な問題となる。ここで問題になっている忠俊と八の君の諍いは、後に兼雅によって、

それ、去年の冬、『はかなき人に物言ひ触れて侍り』とてまかり去りて、親のもとに侍りければ、子の幼きを取り持てなむ、せむ方なくてもてわび給ひけるが、からうして、この頃なむ、『あからさまに』など言ひて、渡りて侍るなる。

（国譲・下　七四七）

と語られている。引用したのは后の宮によって藤原氏の男たちが集められた場面で、梨壺腹皇子を擁立しようと画策する后の宮に対して、兼雅が男たちと正頼一族との姻戚関係を理由に諫めようとしている箇所である。これによれば忠俊と八の君の諍いは忠俊の浮気が原因であったことが分かるが、この

国譲・下巻に至って夫婦仲というのは夫婦の間だけの問題ではなくなっている。男たちは立坊争いの影響で妻を失うことを恐れているし[12]、后の宮は梨壺腹皇子擁立のために男たちと正頼の娘とを離縁させようとすらする。実際、この後で后の宮は自分の産んだ女三の宮と忠雅を結婚させようとし、それが原因で忠雅と正頼六の君との仲は危機的状況に陥ることになる。

とすれば、典侍のもたらした夫婦仲に関する情報は、きわめて政治的に価値のあるものであったことになる。

御方、「宮との御仲は、いかがある」と。典侍、「いかばかりめでたき仲ぞ。そは、先つ頃、こなたにおはしけるに、参りけれど、物聞こえ給はざりければ、五日六日、入り臥し給ひてこそは恨み奉り給ひしか。『御遊び、これかれし給ひしを立ち聞きしかば、御方の、琴の御琴をこの筋に遊ばししが、いとあやしかりしかな。同じやうなる物の音とは言ひながら、この族は筋異なることの、御前にて仕うまつりては』となむ怖ぢ給ひし」

（国譲・中　六九六）

引用したのは藤壺と典侍の会話である。藤壺は仲忠と女一の宮の夫婦仲を典侍に聞いている。この場面の時点で、既に梨壺腹の皇子は誕生している。いよいよ立坊争いが本格化してくるこの段階において、藤壺が仲忠と女一宮の夫婦仲を気にするのが、単なる興味であるはずがない。藤壺は立坊争いにおける仲忠の立場をさぐるために、典侍にこのような問いをしたのではなかろうか。

立坊争いの影響を受けるのは、勿論、正頼一族の女君と結婚した者たちである。彼らの情報をもたらす存在として、典侍にはこれ以上ない人物設定がされている。朱雀帝の乳母の可能性があり、大宮からの信任が厚いこと。正頼一族の様々な出産に立ち会い続けたことにより彼らの内部に深くかかわっていること。現職の典侍として宮中の事情にも明るいこと。さらに、もとは嵯峨院の大后の宮の女房であったということは、藤原太政大臣家とも多少のつながりを残している可能性があること。こうした人物設定により、典侍は立坊争いにかかわる人物たちの内幕を知ることが可能になっている。物語はこのように典侍という人物を設定することにより、人間関係の中で情報網をはりめぐらせているのである。

三　蔵人これはた

藤壺が情報を得ようと利用した人物は、典侍だけではない。最も重要な人物は、里邸に退出した藤壺の文使いとして登場する蔵人これはたではないだ

ろうか。これはたは、単なる文使いの役割を越えた働きを見せている。以下、これはたに関係する場面は非常に多いため、叙述順に番号を付して引用していく。

①かかるほどに、紫の色紙に書きて、桜の花につけたる文、宮より。御使、蔵人。（国譲・上　六三五）

②明くるつとめて、宮より、御文あり。（略）御使、兵衛の君の兄、蔵人の、内許されたる、御前に参りて、「今宵はただ一所御遊びし給ひつつ、大殿籠らずなりぬ」と聞こゆれば、「庚申にこそはありつらめ」。（国譲・上　六三九）

③「（略）世の中のはかなきにつけても、よろづの思ひ給へらるる」とて、藤の花につけて、兵衛の君の兄の、童なりしが、今は春宮の蔵人になし給へるを召して、「これ、太政大臣殿に持て参りて、人々あまたものし給へらむ、源宰相に定かに奉れ」とて、賜へば、喜びて持て参る。かの御方の人は、皆見知りたり。殿にうちはへものし給ひて、兵衛の君語らひ給ひし時は、これを使にてぞ、御文通はし給へる。（国譲・上　六四四）

④「この御使は、誰ぞ」と問はせ給へば、「童名、これはたと召ししが、今は宮の蔵人に侍るなむ、参り来たる」。君、『昔、むつましかりし人』と思して、賜へるにこそありけれ。『ここに、忍びて立ち寄れ』と言へ」とのたまへば、簀子もなき、蔀に懸かれりける所なれば、そこにて、物越しにてのたまふ（略）（国譲・上　六四六）

⑤民部卿、「かう幸ひのものし給ふべき人なれば、さもし給はずなりにたるぞ」などのたまふほどに、春宮より、宮の進を使にて、御文あり。喜びて見給ひて（略）（国譲・上　六四七）

⑥かくて、藤壺の御使は、帰り参りて、御返り奉らせて、人もなき折なりければ、侍りつるやう、のたまひつることを、くはしく申して、ありつる箱を見せ奉れば、開けて見給ひ、書きつけたる物を御覧じて、「これは見つや」とて賜ふ。（国譲・上　六四九）

⑦春宮は（略）「昨日、一昨日は、物忌みにてなむ。かの、『訪はむ』とものせられし人のもとに遣りたりしかば、かくなむ。殊に心地ありげなき人も、かうこそは思ひけれ。これにつけても、院の上なむ、いとほしく、行く先少なげに見え給ふを、『かくてあり』とのみ聞こし召すらむを、『この頃、ものせむ』と思へど、『「心あり」ともや』と思へば、慎ましうてなむ。のたまはむにを。（略）」とて、例の蔵人して奉れ給ふ。（国譲・上　六四九～六五〇）

①に挙げたのは、退出した藤壺に春宮から文が送られてくる最初の場面である。ここでは「蔵人」とだけあり、どういった人物かは明らかにされてい

ない。続く②の場面で、この蔵人が兵衛の君の兄弟であることが分かる。「兄」（底本「せうと」）とあるが、③・④に引用したように、かつて実忠との使いをしていたときに童であり「これはた」と呼ばれていたことが明かされているので、当時すでに大人の女房であった兵衛の君にとっては弟に当たるだろう。①の「蔵人」がこれはたと同一人物であるかは明記されていないが、これ以降に文使いとして登場する蔵人は全てこれはたであると考えられるので、①の蔵人もこれはたと解して構わないと考える。

兵衛の君は藤原の君巻から登場する藤壺の最側近の女房で、乳母子である。ということは、後に「乳母子にて」（国譲・中　七四一）と明記されるのを待つまでもなく、これはたも藤壺の乳母子ということになる。女君に対して男の乳母子が登場するのは非常に珍しいことであり[13]、その存在は注目に値する。

これはたの姉である兵衛の君は、物語前半部のあて宮求婚譚においては実忠との仲介をしていた。そして、実忠が社会復帰する国譲の巻々で再び仲介役になることになるが[14]、まず使いになるのは兵衛の君ではなくこれはたであった。③に挙げた場面で、これはたは実忠宛の藤壺の文を持っていく。「殿にうちはへものし給ひて、兵衛の君語らひ給ひし時は、これを使にてぞ、御文通はし給へる」とあるが、そのようなことは求婚譚のなかで語られていなかった。かつての求婚譚では、藤壺のいる場所に男たちが文を寄越していたため、藤壺周辺の人物――実忠の場合であれば兵衛の君――をひとり仲介として登場させればよかったのであり、これはたのような人物が登場する必然性はなかった。しかし、今回出す使いは実忠から藤壺ではなく、藤壺から実忠にである。かつての因縁を考えれば兵衛の君が最も適任であるが、女の乳母子である兵衛の君は藤壺のそば近くにいるべきであり、使いに出すわけにはいかない。そこで、兵衛の君と同等でありながら自由に動かすことのできる人物として男の乳母子であるこれはたが必要とされ、過去にも文使いをしていたという設定がされたのだろう。

この後、実忠が藤壺のもとを訪れる場面では兵衛の君が対応することになる。藤壺の傍近くでの対応は兵衛の君が、遠くへの工作はこれはたがというように、姉弟で連携しているのだ。実忠の社会復帰は立坊争いの中での源氏回復の物語であり、藤壺主導で行われたものである[15]。姉弟の乳母子の連携という特異な設定は、そのために必要なことであった[16]。

これはたが実忠のいる季明邸に文を持っていった場面の考察に戻りたい。④に挙げたように、実忠とも物越しに対話することができている。注目すべきは、⑤の場面である。これはたが実忠と対面した直後の場面であるが、同じ季明邸に春宮から宮の君への使いが来ているのだ。使いとなった人物は宮

の進である。実忠とこれはたが言葉を交わしてから宮の進が来るまでの間には、実忠と実正のわずかな会話があるだけであり、宮の進とこれはたははち合わせていてもおかしくない。そもそも、春宮からの使いが宮の進であったのも、これはたが藤壺の使いのために不在だったからではないだろうか（これはたには藤壺への使いだけでなく梨壺や嵯峨院の小宮との使いとしても働いていることが示される場面もあり、決して藤壺の使いのみをしているわけではない）。これはたは季明邸で、春宮から宮の君に使いが来た様子を目撃したかもしれない。とすれば、⑥の場面で、藤壺にわざわざ「人もなき折」に「くはしく申し」たことのなかには、その情報も含まれたのではなかろうか。

これはたは藤壺に報告した後、春宮のもとに戻った。⑦に挙げたように、翌日には再び春宮の使いで藤壺のもとを訪れている。そのとき春宮の藤壺宛の文の中には宮の君からの文が同封されていた。動きをまとめてみると、次のようになる。これはたは藤壺からの使いで季明邸に行って実忠に会った。藤壺のもとに戻って報告を終えると、春宮のもとに参上した。これはたと同時か入れかわりに季明邸に来た春宮からの使いの宮の進は、宮の君からの返事を受け取ると春宮のもとに戻った。そして、春宮は自分の藤壺宛の文に、宮の進から受け取った宮の君の文を同封し、これはたに預けて藤壺のもとに届けたことになる。これはたと宮の進というふたりの春宮からの使いがニアミスする形で動いているのである。それが丁寧にえがかれることによって、これはたと宮の進との接触も想定できる。これはたは単なる使いとしての働きだけでなく、春宮をめぐる情報を様々に入手できる存在であることが示されているのである。

これはたが春宮の情報を藤壺にもたらす場面は、これ以降もたびたびあり、立坊争いのなかで非常に重要である。

⑧かかるほどに、宮より、御文、（略）。上、問はせ給ふ、「院の御方へは、いつか渡らせ給へりし。いく度ばかりか参上り給ひぬる」。蔵人、「ついたち、上になむ渡らせ給へりし。さては、夜、一夜なむ参上り給へりし。上は、この頃は、講師、日々に参り、御書遊ばす。夜は、夜更くるまで、御手習ひせさせ給ひなどなむ」と聞こゆ。（国譲・上　六五六）

⑨つとめて、春宮より、例の、蔵人して御文あり。（略）藤壺、蔵人に、「何わざか、この頃はし給ふ。誰々か、参上り給ふ。御文などは、人のもとに遣はすや」と問はせ給へば、「日ごろは、昼は、御書遊ばし、夜は、御手習ひ、飽くまでせさせ給ふ。院の御方なむ、この月となりて、三夜ばかり参上り給ひぬる。今日は、渡り給ひて日一日なむ。さては、上り給ふ人もなし。御文は、左の大殿の御方になむ、一度侍りし。左の大将殿になむ、この月に三度ばかり奉り給へる。一夜は参り侍りてき。おとど、かの御方におはします折にて、いとかしこく饗ぜさせ給ひき」

（国譲・上　六六五～六六六）

⑩かかるほどに、御使にはあらで、蔵人まかでたり。上、御前に召して問はせ給ふ、「梨壺には、御使、いく度か遣はしし」。蔵人、「聞こし召さざりしに、『いたくわづらひ給ふことあり』とて、御消息申されたることありしになむ驚かせ給ひて、その夜、さては、今朝なむ参りて侍る。『男におはするなり』とて、『人は、さこそ言へ。つひにし給ひつめりかし。いかでか、おぼえぬ筋には』となむ申しののしる」。（国譲・上　六八九～六七〇）

⑪宮より、よきほどなる、白銀・黄金の橘一餌袋、黄ばみたる色紙一重覆ひて、龍胆の組して結ひて、八重山吹の作り花につけてあり。（略）大宮、御袋開けて見給へば、大いなる橘の皮を横さまに切りて、黄金を実に似せて包みつつ、一袋あり。大宮、「あなわづらはしや。いかで、こはせさせ給ひしぞ」と問はせたまへれば、例の蔵人、「兵衛殿・中納言殿の、仰せ言受け給ひて、御前にて、これかれなむ仕まつり給ひし」。

（国譲・中　六九〇～六九一）

⑫「この頃は、誰々かものし給ふ。いづくにか、御使は、かく遣はす。内裏わたりには、何ごとかある」とのたまはすれば、「この頃は、例の御書遊ばしなどはせさせ給はで、『御心地悩まし』とて。参上り給ふことは、院の御方こそは。そこに候ふ、左衛門といふ人、忍びて申ししは、『五月ばかりより、御気色ありて悩ませ給ふ』となむ申しし。御使は、一夜参り侍りしかど。申すまじきことなれど、内裏わたりには、梨壺の御方の御勝事し給へることをなむ、やむごとなき所々喜ばせ給ふなる。ある所には、『物の筋といふもの絶えぬと見れど、つひには出で来ぬるものなりけり。かかる折に、し合はせ給へること』とて、常に、ある所には、御文通はせ給ふとなむ承る。かの御方も、『とく参り給へ』と侍るなる」と聞こゆ。

（国譲・中　七〇三）

これはたは藤壺のもとに春宮の文を届ける際、必ずといってよいほど春宮の情報を伝えているのだ[17]。先に引用した②でも、聞かれもしないのに春宮が何をしていたかを伝えていた。⑧では春宮が嵯峨院の小宮のもとをいつ訪れたかという藤壺の問いに答えるとともに、やはり聞かれもしない春宮の近況を伝えている。⑨では藤壺からの問いがより詳細なものになっているが、それに対してやはり詳細な返事をし、これはた自身が梨壺のもとに使いに行ったことを伝えている。後宮の状況は藤壺にとって最大の関心事であるが、これはたは藤壺の求める以上の情報を得ているのだ。さらに、⑪のように春宮の命を受けて贈物の支度をした人物が誰であるかも、大宮に問われれば答えることができている。贈物の支度をした人物を聞くということは、誰が藤壺側についているのかを尋ねているのに等しい。これはたは、こういったことにも確認を怠らない。

そして、何より重要なのは⑩の場面である。これはたはついに春宮からの使いではなく、自ら藤壺のもとに情報をもたらすのだ。梨壺が男皇子を出産したことを報告するのだが、春宮からの使いが何度あったかという藤壺の問いにも答えることができている。なお、梨壺が出産したとき、仲忠にも兼雅からの使いがあったのだが、

「宮より、御使はありつや」と問はせ給ふ。「知らず。え見給へずなりぬ」と申して参りぬ。

（国譲・上　六六九）

というように、この使いは仲忠からの質問に満足に答えることができていない。春宮からの使いに関する似た質問があることで、二人の使いが鮮やかに対比されている。これはたが情報をもたらす存在としていかに優秀であるかが分かる。

これはたから情報を得ようとする藤壺や大宮の姿勢も興味深いが、それ以上にその期待にこたえるこれはたが注目される。⑨や⑫にあるように、これはたは梨壺や嵯峨院の小宮への使いにも出ている。⑫では嵯峨院の小宮のもとで、左衛門という女房から小宮が懐妊したということを聞き出している。「忍びて申しし」とあるからには、本来は聞き出しにくいことを聞き出せるだけの関係を築いていたのであろう。藤壺の乳母子であるこれはたを、藤壺のいわば政敵である梨壺や嵯峨院の小宮への使いにする春宮の真意は不明だが、これはたはその立場をいかして様々な場所に出入りし、つてを作り、情報収集に励んでいるのである。

さて、その後の展開にも注目していきたい。

⑬かくて、経給ふほどに、春宮より、「遅く参り給ふ」とて、ある時はあはれに心苦しげに、ある時は憎げに怨じ給ひつつ、日に従ひて、御使あり。その御使の蔵人申すやう、『梨壺のなむ、坊には居給ふべき』と申しなりにためり。御前にも、しばしば参上り給ふ。昼は、殊に渡らせ給はず。日ごろは、殊に御遊びもし給はず」と聞こゆれば、ある時は一行二行と聞こえ給ひ、ある時は聞こえ給はず。

（国譲・中　七二七）

⑭かくて、春宮は、藤壺の、参り給はず、御返りも聞こえ給はぬを思ほし嘆きて、院の御方・梨壺なども久しうなむ参上らせ給はず、御局へも渡らせ給はず、つれづれと物も聞こし召さず、（略）これはたの蔵人召して、御文賜ひて、「これ、前々のやうにならば、さらに、な参りそ。候はせじ」と仰せらるれば、いたう嘆きて、持て参りて奉る。（略）蔵人「『御返り持て参らずは、簡削らむ』と仰せられつるものを、特に労りなさせ給ひて、とどめられ侍りなば、いと効なく」など申す。孫王の君を始めて、兵衛、『あこきを顧みさせ給ふ』と思ほして、しるしばかり聞こえ給へ。これがいたづらになりなば、いと悲しう」など、集まりて申す。君、「御返り聞こえずとて、御使を罪し給はば、わがためにぞあらむ。罪し給はば、『喜び』

と思はむ。さばかりだに仰せられたらば、これにまさりたらむ職にも申しなしてむ」（国譲・中　七四〇～七四一）

⑮宮、「これは、乳母子とて、いとらうたくする者ぞ。これを解き捨てたらば、これがこと言ひに、文はおこせてむ」と思ほして、勘事に据ゑ給ひつ。（国譲・中　七四一）

藤壺は、⑬にあるようにこれはたの報告を受けて春宮への返事を減らし、その結果、春宮は⑭のように嵯峨院の小宮や梨壺を相手にしなくなる。これはたの報告が、春宮を藤壺にますます執着させる結果をもたらしたのである。

藤壺が春宮へ返事をしなくなったことにより、これはたの身も危なくなったのが⑭・⑮の場面である。これはたは春宮に、藤壺からの返事がもらえなければ除籍すると脅される。これには姉の兵衛の君も同じ側近女房の孫王の君も動揺するが、藤壺は除籍されたらそれ以上の官職に推挙しようと言って動じない。ここに、乳母子としてのこれはたの価値が発揮されている。⑮にあるように、春宮はこれはたが「乳母子にて、いとらうたくする者」であるからこそ、除籍するという脅しを使った。これはたが乳母子であるということには、互いの切り札として利用できるだけの価値があるのである。藤壺もそれを分かった上で動じないという強気の対応をしているのだ[18]。

以上のこれはたの動きは、彼が男の乳母子として設定されているからこそ可能であったことである。そもそも乳母子であったからこそ藤壺の推挙によって春宮の蔵人になれたのであろう。そして春宮も藤壺の乳母子であったからこそ重用した。これはたはそれにより各所についてをつくり、情報収集に励むことができた。そして何より、乳母子でも男であったからこそ、藤壺の傍を離れて自由に動き回ることができたのである。

おわりに

以上確認してきたように、靭負の乳母・典侍・蔵人これはたといった脇役たちは立坊争いの物語の中で情報の媒介者として重要な役割を果たしている。そして、彼らの役割は、他の人物でも構わないという類ものではない。靭負の乳母であれば朱雀帝の乳母であることが重要であった。典侍は正頼一族に深くかかわる現職の典侍であるからこそ、それぞれの夫婦仲を知ることができた。これはたは藤壺にとって男の乳母子であるということが重要であった。

『うつほ物語』の後半部は様々な情報が行き交い、それらに動かされて物語が展開する。媒介する脇役たちには詳細な設定が付され、情報網はきわめ

て効果的に機能しているのだ。本稿で確認してきた他にも、物語は様々な情報網を用意している。藤壺に仕える孫王の君は、物語後半部に至って上野の宮の娘だったことや、妹たちが女一宮やさま宮に仕えていることが明かされ、姉妹間の交流や上野の宮とのつながりが想定できるようになった。后の宮は自分の産んだ女三宮と忠雅を結婚させようとしたが、そのことは女三宮の乳母から聞いたこととして正頼の七の君の女房たちの間で話題になっていた。祐澄は女二宮を略奪しようとして女二宮の乳母の越後を買収するが、そのことは女一宮の乳母の左近が知り、仲忠や女一宮に告げられた。『うつほ物語』の後半部は、情報過多とさえいえる世界なのだ。

しかし、情報過多の世界であるならば、求められるのはそれを使いこなすことである。立坊争いの中で藤壺はさかんに情報収集に励んでいたが、それは功を奏したのだろうか。先に確認したように、これはたは春宮に、藤壺からの返事がもらえなければ除籍すると脅された。それに対して藤壺は除籍されたらそれ以上の官職に推挙しようと言って動じなかった。その後、朱雀帝譲位の前日まで藤壺が何も言ってこなかったため、春宮はこれはたの謹慎を解いたが、春宮の藤壺への使いは「異蔵人」（国譲・下　七五二）が担当している。そして、朱雀帝の譲位後は、次のような状況になる。

帝は、かかることを、何とも思さで、ただ、藤壺の参り給はぬを、夜昼思し嘆けど、御使も久しう奉り給はず、后の宮の聞こえ給ひしことをのみ、「心憂し」と思しつつ、御つれづれと眺めおはしませば、御乳母たち、命婦・蔵人などは、「かかる物の初めに、面白く興あることをこそ。かく、物をのみ思ほし嘆き、日々に御かたちの衰へおはしますこと」など言ふ。女御・更衣たち、参り集まりて、「身の効なくて、とてもかくても、めづらしからぬ世なりや」など言ふ。

（国譲・下　七六二）

春宮（新帝）は藤壺の参内がないことを嘆き続けている。一方の藤壺はどうだろうか。

藤壺は、よろづに思ほせど、物ものたまはず、「帝の、御心を誤りにたればこそは、人は、かくは言ふらめ。かく言ふもしるく、御返し聞こえねど、立ち返り賜ひし御使も見えぬは、いかなるにかあらむ。このことは、げに、げに、さなりて、おとども、のたまふやうになり給はば、我も尼になりなむ。何か、世に交じらむ」と思ほす。

（国譲・下　七六七～七六八）

尼になろうかという悲壮な思いが語られているが、梨壺腹皇子が立坊するのではないかという不審を抱く根拠に「御使も見えぬ」が挙げられている。正頼も同じで、「内裏よりも、久しく御消息も見えねば、おとど、「このこと実に定まりなば、またの日法師になりなむ」（国譲・下　七六七）とあった。しかし、そもそも春宮からの使いがなくなったのは、これはたの一件がきっかけである。さらに、これはたの謹慎が解かれた後でも、春宮が使ったのは

「異蔵人」であり、この蔵人はこれはたのように春宮の情報をもたらすことができていない。もし、変わらずこれはたが使いとして機能していれば、たとえ使いの回数が減ったとしても、「藤壺の参り給はぬを、夜昼思し嘆けど」という春宮の状態は報告されたはずであり、藤壺や正頼がここまで思いつめることはなかったはずである。

これはたは藤壺に春宮の情報をもたらすという極めて重要なはたらきをしていた。しかし、藤壺はそれを自ら断ち切ってしまったのだ。せっかく存在する情報網を、自ら使えなくしてしまった。これは藤壺の失策である。そして、これはたから情報を得ることができなくなった藤壺は、だからこそ「帝の、御心を誤りにたればこそは、人は、かくは言ふらめ」（蔵開・下　七六七）と、匿名の、出所のはっきりしない噂に惑わされるのである。

『うつほ物語』の後半部は詳細な設定を持つ脇役たちによる情報網が存在し、情報過多ともいえる世界になっている。しかし、靭負の乳母を使ってしたことが裏目に出た仁寿殿女御のように、これはたを自ら使えなくした藤壺のように、立坊争いのいなかで情報網は必ずしも使いこなされているとはいえない。そして、それが機能しなくなった時にこそ、出所不明の噂が幅をきかせ、正頼や藤壺を疑心暗鬼に陥らせるのだ[19]。噂によって混迷をきわめた立坊争いの物語は、脇役たちの情報網が「使えない」ということによってネガティブに支えられていたのである。

注

1　本稿ではあて宮の呼称は入内前の場面でも「藤壺」で統一する（ただし「あて宮求婚譚」とする場合は除く）。

2　室城秀之「藤壺腹皇子立坊決定の論理」（『うつほ物語の表現と論理』若草書房　一九九六）は春宮にとって藤壺腹皇子立坊が揺らいだことがないということを指摘するとともに、愛だけではない判断で決定したことを論じている。

3　伊藤禎子「闇の祝祭」（『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社　二〇一一）。また、神田龍身は「祝祭の変容と物語の生成」（学習院大学平安文学研究会編『うつほ物語大事典』勉誠出版　二〇一三）において「国譲」巻の「政治世界における男女の役割の転倒」を指摘し、「個々人の性的トラウマ同士の葛藤という内面的祝祭劇として政治世界が構築されている」とした。

4　唯一の例外として忠澄の乳母の長門という者が登場するが、彼女も藤壺との仲介を期待して頼まれる女房の一人である。長門は藤壺づきではないこ

とに意味がある。彼女を頼った滋野真菅が、藤壺の側近女房に近づけていないことを示すことによって、婿候補にはほど遠いことが明らかにされているからである。なお、『うつほ物語』において物語の進展とともに女房の機能が変化していくことは第一節で指摘した。

5　新編全集の頭注には「仁寿殿の女御は政治的打算から、これまでも朱雀帝の乳母に配慮してきたか」（②三九五）とある。

6　この贈物に関しては小嶋菜温子「「産ぶ屋」の賀歌（3）―『うつほ物語』いぬ宮の産養と「鶴」「雉」「鯉」」（『源氏物語の性と生誕―王朝文化史論』有斐閣　二〇〇四）、西山登喜「うつほ物語〈モノ〉が見せる相関図」（三田村雅子編『源氏物語のことばと身体』青簡社　二〇一〇）などの論がある。

7　前掲注6西山論文。

8　底本「大宮」（国譲・中　七二〇）とあり「太守宮」もしくは「弾正宮」の誤りかとされている箇所である。いずれにせよ、文脈上、仁寿殿女御の子を指すと解して構わないと考える。

9　史上の典侍に関する先行研究には角田文衛『日本の後宮』（学燈社　一九七三）、加納重文「典侍」（『平安文学の環境―後宮・俗信・地理』和泉書院　二〇〇八）などがある。

10　三田村雅子「物語文学の視線」（『源氏物語　感覚の論理』有精堂　一九九六）。

11　室城秀之「うつほ物語の後半の会話文」（前掲注2『うつほ物語の表現と論理』所収）は藤壺腹皇子がいぬ宮を見た事件を例に「実際のできごとを語らずに、当事者たちの会話を通して描くことで、一義的ではない物語の読みの世界への広がりを持たせようとしているのである」とする。ここもその一例といえるだろう。

12　前掲注3神田論文。

13　吉海直人「『宇津保物語』の乳母達」（『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』和泉書院　一九九五）。

14　なお、兵衛の君に関することとしては、在原忠保が親代わりであったことも注目される。忠保は「兵衛が親方にて、常に申さすれば」（国譲・下　八〇一）ということで修理大夫に任官する。室城秀之『うつほ物語　全　改訂版』（おうふう　二〇〇一）の八〇一頁注九には「藤壺は、忠保が兵衛の君の

親代わりであることを理由にしているが、実際は、自分の恋のために出家した仲頼に対する贖罪のためである」とある。兵衛の君は乳母子であることによって、実忠・仲頼という求婚譚で最も悲惨な末路を辿った者たちの救済に関わることになったのである。

15 前掲注3神田論文。

16 他に男女の乳母子が登場する例としては、『源氏物語』の惟光・少将命婦・大輔命婦（惟光・少将とは異腹）が挙げられる。吉海直人「乳母子考」（前掲注13『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』所収）でも指摘されているように、彼らの交流はえがかれない。しかし、『源氏物語』の場合、光源氏は惟光に対して夕顔の一件を少将命婦にも言わないように指示しており、むしろ『うつほ物語』とは対照的なあり方が注目される。これは、『狭衣物語』において狭衣の乳母子である道成・道季兄弟が情報交換しないことにもつながる問題である。『狭衣物語』の道成・道季兄弟に関しては第三章第一節において論じる。

17 武藤那賀子「手紙論」（前掲注3『うつほ物語大事典』所収）はこれはたの言葉への信頼は春宮からの手紙の信頼を上回るものであると指摘している。

18 前掲注16吉海論文は「両者の間には、真の親密さは想定できない」とするが、乳母子であるからこそ切り札になることに、これはたの価値を見たい。

19 宅間弥生子「噂論」（前掲注3『うつほ物語大事典』所収）は正頼家内部の噂の解釈の問題を論じ、「藤壺腹皇子立坊に悲観的な噂を自ら取り込み、助長させ、さらには、正頼家の婚姻政策における政治的な穴までをも浮かびあがらせるものとして機能している」と指摘する。

第二章　『源氏物語』論

第一節　「中将」と浮舟の母君

はじめに

『源氏物語』に登場する女房は召名によって一定の造形がなされている傾向にある。無論全ての女房にあてはまるわけではないが、特に侍従・右近[1]・中将といった女房にはこれが顕著で、明らかに似た造形になっている。しかも、これらの召名を持つ女房らは、いずれも宇治十帖において重要な働きをしている者たちである。物語の進展と共に女房たちが次第に重要になっていくことは早くより指摘されている[2]が、その役割を担うのが正篇より一定の造形をなされている召名の女房であることに注目すべきであろう。

中将という召名の女房については、その多くが召人あるいは男君に目をかけられる魅力的な存在として登場していること、また、浮舟の母君もやはり中将という召名のお手つき女房であったことから、武者小路辰子[3]・平川直正[4]・三田村雅子[5]・原岡文子[6]らによって女房論・召人論として様々に論じられてきた。

『源氏物語』は確かに「中将」をお手つき女房として造形し、それを浮舟の母君に受け継がせている。浮舟の母君の物語は、正篇から受け継がれた「中将」の物語の続篇としてとらえられるのである。とすれば、これは女房あるいは召人という問題だけにおさめるべきものではない。宇治十帖と正篇との関わりという極めて重要な問題を孕んでいるのではなかろうか。

本節では、女房「中将」の造形を確認した後、浮舟の母君について考察していくが、女房・召人論あるいは単なる作中人物論のみを試みるわけではない。女房「中将」の問題から宇治十帖と正篇との関わりを問い直すことを目的とする。

一　正篇における「中将」

『源氏物語』には数多くの女房たちが登場するが、「中将」と呼ばれる女房は正篇に五人、続篇に三人の八人で最も多い。まずは正篇に登場する中将について考察する。

正篇に登場する五人の中将の主人は、空蟬・六条御息所・光源氏（後に紫の上）・朝顔斎院・髭黒北の方である。そのうち、六条御息所づきの中将は光源氏に目をかけられ、和歌の贈答があった。光源氏づきの中将はお手つき女房、髭黒北の方づきの中将は髭黒の召人[7]である。登場回数でいえば圧倒的に光源氏づきの中将が多く、彼女は葵・須磨・澪標・薄雲・初音・若菜上・幻巻と長期に渡って見られる。他の中将たちが一巻にしか登場しないのに対して、余りに多い。この光源氏づきの中将が幾度も存在感を見せることによって、お手つき女房としての「中将」という造形がなされているのである。

中将という名の女房の初見は、帚木巻、空蟬づきの中将である。彼女は光源氏のお手つき女房ではない。しかしながら、その存在は示唆的である。光源氏と空蟬の逢瀬のきっかけこそが「中将」という名であったからだ。空蟬は「中将の君はいづくにぞ」（帚木①八七）と女房の中将を呼ぶ。しかし、それを聞いた当時中将の光源氏は「中将召しつればなむ、人知れぬ思ひのしるしあるここちして」（帚木①八八）と侵入し、口説き、契るに至る。「中将」という名が恋の場面をつくるきっかけになったのである。そもそも、光源氏の官職「中将」からして在五中将を連想させる[8]恋にふさわしいポジションである。柏木も玉鬘に文を贈っていたころは中将であったし、薫が宇治の八の宮のもとに通い始めた頃も中将であった。恋の場面にふさわしい男性の官職名としての「中将」と、女房の召名としての「中将」の取り違いは、今後の物語の中でお手つきになることの多い存在としての女房「中将」を早くも予感させている。

六条御息所づきの中将は、女房としては珍しく容姿の描写が細かにされる。六条御息所の代わりに光源氏の見送りに出た中将は、「紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかに引き結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり」（夕顔①一三二）と描写される。そして「うちとけたらぬもてなし、髪のさがりば、めざましくも」（同）と見た光源氏に歌を詠みかけられるが、「いと馴れて疾く（夕顔①一三三）」、「おほやけごと」（同）にして返歌する。さらに物語はこの中将のことを「まして、さりぬべきついでの御言の葉も、なつかしき御けしきを見たてまつる人の、すこしものの心思ひ知るは、いかがはおろかに思ひきこえけむ、明け暮れうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり」（夕顔①一三四）と評する。光源氏の扱いからも、中将の心寄せからも、ほとんどお手つき女房に近いといってよい、美しくて知的な女房として描かれているのである。

朝顔斎院づきの中将も、空蟬づきや六条御息所づきの中将と同じく、恋の場面を彩るかのように登場する。彼女はお手つきであるか判然としない。し

かし賢木巻の雲林院からの贈答や、その内容が「すこし心とどめて多かり（賢木②一六一）」とあるように、心を寄せている女房として登場する[9]。

また、髭黒北の方づきの中将は、「御召人だちて、つかうまつり馴れたる」（真木柱④二一二）存在として登場する。

しかし、やはり最も注目すべきは、光源氏づきの中将である。先に述べたように、彼女は葵・須磨・澪標・薄雲・初音・若菜上・幻巻と長期に渡って登場する。はじめは光源氏づきであったが、須磨退去に際して紫の上づきとなり、長く仕えることとなる。初音巻には「われはと思ひあがれる中将の君」（初音④一二）とも書かれ、お手つき女房としての存在感を見せている。もっとも、光源氏づきとして登場する中将全てが同一人物であるかどうかは分からない。しかし、とにかく光源氏のもとには常に「中将」というお手つき女房がいたのである。三田村雅子は「中将の君という存在は、一人の女としての歴史的、時間的存在さえ、認められない召人の代名詞[10]」と指摘するが、物語がその代名詞に「中将」という名を選んでいることに注目すべきであろう。

ところで、光源氏のお手つき女房は中将ひとりではない。いくつか例を挙げれば、末摘花巻には、左大臣邸で「たまさかなる御けしきのなつかしき」（末摘花①二五二）を頼みにしている中務という女房が、葵巻では葵の上づきで「年ごろ忍びおぼし」（葵②一〇四）ている中納言という女房が確認できる。須磨巻では「つれなき御もてなし」（須磨②二一六）であった中務と中将が紫の上づきになり、帰京後も「ほどほどにつけつつ情」（澪標③一六）をかけられている。また、若菜上巻では、「昔は、ただならぬさまに使ひならしたまひし人ども」（若菜上⑤五八）として中将と共に中務の名が挙がっている。幻巻でも、亡き紫の上を忍ぶ女房として、中将と共に中納言が登場する（幻⑥一三〇）。先に述べたのと同じように、それぞれが同一人物であるかどうかはまた別問題である。物語が光源氏のお手つき女房として中納言・中務・中将というように常に一定の名を挙げていることが重要なのである。

中納言・中務・中将といった女房たちは光源氏のお手つきとしてたびたび登場する。しかし、それはただそれだけのことに過ぎない。彼女たちがどのような容姿であるかなどといったような、個性を持つ存在としての描写はない。

こうして、名を挙げられてきた中納言・中務・中将といった光源氏のお手つき女房たちであるが、紫の上の死後、幻巻の途中から登場するのは中将ただ一人になる。そして、そうなって初めて、今まで語られることのなかった細かな描写がなされるようになる。

かのおしなべてにはおぼしたらざりし人々を、御前近くて、かやうの御物語などをしたまふ。中将の君とてさぶらふは、まだ小さくより見たまひ馴れにしを、いと忍びつつ見たまひ過ぐさずやありけむ、いとかたはらいたきことに思ひて、馴れもきこえざりけるを、かく亡せたまひてのちは、そ

のかたにはあらず、人よりことにらうたきものに心とどめおぼしたりしものをと、おぼし出づるにつけて、かの御形見の筋をぞあはれとおぼしたる。

心ばせ容貌などもめやすくて、うなゐ松におぼえたるけはひ、ただならましよりは、らうらうじと思ほす。（幻⑥一三二）

このように、中将が幼いころより召し使っていた女房であることなど、初めて個人の情報が明かされている。彼女はあくまで「かの御形見の筋」であり、紫の上を通して関係しているに過ぎない存在である。しかし、女君を失った後にその女房がクローズアップされるという展開は注目すべきである。また、

中将の君の、東面にうたた寝したるを、歩みおはして見たまへば、いとささやかにをかしきさまして、起き上がりたり。つらつきはなやかに、にほひたる顔をもて隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、をかしげなり。紅の黄ばみたる気添ひたる袴、萱草色の単、いと濃き鈍色に黒きなど、うるはしからず重なりて、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを、とかく引きかけなどするに……（幻⑥一四三）

といったように、かつての六条御息所づきの中将を彷彿とさせる容姿の描写もここで登場する。

光源氏はこの中将を「一人ばかりはおぼし放たぬけしき」（幻⑥一四四）であった。だからといって、中納言や中務が捨てられたというわけではなかろう。むしろ、彼女たちの役割も中将ひとりに集約されたと考えたい[11]。それだけでなく、今までに登場した全ての中将のイメージもここに集約されているといっていい。紫の上の代わりとして寵愛を受ける中将の姿は、『源氏物語』において、お手つき女房としての「中将」という造形が確立したことを表しているのである。

『源氏物語』は正篇において「中将＝お手つきの女房」という造形を確立させた。しかし、宇治十帖ではそれを継承しつつも新たな問題を取り上げることになる。

二　続篇における「中将」

続篇に入るとまず竹河巻に玉鬘の大君づきで中将という女房が登場する。その出番はわずかであるが、夕霧の子息蔵人少将の「例かたらふ中将のおもと」（竹河⑥二二三）とあり、やはり正篇からの造形を受け継いでいるといえるだろう。

そして、宇治十帖にはかつて中将であったという人物が登場する。浮舟の母親である。彼女が八の宮の女房であったころの召名は中将であった。そして彼女は、『源氏物語』に登場するお手つき女房の中で、唯一、主人の子を生んだ人物なのである。

浮舟の母親の中将が八の宮のお手つきになった経緯は、宿木巻で弁の尼によって語られる。弁の尼は薫に、「故北の方の亡せたまへりけるほど近かりけるころ、中将の君とてさぶらひける上臈の、心ばせなどもけしうはあらざりけるを、いと忍びて、はかなきほどにもののたまはせける」（宿木⑦二三一）と説明する。中将が八の宮のお手つきになったのが、北の方の死後であったことに注目したい。正篇で光源氏が最後に寵愛した中将も、その存在が細かに描写されたのは紫の上が死んだ後であったからである。幻の巻の光源氏は、

年ごろ、まめやかに御心とどめてなどはあらざりしかど、時々は見放たぬやうにおぼしたりつる人々も、なかなか、かかるさびしき御ひとり寝になりては、いとおほぞうにもてなしたまひて、夜の御宿直などにも、これかれとあまたを、御座のあたり引きさけつつ、さぶらはせたまふ。

（幻⑥一二八）

と描写されたものであった。一方の八の宮も、

心ばかりは聖になり果てたまひて、故君の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心ばへなど、たはぶれにてもおぼし出でたまはざりけり。

（橋姫⑥二五九）

という状況で、両者はよく似ているのである。光源氏には多くのお手つき女房がいたが、紫の上が死んでからは、そのような扱いをしなかった。八の宮も、北の方が亡くなってからは女を寄せつけなかった。しかしそれでも、光源氏は中将「一人ばかりはおぼし放たぬけしき」（幻⑥一四四）であった。八の宮の中将も同じであることが推測される[12]。妻の死後、女を寄せ付けない中で妻の形見として唯一寵愛した女房、そういう存在として「中将」の造形が継承されたのである。

しかし光源氏づきの中将は、子を生まなかった。少なくとも物語はそれを描かない。対して八の宮づきの中将は子を生んでしまった。木村朗子は、召人を「たとえ子供を生もうが、〈生まない性〉であり続けることが要請された[13]」と指摘する。たしかに、『源氏物語』の正篇には子を生むお手つき女房は登場しない。しかも、『源氏物語』全篇を通しても子を生むお手つき女房の唯一の例である浮舟の母親は、浮舟を生んだことによって八の宮のもとにいられなくなった。このことからも、少なくとも『源氏物語』はお手つき女房をそういうものとして扱っていることは明らかである。しかし、木村が「女

性としての生むことの潜在能力（ポテンシャリティ）とはまったく関係がない[14]」とも指摘するように、いくら要請されようとも現実的にはお手つき女房が全く子を生まないというのは不可能である。正篇が扱わなかった「子を生んだお手つき女房」という問題を続篇に至って初めて取り上げた、それがこの八の宮の中将の物語なのである。

正篇の中将たちがまだ寵愛を受けている現役のお手つき女房であったのに対し、八の宮の中将はそこから外れた存在である。いわば、正篇では決して描かれることのなかった中将たちの続篇的存在である。中将は子を産むことによって、中将という女房ではなくなった。以降の物語に登場するのはもはや中将ではなく常陸介の北の方である。浮舟という、中将であったころのまぎれもない遺物を抱えつつ、しかし、もはや中将ではない存在なのである。

確かに、浮舟の母君は正篇からの「中将」の造形を継承した。しかし、継承しつつも、物語は「子を生んだお手つき女房」という全く新たな問題を取り上げているのである。

三　浮舟の母君―「中将」の物語の続篇

ここからは東屋巻以降の中将について論じていくが、「中将」というのは女房としての召名である。既に常陸介の北の方となっている者にはふさわしくないため、ここからは本文での呼称に従って「母君」と呼ぶことにする。

母君は常陸介と再婚している。それゆえ、常陸介家には、常陸介の連れ子である先妻の子、常陸介と母君の子、母君の連れ子である浮舟がいる。母君の腹を痛めた子は、常陸介の子の中にもいるわけだが、彼女はその子供たちと浮舟とを区別する。母君の方では浮舟との縁談を一人で決めようとしたり、調度品を浮舟のものだけ良いものにしたりと、その様が具体的に描かれる。一方、常陸介にも浮舟を「異人と思ひ隔てたる心」（東屋⑦二六九）があるとされるも、苛めたという具体的な描写はない。そもそも、常陸介にとって浮舟は継子であるが、母君が浮舟と区別する常陸介の子供たちの中にも母君の腹を痛めた実子がいる。母君が浮舟だけを大切にするのは、常陸介が浮舟に対して冷たい云々とは次元が違う。どちらが先に始めたことかははっきりしないが、常陸介の継子苛めに対して母君は実子苛めで対抗しているという事態なのである。

ともかく、同じ実子でありながら、母君は浮舟一人を大切にし、他の子供たちとは区別する。そして、左近少将との縁談を一人で勝手に進める。同時

期には弁の君を通じて薫からも文が来ているが、それには踏み切れない。浮舟の身の程を考えるからである。

かの尼君のもとよりぞ、母北の方に、のたまひしさまなど、たびたびほのめかしおこせたれど、まめやかに御心とまるべきこととも思はねば、ただ、さまでも尋ね知りたまふらむこと、とばかりをかしう思ひて、人の御ほどのただ今世にありがたげなるをも、数ならましかば、などぞよろづに思ひける。

（東屋⑦二六九）

御方をも、頭洗はせ、取りつくろひて見るに、少将などいふほどの人に見せむも、惜しくあたらしきさまを、あはれや、親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば、おはせずなりにたれども、大将殿ののたまふらむさまに、おほけなくとも、などかは思ひ立たざらまし、されど、うちうちにこそかく思へ、ほかの音聞きは、守の子とも思ひわかず、また実を尋ね知らむ人も、なかなかおとしめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など思ひ続く。

（東屋⑦二八三）

母君の思いは「数ならましかば」「親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば」と仮想の中にある。もし八の宮に認知されていれば、薫と結婚できたであろうという思いがある。母君の悩みは、そもそも浮舟が八の宮の子であるというところに起因するのである。しかし認知されていない以上どうしようもないのだが、母君はそれを割り切ることができずにいる。

左近少将との縁組が破談になった後、乳母は薫をすすめる。しかし、母君の反論はこうだ。

あな恐ろしや。人の言ふを聞けば、年ごろ、おぼろけならむ人をば見じとのたまひて、右の大殿、按察使の大納言、式部卿の宮などの、いとねむごろにほのめかしたまひけれど、聞き過ぐして、帝の御かしづき女を得たまへる君は、いかばかりの人かまめやかにはおぼさむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとはおぼしもしなむ、それはたげにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮の上の、かく幸ひ人と申すなれど、もの思はしげにおぼしたるを見れば、いかにもいかにも、二心なからむ人のみこそ、めやすくたのもしきことにはあらめ。わが身にても知りにき。故宮の御ありさまは、いと情々しく、めでたくをかしくおはせしかど、人数にもおぼさざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。このいと言ふかひなく、情なく、さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年ごろをも過ぐしつるなり。をりふしの心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ、嘆かしくうらめしきこともなく、かたみにうちいさかひても、心にあはぬことをばあきらめつ。上達部親王たちにて、みやびかに心はづかしき人の御あたりといふとも、わが数ならではかひあらじ。よろづのこと、わが身からなりけりと思へば、

よろづに悲しうこそ見たてまつれ。いかにして、人笑へならずしたてたてまつらむ。（東屋⑦二八六～二八七）

八の宮に認知されていない娘である上、薫にはすでに女二宮がいる。これでは浮舟は薫と結婚したとしても女房格である。そして、かつての自身の体験から、お手つき女房という立場をよく知っている母君は、傍線部のように言うのである。確かに武者小路辰子の指摘するように、「召人の後身として最大公約数とも言うべき感情の表明[15]」だが、それは続篇世界に至って初めて露呈された感情であり、正篇から受け継がれた「中将」の造形が、「中将」自身の物語としてさらなる展開を見せていることを示している。

しかし、一方で、母君は常陸介北の方となっている現在にそれなりに満足している。波線部のように、母君が常陸介に対して肯定的な発言をしていることを見逃してはならない。八の宮の上臈の女房でありお手つきであった過去と、受領の北の方である現在。過去の世界は「中将」という召名でつながる正篇的世界そのものでもあった。一方の現在は、子を生んだゆえに八の宮の女房でもなくなり、受領の北の方となった続篇世界である。二つの世界には大きな隔たりがある。一方の世界から、もう一方の世界に移るのは容易なことではない。しかしそれでも、母君は過去の世界をひきずりつつも、現在の世界に満足を覚えているのである。いや、むしろある唯一のものを除いては、ほとんど現在の世界に満足し存在しているといっていい。その唯一のもの、過去の世界への未練を呼び起こすものこそが、浮舟なのである。

母君は中の君を頼って二条院へ行く。中の君を見た母君は、「われも、故北の方には離れたてまつるべき人かは、つかうまつるといひしばかりに、かずまへられたてまつらず、くちをしくてかく人にはあなづらるる」（東屋⑦二九一～二九二）と思う。母君は八の宮の故北の方の姪であり、血筋からいえば劣らない身分であった。そのため、母君は自分が中将という女房ではなく八の宮の妻であれば、浮舟を薫に縁づかせることができたはずだと思っている。自分が故北の方の姪であるばかりに、そして、浮舟がなまじ八の宮の血を引いているばかりに、母君は浮舟を常陸介の子として扱うことができないでいる。

母君は常陸介北の方としての現在にそれなりに満足していた。この中の君を頼る場面でも「いたく肥え過ぎにたるなむ、常陸殿とは見えける」（東屋⑦二九八）と描写され、外見的にもすっかり受領の妻である。その母君を唯一悩ませるのが、浮舟という過去の遺物なのである。浮舟の存在ゆえに、母君には中将であった過去が消せないのだ。神田龍身はこう指摘する。

浮舟の存在が、中将の君にかかる見果てぬ夢をあらためてみさせてしまったのであり、はやいはなし浮舟がいなければ、中将の君も苦い過去をすっ

ぱり断ち切り、受領の北の方におさまって常陸介との円満な夫婦関係を築くことができたかもしれないのだ。（中略）なまじ浮舟がいたばかりに、ふれたくもない八の宮との過去を思い出し、夫にわだかまりをもち、つまらぬ野心まで抱くようになってしまった。[16]

母君は既に常陸介北の方としてある程度満足している。その母君が不満を覚えるのは、浮舟に関することだけなのだ。浮舟の存在ゆえに、母君は中将であった過去の遺物に悩まされ続けているのである。母君の物語は正篇から受け継がれたお手つき女房としての「中将」の物語の続篇である。それは「子を生んだお手つき女房」という新たな問題を持ち込んだ続篇であった。子たる浮舟がいなければ、母君は常陸介北の方に過ぎず、正篇からの「中将」を引きずることはなかったはずである。

母君が中将という召名で八の宮のお手つき女房であった世界は、幻巻に酷似した、極めて正篇的な世界であった。それは、宇治十帖の「現在」における常陸介家の世界とは大きく隔たっている。母君は、その「現在」に満足しつつも、浮舟という存在ゆえに、「中将」の物語たる「過去」の世界を継承し、また、束縛されているのである。浮舟の母君は、宇治十帖において正篇的世界に束縛された存在といえるのだ。

四　母君不在の物語―「過去」を捨てる「中将」

中の君のもとへ身を寄せて匂宮や薫を垣間見て、母君はついに結論を出す。母君は中の君に向ってこう言うのである。

げに人の御ありさまけはひを見たてまつり思ひたまふるは、下仕へのほどなどにても、かかる人の御あたりに馴れきこえむは、かひありぬべし。まいて若き人は、心つけたてまつりぬべくはべるめれど、数ならぬ身に、もの思ひの種をやいとど蒔かせて見はべらむ。高きも短きも、女といふものは、かかる筋にてこそ、この世後の世まで、苦しき身になりはべるなれ、と思ひたまへはべればなむ、いとほしく思ひたまへはべる。それもただ御心になむ。ともかくも、おぼし捨てずものせさせたまへ。（東屋⑦三〇五）

母君は二人の貴公子を見て、確かに浮舟を薫に縁づかせることを望むようになった。しかし結局のところ、これは中の君に押しつけたに過ぎないのではないか[17]。そして「守の消息など、いと腹立たしげにおびやかしたれば」（同）と、常陸介に呼ばれて帰ってしまう。母君が浮舟と薫との縁談に意欲を燃やすようになったことは確かであるが、同時に中の君に押しつけて帰ってしまったことを見逃してはならないはずである。

母君は中の君に浮舟のことを一任した後、常陸介邸に戻った。この不在の間に、匂宮が浮舟を発見する事件が起こる。それを聞いた母君は動転し強引に引き取ってしまうが、三条の家に移すと「かしこに腹立ち恨みらるるが、いと苦しければ」（東屋⑦三二五）と言って常陸介邸に帰ってしまう。浮舟とは文を交わしながら、常陸介邸で婿となった左近少将の世話をすることになる。そしてこれ以降、母君の行動は一転し、常に常陸介家の事情を優先させていき、浮舟の物語は母君のいない間に展開していく。

そしてやはり母君の不在の間に、薫は弁の尼の仲立ちで浮舟と契り、宇治に連れて行く。匂宮が浮舟と契るのも母君の預かり知らぬことであった。匂宮が初めて浮舟と契った日はちょうど母君が石山詣でに浮舟を連れて行こうという日であった。しかし、匂宮が来たということは全て乳母子の右近一人の胸に収められ、右近は「夢見さわがしかりつ」（浮舟⑧三三）と母君に知らせようとしない。浮舟の物語は、右近や侍従といった若い女房に委ねられ、母君の預かり知らぬところで展開していくのである。

次に母君が宇治に訪れた時には、事態は抜き差しならないことになっていた。しかも、母君はそれを全く知らない。

大将殿は、卯月の十日となむ定めたまへりける。誘ふ水あらば、とは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にかあらむ、と浮きたるここちのみすれば、母の御もとにしばしわたりて、思ひめぐらすほどあらむ、とおぼせど、少将の妻、子産むべきほど近くなりぬとて、修法読経など隙なく騒げば、石山にもえ出で立つまじ、母ぞこちわたりたまへる。（浮舟⑧六五～六六）

引用したように、悩む浮舟は京の母君のところへ行くことを望む。しかし、傍線部のように、左近少将の妻の出産を理由に母君が宇治へ来ることになった。

この母君の訪れが、浮舟の運命を決めることになった。宇治で母君は弁の尼と対面する。何も知らない母君は、次のように言う。

あなむくつけや。帝の御女を持ちたてまつりたまへる人なれど、よそよそにて、あしくもよくもあらむは、いかがはせむと、おほけなく思ひなしはべる。よからぬことをひき出でたまへらましかば、すべて身には悲しくいみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざらまし。（浮舟⑧六九）

これが浮舟の「なほわが身を失ひてばや」（同）という覚悟につながったことは明らかである。しかし、母君はそんなことも知らず、またしても京に帰ってしまう。ここでも理由は左近少将の妻の出産である。

「かしこにわづらひはべる人もおぼつかなし」とて帰るを、いとものの思はしく、よろづに心細ければ、またあひ見でもこそ、ともかくもなれ、と思

へば、「ここちのあしくはべるにも、見たてまつらぬがいとおぼつかなくおぼえはべるを、しばしも参り来まほしくこそ」としたふ。「さなむ思ひはべれど、かしこもいとものさわがしくはべり。この人々も、はかなきことなどえしやるまじく、狭くなどはべればなむ。武生の国府にうつろひたまふとも、忍びては参り来なむを、なほなほしき身のほどは、かかる御ためこそいとほしくはべれ」（浮舟⑧七〇～七一）

浮舟は母君を引きとどめる。しかし、傍線部のように母君は浮舟よりも左近少将の妻を優先させた。この後、浮舟が入水しようという間際に母君から文が来るが、そこにも、「参り来まほしきを、少将の方の、なほいと心もとなげに、もののけだちてなやみはべれば、片時も立ち去ること、といみじく言はれはべりてなむ」（浮舟⑧九五）とあった。そして、母君が左近少将の妻の出産にかかわっている間に、浮舟は姿を消してしまう。

何も知らない母君は、当然、浮舟が死ぬ理由など分からない。「今参りの心知らぬやある」（蜻蛉⑧一〇八～一〇九）と女房を疑う。それを「いとほしきこと」（蜻蛉⑧一〇九）と思った侍従が右近と相談をして真相を告げる。そして、「胸のせきのぼるここちして、いかにもいかにもすべきかたもおぼえたまはぬ」（蜻蛉⑧一一〇）母君を無視して、右近と侍従は葬儀を済ませてしまう。母君は浮舟の死にあたって、ついに右近や侍従という女房たちから逆に排除されてしまったのである。

結局、母君は浮舟に対して何もしなかった。一時的に浮舟のもとを訪れてはすぐに去るということを繰り返していた。そしてその時に常に理由にされていたのは、常陸介家の事情、特に左近少将の妻、つまり、自分と常陸介との間に生まれた娘の世話であった。浮舟の結婚に高い理想を抱きながら、母君の行動はなぜ一転してしまったのであろうか。

さかのぼって考えてみれば、浮舟の物語の始まりは、左近少将と浮舟との縁談だったはずである。もともと母君は、浮舟を常陸介との子と区別をして特別可愛がり、左近少将との縁談を進めていた。どちらも実子でありながら、八の宮の子である浮舟と、常陸介の子を区別していたはずである。しかし、それがいつの間にか逆転してしまっている。浮舟がいるはずだった左近少将の妻の座に別の実子が座った時、母君の優先順位もそのままそちらに移ったかのようである。

なぜ母君はそうなったのか。確かに母君は匂宮や薫を見て、浮舟の結婚に高い理想を抱くようになった。しかし、それと同時に、左近少将に関する意識にも変遷があったことにも注目すべきなのではないだろうか。

母君はもともと、浮舟と左近少将との縁談を、「これよりまさりてことことしき際の人はた、かかるあたりを、さいへど尋ね寄らじ」（東屋⑦二七二）

と半ば妥協するかたちで受け入れていた。また、「少将などいふほどの人に見せむも、惜しくあたらしきさまを、あはれ、親に知られたてまつりて生ひ立ちたまはましかば……」（東屋⑦二八三）とあるように、それは八の宮の子として認知されないがゆえの妥協であった。それが、二条院で匂宮を垣間見た後、母君は、

わが娘も、かやうにてさし並べたらむには、かたはならじかし、勢を頼みて、父ぬしの、后にもなしてむと思ひたる人々、同じわが子ながら、けはひこよなきを思ふも、なほ今よりのちも、心は高くつかふべかりけり……（東屋⑦二九三～二九四）

と、八の宮の子としての浮舟に期待をかけるようになったのである。そして、その翌朝に、匂宮の前に現れる左近少将を垣間見る。左近少将は「御前にて何とも見えぬ」（東屋⑦二九四）男であった。しかも、女房たちが左近少将と浮舟の縁談が破れたという噂を話しているので、「少将をめやすきほどと思ひける心をもくちをしく、げにことなることなかるべかりけりと思ひて、いとどしくあなづらはしく」（東屋⑦二九五）思うようになる。二条院での体験から、母君は八の宮の子である浮舟の結婚に高い理想を抱く。そして、浮舟と縁談のあった左近少将は全く侮るようになった。しかしこの後の展開のなかで、物語はもうひとつ、母君に垣間見の場面を用意する。

それは、浮舟が匂宮に発見された後、母君が浮舟を三条の家に置いて常陸介邸に戻った後の場面である。物語はここで「かの宮の御前にていと人げなく見えしに、多く思ひおとしてければ、私ものに思ひかしづかましを、など思ひしことはやみにたり」（東屋⑦三二五）と二条院での体験から左近少将を侮ることになったことを再確認する。しかし、垣間見た左近少将はどうであったか。

白き綾のなつかしげなるに、今様色の擣目などもきよらなるを着て、端の方に前栽見るとてゐたるは、いづこかは劣る、いときよげなめるは、と見ゆ。娘いとまだかたなりに、何心もなきさまにて添ひ臥したり。宮の上の並びておはせし御さまどもの思ひ出づれば、くちをしのさまどもや、と見ゆ。前なる御達にものなど言ひたはぶれて、うちとけたるは、いと見しやうに、にほひなく人わろげにも見えぬを、かの宮なりしは、異少将なりけり、と思ふをりしも言ふことよ。（東屋⑦三二六）

このように、母君は常陸介邸で、左近少将を二条院で見たのと全く違う、「いづこかは劣る、いときよげなめる」者として見たのである。さらに、

「いでや、心ばせのほどを思へば、人ともおぼえず、出で消えはいとこよなかりけるに、何ごと言ひゐたるぞ」とつぶやかるれど、いとここちなげなるさまは、さすがにしたらねば……（東屋⑦三二六～三二七）

と、悪態をつきながらもやはり高評価を下しているのである。そしてこの場面以降、母君は左近少将の面倒を浮舟よりも優先させている。

この場面で母君が見たのは、常陸介邸において婿として何の不足もない左近少将の姿であった。その妻が寄り添う姿は中の君と比べれば「くちをしのさまどもや」ではあるが、もはや母君は浮舟を左近少将の相手にふさわしいとは考えていない。浮舟の結婚に高い理想を抱いた母君にとって、逆に、左近少将は浮舟の相手としてはふさわしくなくなった。とすれば、この場面で母君が目にしている左近少将とその妻の姿は、常陸介邸にいる夫婦として全く違和感のない、むしろお似合いの二人なのではないだろうか。そして今、この邸に浮舟はいない。浮舟がいなくなった常陸介邸は、何の矛盾も違和もない受領の家として母君の前に存在することとなったのではないだろうか。そして、母君は浮舟のいなくなった常陸介邸で、左近少将の妻の面倒を見て、常陸介北の方としての役割を全うすることになったのである。

浮舟は、母君にとって、かつて八の宮のお手つき女房の中将だった過去の遺物であった。浮舟の物語が始まったとき、母君はその過去の遺物に悩まされていた。しかし、母君は現在の全てが不満であったわけではない。先に確認したように、母君は常陸介北の方としてある程度満足していた。ただ、浮舟という存在があったがために、中将という女房であった過去に悩まされていたにすぎない。そして、母君は二条院に行き、浮舟の結婚に高い理想を抱き、過去の世界への憧憬をつのらせた。しかし、浮舟を二条院に預けたり、三条の家へ置いたりした後に浮舟のいない常陸介邸に戻ってみれば、そこには何の違和もない現在の世界があった。そして、常陸介北の方として動くようになった。それは、かつて中将であったときの遺物たる浮舟を捨てることによって初めて可能になったのである。宮家の上臈の女房と、受領の北の方。大きな隔たりのある二つの世界の一方を解消してもう一方に移るのは容易なことではなく、これだけの行程が必要だったのである。その紆余曲折が、ここに描かれていたのだ。

浮舟を切り捨てることによって、母君は常陸介北の方という現在の立場におさまることができた。母君の物語は正篇から受け継がれたお手つき女房としての「中将」の物語の続篇であり、「子を生んだお手つき女房」という新たな問題を持ち込んだものであった。それは、子を切り捨てることによって「中将」であった過去を捨てるという終着点を見たのである。

そして、それは浮舟の母君というひとりの作中人物だけの問題ではない。母君が切り捨てた過去は、母君一人だけの過去ではない。母君が中将という名で八の宮のお手つき女房であった世界は、幻巻に酷似した世界であった。そして、召名の「中将」は、正篇において確立されたお手つき女房としての造形を継承したものであった。母君の過去は母君だけのものではなく、宇治十帖としての「過去」、つまり、正篇の世界なのである。母君が「現在」存在

している宇治十帖の常陸介家の世界は、お手つき女房として宮に仕えるという「過去」――正篇の世界とは大きく隔たっていた。母君は、その「現在」に満足しつつも、浮舟という存在ゆえに、「中将」の物語たる「過去」の世界を継承し、また、束縛されていた。そして母君は、実際に二条院に行くことで、浮舟をそこに置きたいと望み、もう一度「過去」の世界に憧れを募らせた。しかし、その浮舟を置きざりにして、母君自身は「現在」の世界である常陸介邸に戻ってくることで、その束縛を解き、「過去」の世界を捨てた。「中将」の物語はもはやお手つき女房であった過去を切り捨てたのである。それは、物語が物語自身の「過去」を捨てた瞬間であり、宇治十帖において正篇世界を相対化した瞬間であったのではなかろうか。浮舟の母君による「中将」の物語は、宇治十帖が正篇世界を相対化するひとつの方法を示しているのである。

おわりに――宇治十帖と「過去」

浮舟の母君の物語は、宇治十帖が正篇世界を相対化していくひとつの方法を示した。正篇世界の一部はその続きが描かれる中で確かに相対化されたのである。それが「中将」の物語であった。しかし、物語は最後にもう一人、中将という名の女房を登場させる。蜻蛉巻に登場する女一宮づきの中将である。

女一宮づきの中将は薫と贈答し、「よしづきて、おほかためやすければ、誰ならむ」（蜻蛉⑧一六三）と目をつけられる。その後匂宮にも目をつけられ、匂宮に名を聞かれた他の女房が「中将の君」であると伝える。それを聞いた薫は「なほあやしのわざや、誰にかと、かりそめにもうち思ふ人に、やがてかくゆかしげなく聞こゆる名ざしよ」（蜻蛉⑧一六五）と思う。ここから、この中将に間もなく匂宮の手がつくことが予想される。このようにここで登場する中将もやはり受け継がれてきた造形の中にある。しかもこの中将は、この場面で初めて中将という召名が明かされる女房である。今まで登場してきた中将たちは既に中将という名が知れている女房であり、このように名を聞かれて初めて知られる中将の登場は最後にして最初のことである。最後にこの中将を登場させることによって、お手つきとしての「中将」の一貫性は改めて強調される。

しかし、ここに登場する中将からは、もはや新しい物語は生まれない。匂宮の手がつくことを予想させつつも、それがこの先の物語で語られることはない。「中将」という魅力的な女房に男たちが欲望するという一貫した展開の先にあるものを、もはや物語は引き受けないのである。物語は浮舟の母君に

よって宇治十帖が正篇を相対化する方法を示した。そしてひとたび相対化した過去には、もう戻ることはない。女一宮づきの中将を登場させることによって、物語は過去を過去のものとして確認したのである。

以上、女房「中将」の造形と浮舟の母君について考察してきたが、そこには宇治十帖が正篇世界を相対化する一つの方法が示されていることが明らかとなった。他の女房あるいは他の人物からも考察の余地があろう。右近や侍従といった女房たちにも正篇においては一定の造形があり、それを継承した形で浮舟の物語に登場しているのは明らかである。中将と同様に、やはり宇治十帖と正篇との関わりという点から考察する必要がある。また、女房だけでなく、横川の僧都一族や大内記道定などから正篇世界との関わりを指摘した論もある[18]。別の角度からいえば、弁の尼と柏木の関係や八の宮の没落など宇治十帖になって初めて登場する、いわば「正篇に後付けした過去」という問題もある。宇治十帖にとって、「過去」とは、正篇とは何なのか。今後なお考えるべき問題としたい。

注

1 侍従と右近に関しては次節で論じる。

2 秋山虔「女房たち」(『鑑賞日本古典文学　九　源氏物語』角川書店　一九七五)。

3 「中将の君―源氏物語の女房観―」「もと中将の君」(ともに『源氏物語　生と死と』武蔵野書院　一九八八)。

4 「源氏物語の端役者―女房―中将を中心として―」(『東横学園女子短期大学紀要』三　一九六四)。

5 「源氏物語における〈形代〉」「召人のまなざしから」(ともに『源氏物語　感覚の論理』有精堂　一九九六)。

6 『源氏物語』の女房をめぐって―宇治十帖を中心に―」(『源氏物語とその展開　交感・子ども・源氏絵』竹林舎　二〇一四)。

7 『源氏物語』において「召人」という語が使用されるのはわずか二例しかなく、髭黒北の方づきの中将に「召人だちて」とあるのはそのうちの一つである。『源氏物語』における「召人」の定義には再検討の余地があり、本節では「貴人と性愛関係にある女房」は「お手つき女房」と表現するにとどめたい。なお、「召人」の定義を検討した論として池田大輔「平安朝文学「侍女」考―「めしうど」と呼ばれた女性たち」(『駒沢大学大学院国文学会論輯』三三　二〇〇五・三)がある。

8 清水好子「光源氏論」（『研究講座　源氏物語の視界2』新典社　一九九五）。

9 三田村雅子は前掲注5「召人のまなざしから」において召人の指すものを拡大し「光源氏に女房という立場を越えて心惹かれる女房」として六条御息所づきの中将、朧月夜づきの中納言、朝顔斎院づきの中将、藤壺づきの中納言・中務を挙げる。

10 前掲注5「源氏物語における〈形代〉」。

11 ここで集約された中納言・中務はあくまで光源氏のお手つき女房としての彼女たちである。特に中納言に関しては弘徽殿女御や女三宮に仕え誰のお手つきでもない中納言もいる。「中」のつく女房としてまとめてとらえている前掲注5三田村論文には疑問が残る。

12 秋山虔「召人について―源氏物語読解例の一つ―」（『源氏物語の論』笠間書院　二〇一一）、前掲注6原岡論文。

13 「性の制度化――召人の姓をめぐって」（『乳房はだれのものか』新曜社　二〇〇九）。

14 前掲13「性の制度化――召人の姓をめぐって」。

15 前掲3「中将の君―源氏物語の女房観―」。

16 「社会の欲望媒介装置＝浮舟―交換される欲望―」（『源氏物語＝性の迷宮へ』講談社選書メチエ　二〇〇一）。

17 鈴木日出男は「中将の君と浮舟」（『源氏物語虚構論』東京大学出版会　二〇〇三）で薫を垣間見る直前の母君の中の君への対応を「彼女自身が浮舟を庇護し通すというよりも、その責任を中の君に転嫁しているとさえみられる」と指摘するが、その通りであろう。

18 神田龍身「薫をめぐる端役たち―「後見」「しるべ」という黒衣的欲望」（『端役で光る源氏物語』世界思想社　二〇〇九）、大内記に関しては中丸貴史「『源氏物語』浮舟巻における情報と欲望構造―内宴と躍動する家司たち―」（『源氏物語〈読み〉の交響』新典社　二〇〇八）がある。

第二節　「侍従」「右近」とふたりの女房

はじめに

『源氏物語』において女房の召名は重要な意味を持つ。多くの同名別人の女房が登場するなか、同じ召名の女房は別人であっても似た造形になっていることがあるからである。そして、その傾向が特に顕著である「侍従」・「右近」・「中将」[1]といった召名の女房は、いずれも宇治十帖の浮舟周辺に登場している。逆にいえば、浮舟物語に登場する「侍従」・「右近」・「中将」は、正篇における同名の女房を利用して造形されているのだ。本稿では浮舟物語で重要な役割を担う「侍従」と「右近」[2]について考察し、正篇世界を利用しながら展開させる浮舟物語の方法を考えたい。

一　「右近」から「侍従」へ―夕顔物語と浮舟物語

浮舟物語は、夕顔物語との類似性が古くより指摘されてきた[3]。なかでも、浮舟と夕顔の類似は「ある設定にもとづいた一定の場面」にあるとして、夕顔巻で光源氏が夕顔を某院に連れ出す場面と、東屋巻で薫が浮舟を連れ出す場面および浮舟巻で匂宮が浮舟を宇治川対岸の家へ連れ出す場面の類似を検討し、「夕顔巻の場面という枠組みが、浮舟を死へと導きつつ同時に浮舟の孤絶した状況を浮き彫りにしていくという機能を果たす「装置」として捉えられるのではないか」とした吉井美弥子の論[4]が注目される。吉井論は夕顔物語と浮舟物語にともに登場する「右近」の存在も指摘し、従来論争となっている東屋巻の中の君づき「右近」との矛盾[5]も「それだけ浮舟の侍女に夕顔の侍女が重なり合うように思わせてしまう物語の力がそこに潜んでいる」とする。

たしかに、浮舟物語における「右近」の存在は重要である。この浮舟づきの右近は夕顔づきの右近と明らかに重なる。ともに乳母の子であるということまで共通している[6]。さらに、夕顔巻で光源氏が夕顔を某院に連れ出す場面と、浮舟巻で匂宮が浮舟を宇治川対岸の家へ連れ出す場面を比較すると、女の方には乳母の子である「右近」がいるだけでなく、男の方にも乳母の子が存在している。光源氏には惟光が、匂宮には時方がいる。無論、主人の忍

び歩きに腹心である乳母の子が従うことは当然なのであろうが、この惟光・時方はいずれも五位の位を持つ者として「大夫」（惟光は夕顔①一五五、時方は浮舟⑧五六など）と呼ばれ、呼称の面でも共通する。このふたつの場面の類似性は、ひと組の男女と、その乳母の子として「右近」「大夫」と呼ばれる人物が登場するという設定自体からも指摘できるのだ[7]。

一方で、このふたつの場面には登場人物の設定に大きな違いがある。夕顔巻では光源氏が夕顔を車に「軽らかにうち乗せ」（夕顔①一四四）ると、それに続いて「右近ぞ乗りぬる」（同）とあった。しかし、浮舟巻では匂宮が浮舟を「かき抱きて出」る（浮舟⑧五二）と、「右近はこの後見にとまりて、侍従をぞたてまつる」（同）のだ。浮舟巻の場合、右近は同行しない。その代わりに侍従を行かせている。

「右近」ではなく「侍従」が行った。この違いは重要なのではないだろうか。先に述べたように、『源氏物語』において女房の召名には意味がある。「右近」が夕顔物語を重ねる女房の召名ならば、その「右近」に代わって「侍従」を配したことは見落としてはならないことのはずだ。「侍従」という召名の女房は『源氏物語』のなかで同名別人が多く登場し、しかも、特徴的な造形になっている女房である。『源氏物語』における「侍従」の造形を確認した上で、浮舟物語の「侍従」について検討していきたい。

二　「侍従」という名の女房

「侍従」という名の女房は正篇に四人、続篇に二人登場する。正篇に登場するのは、末摘花づきの侍従、絵合巻に登場する内裏女房の侍従の内侍、雲居雁づきの小侍従、女三宮づきの小侍従[8]である。雲居雁づきと女三宮づきは「小侍従」であるが、女三宮づきの小侍従には「侍従」とする例があるため、「侍従」と「小侍従」は区別しなくてよいと考える[9]。また、侍従の内侍は、絵合において「梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少将の命婦、右には大弐の典侍、中将の命婦、兵衛の命婦」（絵合③一〇三）と登場する女房である。「典侍」「内侍」「命婦」というように上の女房であることが示される呼称で列挙される箇所であり、「侍従」であることよりも「内侍」であることに意味があると考えられるため今回は対象外とする。

末摘花づきの侍従は、まず末摘花巻に登場する。彼女は「女君の御乳母子、侍従とて、はやりかなる若人」（末摘花①二六一）と紹介される。さらに、「若びたる声の、ことにおもりかならぬ」（同）、「斎院に参り通ふ若人」（末摘花①二六九）と若いということが繰り返し語られる。その後、光源氏が須

磨に退去している間に末摘花の女房たちは次々と去っていくが、侍従は「侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれ果てぬ者にてさぶらひつれど」（蓬生③六一）と変わらず仕えていた。しかし、やがて末摘花の叔母の夫である大弐の甥と結婚して、末摘花を見捨てて大宰府に下向してしまう。後に末摘花が光源氏と再会できたと知った後は、「侍従が、うれしきものの、今しばし待ちきこえざりける心浅さをはづかしう思へる」（蓬生③八二）とある。乳母子でありながら、結局は最後まで側にいることをしなかった「心浅さ」のある女房である。

雲居雁づきの小侍従は、乙女巻の夕霧が雲居雁に逢おうとしてかなわなかった場面で話題に出る。「「これあけさせたまへ。小侍従やさぶらふ」とのたまへど、音もせず。御乳母子なりけり」（乙女③二四六）とあり、小侍従が雲居雁の乳母子であり、雲居雁と夕霧の幼い恋の仲介をしていたらしいことがわかる。しかし、この場面は内大臣が二人の関係に激怒した後であり、そのためか小侍従は夕霧・雲居雁の意に反して二人の仲介をしていない。

女三宮づきの小侍従は正篇で最も印象的に登場する侍従であろう。彼女は「小侍従といふ御乳主」（若菜上⑤一二三）、「小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍従の乳母の娘なりけり、その乳母の姉ぞ、かの督の君の御乳母なりければ、早くより気近く聞きたてまつりて」（若菜下⑤一九九～二〇〇）とある。末摘花づき、雲居雁づきの侍従と同じく主人の乳母の娘である。末摘花づき、雲居雁づきの侍従のように「乳母子」という語は使用されていないが、吉海直人氏は、小侍従に使われている「乳主」という語を「女三の宮と同年齢の最も信頼されている乳母子」と定義している[10]。小侍従も他の侍従たち同様に乳母子であると考えてよいだろう。彼女は柏木に対して「いふかひなくはやりかなる口ごはさ」（若菜下⑤二〇二）で話す女である。「はやりか」という語は末摘花づきの侍従にも使われていた。また、柏木を手引きしたことは、「しばしこそ、いとあるまじきことに言ひ返しけれ、もの深からぬ若人は、人のかく身にかへていみじく思ひのたまふを、え否び果てで」（若菜下⑤二〇三～二〇四）と、密通が露見した後に女三宮を「憚りもなく」（若菜下⑤二三二）叱る様は「心やすく若くおはすれば、馴れきこえたるなめり」（同）とあり、若いがゆえに思慮の浅い人物として造形されている。

以上のように、正篇に登場する三人の「侍従」には共通した造形がなされている。いずれも恋の場面に登場する乳母子である[11]ということに加え、若く、それゆえに思慮が浅い女房であることが注目される。末摘花づきの侍従は他の女房たちが去っても変わらず仕えていたが、最後には「心浅さ」によって末摘花のもとを去り、末摘花が光源氏と再会するのを見ることはなかった。雲居雁づきの小侍従は夕霧と雲居雁の恋の仲立ちをしていたが、内大臣に気づかれてからはそれをやめてしまった。女三宮づきの小侍従も、柏木に屈し、彼を女三宮の寝所へ導いてしまった。この「侍従」たちは、若さや若いゆえの思慮の浅さでもって、乳母子でありながら主人の意に反する行動も取る女房である。

三　「右近」という名の女房

では、一方の「右近」はどうであろうか。「右近」という女房は、夕顔巻と浮舟巻に登場するふたりの「右近」と、浮舟づきの「右近」と同一人物であるかのような表現があって問題となっている[1][2]中の君づきの「右近」の他には登場しない。それだけに浮舟づきの「右近」が直接的に夕顔づきの「右近」を想起させるようになっているのだが、中の君づきの「右近」も含めて、人物造形からも共通点が見出せないか考えたい。

夕顔づきの右近は惟光の発言の中に登場するのが最初である。

一日前駆追ひてわたる車のはべりしを、のぞきて、童女の急ぎて、「右近の君こそ、まづもの見たまへ。中将殿こそ、これよりわたりたまひぬれ」と言へば、また、よろしき大人出で来て、「あなかま」と、手かくものから、「いかでさは知るぞ、いで、見む」とて、はひわたる……（夕顔①一三四）

このように、惟光の見た童女が「右近の君こそ、まずもの見たまへ」と言っているところで名が示され、後にある「よろしき大人」に該当すると考えられる。また、夕顔が死ぬ前の場面では、後から合流した惟光が「右近が言はむこと、さすがにいとほしければ、近くもえさぶらひ寄らず」（夕顔①一四七）と文句を言われることを恐れていて、右近がしっかりとした女房であることが察せられる。そして、某院で夕顔が死んでしまった後は光源氏に引き取られるが、そこでは「容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり」（夕顔①一六六）とある。また、素性は「右近は、亡くなりにける御乳母の捨て置きてはべりければ」（夕顔①一七二）とあり、夕顔の乳母の娘であったことが分かる。

それからおよそ十八年後、右近は玉鬘巻で再び登場する。光源氏の須磨退去の時に紫の上づきとなり、「右近は、何の人数ならねど、なほその形見と見たまひて、らうたきものにおぼしたれば、古人の数につかうまつり馴れたり」（玉鬘③二八一）と夕顔の形見として光源氏に目をかけられていたことがわかる。そして、長谷寺に参詣した折に玉鬘と再会し、彼女を六条院に迎えることに成功することになる。後に玉鬘が髭黒大将の妻になったときにもついて行っている。「右近」は乳母の娘で、容姿こそ良くないものの、堅実で主人によく仕える女房として造形されている。

中の君づきの右近は、二条院で匂宮が浮舟を発見する場面に登場し、「右近とて、大輔が娘のさぶらふ」（東屋⑦三一〇）と紹介される。

「何ごとぞ」とて探り寄るに、衽姿なる男の、いとかうばしくて添ひ臥したまへるを、例のけしからぬ御さまと思ひ寄りにけり。女の心合はせたま

ふまじきこと、とおしはからるれば、「げにいと見苦しきことにもはべるかな。右近はいかにか聞こえさせむ。今参りて、御前にこそは忍びて聞こえさせめ」（東屋⑦三一一）

とあり、匂宮の「例のけしからぬ御さま」に対して、中の君に告げようかと半ば脅すかのような強気の対処をしている。また、後に出てくる弁の尼の言葉の中にも右近の匂宮に対する以下のような評価がある。

この宮の、いとさわがしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人、さぶらひにくげになむ。おほかたは、いとめでたき御ありさまなれど、さる筋のことにて、上のなめしとおぼさむなむわりなき、と大輔が娘の語りはべりし。（浮舟⑧六八）

この「大輔が娘」＝右近は匂宮が女房たちに手をつけることに手を焼いているのだ。先に匂宮の色好みを「例のけしからぬ御さま」と評していたことと対応する。このように右近はお手つき女房とは縁遠い、あくまで仕事のできる女房として造形されている。夕顔づきの右近は夕顔の形見として光源氏のお手つきであったことが察せられる[13]が、もともと「容姿などよからねど」（夕顔①一六六）である彼女は「いとさわがしきまで色におはします」ことによる匂宮のお手つき女房とは位相が異なる。「右近」という名の女房は、堅実に仕える女房として造形されていると考えてよいだろう。思慮の浅い「侍従」とは対照的である。

なお、中の君の周辺には乳母と思われる女房がいない。橋姫巻には、乳母が中の君を「見捨てたてまつりにければ」（橋姫⑥二五八）とある。とすれば、中の君の最側近として登場する大輔は実質的には乳母の役割を果たしていたのではないか。そして、その娘である右近は乳母子に準ずるような位置にあると考えられるのではないだろうか[14]。「右近」という召名の女房の造形として、夕顔の乳母の娘であった「右近」との共通点がここにも見出せる。

四　浮舟づきの侍従と右近

検討してきた通り、「侍従」と「右近」という召名の女房には一定の造形がある。では、浮舟づきの「侍従」と「右近」はどうであろうか。

最初に登場するのは侍従である。東屋巻で薫は浮舟を宇治に連れ出す。夕顔巻との類似が指摘される場面のひとつであるが、ここでも同行したのは右近ではなく侍従であった。侍従は「この君に添ひたる侍従」（東屋⑦三三九）とあり、浮舟の側近の女房とされている。また、「若き人は、いとほのかに

見たてまつりて、めできこえて、すずろに恋ひたてまつるに、世の中のつつましさもおぼえず」（同）とあり、正篇に登場した「侍従」たち同様、若いということが示されている。勿論、ここは同行している「老いたる者」（東屋⑦三四〇）である弁の尼と対比する表現としての「若き人」であるが、それが「侍従」という名の女房であることに意味があろう。そして、涙を流している弁の尼を「侍従はいと憎く、もののはじめにかたち異にて乗り添ひたるをだに思ふに、なぞかくいやめなる、と憎くをこにも思ふ」（東屋⑦三四〇）や「若き人、あやしう見苦しき世かな、心ゆく道に、いとむつかしきこと添ひたるここちす」（東屋⑦三四一）と不快に思っている。さらに、

琴は押しやりて、「楚王の台の上の夜の琴の声」と誦じたまへるも、かの弓をのみ引くあたりにならひて、いとめでたく、思ふやうなりと、侍従も聞きゐたりけり。さるは、扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、後れたるなめるかし。（東屋⑦三四五）

と、薫がくちずさんだ詩が実は不吉なものであったということが理解できなかった姿もえがかれている。浮舟づきの侍従も若く、思慮の浅い女房として正篇の造形を継承しているといえる。

一方の右近は匂宮が薫を装って宇治に来る場面に登場する。匂宮はそこにいる女が浮舟であることを「童のをかしげなる、糸をぞよる。これが顔、まづかの火影に見たまひしそれなり。うちつけ目かと、なほうたがはしきに、右近と名のりし若き人もあり」（浮舟⑧二四）と女童や右近の存在によって確信する。前述した、矛盾として論争になっている箇所である。深入りすることは避けるが、中の君の側近である右近がここにいるはずはなく、ここは別人と取るのが妥当であろう。

右近は「若き人」とありながら、この場を取り仕切っている。それは女房たちが右近の一言で寝始めたことからも察せられる。この後、右近は匂宮を浮舟のもとへと導いてしまう。これは「いとらうらうじき御心」（浮舟⑧二八）で薫を装った匂宮に騙されてしまったためで、匂宮と知っていて手引きしたわけではないということも「右近」にふさわしい。そして、翌朝事実に気付くと右近は一人で偽装工作にかかる。このとき、匂宮の乳母子である時方を叱り、それに対して時方が「勘へたまふことどもの恐ろしければ、さらずとも逃げてまかでぬべし」（浮舟⑧三二）と答えるという箇所がある。ここには、惟光が叱られるのを恐れた夕顔づきの右近を彷彿とさせるものがある。光源氏・惟光・右近の関係と、匂宮・時方・右近の関係は類似している。また、偽装工作にかかる右近が「初瀬の観音、今日事なくて暮らしたまへ」（浮舟⑧三三）と念じるのも、夕顔づきの右近が玉鬘と長谷寺で邂逅したことを思い起こさせる。

このように、この浮舟づきの侍従・右近はそれ以前に登場した「侍従」「右近」の造形を継承している。しかも、他の「侍従」「右近」がそうであったように、浮舟づきのふたりはふたりとも、浮舟の最側近の女房であるかのように登場する[15]。物語は夕顔物語の右近を彷彿とさせる「右近」を登場させながらも、正篇において全く対照的な女房として造形した「侍従」をもう一人の側近女房として登場させ、正篇から継承したふたりの女房像を利用して物語を動かそうとしているのだ。

五　侍従と右近の動かす物語

浮舟巻、匂宮が浮舟を宇治川対岸へと誘う場面で、侍従と右近は初めて同時に登場する。夕顔巻と重ねながら「右近」ではなく「侍従」を配した場面である。侍従は、右近の「同じやうにむつましくおぼいたる若き人の、心ざまも奥なからぬ」（浮舟⑧五一～五二）者として登場する。「侍従」はここでも「侍従も、いとめやすき若人なりけり」（浮舟⑧五五）や、「侍従、色めかしき若人のここちに、いとをかしと思ひて、この大夫とぞ物語して暮らしける」（浮舟⑧五六）と、若いことが繰り返し語られる。そして夕顔巻で「大夫」である惟光を恐れさせた「右近」と異なり、この「侍従」は「大夫」である時方と楽しく過ごす。夕顔巻に似せながら、「右近」ではなく「侍従」を配したことによって、ここは愛欲にまみれた場面に転換されたのだ。浮舟もここでは死なず、その死（死のうとした、ではあるが）は物の怪によるものなどではなく、薫と匂宮の間で揺れてのものとなる。そしてその浮舟を追い詰めたに等しいのは、対照的なふたりの女房であった[16]。

侍従と右近の見解の違いははっきりとしている。ふたりは浮舟の様子を見ながら「見合はせて、「なほ移りにけり」など、言はぬやうにて言ふ」（浮舟⑧六一）と浮舟が匂宮に心を移したと思うが、それに対して侍従は「ことわりぞかし。殿の御容貌を、たぐひおはしまさじと見しかど、この御ありさまはいみじかりけり。うち乱れたまへる愛敬よ。まろならば、かばかりの御思ひを見る見る、えかくてあらじ。后の宮にも参りて、常に見たてまつりてむ」（同）と言う。侍従は匂宮に魅せられたのだ。それも、侍従の見解は、「まろならば」であるとか、「后の宮にも参りて、常に見たてまつりてむ」という、あくまで侍従自身の願望によるものだということに気をつけておきたい。この後も侍従は「宮をいみじくめできこゆる心なれば、ひたみちに言ふ」（浮舟⑧八一）と、自身の願望によって匂宮を勧め、その見解はぶれることがない。

一方の右近は、「うしろめたの御心のほどや。殿の御ありさまにまさりたまふ人は、たれかあらむ。容貌などは知らず、御心ばへけはひなどよ。なほこの御ことは、いと見苦しきわざかな。いかがならせたまはむとすらむ」（浮舟⑧六一）と、薫を擁護しながら今後を憂うが、積極的に薫を勧めようとはしない。それどころか、その後は状況が変わるに従って「一方におぼし定めてよ。宮も御心ざしまさりて、まめやかにだに聞こえさせたまはば、そなたざまにもなびかせたまひて、ものないたく嘆かせたまひそ」（浮舟⑧八一）と匂宮でも構わないという姿勢すら見せるようになる。

右近は浮舟のことを思い、浮舟が匂宮に心を移したと思ったからこそ、このように言った。しかし、これが浮舟の思いとは異なっていた。浮舟の思いは、

君、なほわれを、宮に心寄せたてまつりたる、と思ひて、この人々の言ふ、いとはづかしく、ここちにはいづれとも思はず、ただ夢のやうにあきれて、いみじく焦られたまふをば、などかくしも、とばかり思へど、頼みきこえて年ごろになりぬる人を、今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじともものも思ひ乱るれ、げによからぬことも出で来たらむ時、とつくづくと思ひゐたり。「まろは、いかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かく憂きことあるためしは、下衆などのなかにだに多くやはあなる」（浮舟⑧八二～八三）

と揺れていて、右近や侍従が、浮舟が匂宮に心を移したと思って匂宮のことを勧めることに引け目を感じており、右近の配慮はむしろ裏目に出てすらいるのである。このような箇所は他にもあり、匂宮から上京を促す文が来ると右近は「右近はべらば、おほけなきこともたばかり出だしはべらば、かばかりちひさき御身ひとつは、空より率てたてまつらせたまひなむ」（浮舟⑧八八）と励ますが、浮舟は「かくのみ言ふこそいと心憂けれ。さもありぬべきこと、と思ひかけばこそあらめ、あるまじきこと、と皆思ひとるに、わりなく、かくのみ頼みたるやうにのたまへば、いかなることをし出でたまはむとするにか、など思ふにつけて、身のいと心憂きなり」（同）と言い、右近の配慮は逆効果だったことがわかる。

「侍従」と「右近」はいずれも『源氏物語』が正篇から作り上げてきた一貫した造形を継承したものだ。そして堅実によく仕える女房である「右近」は、浮舟を思うあまりに判断を誤り、結果的に浮舟を追い詰めることになった。一方、若く思慮が浅く必ずしも主人の思うようには動かない「侍従」は、一貫して自身の欲望のままに匂宮を勧め続けた。夕顔物語を彷彿とさせる「右近」に対して、「侍従」を導入した浮舟物語は、正篇から継承された「侍従」と「右近」という女房の対照的な造形を動力にして展開し、浮舟を追い詰めていったのだ。

六　侍従と右近のその後

「侍従」と「右近」は正篇からの造形を継承した女房たちであるが、それだけではない。実は大きく違う設定の上にあったということが、浮舟も失踪した後の蜻蛉巻で暴露されている。

浮舟の失踪後、侍従は匂宮に引き取られて明石中宮の女房になる。匂宮に呼ばれて最初に上京する場面にはこうある。

①侍従ぞ、ありし御様もいと恋しく思ひきこゆるに、いかならむ世にかは見たてまつらむ、かかるをりに、と思ひなして参りける。黒き衣ども着て、引きつくろひたる容貌もいときよげなり。裳は、ただ今われより上なる人なきにうちたゆみて、色もかへざりければ、薄色なるを持たせて参る。②おはせましかば、この道にぞ忍びて出でたまはまし、人知れず心寄せきこえしものを、など思ふにもあはれなり。道すがら泣く泣くなむ来ける。

（蜻蛉⑧一二五～一二六）

ここでも侍従は、傍線部①に示したように自身が匂宮に会いたいということも強い動機となって上京している。さらに、傍線部②のように侍従自身が匂宮に心を寄せていたことも再び語られている。

結局、侍従は匂宮に仕えることを打診されるも、本人の希望で明石中宮に仕えることになる。匂宮ではなく明石中宮の女房を希望したのは「御心はさるものにて、人々の言はむことも、さる筋のことまじりぬるあたりは、聞きにくきこともあらむ」（蜻蛉⑧一五八）と女房たちの噂を憚ってのこととされているが、先に確認したように、初めて匂宮を目にした、あの宇治川対岸の家から帰ってきたとき、侍従はすでに明石中宮に仕えたいという願望を口にしていた。その念願をかなえたことになる。

ところで、浮舟失踪後、匂宮は二度にわたって時方らを宇治に行かせている。この時、時方は侍従に会う前に、必ず右近に会おうとしている。一度目は、浮舟が失踪した翌日のことで、時方は匂宮から「例の、心知れる侍従などに会ひて、いかなることをかく言ふぞ、と案内せよ」（蜻蛉⑧一〇四）と、浮舟の死の真相を「侍従など」に聞けと命じられたにもかかわらず、

右近に消息したれども、え会はず、「ただ今ものおぼえず、起きあがらむここちもせでなむ。さるは、今宵ばかりこそはかくも立ち寄りたまはめ、え聞こえぬこと」と言はせたり。「さりとて、かくおぼつかなくては、いかが帰り参りはべらむ。今一所だに」と切に言ひたれば、侍従ぞ会ひたりける。

（蜻蛉⑧一〇四～一〇五）

と、まず右近に会おうとしたものの断られ、「今一所にだに」と頼んだために侍従と会うことができたという流れになっている。「侍従など」の「など」には右近も含まれるのだろうが、匂宮が名を挙げた侍従ではなくまず右近に会おうとしたことが注目される。

二度目は侍従を都に連れて帰った時であるが、この時も最初は右近に会い、右近を都に迎えようとしていた。しかし、右近は動こうとしなかった。そこで、

「わざと御車などおぼしめぐらして、たてまつれたまへるを、むなしくては、いといとほしくなむ。今一所にても参りたまへ」と言へば、侍従の君呼び出でて、「さは、参りたまへ」と言へば……（蜻蛉⑧一二五）

と、時方は侍従の上京を提案し、右近からも勧められて侍従が行くこととなった。このようなことは浮舟巻にもあった。薫側の厳重な警備の中で匂宮が浮舟に会おうとする場面であるが、

右近が従者の名を呼びて会ひたり。いとわづらはしく、いとどおぼゆ。「さらに、今宵は不用なり。いみじくかたじけなきこと」と言はせたり。宮、などかくもて離るらむ、とおぼすに、わりなくて、「まづ時方入りて、侍従に会ひて、さるべきさまにたばかれ」とてつかはす。（浮舟⑧八九～九〇）

と、まず右近に会おうとしたものの断られたために、時方に侍従に会うよう命じている。時方は宇治川対岸の家で侍従と語り暮らしたのだから、侍従の方が会いやすいはずであるし、実際、侍従は求めに応じて必ず対面している。それにもかかわらず、匂宮側は侍従に会う前に必ず一度は右近に会おうとし、断られるという段階を踏んでいるのだ。

その理由が明らかになるのが、侍従が明石中宮へ出仕することになった顛末が語られる箇所であると考えられる。

また、おぼすままに、「恋しや、いみじや」などのたまはむには、かたはらいたければ、かしこにありし侍従をぞ、例の、迎へさせたまひける。皆人どもは行き散りて、乳母とこの人二人なむ、取り分きておぼしたりしも忘れがたくて、侍従はよそ人なれど、なほかたらひてあり経るに、世づかぬ川の音も、うれしき瀬もやある、と頼みしほどこそなぐさめけれ、心憂くいみじくもの恐ろしくのみおぼえて、京になむ、あやしき所に、このころ来てゐたりける。尋ね出でたまひて、「かくてさぶらへ」とのたまへど、御心はさるものにて、人々の言はむことも、さる筋のことまじりぬるあたりは、聞きにくきこともあらむ、と思へば、うけひききこえず、后の宮に参らむとなむおもむけたれば、「いとよかなり。さて人知れずおぼしつかはむ」

とのたまはせけり。心細くよるべなきもなぐさむやとて、知るたよりもとめて参りぬ。きたなげならでよろしき下臈なり、とゆるして、人々もそしらず。

（蜻蛉⑧一五七～一五八）

二重傍線部に示したように、侍従は実は浮舟の乳母の子でも親戚でもなく「よそ人」だったことがわかる。確かに、「取り分きておぼしたりし」と、目をかけられていたことは確かのようだ。しかし、所詮は「よそ人」であり、浮舟が京に迎えられるような「うれしき瀬」をたよりにしていたものの、それが叶わなくなった後の宇治川の音は「心憂くいみじくものおそろしくのみ」感じられるものとして、しばらく経つと京に引っ越していた。

さらに、手習巻で浮舟が離れた人々を思いやる場面には、「同じ心なる人もなかりしままに、よろづ隔つることなくかたらひ見馴れたりし右近なども、をりをりは思ひ出でらる」（手習⑧一九五）と右近の名が出されるにも関わらず、侍従の名は出ない。「右近など」の「など」に含まれるのかもしれないが、あくまで名前を出して回想されるのは「右近」だけなのだ。

右近の方は乳母の娘であることが浮舟巻で明らかになっている。浮舟に聞かせた話の中で、二人の男の争いのもととなった姉を「東の人になりて、まも今に恋ひ泣きはべる」（浮舟⑧八〇）と言っていて、「まま」（乳母）が右近の母であることが分かる。一方の侍従は、どういった立場か明かされないまま側近であるかのように登場していた。

『源氏物語』は正篇から「侍従」という女房に一貫した造形を与えていた。若く思慮が浅く、時に主人に反するというものだが、加えて、正篇に登場した「侍従」は全て乳母子であった。そもそも、「侍り従う」という「侍従」の名そのものに、側近のイメージがある[17]。そのイメージと、『源氏物語』がつくりあげた乳母子としての「侍従」の造形によって、物語は、この侍従を浮舟の側近女房として読むように誘導している。

それが最後に、実はこの侍従は「よそ人」であったと明かされた。自身の願望のままに匂宮を勧める侍従の姿は、乳母子でありながらも思慮の浅い女房であるという正篇からの「侍従」の造形を継承したものとして読めた。しかし、「よそ人」であると明かされた後、もう一度立ち帰って読めば、これに新たな説得力が加わることになる。「よそ人」であるからこそ侍従は浮舟の思いはさておきで匂宮に惹かれ、明石中宮に仕えたいなどと願えたのだ。つまり、物語は侍従を「よそ人」として設定しながら、正篇の「侍従」たちと共通する人物造形にすることによって、浮舟の侍従も正篇の「侍従」たちと同じ側近女房であるかのように見せかけていたのではないだろうか。

浮舟物語には多くの脇役・端役が登場し、自身の欲望のままに動く[18]。浮舟物語の始まり、東屋巻に登場した仲人は、左近少将との縁談を持ってきて

おきながら、浮舟が常陸介の実子でないことも知らない男であった。彼は「妹のこの西の御方にあるたよりに、かかる御文なども取り伝へはじめけれど、守にはくはしくも見え知られぬ者」（東屋⑦二七六）である。そんな男が左近少将と浮舟の縁談の仲人になり、破談になれば即座に常陸介実子との縁談に切り替え、これを成功させているのだ。また、匂宮を宇治へ導く道定は、薫の家司仲信の婿であることを利用して薫の情報を匂宮に流す。そこには匂宮に取り入って昇進しようする目論見があった[19]。無論、この道定は匂宮の乳母子でも何でもない。浮舟物語は、このように本来無関係である人物たちが、まるで側近であるかのように踏み込み、物語を動かしている。しかも道定は正篇では夕霧の師として登場した「大内記」の職にあり、正篇世界の据えなおしが試みられているといわれている[20]。

そして、この「よそ人」の侍従はその最たるものであろう[21]。侍従は自身の欲望のために浮舟に匂宮を勧め続け、最終的には明石中宮の女房になった。それを物語は「侍従」の造形によって側近であるかのように描き続け、最後に実は「よそ人」であったという真相を明かすという、「大内記」道定の場合よりも一層手の込んだ方法で描き出してみせたのである。

おわりに

明石中宮に出仕した侍従は「きたなげならでよろしき下臈なり」（蜻蛉⑧一五八）とされている。浮舟に仕えていた侍従は、明石中宮のもとに出れば所詮は「下臈」の女房である。匂宮との取次をしていたことで京に迎えられたのであり、本来ならそれが可能な身ではない。とすれば宇治に残る右近も同様のはずで、出仕したとしても夕顔づきの右近の「局など近くたまひて」（夕顔①一六六）というような待遇は期待できない。三位中将の娘である夕顔と、八の宮の娘として認知されず常陸介の娘として扱われる浮舟とでは、もとより身分が違うのであり、同じ「右近」でもまるで身分が違うのだ。侍従が「下臈」の女房にしかなれなかったことは、浮舟の右近が夕顔の右近のようにはなれないことを暗に示す。浮舟の右近は、高貴な家に出仕することも、浮舟と再会することもないだろう。「侍従」「右近」と名のつくふたりの女房だが、身分という点からも正篇の「侍従」や「右近」とは大きく違うことが蜻蛉巻で明確に示されているのだ。正篇から積み上げてきた「侍従」「右近」像を利用することによって浮舟物語は動かされてきたが、宇治を離れて再び都の世界が語られる蜻蛉巻の世界では、浮舟物語が実はいかに正篇世界から異質なものであったかが位置づけ直されている。逆にいえば、正篇世界から遠い

浮舟物語において、いかにも正篇の「侍従」や「右近」と同じであるかのように見せかけられていた浮舟づきの侍従や右近は、『源氏物語』がつくりだした「侍従」像・「右近」像の集大成であったともいえようか。侍従が「侍従」らしく、右近が「右近」らしくふるまえばふるまうほど、蜻蛉巻で明かされる落差も大きくなる。物語はこうして、「侍従」や「右近」を利用して、浮舟物語と正篇との距離をはかってみせたのだ。

注

1 「中将」については前節で論じた。

2 「侍従」と「右近」の造形に関しては武者小路辰子の「侍従と名のる女房はどうも「物深からぬ」「色めかしき」様子があり、右近と名のつく女房は固い方であるのもおもしろい」という指摘（「中将の君―源氏物語の女房観―」（『源氏物語　生と死と』武蔵野書院　一九八八）のほか、原田真理「源氏物語における右近像」（『平安文学研究』七五　一九八六・六）、野村倫子「浮舟入水の脇役たち―「東屋」から「浮舟」へ構想の変化を追って―」及び「「侍従」考―平安末期物語および鎌倉時代の物語にみられる脇役女房史―」（ともに『『源氏物語』宇治十帖の継承と展開』和泉書院　二〇一一）などで検討されている。特に野村論からは多くの示唆を得た。考察が重なる部分も多いが、本稿は正篇世界を利用する方法を見い出すことを目的としており、基本的な論旨を異にする。

3 古くは『岷江入楚』に浮舟の歌に対する指摘があり、その後も『源氏物語評釈』（萩原広道）に指摘が見える。他に島津久基『源氏物語講話　巻三』（中興館　一九四七）、池田亀鑑『新講源氏物語　下巻』（至文堂　一九五一）、岡一男『『源氏物語』のテーマ・構想・構成―内部徴證による成立論―』（『源氏物語の基礎的研究　増訂版』東京堂出版　一九六六）、篠原昭二「東屋」（『源氏物語必携』學燈社　一九七八）、今井源衛「浮舟の造型―夕顔・かぐや姫の面影をめぐって―」（『源氏物語の思念』笠間書院　一九八七）、田中隆昭「宇治十帖における初期の巻々の影響」（『源氏物語　引用の研究』勉誠出版　一九九九）、池田和臣「浮舟登場の方法をめぐって―『源氏物語』の『源氏』取り―」（『源氏物語　表現構造と水脈』武蔵野書院　二〇〇一）など。

4 「浮舟物語の一方法―装置としての夕顔」（『読む源氏物語　読まれる源氏物語』森話社　二〇〇八）。

5 匂宮は宇治で浮舟のもとに薫を装って侵入しようとする際、「右近と名のりし若き人もあり」（浮舟⑧二四）と浮舟づきの右近を目にとめているが、

匂宮が知っている右近は中の君づきの右近のはずであるという矛盾である。藤村潔「右近と侍従―橋姫物語と浮舟物語の交渉―」（『源氏物語の構造』桜楓社　一九六六）、小山敦子「女一宮物語と浮舟物語」（『源氏物語の研究』桜楓社　一九八〇）など。

6　吉海直人「右近の活躍」（『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社　二〇〇八）、中丸貴史「『源氏物語』浮舟巻における情報と欲望構造―内宴と躍動する家司たち―」（『源氏物語〈読み〉の交響』新典社　二〇〇八）。

7　前掲注3『源氏物語講話　巻三』に指摘がある。

8　小侍従の母親は「宮の御侍従の乳母」（若菜下⑤一九九～二〇〇）とあり、固有名「侍従」に「御」が冠されていることで問題となっている。しかし、この乳母は実際には登場しないため、本稿では考察対象外とする。なお、「御侍従」となっていることに関しては、野村倫子が前掲注2「「侍従」考―平安末期物語および鎌倉時代の物語にみられる脇役女房史―」において指摘するように、一般名詞としての「侍従」があったという可能性がある。

9　小侍従のほかにも、『源氏物語』には「小」がつく女房の存在が確認できる。落葉宮づきの小少将は、はじめ「少将の君」（柏木⑤三一三）の呼称で登場し、その後は「例の少将の君」（夕霧⑥一五）であったり、「小少将の君」（夕霧⑥三三）であったりと、「小」がつくときとつかないときがある。明石中宮づきの小宰相も同様で、「小宰相の君といふ人」（蜻蛉⑧一四二）であったり、「かくいふ宰相の君」（蜻蛉⑧一四五）であったりしている。どういった場面で「小」をつけているのかは明確でないが、このように同じ人物でも「小」をつけたりつけなかったりしているため、「小侍従」の「小」の有無は、「侍従」の人物造形を考える上では問題視せずとも構わないと考える。

10　「乳主考」（『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』世界思想社　一九九五）および「女三の宮の乳母達」（前掲注6所収）。

11　前掲注2野村論文「浮舟入水の脇役たち―「東屋」から「浮舟」へ構想の変化を追って―」は、「侍従の名を有する女房はしばしば恋の手引き者となった。しかも、手引きした段階で恋愛が破綻に終わるか、のちに侍従とは無関係に二人が結ばれるという共通点すら有している」とする。

12　前掲注5参照。

13　前掲注6吉海論文、三田村雅子「召人のまなざしから」（『源氏物語　感覚の論理』有精堂　一九九六）など。なお、三田村は夕顔づきの右近を「六条院における召人としての立場と、乳母子的な立場をあわせ持つ存在」と指摘する。

14　吉海直人は「弁の尼」（前掲注6所収）で大輔と右近を「乳母と乳母子に限りなく近い存在」と指摘する。

15 吉海直人は「末摘花の乳母達」(『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社　二〇〇八)で夕顔の右近と末摘花の侍従の対比構造を指摘し、「右近と侍従は、乳母子の典型的な呼称であった」とし、「意図的な対比(右近がプラスで侍従がマイナス)を狙っているとも考えられる」としている。

16 浮舟物語における侍従と右近の役割に関しては、前掲注2野村論文、前掲注2原田論文のほか、鈴木祥子「源氏物語の女房たち」(『言語と文芸』六一　一九六八・一一)、沢田正子「浮舟物語の家司・女房たちの役割」(『講座源氏物語の世界』有斐閣　一九八四)、高橋美穂子「浮舟の運命と女房達―右近・侍従の役割について―」(『羽衣国文』八　一九九五・三)、岩佐美代子「二人の侍臣・二人の侍女」(『源氏物語の展望　第五輯』三弥井書店　二〇〇九)などの先行研究がある。

17 前掲注2「「侍従」考―平安末期物語および鎌倉時代の物語にみられる脇役女房史―」。

18 前掲注16沢田論文。

19 前掲注6中丸論文、前掲注一六沢田論文。

20 前掲注6中丸論文、神田龍身「薫をめぐる端役たち―「後見」「しるべ」という黒衣的欲望」(『端役で光る源氏物語』世界思想社　二〇〇九)。

21 藤本勝義は「浮舟失踪の波紋」(『講座源氏物語の世界』有斐閣　一九八四)において侍従と右近の出自の卑しさを指摘した上で「その彼女たちが活躍し、生き生きと描かれるのは、東屋巻での、常陸介、左近少将、仲人らが繰り広げるリアルな世界を描破することと関係すると思われる。あるいはその世界を描き切ったところから出て来たのかもしれない。常陸介、中将の君、右近、侍従、さらには乳母といった、上流貴族圏からみればまったく取るに足らぬ人間たちの生動は、「浮舟物語」の大きな特徴である」とする。

第三節　「弁」と弁の尼

はじめに

第一節では「中将」、第二節では「侍従」「右近」という女房名から、宇治十帖あるいは浮舟物語と正篇世界との関わりを論じてきた。繰り返しになるが、『源氏物語』において同名の女房は似た造形になる傾向にある。特に宇治十帖の重要人物となる「中将」「侍従」「右近」においてはそれが顕著であった。本節では同じ視点から、「弁」について論じていきたい。言うまでもなく、薫に出生の秘密を告げ、後に出家して「弁の尼」と呼ばれることになる老女房のことである。彼女の負う「弁」という名も、やはり正篇からの造形に関わると考えられる。また、彼女は正篇に登場こそしないが、浮舟の母君同様、「過去」たる前史を持つものである。女房「弁」の物語とは、いかなるものなのであろうか。

一　「弁」と弁の尼

『源氏物語』のなかで「弁」という召名を持つ女房は正篇に三人、続篇に二人の五人である。正篇に登場するのは、藤壺の乳母子、紫の上の乳母である少納言の娘、それに、髭黒を玉鬘のもとに手引きした者である。続篇に登場するのは、薫に出生の秘密を語った柏木の乳母子と、今上女一宮づきの者がいる。五人中の三人が乳母子であるというのが注目されるが[1]、まずは正篇に登場する三人の「弁」について確認したい。

藤壺の乳母子である弁は、藤壺の懐妊に気づく場面に登場する。

御湯殿などにも親しうつかうまつりて、何ごとの御けしきをもしるく見たてまつり知れる、御乳母子の弁、命婦などぞ、あやしと思へど、かたみに言ひあはすべきにあらねば、なほのがれがたかりける御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ。（若紫①二一四～二一五）

ここで弁は、「湯殿などにも親しくつかうまつりて」、「何ごとの御けしきをもしるく見たてまつり知れる」、「御乳母子」であるとされ、王命婦とともに妊娠に気づくのも当然の最側近であることが示されている。しかし、藤壺の妊娠の相手が光源氏であることは王命婦しか知らない。そのため「なほのが

れがたかりける御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ」と、王命婦だけが藤壺の宿世を思うのである[2]。弁が側近であることを説明し、何もかも知っているように語っておきながら、密通のことは知らないというのはなんとも皮肉なことである。王命婦は吉海直人が指摘するように、乳母に比肩する「親類の女房」なのであろう[3]が、彼女と並べて語られたとき、弁には「知っていて当然であるが知らなかった」という感が否めない。しかし、光源氏の側にしてみれば、乳母子として藤壺の傍近くにある弁よりも命婦として内裏に勤めている王命婦の方が接触しやすかったのであろう[4]。そして、王命婦は弁にすら知られぬように手引きをしたことになる[5]。王命婦の手引きは「いかがたばかりけむ」（若紫①二一二）と語られるが、かなり難しい状況のなかで成功させたといえよう。そのため弁は、乳母子でありながら藤壺の密通を知らなかったことになる。

この後、光源氏は賢木巻で藤壺に近づこうとする。近づく際は「心深くたばかりたまひけむことを、知る人なかりければ」（賢木②一五〇）と単独行動であるが、胸の痛みを訴える藤壺に「近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさましう見たてまつりあつかふ」（同）と王命婦と弁とで対応にあたる。そして光源氏を塗籠に押し込めるが、このとき光源氏の衣装を隠したのは、「御衣ども隠し持ちたる人のここちども」（同）と、複数の女房ということになっている。王命婦と弁としか考えられないが、こういった対応をした以上、弁は少なくとも光源氏と藤壺との間に関係があることを知っている。弁がいつ光源氏と藤壺との関係を知ったか、物語には一切語られていない。しかし少なくとも、賢木巻のこの場面までに知ったことは確かである[6]。とすれば、冷泉帝の出生にも気づいていると考える方が自然だということになる。

藤壺密通は後に夜居の僧都によって「さらに、なにがしと王命婦とよりほかの人、このことのけしき見たるはべらず」（薄雲③一七二）と語られる。ここから、やはり弁は冷泉帝の出生にまでは気づいていないと取ることもできる。しかし、これはあくまで僧都の台詞であり、彼の認識である。弁は密通の現場にいなかったのだから、僧都にとって「このことのけしき見たる」人の数に入らないのも無理はない。しかし実のところ弁は、藤壺の傍近くに仕えており、不審な時期であった藤壺の妊娠に王命婦とともに気づき、賢木巻では光源氏の侵入に対応した。冷泉帝の出生の秘密を当初は知らなかったとしても、事後的に気づいた可能性が高いことを物語が示しているのである。ただし、物語は弁を若紫巻と賢木巻にしか登場させない。あくまで秘密露見の可能性を示すのみなのだ。

若紫づきの弁は、葵巻の光源氏と若紫の三日夜の場面に登場する。

のたまひし餅、忍びていたう夜ふかして持て参れり。少納言はおとなしくて、はづかしくやおぼさむと、思ひやり深く心しらひて、娘の弁といふを

呼び出でて、「これ忍びて参らせたまへ」とて、香壺の筥を一つさし入れたり。「たしかに御枕上に参らすべき祝ひのものにはべる。あなかしこ、あだにな」と言へば、あやしと思へど、「あだなることは、まだならはぬものを」とて取れば、「まことに、今はさる文字忌ませたまへよ。よもまじりはべらじ」と言ふ。若き人にて、けしきもえ深く思ひ寄らねば、持て参りて、御枕上の御几帳よりさし入れたるを、君ぞ、例の聞こえ知らせたまふらむかし。

（葵②一一八）

いぬきと同一人物かともいわれている弁である[7]。藤壺づきの弁が乳母子であったように、ここの弁も少納言乳母の娘である。惟光に三日夜餅を渡されるが、「若き人」であるために、「けしきもえ深く思ひ寄らねば」と事情を察することができていない。ここでも「弁」は、秘密の男女関係に関わるのである。藤壺との関係と違って若紫との関係は密通とまではいえないが、内密に行われたものであることに変わりはない。そして弁は、その関係に思い至ることができないにもかかわらず加担させられる女房として登場する。藤壺づきの弁を微笑ましくしたような形であるが、同じ役割を担っているのである[8]。

正篇最後に登場する弁は、玉鬘づきである。彼女は何者なのか判然としない。ただ、髭黒が「この弁のおもとにもせためたまふ」（藤袴④一九八）と仲介に使い、やがて玉鬘と通じた後には、

石山の仏をも、弁のおもとをも、並べて頂かまほしう思へど、女君の、深くものしとおぼしうとみにければ、えまじらはで籠りゐにけり。

（真木柱④二〇三）

とあることから、手引きをし、そのため玉鬘に嫌われたことが分かる。やはりこの弁も、秘密の男女関係に関わるものとして登場したのである。藤壺づきや若紫づきの弁が乳母子という最側近の女房でありながら、女君にもたらされる秘密の関係に当初は関われなかったり気づけなかったりしたのと対照的に、玉鬘との関係が明かされないこの弁は、ついに自ら手引きをする女房として登場したのである。ただし、髭黒と玉鬘の関係は、光源氏によって事後承認されるのであり、密通と呼べるほどのものではない。結局この「弁」も秘密に加担しきれないのだ。

「弁」という女房は、秘密の関係に関わる側近女房として登場する（玉鬘づきの弁がどの程度の女房なのかは分からないが、女君とそれなりに近しくなければ閨への手引きなどできまい[9]）。しかし、その秘密を抱えながらも実は加担しきれない女房として存在したのである。

二　秘密を語る「弁」

正篇の弁は、男女の秘密の関係に関わる女房として登場した。しかし、それぞれの登場回数は少なく、その後の弁たちを追うことはできない。藤壺づきの弁は乳母子でありながら若紫巻と賢木巻にしか登場せず、冷泉帝の出生は夜居の僧都によって語られる。若紫づきの弁も三日夜餅を運んだだけであるし、玉鬘の弁も密通の手引きをしただけである。藤壺・若紫・玉鬘といったヒロインたちはこの後も長く登場し続けるが、その傍に弁たちの姿はない。男女の秘密の関係に関わった彼女たちがどうなったのか、正篇は語らないのだ。

しかし、彼女たちの「その後」こそが、宇治十帖に登場する弁なのではないか。薫の前に現れ、出生の秘密を語った老女房の名が「弁」であったのは、正篇の「弁」たちを継承する者としてあったからなのではないだろうか。弁は薫にこう語る。

小侍従と弁と放ちて、また知る人はべらじ。一言にても、また異人にうちまねびはべらず。（橋姫⑥二九五）

薄雲巻でかの夜居の僧都が言った「さらに、なにがしと王命婦とよりほかの人、このことのけしき見たるはべらず」（薄雲③一七二）を彷彿とさせる発言ではないか。藤壺密通のとき、「弁」は乳母子でありながらそれに関わることができなかった。賢木巻の行動により事後的に知った可能性は示されているが、夜居の僧都には秘密を共有する人物としての認識がされていない。「弁」という名を負う女房の物語は、密通の秘密を共有できないところから始まった。しかし、三日夜餅を持って知らず知らずに秘密の関係に加担する若紫の「弁」を経て、髭黒を玉鬘の閨に手引きする「弁」が登場し、そして続篇に至って、ついに、「弁」は密通に加担し、その秘密を語る者となったのである。

この弁は、「かの権大納言の御乳母にはべりしは、弁が母になむはべりし」（橋姫⑥二八二）、「この人は、かの大納言の御乳母子にて、父は、この姫君たちの母北の方の、母方の叔父、左中弁にて亡せにけるが子なりけり」（椎本⑥三三四）などとあるように、柏木の乳母子であり、八の宮の北の方の従妹である。正篇に登場する「弁」も、藤壺づきの弁と紫の上づきの弁が乳母子であった。この老女房の弁もやはり「弁」を特徴づける性質を持っているわけだが、彼女の場合は女君ではなく男君の乳母子である。そのためであろうか、密通にどこまで加担していたかは、実は疑わしい。そもそも弁自身は第二部には登場せず、柏木の手引きはもっぱら女三宮の乳母子である小侍従が行っていたわけだが、弁自身の証言からもそれが裏付けられる。

朝夕につかうまつり馴れはべりしに、人数にもはべらぬ身なれど、人に知らせず、御心よりはた余りけることを、をりをりうちかすめのたまひしを、

今は限りになりたまひにし御病の末つかたに、召し寄せて、いささかのたまひ置くことなむはべりしを……（橋姫⑥二八二）

引用したのは薫と初対面の場面である。柏木は弁に対して女三宮への思いを「をりをりうちかすめのたまひし」という程度であり、「今は限りになりたまひし」時に遺言したのである。また後にも弁は、次のように語っている。

かくものはかなく、数ならぬ身のほどにはべれど、夜昼かの御影につきたてまつりてはべりしかば、おのづからもののけしきをも見たてまつりそめしに、御心よりあまりておぼしける時々、ただ二人のなかになむ、たまさかの御消息の通ひもはべりし。かたはらいたければ、くはしく聞こえさせず。今はのとぢめになりたまひて、いささかのたまひ置くことのはべりしを、かかる身には、置き所なく、いぶせく思うたまへわたりつつ……（椎本⑥二九五～二九六）

ここでの新しい情報は、柏木が弁と小侍従を通して文を送っていたということである。弁と小侍従は従姉妹であり、うまく連携していたのであろう。弁は「かたはらいたければ、くはしく聞こえさせず」と多くを語らない。たしかに、ここで薫に対して柏木と女三宮とのことを赤裸々に語ってしまうのは出過ぎた真似といえよう。柏木の乳母子として、控え目に語るというのは不自然なことではない。しかし、それを差し引いたとしても、弁に一体どこまでが語れたであろうか。本人の証言を信じるなら、弁は折々に柏木が漏らす女三宮への思いを知っていた。また、小侍従と連携して文の取り次ぎをした。そして、最後には遺言も受け取った。しかし、それだけではないか。乳母子として傍にいたとしても、ひとたび柏木が太政大臣邸を出てしまえば、その先のことなど弁の知り得るものではなかったのではないか。第二部で描かれていたのは、柏木が小侍従を籠絡し手引きをさせた姿であった。宇治十帖になって初めて弁という存在が登場するのは、何か後出しのような、ご都合主義のような感を受けるかもしれない。しかし、男がわの乳母子に何ができたであろうか。結局、柏木と女三宮の密通には、女がわの乳母子である小侍従の力が何より必要だったのである。そういった意味で、弁は小侍従ほどの当事者にはなれないのだ[10]。

薫に秘密を語る弁は、正篇が作りあげてきた「弁」の「その後」であり、正篇の「弁」たちがなり得なかった姿である。しかし同時に、正篇の「弁」たちのように、やはり秘密を当事者として共有しきれないのであった。

三　加担しきれない「弁」

弁は柏木の乳母子として、薫に秘密を告げる者として登場した。同時に「父は、この姫君たちの母北の方の、母方の叔父、左中弁にて亡せにけるが子」（椎本⑥三三四）とあるように、宇治姉妹の親戚でもある。そのため「姫君たちの御後見だつ人」（椎本⑥三三四）とされている。「乳母子としては過去（柏木）にかかわり、血縁者としては現在（宇治の姉妹）にかかわっていた[11]」のである。しかし、実のところ物語にそれらしき様子はほとんど描かれていない。しかも、薫の大君への想いに対して、「例の、わろびたる女ばらなどは、かかることには、憎きさかしらも言ひまぜて、言よがりなどもすめるを、いとさはあらず」（総角⑦一五）と他の女房たちと一線を画すように語られていた弁であるが、やがて「この君をのみ頼みきこえたる人々なれば、思ひにかなひたまひて、世の常の住処にうつろひなどしたまはむを、いとめでたかるべきことに言ひあはせて、ただ入れたてまつらむと、皆かたらひあはせけり」（総角⑦三〇）と、他の女房たちと区別ない「人々」として薫を手引きしようとするようになる。その動きを大君は、「かく取り分きて人めかしなつけたまふめるに、うちとけて、うしろめたき心もやあらむ」（総角⑦三〇～三一）と警戒する。大君は弁を薫がわの女房として認識しているのだ。

さらにいえば、弁が個性ある人物として物語に登場するのは、薫に関わる場面がほとんどであり、こと大君生前はそれが顕著である。弁は薫に柏木のことを語り、薫もまた身の上話をすることで、互いに主従の結びつきを強めていく。やがて弁にとって薫は柏木に等しい存在になり、その恋のために尽力する。藤壺や若紫の乳母子と同じ名を負う弁は、どこまでも「過去」にとらわれた「柏木の乳母子」なのだ[12]。

しかし、「柏木の乳母子」であるがゆえに、この弁は薫の側にばかり立ち、他の人物の動きに驚くほど疎い。総角巻で薫が中の君と一夜を過ごす場面はどうであっただろうか。弁は薫に「今宵ばかり、大殿籠るらむあたりにも、忍びてたばかれ」（総角⑥三七）と言われ、その通りに動いた。しかし、大君に逃げられた薫が中の君と契らぬ一夜を過ごしたということに全く気づくことができず、翌朝に至っても「いとあやしく、中の宮はいづくにかおはしますらむ」（総角⑥四一）と言う有様であった。

また、匂宮と中の君が契る場面も同様である。薫に「今しばしふかしてを、ありしさまには導きたまひてむや」（総角⑥四八～四九）と言われた弁は、匂宮の合図を薫のものと思い込み、中の君のもとに導いた。この時は、「ねび人ども」（総角⑥五三）と、もはや個性のない老女の群れとして、「いとあやしく心得がたく思ひまどはれけれど、さりともあしざまなる御心あらむやは、となぐさめたり」（総角五三～五四）と状況が把握できない姿がえがかれている。

弁は薫の意のままに動いたが、誰と誰との関係を手引きしたのか、結局のところ自身では全く把握できていなかったのである。一度目は「後見」をしているはずの大君の動きを察することができず、二度目は薫にさえ謀られた。男女関係に加担しきれない存在としての「弁」の物語は、まだ続いていたのである。

そして、その最たるものが、匂宮と浮舟との関係であったといえよう。浮舟の話題は中の君からもたらされたものであったが、素性や細かい近況を薫に語ったのは弁であった。ここで弁は浮舟の話題に入る前に、薫に再び「故権大納言の君の御ありさまも、聞く人なきに心やすくて、いとこまやかに聞こゆ」（宿木⑦二二九～二三〇）と柏木の思い出話をしている。橋姫巻の「反復であり、その忠実な再現[13]」とも言われる場面だが、ここで弁は柏木を通して薫との主従の結びつきを確認した。「柏木の乳母子」である弁に、もう一度、主人の恋を叶える機会が与えられたのだ。

弁は薫を浮舟のもとに導く。宿木巻の垣間見場面を含め、弁はかなり積極的に動いている[14]。東屋巻では自ら「かの宮にだに参りはべらぬを、この大将殿の、あやしきまでのたまはせしかば、思うたまへおこしてなむ」（東屋⑦三三五）と言うように、中の君に求められてもしなかった上京を、薫のためにした。そして、薫に協力し、「乳母、尼君の供なりし童などもおくれて」（東屋⑦三三九）と、浮舟の乳母も、自身が連れてきた供までも置いて、浮舟を宇治まで連れて行ってしまうのである。

しかし、弁にできたのはここまでである。弁は「故姫君の御供にこそ、かやうにても見たてまつりつべかりしか、あり経れば思ひかけぬことをも見るかな」（東屋⑦三三九～三四〇）と、大君を思う。しかし、浮舟を完全に大君の代わりにすることはできない。確かに宇治行きにあたって弁は母君や乳母の排除に成功したが[15]、それだけで浮舟を手中に収めることなどできはしない。なぜなら感慨にむせび泣く弁の横には、「いと憎く、もののはじめにかたち異にて乗り添ひたるをだに思ふに、なぞかくいやめなる、と憎くをこにも」（東屋⑦三四〇）思っている侍従がいるからである。この侍従は後に「よそ人」（蜻蛉⑧一五八）であったことが明かされるのであるが、この時点では「この君に添ひたる侍従」（東屋⑦三三九）と紹介され、その後も浮舟の側近女房として活躍していく。「侍従」という名の女房は、正篇において、若く思慮が浅く、時に主人の意に反することもある側近女房として登場してきた。この浮舟の侍従も、その造形を継承して「この君に添ひたる」側近として登場している[16]。実は、宇治十帖の前半、大君の物語において固有名を持つ女房は弁のほかに登場していなかった[17]。中の君の側近である大輔の君ですら、初登場は早蕨巻の上京場面においてであった。しかし、浮舟には侍従というれっきとした側近女房がいて、宇治にも同行するのだ。東屋巻は弁と薫の和歌の贈答で終わるが、それは「侍従なむ伝へけるとぞ」（東屋⑦三四六）と

される。語りのレヴェルにおいても、いよいよ弁に主導権はない。

さらに、浮舟の側近は侍従ひとりではなかった。誤って匂宮を浮舟のもとに導いてしまったのは、後に乳母子であることが分かる右近であった。当初、その秘密は右近ひとりの胸に収めて処理される。「尼君にも、「今日は物忌にて、わたりたまはぬ」と言はせたり」（浮舟⑧三五）とあるように、このことを弁は知ることができなかった。やがて右近が侍従を共犯に引き入れてからも、弁はそこに登場しない。浮舟と匂宮の関係は、右近と侍従というふたりの側近女房の秘密として進められるのだ[18]。

実のところ弁が匂宮と浮舟との関係を全く知らなかったのかといえば、それは定かではない。右近も後に「尼君なども、けしきは見てければ、つひに聞きあはせたまはむを」（蜻蛉⑧一二九）と思っていることから、どこかの段階で知ったようだ[19]。しかし、はじめからというわけではないだろう。何より、知っていたとしても、弁はこのことに関して一切動くことがなかった。いや、動けなかったのではないか。右近が仲間に引き入れたのは侍従であり、ふたりはあくまで秘密裏に処理をしようとしていたのだから。

「色めかしき若人」（浮舟⑧五六）である侍従は、宇治川対岸の隠れ家に同行し、すっかり匂宮に魅せられた。匂宮に心を寄せる女房が「侍従」の名を負うことは、若く思慮の浅い女房としての正篇の造形を継承したものといえようが、「弁」との関係を思えばなんとも皮肉なものではないか。かつて柏木に乳母子として仕えていた弁は、柏木から女三宮への想いを聞かされ、また、文のやり取りの一端を担った。しかし、柏木を女三宮のもとに手引きした実質的な共犯者は、女三宮の乳母子たる小「侍従」だった。しかし、小侍従亡きあと、弁は薫に秘密を告げる者として物語に現れることができた。そして、柏木を通して薫と主従関係を結び、その恋を叶えるために何度でも動いた。しかし薫と浮舟とを結ぼうとしたとき、再び「侍従」の名を負う女房が、女君がわの側近として登場したのだ。そして弁のあずかり知らぬところで匂宮が現れ、今度は「侍従」がその秘密の共犯として匂宮と浮舟を積極的に結ぼうとしていく。秘密の関係に加担するのは「弁」ではなく、結局は女君の側近たる「侍従」だったのである。

おわりに

弁は柏木の乳母子であり、宇治姉妹の後見であった。とはいえ、「現在」の役割である姉妹の後見としての動きはほとんど見られず、「過去」を語り、

かつての主に等しい薫に仕え、どこまでも「柏木の乳母子」として動いていた。それは、弁と同じく八の宮に仕えていた浮舟の母君に通じる設定である。浮舟の母君は、中将というお手つき女房であった過去を持ち、常陸介北の方である現在の境遇を嘆いていた。母君が「中将」であるという過去は、正篇から作りあげられた「中将」の名が持つ、物語自身の過去でもあった[20]。同様のことが、弁にもいえるのだ。「弁」は男女の秘密にかかわりながら共犯になりきれない乳母子の名であった。その名を負った柏木の弁も、やはり密通に加担しきれなかった過去を持つ。弁は薫に過去を語り、再び主従の絆を結び、主の恋を叶えようとした。しかし、それでも弁は、薫と大君を結ぶことができなかったばかりか、自身が誰と誰の手引きをしているかすら把握できていなかった。弁は現在の「姉妹の後見」ではなく過去の「柏木の乳母子」として動いたが、いずれの役割も全うできなかったのだ。

浮舟の登場は大君の再来のようであって、そうではない。浮舟は「弁が後見できない大君」なのであり、「後見」という「現在」の役割の絶ち切られた大君であった[21]。弁は再び「過去」の「柏木の乳母子」として薫と浮舟を結びつけようとしたが叶わなかった。そのとき弁の前に立ちはだかったのは、かつて自身のできなかった「秘密の共有」をした者と同じ名を持つ「侍従」であった。「弁」の名を負う老女房は、自身の過去も、物語の過去も、ついに克服することができなかったのである。

注

1 吉海直人『『源氏物語』の乳母達」「右近の活躍」(『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社　二〇〇八)など。

2 岩佐美代子「二人の命婦」(『源氏物語の展望　第三輯』三弥井書店　二〇〇八)はこの時点で弁も秘密保持に加わったと取る。たしかに弁は藤壺懐妊を不審に思っているが、王命婦との情報交換はされていないのであり、弁が知るのはまだ先のことであっただろう。

3 吉海直人「親類の女房」(『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』おうふう　二〇〇三)。

4 命婦に関する先行研究としては、加納重文「命婦」(『平安文学の環境―後宮・俗信・地理―』和泉書院　二〇〇八)、増田繁夫「平安中期の女官・女房の制度」(『評伝紫式部―世俗執着と出家願望―』和泉書院　二〇一四)などがある。

5 『狭衣物語』における中納言典侍と出雲の乳母の関係は、このふたりをふまえているとも考えられる。ただし、『狭衣物語』の場合は中納言典侍による手引きがなかったことや、女官を兼ねる女房と乳母の女房との対立が物語を動かしている点が注目されるが、このあたりのことは第三章第二節で論じ

る。

6 古田正幸「平安時代における乳母子の語義―『延喜式』・古辞書・『源氏物語』の分析から―」（『平安物語における侍女の研究』笠間書院　二〇一四）は、「弁は光源氏の密通を事後に知り、秘密を保持する侍女である。これは他の密通に立ち会う「乳母の子」、例えば浮舟に仕える右近にも共通する役割である」と指摘する。乳母子としての役割の共通性は留意すべきところであるが、本稿では「弁」という名から見える造形があることに注目したい。

7 三田村雅子「召人のまなざしから」（『源氏物語　感覚の論理』有精堂出版　一九九六）。

8 鈴木宏昌「源氏物語における乳母子の位置―橋姫の巻における弁の君の場合―」（『研究講座源氏物語の視界』五　一九九七）は「橋姫の巻の弁といい、同名の乳母子があたかも符節を合わせたかのように『源氏物語』の秘密の恋に登場するのには注目される」とする。また、前掲注7三田村論文は、藤壺の「弁」と若紫の「弁」がいずれも重要な働きをしないことを指摘している。

9 吉海直人は前掲注1「右近の活躍」において、この弁を兵部（西の京の乳母の娘）ではないかと指摘している。

10 髙野浩「秘密露見者の新規造型―王命婦・小侍従から夜居僧都・弁へ―」（『平安文学研究』一〇　二〇〇一・一二）は、手引きに関与していない人物が露見者として新規造型されることを指摘し、「共犯者的性格を有していた潜在的露見者が作者の意図する物語展開の妨げとなっていたのではないか」とする。

11 吉海直人「弁の尼」（『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社　二〇〇八）。

12 このあたりの詳細は第二章第四節で論じる。

13 外山敦子「弁の「昔物語」―薫の〈原点回帰〉の契機として―」（『源氏物語の老女房』新典社　二〇〇五）。

14 陣野英則「弁の尼を超える薫―『源氏物語』「宿木」「東屋」巻の言葉から―」（『源氏物語の新研究―宇治十帖を考える―』新典社　二〇〇九）は、浮舟と薫との縁に関して「弁の尼は明らかに消極的であり、及び腰であった」とする。しかし、中の君に言われても上京しなかった弁が、ここで仲介のために宇治を離れることには注目すべきではなかろうか。

15 外山敦子「弁の尼と中将の君―〈母〉たちの浮舟物語―」（『源氏物語の老女房』新典社　二〇〇五）。

16　このあたりの詳細は第二章第二節で論じた。

17　篠原昭二「大君の周辺―源氏物語女房論」（『国語と国文学』四二-九　一九六五・九）。

18　三村友希「浮舟の〈幼さ〉〈若さ〉―他者との関係構造から―」（『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上―』翰林書房　二〇〇八）は浮舟物語における〈幼さ〉〈若さ〉に注目したものであるが、浮舟に仕える女房たちの中で密通・入水の局面に関わるのは老人ではなく若人であることを指摘している。

19　金子大麓「「弁の君」呼称考―宇治十帖に於けるその呼称の変化について―」（『国士舘短期大学紀要』一二　一九八七・三）は、浮舟と母君との対話中の弁の言葉を「随分含みのある巧みな言い回しで、匂宮との関係をそれとなく暗示しているように感じられる」とする。また、前掲注15外山論文は「弁の尼は異変を察知しつつ、しかもそれを敢えて放置していたという可能性は十分にあるのではないか。飛躍を恐れずに述べるならば、浮舟をめぐる状況や中将の君の性格までもを熟知していた弁の尼が、中将の君の感情を逆撫でする発言を巧みに繰り返し、母娘の分離を中将の君自らが宣言するよう仕向けたのではないだろうか」と指摘する。

20　第二章第一節で論じた。

21　古田正幸「宇治十帖における弁の君の立場―柏木の「乳母子」／大君・中の君の「後見」として―」（『平安物語における侍女の研究』笠間書院　二〇一四）は弁の複雑な立場に注目した論で、「柏木の乳母子・弁は、柏木の乳母子であることや、大君らの後見であること、あるいは浮舟の後見でないことによって、侍女として宇治十帖の主人公・薫や三人の八の宮の姫君たちとも密接に関わるのである」と指摘する。

第四節　源典侍と弁の尼

はじめに

源典侍と弁の尼。ともに老女房であり、物語の途中で出家する者たちであるが、片や内侍所の実務女官であり、片や宇治に住まう没落した宮家の女房である。あるいは、片や男君との老いらくの恋に心をときめかせる老女であり、片や男君を女君のもとへ導く仲介者である。登場巻も第一部と第三部であり、全く重ならない。

しかし、ふたりはともに男君にとって亡き父の記憶を持つ女房である。源典侍が宮中で活躍したのは桐壺帝代のことであり、光源氏にとって源典侍との交渉は父帝の治世下の宮中での出来事であった。一方、弁の尼は柏木の乳母子であり、薫はこの弁の尼から出生の秘密を知るのであった。

本節では、このふたりの老女房を「亡き父へとつながる〈昔語り〉の女房」ととらえ、その物語を読んでいきたい。そのとき、光源氏の物語は、あるいは薫の物語は、どのような姿を見せるであろうか。

一　源典侍（1）―桐壺帝代を代表する内裏女房

源典侍の初登場は紅葉賀巻である[1]。藤壺がのちの冷泉帝を出産し、苦悩の中にある光源氏は若紫に癒しを求め、葵の上のもとへは間遠になる。その噂を聞いた桐壺帝は光源氏を諫めるが、その一方で、

「さるは、すきずきしううち乱れて、この見ゆる女房まれ、またこなたかなたの人々など、なべてならずなども見え聞こえざめるを、いかなるもののくまに隠れありきて、かく人にも怨みらるらむ」とのたまはす。（紅葉賀②三二）

と息子の女性関係に疑問を持っている。その流れの中で、次のように紹介されて登場するのが、源典侍である。

帝の御年ねびさせたまひぬれど、かうやうのかた、え過ぐさせたまはず、采女、女蔵人などをも、容貌、心あるをば、ことにもてはやしおぼしめし

たれば、よしある宮仕へ人多かるころなり。はかなきことをも言ひ触れたまふには、もて離るることもありがたきに、目馴るるにやあらむ、げにぞあやしう好いたまはざめると、こころみにたはぶれ言を聞こえかかりなどするをりあれど、情なからぬほどにうちいらへて、まことには乱れたまはぬを、まめやかにさうざうしと思ひきこゆる人もあり。年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく、心ばせあり、あてに、おぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるまで、などさしも乱るらむと、いぶかしくおぼえたまひければ、たはぶれ言言ひ触れてこころみたまふに、似げなくも思はざりける。あさましとおぼしながら、さすがにかかるもをかしうて、ものなどのたまひてけれど、人の漏り聞かむもふるめかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女は、いとつらしと思へり。（紅葉賀②三三～三四）

この源典侍の登場は桐壺帝代の後宮を一身に背負ってのものだといえるだろう。尚侍が后妃化するとともに内侍所の実質的な責任者になったのが典侍という職である[2]。つまり源典侍は「よしある宮仕へ人」たちを束ねる上司ということになる。そしてその中で、この典侍は「人もやむごとなく、心ばせあり、あてに、おぼえは高く」であるという。それはつまり、歳を取ってもなお「かうやうのかた、え過ぐしさせたまず」であるために「よしある宮仕へ人」たちを多く抱える桐壺帝代の宮中の、名実ともにトップの女房であるということになるのである。「おぼえは高くありながら」と逆接で示される「いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたに重からぬ」という癖も、そういう桐壺帝代の気風を纏っている[3]。

こうして光源氏は源典侍と交際することになるが、続く場面で「上の御梳櫛にさぶらひけるを、果てにければ、上は御桂の人召して、出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて」（紅葉賀②三四）という状況下で和歌の贈答をすることになる。

この内侍常よりもきよげに、様体、頭つきなまめきて、装束、ありさま、いとはなやかに好ましげに見ゆるを、さも旧りがたうもと、心づきなく見たまふものから、いかが思ふらむと、さすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはぼりのえならず画きたるを、さし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさまかなと見たまひて、わが持たまへるに、さしかへて見たまへば、赤き紙の、うつるばかり色深きに、木高き森の画を塗りかくしたり。片つ方に、手はいとさだすぎたれど、よしなからず、「森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、ことしもあれ、うたての心ばへやと笑まれながら……（紅葉賀②三四～三五）

源典侍を見る光源氏は、「きよげ」で「いとはなやかに好ましげ」と評価するものの、その若づくりを「心づきなく」思いながらも「さすがに過ぐしがたくて」気を引いてしまう。「いかが思ふらむ」という源典侍を思ってのことではあるが、源典侍に対する評価は二転三転しているのだ。さらに、続く源

典侍の容貌描写も醜く描かれて「似つかはしからぬ扇のさまかな」とあるが、扇に書かれた筆跡は「いとさだすぎたれど、よしなからず」とある。さらに、書かれている内容に関しては「うたての心ばへや」と、もう一度評価を落としている。裳をとらえて扇の交換をする間などほんの数秒の出来事であろうが、そのわずかの間に光源氏の源典侍に対する評価はこれほどまでに目まぐるしく変化しているのである[4]。

このように非常に複雑な源典侍への評価であるが、低い評価がされているときは、「さも旧がたうも」や「似つかはしからぬ」といった年齢に合わないことや、「さだすぎ」という老いそのものへの評価が主である。扇の和歌にしても、老いゆえに顧みられなくなった源典侍の心情と重なっていることに「こともあれ、うたての心ばへや」と思うのである。逆にいえば、老いてさえいなければ、かなりの高評価が下りそうな女だということになる。特に「よしなからず」とされる筆跡は、「よしある宮仕へ人」の頂点たる典侍にふさわしい。

そして、この源典侍とのやり取りは、桐壺帝に目撃されていた。

上は御荏果てて、御障子よりのぞかせたまひけり。似つかはしからぬあはひかなと、いとをかしうおぼされて、「好き心なしと、常にもてなやむめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」とて、笑はせたまへば、内侍は、なままばゆけれど、憎からぬ人ゆゑは、濡衣をだに着まほしがるたぐひもあなればにや、いたうもあらがひきこえさせず。（紅葉賀②三六）

結局、この源典侍との場面は桐壺帝の視線に回収されるのである。この場面は桐壺帝が光源氏の女性関係に思いめぐらせるところから始まっていた。そして、桐壺帝代を代表する内裏女房として源典侍は登場し、そこに目をつけた光源氏に対して「さはいへど、過ぐさざりけるには」と桐壺帝が笑って一段落つく、というまとまりになっているのだ。

先にも述べたが、この巻では後の冷泉帝が誕生している。藤壺との間に密通によって子まで生した光源氏を前に、何も知らない（ように見える）桐壺帝が源典侍との関係を笑って見守るという展開には、何やら皮肉めいたものも感じられる。そもそも源典侍物語には藤壺事件との係わりが論じられてきた[5]。だが、それは潜在的なレベルのものであり、それが顕在化するのはもう少し後のことになる。あくまで源典侍の物語は、御代の気風に支えられた、桐壺帝の宮廷の物語としての形を保っているのだ。

さて、紅葉賀巻における源典侍の物語はここで終らず、この後には、頭中将との騒動になる場面が待っている。その始まりも、やはり「よしある宮仕へ人」の頂点にふさわしい姿から始まっていた。

夕立して、名残涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみありきたまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きゐたり。御前などにても、男方の御遊びにまじりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、ものうらめしうおぼえけるをりから、いとあはれに聞こゆ。「瓜作りになりやしなまし」と、声はいとをかしうて歌ふぞ、すこし心づきなき。鄂州にありけむ昔の人も、かくやをかしかりけむと、耳とまりて聞きたまふ。弾きやみて、いといたう思ひ乱れたるけはひなり。君、東屋を忍びやかに歌ひて寄りたまへるに、「押し開いて来ませ」と、うち添へたるも、例に違ひたるここちぞする。

立ち濡るる人しもあらじ東屋にうたてもかかる雨そそきかな

と、うち嘆くを、われひとりしも聞き負ふまじけれど、うとましや、何ごとをかくまではと、おぼゆ。

（紅葉賀②三七～三八）

典侍は琵琶の「ことにまさる人なき上手」であるという。琵琶を「いとをかしう」弾き、それが光源氏には「いとあはれ」に聞こえる。声も「いとをかしう」とあるが、それが「すこし心づきなき」とされるものの、結局光源氏は源典侍のもとに寄り、催馬楽「東屋」による応酬も「例に違ひたるここち」がする。いざ向き合えば源典侍の和歌に「うとまし」と思うことになってしまうが、やはり琵琶や気の利いた応酬といった教養が光源氏も誘われる魅力となっているのである。

そして、頭中将との騒動の場面になるが、それが終わった後に、次のような一節がある。

さてそののちは、ともすればことのついでごとに、言ひ迎ふるくさはひなるを、いとどものむつかしき人ゆゑとおぼし知るべし。女は、なほいと艶に怨みかくるを、わびしと思ひありきたまふ。中将は、妹の君にも聞こえ出でず、たださるべきをりのおどしぐさにせむとぞ思ひける。やむごとなき御腹々の親王たちだに、上の御もてなしのこよなきに、わづらはしがりて、いとことにさりきこえたまへるを、この中将は、さらにおし消たれきこえじと、はかなきことにつけても、思ひいどみきこえたまふ。この君ひとりぞ、姫君の御ひとつ腹なりける。帝の御子といふばかりにこそあれ、われも、同じ大臣と聞こゆれど、御おぼえことなるが、皇女腹にてまたなくかしづかれたるは、何ばかり劣るべき際とおぼえたまはぬなるべし。人がらも、あるべき限りととのひて、何ごともあらまほしく、たらひてぞものしたまひける。

（紅葉賀②四三～四四）

ここでは、頭中将が葵の上の唯一の同腹であり、皇女腹であることがわざわざ語られている。この皇女は言うまでもなく桐壺帝の妹である。単に頭中将の光源氏への対抗心の根拠として挙げられているだけでなく、桐壺帝に連なる人物として位置づけようとされていることに意味があるのではなかろう

か[6]。源典侍にまつわる物語は、どこまでも桐壺帝代の物語として語られているのである。

二　源典侍（2）―亡き桐壺帝へとつながる〈昔語り〉の女房

源典侍はこの後、葵巻と朝顔巻に登場することになるが、注目すべきは朝顔巻であろう。紅葉賀巻から十三年。既に冷泉帝代であり、前巻薄雲で藤壺が亡くなり、冷泉帝も出生の秘密を知った後。光源氏が様々なかたちで過去と接触するこの巻[7]に、源典侍は登場する。

ここには、源典侍のほかにもうひとり老女が登場する。故桐壺院の妹、女五宮である。光源氏は「女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御とぶらひにことづけて」（朝顔③一八九）と女五の宮を口実に朝顔斎院のもとを訪れることになる。この女五宮と「御物語」（朝顔③一八九）するが、その内容はといえば、亡き桐壺院のことに始まる。彼女は、

「院の上かくれたまひてのち、よろづ心細くおぼえはべりつるに、年のつもるままに、いと涙がちにて過ぐしはべるを、この宮さへかくうち捨てたまへれば、いよいよあるかなきかにとまりはべるを、かく立ち寄り訪はせたまふになむ、もの忘れしぬべくはべる」（朝顔③一九〇）

と言い、光源氏もまた、

「院かくれたまひてのちは、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず、おぼえぬ罪にあたりはべりて、知らぬ世にまどひはべりしを、たまたま朝廷に数まへられたてまつりては、またとり乱り暇なくなどして、年ごろも、参りていにしへの御物語をだに聞こえうけたまはらぬを、いぶせく思ひたまへわたりつつなむ」（朝顔③一九〇）

と語る。ふたりの近況報告は、ともに桐壺院の崩御を起点にしている。そもそも女五宮は「故院の、この御子たちをば心ことにやむごとなく思ひきこえたまへりしかば、今も親しく次々に聞こえかはしたまふめり」（朝顔③一八九）という人物のひとりであった。光源氏と女五宮は亡き桐壺院でつながっているのである。光源氏の言う「いにしへの御物語」も桐壺帝代のことを指すのであろう。

しかし、女五宮とのここの会話で重要なのは、それだけではない。彼女は光源氏が童であった頃を回想した後、次のように言う。

「……内裏の上なむいとよく似たてまつらせたまへると人々聞こゆるを、さりとも、劣りたまへらむとこそおしはかりはべれ」（朝顔③一九一）

女五宮はあくまで光源氏に対する褒め言葉のつもりで言ったのであろう。しかし、これには光源氏も「ことにかくさし向ひて人のほめぬわざかなと、をかしく」（朝顔③一九一）思うものの、「内裏の御容貌は、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御おしはかりになむ」（朝顔③一九一）ときっぱり否定する。桐壺帝ゆかりの女五宮が、よりにもよって藤壺事件の話題をこの場にもたらしてしまうのである。ただし、光源氏の否定によってこれ以上の話題の発展はない[8]。

光源氏が次に訪れた時も、女五宮と「御物語」をしたことが見える。しかし、女五宮は眠くなってしまい、ここで源典侍が登場することになる。

宮の御方に、例の、御物語聞こえたまふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、聞こえ尽くしたまへど、御耳もおどろかず、ねぶたきに、宮も欠伸うちしたまひて、「宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらず」とのたまふほどもなく、鼾とか、聞き知らぬ音すれば、よろこびながら立ち出でたまはむとするに、またいと古めかしきしはぶきうちして、参りたる人あり。（朝顔③二〇一）

ここでの女五宮の「古事」はもはや光源氏の興味をひくものではない。「御耳もおどろかず、ねぶたき」ものであり、女五宮が寝てしまったことに「よろこび」すらする。そして朝顔斎院のもとに行こうとした光源氏の前に、女五宮の役割を引き継ぐようにして現れたのが[9]、源典侍であった。

「かしこけれど、聞こしめしたらむと頼みきこえさするを、世にある者とも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」など名のり出づるにぞ、おぼし出づる。源典侍といひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にてなむ行ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知りたまはざりつるを、あさましうなりぬ。「その世のことは、みな昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも心細きに、うれしき御声かな。親なしに臥せる旅人とはぐくみたまへかし」（朝顔③二〇一～二〇二）

源典侍の実に十三年ぶりの登場だが、ここで初めて明かされる情報に注目したい。まず、故桐壺院が典侍を「祖母殿」と呼んでいたということだ。過去に一度だけ、葵巻で光源氏が三位中将（頭中将）に向かって「あないとほしや、祖母殿の上ないたう軽めたまひそ」（葵②一〇〇）と言ったことがあった。それが、源典侍にとっては故桐壺院の思い出となっている。あるいは光源氏が三位中将と「祖母殿」と言っていたのも、故桐壺院命名のあだ名であったからなのかも知れない[10]。そうだとしても、青年時代の光源氏の冗談が、故桐壺院の記憶としてとらえなおされたことが注目される。それとともに、源典侍には母的なイメージが付与された[11]。もとより典侍は平安中期には天皇乳母経験者が任じられることの多くなる職である。典侍が故桐壺院の乳母であったと断定することはできないが[12]、「典侍」の職と帝による「祖母殿」のあだ名によって可能性をほのめかすことによって、源典侍はただの好色

な老女房ではなくなったのである。そして光源氏も、冗談ながらも「親なしに臥せる旅人とはぐくみたまへかし」と、親代わりという、まさに乳母のような役割を求めるのである。

もう一つの新たな情報は、彼女が「源」典侍であったということだ。琵琶の名手であるという設定で王族出身者であることが表出されているともいわれているが[13]、ここで初めて「源典侍」と明示されていることが重要ではないか。彼女も「王族優位の論理[14]」である桐壺帝代を支えるひとりだったことが示されているのである。

こうして源典侍は故桐壺院の御代をより濃く背負って再登場した。だからこそ光源氏は、「その世のことは、みな昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも心細きに、うれしき御声かな」と言う。つい先ほどまで女五宮の「古事」には「御耳もおどろかず、ねぶたき」であったはずの光源氏がこう言うのである。光源氏にとっては女五宮ではなく源典侍こそが「昔語り」になりゆく桐壺帝代の思い出を共有できる存在だったのだ。源典侍は女五宮とただ入れ代わって出てきたのではなく、むしろ凌駕する存在として登場したのである。

さて、続く源典侍との場面を、少し長くなるが引用する。

寄りゐたまへる御けはひに、いとど昔思ひ出でつつ、古りがたくなまめかしきさまにもてなして、いたうすげみにたる口つき思ひやらるる声づかひの、さすがに舌つきにて、うち戯れむとはなほ思へり。「言ひこしほどに」など聞こえかかるまばゆさよ。〈今しも来たる老のやうに〉など、ほほゑまれたまふものから、ひきかへ、これもあはれなり。この盛りにいどみたまひし女御更衣、あるはひたすら亡くなりたまひ、あるはかひなくて、はかなき世にさすらへたまふもあべかめり。入道の宮などの御齢よ、あさましとのみおぼさるる世に、年のほどの身の残り少なげさに、心ばへなども、ものはかなく見えし人の、生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なりとおぼすに、ものあはれなる御けしきを、心ときめきに思ひて、若やぐ。

年経れどこの契りこそ忘られぬ親の親とか言ひし一言

と聞こゆれば、うとましくて、

「身をかへてのちも待ち見よこの世にて親を忘るるためしありやと

たのもしき契りぞや。今のどかにぞ聞こえさすべき」とて、立ちたまひぬ。

（朝顔③二〇二～二〇三）

源典侍も「いとど昔思ひ出で」て光源氏に色めかしく声をかける。これには光源氏も「まばゆ」く思い、「ほほゑまれ」るが、「ひきかへ、これもあはれなり」と思う。紅葉賀巻のときと同じく複雑な評価だが、最終的には「あはれ」にたどりつく。そして、光源氏の思いはまず「この盛りにいどみたまひし女御更衣」へと向かう。源典侍は初登場時で既に「五十七八」（紅葉賀②四〇）であったから、その盛りは桐壺帝代より一代前かも知れないが、背負っているのは桐壺帝代である[15]。何より、「いどみたまひし女御更衣」という表現は、物語の冒頭、

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに……（桐壺①一一）

を彷彿とさせる。光源氏の母桐壺更衣もまた「女御更衣」の「いどみたまひし」中にいた更衣であり、「ひたすら亡くな」ったうちのひとりでだったではないか。源典侍を通して回想は桐壺巻の冒頭にまで向かい、光源氏の思いは父桐壺帝だけでなく、母桐壺更衣にまで及んだのだ。

そして、思いはやがて同じく故人である「入道の宮」へ向かう。女五宮との会話で持ち出された藤壺の話題が、ここでもう一度姿を見せる。この後、朝顔巻の終わりに光源氏は紫の上に向かって女君たちのことを話す。その中には藤壺の話題ももちろん含まれ、その夜、藤壺は光源氏の夢枕に立つ。この藤壺は、源典侍との係わりのなかで回想された流れで呼びこまれたものではなかろうか。源典侍の背後に透けて見える、藤壺との一件。紅葉賀巻では潜在化していたものが、朝顔巻にいたって顕在化したのである。

ただし、源典侍との係わりの中で光源氏が抱いたのは「定めなき世なり」という思いまでであり、源典侍の物語はそこで閉じられる。源典侍は光源氏に向かい、「親の親とか言ひし一言」の歌を詠み、光源氏も「親を忘るるためしありやと」と返す。源典侍は、光源氏にとって、故桐壺院の御代を一身に背負った元内裏女房であり、乳母的な「親」のような存在であり、「昔語り」になりゆく故桐壺院の御代の記憶を共有する人物となって退場したのであった。

三　弁の尼（1）―もと太政大臣家の女房にふさわしい女

亡き父の記憶を共有する昔語りの女房。そのようにとらえてみれば、宇治十帖に登場する弁の尼[16]という老女房は、まさしく源典侍の後身ということになりはしないだろうか。また、薫は柏木と女三の宮の密通の子であり、その秘密を告げる弁の尼は、密通というテーマを背負った女房でもある。源典

侍の物語は背後に光源氏と藤壺との密通を抱えたものだった。源典侍との再会は光源氏に藤壺のことを思いおこさせ、藤壺が夢枕に立つという展開を導くことになった。光源氏にとっては自らの密通の記憶も亡き父の記憶とともにあっただろう。一方、薫は自分自身が密通によって生まれた子であった。今度は弁の尼が薫に、父の密通というテーマをつきつけることになるのだった(そのとき、もうひとりの父である光源氏は密通された側として存在する)。

弁の尼は橋姫巻で登場する。薫が宇治で姉妹の垣間見をした後の場面で、不慣れな若い女房に代わって登場する。

たとしへなくさし過ぐして、「あなかたじけなや。かたはらいたき御座のさまにもはべるかな。御簾のうちにこそ。若き人々は、もののほど知らぬやうにはべるこそ」など、したたかに言ふ声のさだすぎたるも、かたはらいたく君たちはおぼす。「いともあやしく、世の中に住まひたまふ人の数にもあらぬ御ありさまにて、さもありぬべき人々だに、とぶらひかずまへきこえたまふも、見え聞こえずのみなりまさりはべるめるに、ありがたき御心ざしのほどは、数にもはべらぬ心にも、あさましきまで思ひたまへはべるを、若き御こころにもおぼし知りながら、聞こえさせたまひにくきにやはべらむ」と、いとつつみなくもの馴れたるも、なま憎きものから、けはひいたう人めきて、よしある声なれば、「いとたづきも知らぬここちしつるに、うれしき御けはひにこそ。何ごとも、げに思ひ知りたまひける頼み、こよなかりけり」

（橋姫⑥二七九～二八〇）

「たとへしなくさし過ぐして」「したたかに言ふ」と、しゃしゃり出てる弁の尼の印象は、あまり良くないように見える。宇治の姉妹はその弁の尼の「声のさだすぎたる」を「かたはらいたく」思っている。しかし、薫の方の反応はどうだろうか。確かに「いとつつみなくもの馴れたる」とやはり遠慮のない様子に「なま憎きものから」と良い印象を受けていないが、しかし「ものから」と逆接でつなぎ、「けはひいたう人めきて、よしある声なれば」としている。特に注目されるのは「よしある声」と思っていることである。宇治の姉妹が「さだすぎたる」として「かたはらいたく」思った声を、薫は「よしある」と感じているのだ。光源氏の子として生きる薫は、自邸でも宮中でも多くの上臈女房を見ているはずである。その薫が「よしある」と感じたのだ。弁の尼は、ただの老女房ではない風格を持って登場している。なお、先に確認したように、源典侍も「よしある宮仕へ人」（紅葉賀②三三）の集まるなかで「よしなからず」（紅葉賀②三五）の筆跡の持ち主と評価され、また、「声はいとをかしう」（紅葉賀②三七）という美声の持ち主であった。

この直後、弁の尼は薫に出生の秘密を告げる。そこで彼女が「かの権大納言の御乳母にはべりしは、弁が母になむはべりし」（橋姫⑥二八二）と「弁」という名であり、柏木の乳母子であったことが明かされる。弁の尼はもとは由緒正しき太政大臣家の女房であり、その嫡男の乳母子だった。薫が感じた「よしある声」とは、その卑しからぬ素性を証明するものになっているのではなかろうか。その後に再び対面した場面でも、「年も六十にすこし足らぬほ

どなれど、みやびかにゆゑあるけはひして」（橋姫②二九四）と同様の高評価がなされている。なお、六十弱という年齢は、初登場時「五十七八」（紅葉賀②四〇）である源典侍とやはり重なるものでもある。

こういった弁の尼への高評価は、かなり後になってからも登場する。浮舟一行が宇治を訪れた時は、

若き人、「あなかうばしや。いみじき香の香こそすれ。尼君の焚きたまふにやあらむ」とおどろく。老人、「まことにあなめでたのものの香や。京人はなほいとこそみやびかに今めかしけれ。天下にいみじきこととおぼしたりしかど、東にてかかる薫物の香は、え合はせ出でたまはざりきかし。この尼君は、住ひかくかすかにおはすれど、装束のあらまほしく、鈍色青鈍といへど、いときよらにぞあるや」などほめゐたり。（宿木⑦二六〇）

というように、弁の尼の香と衣装が褒められている。ここでは薫が垣間見をしており、浮舟の女房たちが弁の尼のものとして褒めた香は薫の芳香である。もちろん、さほど鼻が利くとも思えない浮舟の女房たちによる評価であるから、それは差し引いて考えねばなるまい。しかし、匂宮も羨む薫の芳香が、弁の尼の香と思われて褒められているのは注目に値する。さらに、装束の方はといえば、この女房たちだけでなく垣間見をする薫の視線を通して、「ほめつる装束、げにいとかはらかにて、みめもなほよしよししくきよげにぞある」（宿木⑦二六二）と評価されているのである。やはりここでも、弁の尼は品のある都風の女房として存在しているのだ。

この弁の尼への高評価は宇治十帖を通してあり、時に登場人物たちの弁の尼への思いが反映されていることもある。大君没後に出家すると、その尼姿は、「いたくねびにたれど、昔よげなりける名残をそぎ捨てたれば、額のほどさまかはれるに、すこし若くなりて、さるかたにみやびかなり」（早蕨⑦一三八）とか評される。ここには大君を出家させて生き延びさせたかったという薫の思いが反映されている。また、中の君にとっては、「皆人は心ゆきたるけしきにて、もの縫ひいとなみつつ、老いゆがめる容貌も知らず、つくろひさまよふに、いよいよやつして」（早蕨⑦一三九）と、上京することに浮かれている他の女房たちとは一線を画す者として好感が持たれている。もとより身についている都風の品に加えて、こういった思いの反映により、弁の尼の好感度は高くなっていくのであった。

四　弁の尼（2）―柏木の乳母子

弁の尼の重要な役割のひとつは、薫に出生の秘密を告げることである。

この老人はうち泣きぬ。「さし過ぎたる罪もやと思うたまへ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならむついでにうち出で聞こえさせ、片端をもほのめかし知ろしめさせむと、年ごろ念誦のついでにも、うちまぜ思うたまへわたるしるしにや、うれしきをりにはべるを、まだきにおぼほれはべる涙にくれて、えこそ聞こえさせずはべりけれ」、とうちわななくけしき、まことにいみじくもの悲しと思へり。（橋姫⑥二八〇～二八一）

このように泣き、「あはれなる昔の御物語」を始める。ここで出生の秘密をほのめかし、さらに薫の再度の訪問の折には、

故権大納言の君の、世とともにものを思ひつつ、病づき、はかなくなりたまひにしありさまを聞こえ出でて、泣くこと限りなし。げによその人の上と聞かむだに、あはれなるべき古事どもを、まして年ごろおぼつかなくゆかしう、いかなりけむことのはじめにかと、仏にも、このことをさだかに知らせたまへと、念じつる験にや、かく夢のやうにあはれなる昔語りを、おぼえぬついでに聞きつけつらむ、とおぼすに、涙とどめがたかりけり。（橋姫⑥二九四～二九五）

と、詳細を語り、この後の場面で形見の文反故を渡す。弁の尼の昔語りのほとんどに「昔物語」という表現が用いられていることは指摘されているが[17]、源典侍とも通じる「昔語り」という言葉もここに登場している。

弁の尼は、薫に「昔語り」をする。それは薫にとっては亡き父にあたる故柏木の話題である。源典侍が、光源氏にとって亡き父にあたる故桐壺院の「昔語り」ができる存在であったことと重なるのだ。亡き父につながる昔語りの女房として、弁の尼は源典侍の後身なのである。

しかし、源典侍は故桐壺院の記憶を光源氏と共有していたが、弁の尼はそうではない。弁の尼に出会うまで薫は自らの出生を明確には知らなかったのであり、もとより柏木の記憶は薫にはない。弁の尼の昔語りは、薫の知らない亡き父の記憶を補完するものになる。そして、結局は昔語りもせず二度と登場しなくなった源典侍とは対照的に、弁の尼は昔語りをすることによって薫の物語を次なる展開へと導くことになる。注目すべきは、椎本巻の次の場面である。

老人ぞ、こよなき御かはりに出で来て、昔今をかき集め、悲しき御物語ども聞こゆる。ありがたくあさましきことどもをも見たる人なりければ、かうあやしくおとろへたる人ともおぼし捨てられず、いとなつかしうかたらひたまふ。「いはけなかりしほどに、故院に後れたてまつりて、いみじう悲

しきものは世なりけりと、思ひ知りにしかば、人となりゆく齢に添へて、官位、世の中のにほひも、何ともおぼえずなむ。ただかう静やかなる御住ひなどの、心にかなひたまへりしを、かくはかなく見なしたてまつりなしつるに、いよいよいみじく、かりそめの世の思ひ知らるる心ももよほされにたれど、心苦しうてとまりたまへる御ことどもの、ほだしなど聞こえむは、かけかけしきやうなれど、ながらへても、かの御言あやまたず、聞こえうけたまはらまほしさになむ。さるは、おぼえなき御古物語聞きしより、いとど世の中に跡とめむともおぼえずなりにたりや」と、うち泣きつつのたまへば、この人はましていみじく泣きて、えも聞こえやらず。御けはひなどの、ただそれかとおぼえたまふに、年ごろうち忘れたりつるいにしへの御ことをさへとり重ねて、聞こえやらむかたもなく、おぼほれゐたり。この人は、かの大納言の御乳母子にて、父は、この姫君たちの母北の方の、母方の叔父、左中弁にて亡せにけるが子なりけり。（椎本⑥三三三～三三四）

弁の尼は薫に「昔今をかき集め、悲しき御物語ども」を語る。すると薫は、「いはけなかりしほどに、故院に後れたてまつりて」以下、自分の身の上話を始めるのである。いわば、今まで語る者であった弁の君と聞く者であった薫の関係が逆転した瞬間である。

光源氏が女五宮に「院かくれたまひてのちは」（朝顔③一九〇）と語ったように、薫も亡き父光源氏のことから語り始める。薫は光源氏が死んで以来の厭世感を語るとともに、目先の姫君への思いも語る。そして最後にだめ押しで「さるは、おぼえなき御古物語聞きしより、いとど世の中に跡とめむともおぼえずなりにたりや」と柏木のことを持ち出す。世間的な父光源氏の話題から始まった薫の身の上語りは、最後に弁の尼が実の父柏木を語ったところにたどり着く。薫の語りは、その結節点を柏木にして、弁の尼の語りへと結ばれたのだった。

そして、それを聞いた時、弁の尼は薫を「御けはひなどの、ただそれかとおぼえたまふ」と、薫に柏木を重ね合わせる。弁の尼にとって、薫はかつての主人柏木そのものになったのである。ここでまた「この人は、かの大納言の御乳母子にて、父は、この姫君たちの母北の方の、母方の叔父、左中弁にて亡せにけるが子なりけり」と弁の尼の情報が語られていることに注目したい。柏木の乳母子であることは既出の情報であるはずだ。しかし、それを改めて語ることによって、弁の尼にとって薫が柏木そのものになったことの重さが示される。弁の尼は柏木の乳母子として、柏木そのものになった薫を主人とみなしたのだ。かつての主従の関係が、再び結ばれたのである[18]。

それとともに、弁の尼が宇治姉妹にとって母方の親類であることが明かされた。これは初出の情報である。弁の尼は薫にとっては柏木の乳母子であり、宇治姉妹にとっては母方の親戚というつながりを持つことになる[19]。大君を思慕する薫にとっては非常に都合の良い存在だということだ。それがここで

確認されることによって、弁の尼によって物語が展開されていくことが示された。これ以降、弁の尼は薫の意向に沿って、大君と薫を結ばせようと尽力することになる[20]。

しかし、柏木の乳母子と宇治姉妹の親戚、どちらが弁の尼にとって重要なのであろうか。宇治姉妹の親戚としては、弁の尼は「姫君たちの御後見だつ人」（椎本⑥三三四）とされている[21]。それにもかかわらず、物語の中にそれらしい様子はほとんどえがかれない。例えば、次のような場面がある。

明日入りたまはむとての日は、例ならずこなたかなたたたずみありきたまひて見たまふ。いとものはかなく、かりそめの宿りにて過ぐいたまひける御住ひのありさまを、亡からむのち、いかにしてかは若き人の絶え籠りては過ぐいたまはむ、と涙ぐみつつ念誦したまふさま、いときよげなり。おとなびたる人々召し出でて、「うしろやすくつかうまつれ……」（椎本⑥三一〇）

八の宮が山寺に籠る前日、女房たちに訓戒する場面である。このような時こそ後見たる弁の尼に何か言うようなことがえがかれてもよいはずである。しかし、そのような場面はなく、弁の尼は「おとなびたる人々」のひとりになっていると思しい。この他でも、薫不在時の八の宮邸の女房たちは「古人ども」（椎本⑥三一〇）「さぶらふ人々」（椎本⑥三一六）など、常に複数でえがかれている[22]。

弁の尼が大勢の女房の群れの中の人ではなく、個性ある「弁」として登場するのは、薫に関わる場面だけである。このことは、八の宮や姉妹に限ったことではない。匂宮が宇治を訪れるときに、弁の尼が目立った行動を起こすことはない。唯一、最初の晩だけ弁の尼の手引きによるものだったが、それは薫だと思った上での行動である。匂宮も、後朝の歌に「昨夜のさかしがりし老人のしわざなりけり」（総角⑦五六）と思うだけで、その後も弁の尼をあてにすることはない。匂宮がいるときにえがかれるのはやはり、「山里の老人ども」（総角⑦六四）や「人々」（総角⑦六八）という女房の群れである。

要するに、個性ある「弁」は、薫あっての弁なのである。確かに、弁の尼は柏木の乳母子であり宇治姉妹の母方の親戚という両側からのつながりで、大君を思慕する薫にとっては非常に都合の良い存在であった。しかし、えがかれている弁の尼の実質的な位置は姉妹の「御後見」ではなく、「かの大納言の御乳母子」なのである。

五　弁の尼（3）―亡き柏木／八の宮へとつながる〈昔語り〉の女房

大君が死んだ後も、弁の尼の役割は変わらない。中の君は匂宮に引き取られて上京するが、弁の尼はそれについて行かず、宇治に残ることになる。宿木巻で薫は浮舟の存在を知ると、その詳細を問うため宇治に向かう。

ほかにては、かばかりにさだ過ぎたらむ人を、何かと見入れたまふべきにもあらねど、夜も近く臥せて、昔物語などせさせたまふ。故権大納言の君の御ありさまも、聞く人なきに心やすくて、いとこまやかに聞こゆ。「今はとなりたまひしほどに、めづらしくおはしますらむ御ありさまを、いぶかしきものに思ひきこえさせたまふめりし御けしきなどの思ひたまへ出でらるるに、かく思ひかけはべらぬ世の末に、かくて見たてまつりはべるなむ、かの御世にむつましくつかうまつりおきし験のおのづからはべりけると、うれしくも悲しくも思ひたまへられはべる。心憂き命のほどにて、さまざまのことを見たまへ過ぐし、思ひたまへ知りはべるなむ、いとはづかしく心憂くはべる。宮よりも、時々は参りて見たてまつれ、おぼつかなく絶え籠り果てぬるは、こよなく思ひ隔てけるなめり、など、のたまはするをりをりはべれど、ゆゆしき身にてなむ、阿弥陀仏よりほかには、見たてまつらまほしき人もなくなりてはべる」など聞こゆ。故姫君の御ことどもはた尽きせず、年ごろの御ありさまなど語りて、何のをり何とのたまひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠みたまひける歌語りなどを、つきなからず、うちわななきたれど、こめかしく言少なるものから、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ、いとど聞き添へたまふ。宮の御方は、今すこし今めかしきものから、心ゆるさざらむ人のためには、はしたなくもてなしたまひつべくこそものしたまふめるを、われにはいと心深く情々しとは見えて、いかで過ごしてむ、とこそ思ひたまへれ、など、心のうちに思ひくらべたまふ。さてもののついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり。

（宿木⑦二二九～二三一）

薫は弁の尼に「昔物語など」をさせる。その内容には「故権大納言の君の御ありさま」と柏木のことが含まれている。それどころか「いとこまやかに」とあり、弁の尼の台詞のなかでも詳細に語られている。その後は大君の話題になり、薫は姉妹に思いを馳せるが、「さてもののついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり」とやがて本題である浮舟の話題になる。浮舟の話題を持ち出したかったのなら「昔物語」は大君の話だけをさせてもよかったはずであるが、弁の尼は柏木のことをまず語る[23]。それは、弁の尼を動かすために必要な行為だったのではなかろうか。先に確認した椎本巻でも弁の尼は「昔今をかき集め、悲しき御物語ども」（椎本⑥三三三）をしていた。「昔今」とは、柏木のことや八の宮のことであろう。「今」の話題だけでなく「昔」の柏木にも話題が及び、椎本巻の場合は薫も身の上話をして、弁の尼は薫を「ただそれかと」と柏木そのものに思い、故柏木を通してふたりの主従関係が確認されたのであった。その結果、弁の尼は薫と大君を結ばせようと奔走した。八の宮のこととともに柏木の話をしたのと同じく、今回も大君のことに加

えて柏木の話をしている。それはやはり柏木の乳母子たる弁の尼との主従の確認行為なのだ。

この後、弁の尼は浮舟との手引きのため、再び動き出す。東屋巻では、「かの尼君のもとよりぞ、母北の方に、のたまひしさまなど、たびたびほのめかしおこせけれど」（東屋⑦二六九）と弁の尼が浮舟の母君に薫のことを打診していることがまず語られ、やがて薫に頼まれて上京して仲介することになる。このとき弁の尼は「今さらに京を見はべらむことはもの憂くて、宮にだにえ参らぬを」（東屋⑦三三二）と中の君にも会いに行こうとしていないことを口実に一度は渋っている。先に引用した宿木巻の場面も「宮よりも、時々は参りて見たてまつれ、おぼつかなく絶え籠り果てぬるは、こよなく思ひ隔てけるなめり、など、のたまはするをりをりはべれど、ゆゆしき身にてなむ、阿弥陀仏よりほかには、見たてまつらまほしき人もなくなりてはべる」と言っていた。また、浮舟や母君に対面した時も、「かの宮にだに参りはべらぬを、この大将殿の、あやしきまでのたまはせしかば、思うたまへおこしてなむ」（東屋⑦三三五）と言う。このように中の君に勧められても上京しなかった弁の尼は、薫に頼まれたら浮舟との仲介のために上京するのだ。弁の尼が何を優先させているかは明らかであろう。弁の尼は宇治姉妹の親類の女房としてではなく、柏木の乳母子としてどこまでも行動するのである[24]。

しかし、弁の尼が八の宮邸に仕えていたという事実に変わりはない。弁の尼が浮舟のもとを訪れる場面に注目したい。

かならず出づべくのたまへりければ、いとつつましく苦しけれど、うち化粧じつくろひて乗りぬ。野山のけしきを見るにつけても、いにしへよりの古事ども思ひ出でられて、ながめ暮らしてなむ来着きける。いとつれづれに人目も見えぬ所なれば、引き入れて、「かくなむ参り来つる」と、しるべの男して言はせたれば、初瀬の供にありし若人、出で来ておろす。あやしき所をながめ暮らし明かすに、昔語りもしつべき人の来たれば、うれしくて呼び入れたまひて、親と聞こえける人の御あたりの人と思ふに、むつましきなるべし。「あはれに、人知れず見たてまつりしのちよりは、思ひ出できこえぬをりなけれど、世の中かばかり思ひたまへ捨てたる身にて、かの宮にだに参りはべらぬを、この大将殿の、あやしきまでのたまはせしかば、思うたまへおこしてなむ」と聞こゆ。（東屋⑦三三四～三三五）

ここでは浮舟が弁の尼のことを「昔語りもしつべき人」で「親と聞こえける人の御あたりの人」と思っているのである。弁の尼が薫にとって亡き父柏木ゆかりの女房であり、「昔語り」をする女房であったのと同じように、浮舟もまた、弁の尼をそういう存在としてとらえているのだ。弁の尼が八の宮に仕えた女房であったというもう一方の属性は、浮舟によって薫の場合と同じくとらえられたのである。

ただし、浮舟と弁の尼の物語にこれ以上の発展はない。弁の尼は「野山のけしきを見るにつけても、いにしへよりの古事ども思ひ出でられて、ながめ

暮らしてなむ来着きける」というように、過去を回想しながら上京してきた。語れる思い出は既にあるはずだ。しかし、弁の尼が浮舟に「昔語り」をすることはない。浮舟にとって弁の尼が「親と聞こえける人の御あたりの人」であっても、弁の尼にとって浮舟はそれだけの価値を持たなかったのである。

おわりに

ともに六十歳弱で登場し、途中で出家する源典侍と弁の尼であるが、何より重要なのは亡き父へとつながる〈昔語り〉の女房であることだ。

源典侍は桐壺帝代を一身に背負って登場し、宮中、桐壺帝のもとで光源氏と関わった。そして、桃園宮で光源氏と再会したとき、乳母的な親代わりの存在となり、「昔語り」になりゆく故桐壺院の御代の記憶を共有する人物となった。光源氏にとっては、藤壺の件も含めて、亡き父へとつながる女房なのであった。

弁の尼もやはり、薫にとっては亡き父柏木の乳母子であることに意味がある女房であった。源典侍の場合、彼女は結局は昔語りをせず、亡き桐壺院の御代の記憶を共有していることだけを確認して物語から姿を消した。源典侍の昔語りは亡き父桐壺院の物語であるが、光源氏自身の記憶でもある。物語はその先に次なる物語を生み出そうとはしない。しかし弁の尼と薫は、共有する記憶を持たない。亡き父柏木の物語は薫の記憶にはない。だからこそ弁の尼は何度でも薫に柏木のことを語り、記憶を共有していく。語ることで弁の尼にとって薫は柏木と等しい存在になり、主従の結びつきが確認される。こうして弁の尼は主人である薫のために何度でも動くことになり、薫の恋の物語が展開していくのだ。

浮舟にとってもまた、弁の尼は亡き父八の宮に仕えた昔語りの女房であった。八の宮の記憶を持たない浮舟にとっても、弁の尼はそれを補完する存在になり得たはずだった。しかし、源典侍が「典侍」と「祖母殿」という乳母的な存在として光源氏と結びつきを強めたように、弁の尼も既に柏木の乳母子として薫との結びつきを持っていた。そして、そういう結びつきを弁の尼は浮舟に対して持たない。薫にとっても浮舟にとっても、弁の尼はそれぞれの亡き父へとつながる昔語りの女房として等しい存在でいられる可能性が示されながら、結局は薫の側にあり続けたのである。

源典侍と弁の尼。ふたりの老女房は、亡き父へとつながる〈昔語り〉の女房として対照的なあり方で父と子の物語を支えていた。

注

1　三谷邦明「源典侍物語の構造―織物性あるいは藤壺事件と朧月夜事件―」（『物語の文学の方法Ⅱ』有精堂出版　一九八九）は桐壺巻で藤壺を桐壺帝に紹介する典侍を源典侍だとしているが、藤本勝義「源典侍―末摘花との連環―」（『源氏物語の人　ことば　文化』新典社　一九九九）による反論がある通り、同一人物と考えるのは難しい。

2　史上の典侍に関する先行研究には角田文衛『日本の後宮』（学燈社　一九七三）、加納重文『平安文学の環境―後宮・俗信・地理―』（和泉書院　二〇〇八）などがある。

3　岡部明日香「源典侍について―桐壺院宮廷の位置づけと「をこ話」の意義―」（『人物で読む源氏物語　朧月夜・源典侍』勉誠出版　二〇〇五）は源典侍の物語を「桐壺院治世の特異なあり方」のなかに位置づけている。本稿と重なる部分も多いが、基本的な論旨を異にする。

4　外山敦子「源典侍―重畳する両面性が織りなす物語―」（『源氏物語の老女房』新典社　二〇〇五）は源典侍を「対極の価値の属性が融合した人物」とし、「正性と負性の両面を併せ持つ源典侍を見ている光源氏までもが、不快の念を抱きつつも一方で興味をそそられるという、相反する感情を抱いているのである」と指摘する。

5　前掲注1三谷論文は源典侍物語に「藤壺事件と類似する〈王権〉の禁忌への違犯性」を指摘する。嶋津知恵「源氏物語における頭中将の役割―源典侍事件を中心に―」（『王朝文学史稿』十三　一九八六・三）は藤壺事件と関わらせるとともに皇女腹である頭中将も源典侍と通じたことを「王統の秩序破壊が、王統の血筋につながる者たちによって行われている」としている。また、小嶋菜温子「源典侍と朧月夜―催馬楽を超えて」（『源氏物語批評』有精堂　一九九五）は源典侍物語が「朱雀皇権への侵犯をはらむ朧月夜や斎院の物語と通底する」ことを指摘するとともに「藤壺事件の根拠までもが問われてしまう」とする。

6　前掲注3岡部論文はここに「桐壺院周辺の皇族優位の風潮への大臣家からの警戒と対抗心」を指摘するが、頭中将が「皇女腹」つまり桐壺帝の血族であることとが示されていることに意味を見出したい。

7　前掲注1藤本論文、原岡文子「朝顔の巻の読みと「視点」」（『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』翰林書房　二〇〇三）、松井健児「朝顔の姫君と歌ことば」（『源氏物語の生活世界』翰林書房　二〇〇〇）、津島昭宏「「親」としての源典侍―「朝顔」巻の登場をめぐって」（『野州国文学』七十七　二〇〇六・三）など。

8　永井和子「源氏物語における老者―女五の宮を中心に」（『源氏物語と老い』笠間書院　一九九五）は女五の宮が冷泉帝と源氏の噂が「似より」まで止まっていた」ことを「桐壺帝の側には洩れていないという、側面からの保証」であるとする。

9　前掲注7津島論文。

10　新潮日本古典集成③二〇一頁注一一。

11　前掲注7津島論文は「親」と「女」の両義性から源典侍と藤壺の重ね合わせを指摘するとともに、この贈答を「光源氏にとっての、「親」と「子」の意味を強く照らし出すものとなっている」とする。

12　倉田実「源典侍物語の意味―「典侍」の職掌から―」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識　紅葉賀・花宴』至文堂　二〇〇二）は「以前は桐壺帝の乳母であって、即位してから典侍になっていたともとれよう」とする。なお、加納重文「典侍」（『平安文学の環境―後宮・俗信・地理―』和泉書院　二〇〇八）は源典侍を「出自は低くないのだが軽々しく、天皇乳母として尊重される典侍ではなく、老練な官女タイプである」とし、『源氏物語』の典侍を「『源氏物語』時代にはいささか相違する本来のタイプ」と指摘する。また、吉海直人「『源氏物語』の乳母達」（『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』世界思想社　一九九五）は「好色・性教育・典侍といった乳母特有の性質を持っているので、あるいは桐壺帝の妹女五の宮あたりの乳母かもしれない」とする。

13　前掲注1三谷論文。

14　前掲注1藤本論文。

15　前掲注3岡部論文。

16　早蕨巻で出家するまでは「弁の君」と呼ぶのが正確であるが、便宜上「弁の尼」で統一する。

17　外山敦子「弁の昔物語―薫の〈原点回帰〉の契機として―」（『源氏物語の老女房』新典社　二〇〇五）

18　古田正幸「宇治十帖における弁の君の立場―柏木の「乳母子」／大君・中の君の「後見」として―」（『平安物語における侍女の研究』笠間書院　二〇一四）は弁が柏木の乳母子であることに意義を見い出し、「薫の姿に柏木を重ねているともいえるだろう」とする。

19　吉海直人「親類の女房」（『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』おうふう　二〇〇三）および「弁の尼」（『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社　二〇〇八）は弁の尼が柏木の乳母子であり宇治姉妹の親類の女房であることの重要性を論じている。一方で、「弁の尼」では「薫に出生の秘密を打ち明けたことによって、過去の主従関係も確認されたわけで、その後は八の宮邸にいながら薫側の女房となり、むしろ薫を主人として薫に忠誠を尽くしているように見える」とも指摘している。

20　弁の尼が薫側に立って行動していることは、中野幸一「弁の君と女房たち」（『講座源氏物語の世界　八』有斐閣　一九八三）、金子大麓「「弁の君」呼称考―宇治十帖に於けるその呼称の変化について―」（『国士舘短期大学紀要』一二　一九八七）、大朝雄二「宇治の女はらから論」（『源氏物語続篇の研究』桜楓社　一九九一）、佐久間洋子「源氏物語における侍女像」（『むらさき』三五　一九九八・一二）に指摘がある。特に大朝論文は弁が柏木の乳母子として薫側にあることを指摘している。

21　外山敦子「弁の尼と中将の君―〈母〉たちの浮舟物語―」（『源氏物語の老女房』新典社　二〇〇五）は弁の尼を母も乳母も不在の姉妹の「〈母〉そのもの、あるいは〈母〉の機能をも越え得る存在性」としている。状況的には確かにそうであるが、物語がそうえがかないことに注目したい。なお、外山論文は神田龍身「社会の欲望媒介装置＝浮舟―交換される欲望」（『源氏物語＝性の迷宮へ』講談社選書メチエ　二〇〇一）をふまえ、弁の尼を八の宮の召人だったととらえている。弁の尼が八の宮の召人であったかということに関しては前掲注19吉海直人「弁の尼」の反論があり「むしろ柏木の召人とする方が、可能性はずっと高いはずである」との指摘もある。

22　篠原昭二「大君の周辺―源氏物語女房論―」（『国語と国文学』四二-九　一九六五・九）は弁の尼が出生の秘密を告げる場面以外は「特に個性が与

えられているとはいい難い」と指摘する。

[23] 前掲注17外山論文は物語が大君の「昔物語」ではなく柏木の「昔物語」を重視していることを指摘し、この場面を「橋姫巻で弁が薫の出生の詳細を語った場面の反復であり、その忠実な再現なのである」としている。

[24] 前掲注19「弁の尼」は弁の尼が浮舟や中将の君に対して主人筋として対応していないことを「それは中将の君の特殊事情にもよるが、薫との関係が優先されているのではないだろうか。その意味でも弁の尼はずっと乳母子であり続けていたことになる」としている。しかし、浮舟だけでなく中の君より薫が優先されていることにも注目したい。

第三章　『狭衣物語』論

第一節　飛鳥井女君物語の〈文目（あやめ）〉をなす脇役たち

はじめに

王朝物語において、女房や従者たちのつながりが重要な役割を果たすことがある。例えば、『うつほ物語』には「孫王の君」という召名の女房が三人出てくるが、彼女たちは姉妹で、長女は藤壺（あて宮）、次女は朱雀院女一宮、三女はさま宮に仕えているという設定になっている。国譲・上巻の藤壺と女一宮が会う場面では、この長女と次女も対面し噂話に興じている。さらに、異腹の四女はいぬ宮に仕えていて、楼の上・上巻では、四女が長女にいぬ宮のことを話したことで、秘琴伝授の噂が藤壺にまで伝わるという展開がある[1]。また、藤壺の乳母子に兵衛の君という女房がいるが、彼女の弟であるこれはたは東宮の蔵人になり、国譲・中巻では東宮との仲介となって藤壺に情報をもたらすという重要な役割を果たす。女房・従者たちの横のつながりによって情報が伝達されていく様が示されているのだ。

また、『源氏物語』宇治十帖では、中の君が都に迎えられてからも、中の君についていった大輔の君と宇治に残った弁の尼との間での交流がえがかれ、浮舟巻では大輔の君の娘である右近がもらした匂宮に対する愚痴を、弁の尼が浮舟とその母君に話す場面があり、浮舟に入水を決意させる重要な出来事になっている。さらに、浮舟が入水したことは宇治に仕える下童から明石中宮に仕える小宰相の君に伝わり、大納言の君を経由して明石中宮にまで伝わる。その後、浮舟が生きていることは横川僧都から明石中宮と小宰相の君に伝わるが、それは浮舟のことをあらかじめ知っていたからこそ、僧都の話したことが浮舟のことだと思い当たれたという展開になっている。人物と人物とのつながりが作りあげるネットワークは時に重要な役割を果たすのだ[2]。

しかし、『狭衣物語』の場合はいささか様相が異なる。『狭衣物語』では、近いところに仕えている女房たち同士ですら情報を共有していないことがあり、むしろ、情報を持たないことが重要な役割を果たす。例えば、女二宮の物語に登場する中納言典侍と出雲の乳母は互いに情報を交換しない。中納言典侍は女二宮と通じたのが狭衣であることを知っていたが、女二宮の妊娠は知らなかった。出雲の乳母は女二宮と通じたのが誰か知らなかったが、女二宮の妊娠を知り、大宮が妊娠したと偽装した。こうして、狭衣には何も知らされないままに、女二宮は密かに出産し、その子は嵯峨帝と大宮の子として

処理されてしまうことになる[3]。

人物同士が近いところにいるにもかかわらず、情報の交換が適切になされない。ネットワークは存在しているのに、機能していない。このことは女二宮の物語だけでなく、飛鳥井女君の物語にもみられるのではないか。本稿では、人物同士があやなすネットワークを仮に〈文目（あやめ）〉と呼び、『狭衣物語』の飛鳥井女君をめぐる物語にはどのような〈文目〉が見出され、物語をどう動かしているのか考察していきたい。

一　飛鳥井女君の乳母の場合

狭衣と飛鳥井女君との関係は、互いに素性を隠したまま始まった[4]。仁和寺威儀師に誘拐された飛鳥井女君を助けた狭衣は、彼女を家まで送り届けるが、自分の素性を打ち明けようとしない。源氏宮思慕の呪縛にとらわれる狭衣は[5]、その後も隠し続けるばかりか、素性を偽りすらした。しかし、飛鳥井側もそれに騙されていたわけではない。飛鳥井女君と乳母と女房の間で、次のような会話が交わされている[6]。

「この人にかくて止みはべりなば、御前の御扱ひもいかが仕うまつらん、いみじきわざかな。はやはや源氏の宮の御内裏参りにとて、やんごとなき人々多く参り集まりたまふなり。御前の御容貌ばかりの人はおはせじ。参りたまひね。女が身一つの、ことにもはべらず。いづちもいづちもまかりなん。このおはすらん人は誰ぞとよ。あやしういたう忍びたまふは。御前は知らせたまひたらんな」と言へど、「知らず、ただ心より外にあやしきありさまなれば」とて、うち泣きたまふをあはれと見て、我も泣きぬ。「一夜も門を叩かせたまひしに、開くる人のなかりしかば、いたう侮りたるなめり。看督の翁率て来てこれ開けさせん、など言ひけるけしき、別当殿の御子の蔵人少将とぞ思はせたりし」など言へば、「さはれ、まれまれありつる者どもも怖ぢまどひて、この頃は参で来ず、いとどわりなし。あてにやんごとなきこと、めでたうとても、この定にてはいかがはせん……」

（巻一①八六～八七）

乳母に、通ってくる男が誰かと問われた飛鳥井女君は知らないと答えているが、それに対して女房が、狭衣がわの者たちの「看督の翁率て来てこれ開けさせん」という発言を報告し、さらに、「別当殿の御子の蔵人少将とぞ思はせたりし」[7]と言っている。つまり、この女房は、通う男が狭衣であるとは知らないものの、少なくとも「別当殿の御子の蔵人少将」というのが偽りであることに気づいている。「別当殿の御子の蔵人少将」であると偽るからには、

女房も乳母も飛鳥井女君も、通う男の正体は少なくともそれ以上の高貴な身分であろうということを理解したはずだ。ただし、源氏の宮のもとへ出仕する話も出ているのに狭衣の話題は出ておらず、通う男が狭衣であるとは思い当たれていない。「あてにやんごとなきこと、めでたうとも、この定にてはいかがはせん」と、高貴な身分の男であろうことは分かっているものの、乳母の第一の懸案は生計であって、その点において頼れそうにない男に不快感を示している[8]。

狭衣が飛鳥井女君と素性を隠して交際しているうちに、狭衣の乳母の子である道成が女君に求婚してくることになる。道成は狭衣よりも早く、飛鳥井女君が太秦に参籠している頃から既に目をつけ文を送っていたが、当時は仁和寺威儀師がいたため乳母に返事を保留にされていた。しかし、その後、道成は父親の大宰大弐任官に従って九州に下向することになり、同行する女ほしさに飛鳥井女君のことを探すことになる。その頃には狭衣と飛鳥井女君の交際は始まっているのだが、このとき道成が仕入れた情報に注目したい。

太秦の人を尋ねけるに、「かくなん、別当少将の、時々通ひてあんなれば。乳母は承けずな」と言ふ人のありけるを、喜びながら消息したりけるに、乳母、思ふやうにめでたくおぼえて、東も思ひ止りて、「まことに思すことならば、しばし、君にも知らせたてまつらじ。下りたまはんほどに、みそかに迎へたてまつりたまへ」と言ひ遣りけるを、えもいはず喜びて、「さやうの細君達の蔭妻にておはすらん、口惜しきことなり。ただ心見たまへ。男の御幸ひにてこそあらめ。ゆめ違へたまふな」

（巻一①一一八～一一九）

乳母は通う男が別当少将ではないことを知っているにもかかわらず、道成が得た情報では、飛鳥井女君のもとに別当少将が通っていることになっているのだ。そのため、道成は相手が狭衣であるとも知らず、通う男を侮ることになる。なお、乳母は通ってくる男に対して以下のような対応をしていた。

この人のおはする宵、暁のことをも心安からず、鍵失ひがちに、つぶやくけはひを、御供の人聞きて、あさましうめざましき折々ありけり。殿にも忍びて、「誰と思ひたるか。かくな」と申せば、女のけしきもあやしうのみあるは、この見えし火影の女の、ありし法の師に取らせんとするなめり…

（巻一①一一三～一一四）

…

狭衣がわの「看督の翁率て来てこれ開けさせん」という偽装と、乳母のこういった対応から、飛鳥井女君に通っている男は別当少将であるという噂が立っていたのだろう。その結果、道成は飛鳥井女君に通う男が狭衣であることなど知らずに言い寄ることになったのだ[9]。

そして、道成の得たこの誤った情報は、訂正されることがなかった。道成は乳母と謀って飛鳥井女君を九州行きの船に乗せてしまう。その船上で、道

成は次のように言っている。

「さこそのたまふとも、たけきこと、今はよもおはせじ。あな、をこがましや。なにがし少将の蔭妻にて、道行き人ごとに心を尽し、胸をつぶしたまふ心もやは。あやしうせん、またなく思ひかしづききこえんを、取り所に思せかし。なま君達は、いとなづまじう、ここだしきものぞよ。我が殿のおはしまさん世には、なにがしらに、その君達まさらじ。……」

（巻一①一三五～一三六）

道成は、飛鳥井女君に通う男が少将であると信じている。「我が殿」の威光を背景に強気な発言で女君を口説くが、もちろん少将と名乗っているのが「我が殿」であるとは気づいていない。この段階でもなおそう信じているということは、謀をめぐらすなかで、乳母から通う男の正体が少将ではないということを知らされなかったということになる。

乳母は、飛鳥井女君に対して以下のような発言もしていた。

「……このおはする人に、かくと聞こえさせたまへかし。わざとならぬ宮仕へ人たちに、さこそは、かやうの君達は、車は貸したまへ。さばかりのことは、などてか聞きたまはぬことあらん。まことまこと、この隣の駿河が妻こそ、物に情ありて、頼もしき所ある人なれ。つとめて、いととく借りこころみん。さてやがて、この蔵人少将の殿の御乳母の家に、しばし渡らせたまひて、おはしかし。年頃のいみじき知る人なり。この御事の後、なかなか恥づかしうて訪れはべらずなりぬる。かくと聞きたまふとも、なでふことかあらん」

（巻一①一二五～一二六）

通う男が少将ではないと知っているはずの乳母が、少将であると信じているような発言をしているのである。ここの乳母の言葉は飛鳥井女君を謀ろうとするものであり、もとより車を借りるべきなどとは微塵も思っていないはずである[10]。その謀の中で、乳母は、そもそも少将であるという偽りすら信じたふりをしているのである。これに対して飛鳥井女君も、

よろづよりも、かの少将と思ひて、いかなる僻事を言はんとすらむ。時々の前渡りにも思ひ合すれば、それにやと見ゆべき影も、紛るべうも見えぬものを、と思へど、かやうやと、この人に言はんも、よきことと言うべうもなければ、答へもせられず、いかなる僻事どもを、し出でんずらん、と思ふにも、もとよりかくものはかなう、あやしかりける身のありさま、いとあはれに思ひ知らる。

（巻一①一二七～一二八）

と、乳母が、男が少将であると思っているのだ、と考えるとともに、どんな謀をしてくるのか案じている。飛鳥井女君と乳母は、通う男が少将であるというのが偽りであると了解していた。しかし、乳母は、少将であるという偽りを信じたふりをし、この時点では既に男が狭衣であることに気づいている

女君も、乳母への不信からそれを訂正しない。

もとはといえば、狭衣が自らを少将であると偽装したのが原因である。しかし、飛鳥井女君も乳母も、それが偽装であることに気づいていた。それでも、飛鳥井女君は正体が狭衣であると気づいた後も、それを乳母に告げなかった。乳母は少将であるという噂を放置し、信じたふりをし続けた。そして、それを信じた道成は、通う男が狭衣と知らずに、飛鳥井女君を奪ったのである。相手が「わが殿」＝狭衣であることを知ったら、道成は手を引いたかもしれない。しかし、乳母が誤った情報を放置したために、悲劇は起こったのだ。

乳母が男の正体が狭衣であると気づいていたかは明らかにされていない[11]。少なくとも飛鳥井女君はそれを乳母に告げていない。しかし乳母は、少なくとも少将ではないということには気づいていたにもかかわらず、信じたふりをして放置した。ある種の情報操作をしているのである。そして、乳母が情報操作するというのは、『狭衣物語』の常套である。巻二で狭衣は誰にも知られることなく女二宮と通じ、宮は妊娠する。このとき、女二宮の乳母である出雲は、相手の男が誰だか知らないまま、妊娠したのは女二宮の母である大宮だと偽装した。また、巻三で狭衣は権大納言によって一品宮（一条院女一宮）との間に噂を立てられてしまう。このとき、権大納言はまず一品宮の乳母子である中納言の君に狭衣のことを告げる。そして、中納言の君から話を聞いた内侍の乳母は、狭衣が少将命婦に会いに来たところを誤解されたのだと考え、中納言の君には口止めをしたにもかかわらず、女院（一品宮の母）には「権大納言ののたまひけること」（巻三②八二）を報告し、それを聞いた女院は少将命婦が狭衣を一品宮のもとに手引きしたのだと考える。内侍の報告の詳細は語られないが、女院がそう思い込むような報告をしたことが想定されるのである。『狭衣物語』において乳母は正確な情報を握ることができず、それでいて情報操作することで物語を悲劇へと導く存在として登場するのである。

二　道成・道季兄弟の場合

しかし、問題は乳母にだけあったわけではない。飛鳥井女君に通う男の正体を道成が知る機会は実はいくらでもあったことが、物語に幾度も示されている。

道成という人物は、次のように紹介されている。

この殿の御乳母の大弐の北の方にてあるありけり。子どもあまたある中に、式部大夫にて、来年、官得べき、かやうの人の中には、心ばへ、容貌などめやすくて、少々の上達部、殿上人などよりは、世の人も心ことに思ひたり。自らの心にも、また思ふことなく、いみじきすき者の色好みて、いかで、心、容貌よき、すぐれたらん人を見んと思ひて、婿にほしうする人々の辺りにも寄らず、君の御真似をのみして、夜中の御供にも後れず、私の里わたりをのみ尋ぬるわざのみして、この女君、太秦に籠りたまへりけるを、ほのかにのぞきて見けるより、異心なくなりて、消息などしけるを、この乳母は、いみじう耳つきに思ひて、返事などしけれど……

（巻一①一一七）

狭衣の乳母の子であるだけでなく、狭衣の「御真似」をして、「夜中の御供」をしていた。それならば狭衣が飛鳥井女君に通うときにもいそうなものであるが、そこにはいなかった。それは、次のような事情からである。

かの下りし式部大夫、肥前守の弟ぞかし。三郎は蔵人にもならで、雑色にてぞありける。兄、蔵人になりて、暇なかりつるほどは、御身に添ふ影にて、この御しのびありきには、身を離れたてまつらねば、飛鳥井にも一人のみこそ御供には参りしに、忍びたまひしことなれば、兄にも「しかじかの心え」なども言はざりければ、彼も「そこなる人を率て下る」など語らざりけるなめり。君のかく嘆きたまふけしき見て、雑色道季は人知れずこの人を尋ねけり。

（巻二①一五七～一五八）

道成は蔵人になってから狭衣の供をする暇がなくなっていたのだ。代わりに狭衣の供をしたのは弟の道季であった。そして、この兄弟の間で、情報交換がされていなかったのである。道季は「忍びたまひしことなれば」と配慮して狭衣が飛鳥井女君のもとに通っていることを道成に告げず、何も知らなかった道成は九州下向に連れて行く相手のことを道季に告げることもなかった。

ここで、道季が狭衣の供をしているのは「一人のみ」とあるが、実際は飛鳥井女君のことを知っているのは道季だけではない。

御供の人々は、「かかることはなかりつるを。いかばかりなる吉祥天女とならん。さるはいとものげなき男のけはひぞすめる」、あるはまた、「仁和寺の威儀師が盗みたりけむ女か」など、おのおの言ひ合せて、あやしがるべし。

（巻一①八八）

というように、「御供の人々」とある。彼らは狭衣の通う相手の詳細を知らないようである。狭衣は詳細を腹心にしか知らせていなかったと思しい。そういう意味で、道季は「一人のみ」の供といえるのだろう。しかし、それでも、供のなかに狭衣の通う相手が「仁和寺の威儀師が盗みたりけむ女か」と正体に勘づいている者もいた。道季が告げなくても、この者たちから道成に情報がいく可能性もあったはずだ。結局のところ道成は誰からも真相を知らさ

れることはなかったが、その可能性自体は存在していたのだ。

さて、飛鳥井女君は船上から身を投げた。道成は帰京後、狭衣にその折の事情を語っている。

「……帥の平中納言の女にさぶらひけり。親たちみな筑紫にて失せにける後、ただ乳母を頼もし人にてさぶらひけるに、蔵人少将時々通はれけるを、女はあひ思ひはべりければ、下り侯ひにし暁、乳母に心あはせてとらせはべりしを、…（中略）…あさましう海に落ち入りぬるとなん見たまへし。御扇取らせてはべりしかば、しかじかなんかき汚してはべりしは、いかに思ひけるにか。ただにもさぶらはで、七月八月ばかりにさぶらひけるは、なにがしの少将のにやはべりけん。その君たちにかけられたらんよりはと思ひしかど、いといみじう泣き焦がれて命に換へはべりしも、いかばかり思ひける中にか、少将はいかに思ひ出ではべらん」と言ふ。さらば、まことなりけりと思すに、けしきも変るらんかしとおぼゆるまでいみじきを、つれなうもてなしたまひて、「げにおぼろけならず心ふかかりける人かな。かへりては、疎ましうこそおぼゆれ」など、言少なにて入りたまひぬ。

（巻二①二四九～二五一）

この段階にいたってもなお、道成は相手の男が少将だったと信じ込んでいる。狭衣は道成が飛鳥井女君を奪ったことを既に知っているが、それは道季の報告によるものだった。しかし道成は、道季から真相を聞かされていない[12]。道成が真相を知るのは、物語も最終盤、飛鳥井女君の遺児が一品宮になってからであった。

一方、道季にも、気づく機会はあったことが示されている。

道季参りて、「あやしきことをこそうけたまはりつれ。道成が妻は海に身を投げてさぶらふなりけり。乳母なるものの申しけることどもうけたまはれば、ただ身の行方なくなりたまへる人とぞおぼえ侯ふ。いま思ひたまへあはすれば、太秦にて見し人をなん尋ね得たるなど、語り出で侯ひしか。もしさることもやはべりけん。おはしまし通ふ所とはかけても知りはべらざりけるなめり。まことに、それならばあさましうさぶらひけることかな」と申せば、「さもやありけむ。知りながらもさやうの人はさこそあれ」とて、…（中略）…御心の中は、なかなか行方なく思ひつるよりも心憂くもあるべきかな、一夜二夜にもあらず、さは言へどもほど経にしを、さりとも誰と知らぬやうはあらじを、太秦にて見そめて、乳母と心合わせたるしわざなるべし、さすがにあざれて、さやうのわざもしつべくぞあるかし……

（巻二①一五八～一五九）

道季は、道成が太秦で見初めた女を得たということを聞いていたのだ。しかし、それが飛鳥井女君と結びつかなかっただけなのである。物語は、悲劇

を防ぐことができたかもしれない可能性をいくつも示している。人物と人物が近い距離にいて、情報を交換する可能性を持っている。人間関係の〈文目〉は存在している。しかし、それが機能していないのだ。もし、この〈文目〉のなかの誰かひとりでも誰かに情報を伝えていたのなら、飛鳥井女君の悲劇はなかったかもしれない。

そして、〈文目〉が存在しているからこそ、狭衣は「知りながらも」という可能性を考えるし、「知らぬやうはあらじ」と思う。道成が知らなかったということが、狭衣には信じられないのだ。

この「知らぬやうはあらじ」は、『狭衣物語』のなかでたびたび繰り返される表現でもある。先に、乳母の情報操作が女二宮や一品宮の物語でも行われていることを指摘したが、この「知らぬやうはあらじ」という表現も、やはり女二宮や一品宮の物語に存在する。次に挙げるのは、大宮が女二宮の妊娠を知って乳母たちを問いただす場面である。

この人々の中に知りたるもあらんと思して、出雲・大和などいふ御乳母たちをしのびたるかたに召しよせても、とみにものものたまはずむせかへらせたまへるを、いかなることぞと思ひ騒ぐに、からうじて、「かかることのおはしましけるを、誰も知らぬやうあらじを、などかいままでまろには知らせざりける。いかなりしことぞなどもいかでか聞かでは」などのたまはせやらぬを、うち聞く心地もいかがはありけん、（中略）「月ごろもあやしう心得ぬ御ありさまを、御もののけにやと見たてまつり嘆くより外には、またえいかにもいかにも見知りまゐらすることもはべらず。さりとも、ことのありさま知る人はべらんかし。昔物語にも、心をさなきさぶらひ人につけてこそ、かかることもはべりけれ。うちかはり誰も見たてまつらぬ折も候はぬを、なほ、いつの隙にいかでさることもはべらん。御ひがめにや」と言へば、「いでや、むげに誰も知らぬやうもあらじ。……」

（巻二①一九八～二〇〇）

このように、大宮は、乳母たちを「誰も知らぬやうあらじ」と責める。それに対して乳母たちは「昔物語」を引き合いに出し、「ことのありさま知る人はべらんかし」と言うが、誰も見ていないのだから妊娠は大宮の見間違いなのではないかとする。しかし、それに対して大宮は重ねて「むげに誰も知らぬやうもあらじ」と言う。実際は、狭衣と女二宮の逢瀬は誰にも見られておらず、本人たち以外に知る者はなかった。それなのに、大宮は乳母たちの誰も知らないなどというはずがないと考えているのである。

さらに、女二宮の若宮出産後、中納言典侍と出雲の乳母が次のような会話をする場面もある。

御湯よりのぼりて臥したまひける御顔の、ただかの御児のほどとおぼえたまへるを見るに、大弐の乳母にこれを見せたらん、いかばかり人目も知らず喜び愛しがりきこえんと、我だにいみじうらうたうおぼえたまひて、いかで、疾く見せたてまつらんと思ひあまりて、出雲の乳母に、「空目かとよ。ただその御顔とこそおぼえさせたまへ」と言ふを、いでや、知らぬやうはあらじとつらければ、「さしも似させたまはず。よき人どちはよしなきだに似るものなれば、まして同じ御ゆかりなればこそ。されど、これはいまよりさまことに王気さへつかせたまへるさまにぞ」と言ふもをかしかりけり。

（巻二①二二一）

中納言典侍も出雲の乳母も、この時点ではもう若宮の父親が狭衣であることを知っている。しかし、二人はその事実を別々の機会に知った。さらに、出雲の乳母は、狭衣を女二宮のもとに手引きしたのは中納言典侍であると考えている。中納言典侍は狭衣の乳母である大弐（道成・道季兄弟の母）の妹であり、狭衣と親しいからである。そのため、中納言典侍の、若宮が狭衣に似ているとする発言を、「いでや、知らぬやうはあらじ」と思う。出雲の乳母は、中納言典侍が全てを知った上で知らないふりをしていると考えているのだ。実際、中納言典侍は事情を知っているのではあるが、出雲の乳母が考えているように手引きをしたわけではない。この「知らぬやうはあらじ」は微妙に真相とずれているのだ。

また、一品宮の場合も同様である。一品宮と狭衣との噂を聞いた女院は、内侍の乳母に事情を聞く。

院聞かせたまひて、内侍の乳母に、「かく、世の人のことに言ふなる、いかなることぞ。むげになきことは、人の言ふにもあらぬを。さりとも知らぬやうあらじ」とのたまはするに、いとあさましうなりて……

（巻三②八二）

女院は一品宮と狭衣との噂は根拠のないことではないと考え、乳母が知らないはずがないとする。しかし、一品宮と狭衣との噂は全くの濡れ衣であった。

以上のように、様々な形で「知らぬやうはあらじ」という表現が繰り返されている。大宮や女院は、乳母が主の事情を知らないはずはないと考えている。出雲の乳母は、狭衣に親しい女房である中納言典侍が事情を知らないはずがないと考えている。

そして、狭衣も、道成が飛鳥井女君のことを「誰と知らぬやうはあらじ」と考えていた。女二宮の例も一品宮の例も、それぞれ状況や人物関係が異なり一概には同じと言えないが、しかし、「知らぬやうはあらじ」という推測が的を射ていなかったことだけは共通する。実際は欠けた情報しか持っていないにもかかわらず、知っているはずだと思い込む。それが、『狭衣物語』に頻出する「知らぬやうはあらじ」という表現なのである。

確かに「知らぬやうはあらじ」という推測は的を射ていない。しかし、全く根拠のないことではないからこそ、こういった誤解が起きる。大宮や女院が乳母に事情を聞くのも、乳母が女君の最も側近くに仕えているのだから当然である。出雲の乳母が中納言典侍を疑うのも、中納言典侍が狭衣と親しいのだから妥当であろう。実際、中納言典侍は、狭衣と女二宮との関係を知った時、「もしさることもあらば、我がかごとなどこそ思しめさめ」（巻二①一八六）と、自分が疑われるに違いないと考えていた。

道成の場合も同様である。確認してきたように、物語は道成が情報を得たかもしれない可能性をいくつも示している。飛鳥井女君が乳母に男の正体を告げていたら。乳母が男が少将であるという噂を否定していたら。道季や他の従者たちが道成に飛鳥井女君のことを告げていたら。道季が道成の得た女が飛鳥井女君であると気づいていたら。人間関係の〈文目〉をつくりあげ、これら可能性をいくつも存在させながら、それを機能させないことで飛鳥井女君の悲劇が作り上げられているのである。

三　「少将」の子とされた遺児

そもそもの始まりは、狭衣が素性を偽ったことであった。それが偽りであることは飛鳥井女君や乳母も気づいていたが、訂正されることはなかった。その影響は物語の後半にまで及ぶことになる。

巻二末～巻三の粉河詣で狭衣は飛鳥井女君を救出した兄僧に会う。しかし、ここでは女君にも我が子にも会えず帰京する。その後、今姫君の母代から情報がもたらされ、狭衣は常盤の里を訪ねることになる。女君は既に死んだ後であったが、狭衣は常盤の尼君と対面し、女君や遺児のことを尋ねた。尼君は遺児のことを、次のように説明する。

「我が君や、聞こえさせん方こそなけれ。かかりける御事を、などかつゆ知らせたまはざりけん。限りあらん命こそえ留めはべらざらめ、こののたまはすることをさへ、かく跡かたなくはしなしはべらざらまし。いかなることぞなど、常に、さまで思ひ立ちはべりけんことを問ひはべりしかど、かけてもかやうにほのめかしはべらざりき。いと心はかなう、言ふかひなくもはべりけるかな。心の咎とこそうけたまはりつれ。兵衛督の知るべきゆかりと、ほの聞きはべりしかど、この自らは、さらにことの外に思ひて、数ならぬ身のほどにたぐひたまはんも、いとかたじけなきことになんは

べりしかば、かくにこそはべりけれ。世に知らぬうつくしさと聞かせたまひて、一品の宮のいみじうゆかしがらせたまひしかば、百日の折りに参らせたまへりしを、やがて留めきこえさせたまひて、乳母などあまたして思しめしかしづくさまなどは、いまおのづから聞かせたまひてん……」

（巻三②五九～六〇）

狭衣は今姫君の母代から情報を得て、常盤の尼君のもとを訪ねていた。今姫君の母代はどういうわけか狭衣と飛鳥井女君との交際を知っていて、狭衣に常盤の尼君のことを話したからである。しかし、尼君は遺児の父親が誰か知らなかった。それは飛鳥井女君が事情を決して話さなかったからだと言う。さらに、尼君自身は遺児の父親が兵衛督[13]の縁者であるという噂を聞いていた。その噂は飛鳥井女君自身が否定していたが、真相を話さなかったため、尼君は父親が狭衣であると知らずに遺児を一品宮の養子に出してしまっていた。

さらに、遺児を引き取った一品宮はどうだったであろうか。一品宮は狭衣と結婚することになるが、その後、遺児の父親が狭衣であることを知る場面がある。

「忘れがたみに」とありし御独り言を、宮の御乳母子の中将といふ、障子のつらにて、いとよく聞きけり。宮の御前に語り申せば、さはこの児は、なにがしの少将のと聞きしは、あらざりけるにこそ、これによりて、このわたりにはあながちに尋ね寄りにけるにこそ、いみじう物思ひたるさまなるも、このことにこそと心得たまへば……

（巻三②一一三）

このように、一品宮は、この子の父親を「なにがしの少将」であると思っていたのだ。尼君は、飛鳥井女君が子の父親に関する噂を否定していたと語っていた。しかし、それでも、この子は養母の一品宮に「なにがしの少将」の子と信じられて養育されていたのである。

いつの間にか、飛鳥井女君は「少将」と交際していたことになってしまった。狭衣が少将と偽ったことは、飛鳥井女君も乳母も偽りであると知っていた。しかし、訂正されないままに噂として流れ続け、遺児の子は少将の子として一品宮のもとにたどりついたのである。これは、女二宮の物語や一品宮の物語とも似た構造になる。女二宮の物語の場合、狭衣と女二宮という、あったはずの関係はなかったこととされ、生まれた若宮は嵯峨帝と大宮の子として処理された。その結果、後に若宮の父親が狭衣であることが明かされることによって、狭衣と大宮という、なかったはずの密通が創出された[14]。また、一品宮の物語の場合、狭衣と一品宮という、なかったはずの関係があったことにされ、婚姻が成立してしまった。これらと同じように、狭衣と飛鳥井女君の関係はなかったことにされ、「少将」と飛鳥井女君の関係があったことになってしまったのである[15]。

そして、それは、〈文目〉の中で情報が正確に行き交わなかったために起こったことである。誰かがどこかで情報を交換していたら、飛鳥井女君の悲劇はなかったかもしれないし、遺児が養子に出されることもなかったかもしれないのだ。

四　見えない〈文目〉

以上のように、張りめぐらされながらも、情報が交換されない〈文目〉が存在している飛鳥井女君の物語であるが、それだけでは説明できない人物がいる。それは、今姫君の母代である。先に述べたように、今姫君の母代はどういうわけか狭衣と飛鳥井女君の関係を知っていた。そして、彼女の持っている情報は奇妙なほどに詳細である。

「まことにや、思ひかけぬ人の御文持ちてはべりし」と言へば、「おぼろけにては散らさぬものを。よに侍らじ」とのたまへば、「げに世の常の御こととは見えはべらざりき」と思はせて心したるが憎ければ、「虚言をしける人ななり」と、ことの外に言ひなしたまへば、いと高やかにうち笑ひて、「今日のひる間はなほぞ恋しき」など……　（巻三②五〇）

母代が狭衣に飛鳥井女君のことを切り出す場面である。母代は狭衣が飛鳥井女君に宛てた文を見たと言う。この「今日のひる間はなほぞ恋しき」は巻一で狭衣が飛鳥井女君に送った文の通りである。さらに母代は次のように語る。

「いで、さればこそ、ことの外にのたまはせつれど、この御前の母は、故平中納言の御妹ぞかし。その御姉は、女院に、中納言の君とてさぶらひたまひしを、筑前の前司なにがしの朝臣に盗まれて、遠きほどまでおはしたりしが、守失せて後、尼になりて、常盤といふ所におはする。中納言の女は、乳母のもとに心細げにてなど聞かせたまひて、常に召ししかど、乳母、心かしこくて、ものしたたかなるさまにしなさんとて、参らせざりしほどに、御覧ずるやうもはべりとかや。前の別当、左衛門督の子の少将と名のらせたまひけるを、いでや、さやうのなま公達の蔭妻にて、益なしとて、三河守なにがしが殿に親しくさぶらふらんを知らせざりけるとかや。あさましきことなりかし。女には知らせで盗ませて、筑紫へ具しはべりける道にて、女泣きこがれて、身を投げてんとて、せがいに出でてはべりけるを、兄の禅師の君、目あやしき法師、いみじき聖にてはべりける、伯母につきて筑前より上りけるに、見つけて常盤に置きたりける。世に知らずうつくしき子を生みたりけるは、いかにとかや、その案内は申さじ。明け暮れ

物を思ひて、先つ頃、尼になりてこそ失せはべりにけれ。容貌など、御覧じけん。さばかりなる侍りなんや。ただ人ざまなどこそ、あやしうおしなべての人には似はべらざりしか」

（巻三②五一～五二）

これほどの詳細な情報を、母代は一体どこから手に入れたのであろうか。狭衣が飛鳥井女君に宛てた手紙を見たというのは、おそらく常盤の尼君のもとであろう。しかし、先に述べたように、常盤の尼君は飛鳥井女君と狭衣の交際のことを知らなかった。ということは、常盤の尼君は手紙を書いたのが狭衣であるということも知らないことになる。そうなるとなぜ母代はこの手紙が狭衣のものであると分かったのかという疑問が生じるが、母代はおそらく筆跡から狭衣のものであると判断したのではないだろうか。狭衣は洞院の上に言われてしばしば今姫君のもとに出入りしていたのだから、母代に筆跡を知られていても不思議ではない。それにしても、狭衣の筆跡と気づいた時点で母代がそれを常盤の尼君に告げていれば、遺児が一品宮のもとに渡ることは防げたと思われる。やはり、ここでも近しい者同士の情報の不伝達が起こっている。母代の発言により、人間関係がさらに複雑にあやなされていたことが明らかになったが、今までと同様、その〈文目〉は機能していないのだ。

それでは、母代が語る詳細な情報は、どこからもたらされたのであろう。狭衣の手紙であることが推測できたとしても、ここまでの経緯を推測だけで導き出すのは不可能である。何も知らなかった常盤の尼君ではなく、別の誰かから情報を得たことになる。しかし、それは物語のなかで語られない。母代がどういった人間関係のなかで誰からこの情報を手に入れたのか、一切は不明なのである。

ここにもうひとつ飛鳥井女君の物語を動かすものの存在を考えることができる。先に述べたように、物語に直接えがかれている〈文目〉は、飛鳥井女君をめぐる情報を行き交わせる可能性をえがいていた。しかし、それは機能せず、姿を見せているのに切断された〈文目〉であった。一方、物語に直接にえがかれない何らかの〈文目〉が確かに存在していて、そこでは飛鳥井女君に関する情報が詳細に流れているのである。決して姿を見せないのに、確かに機能している〈文目〉があったのだ。

この母代という人物は経歴がほとんど不詳である。「母のなま親族の、高きまじらひはせで、人数ならで若きまじらひわぶる人」（巻一①一〇一）で、「さすがにゆゑづき、物見知り顔にて、いとしも見ぬことも知り顔になどやうにて、かたはらいたき物好みなどさし過ぎたる者」（同）とされている。「母のなま親族」ということで常盤の尼君とのつながりは納得できるが、「なま親族」というのがどの程度のものかは分からない。さらに、「高きまじらひはせで」には内閣文庫本「高きまじらひはしてあれど」という異同があり、問題のある箇所ではあるが、とにかく経歴も不詳である。そして、不詳であり

つつも余所につながりを持っていそうな経歴がほのめかされていることによって、背後に見えない〈文目〉が想定できるのである。今姫君の乳母でもない「母代」という正体の知れない存在だからこそ持つことのできる見えない〈文目〉。それは飛鳥井女君や狭衣の「乳母」を中心にした見える〈文目〉とは全く対照的なものである。

おわりに

母代をめぐる、見えない〈文目〉の存在。物語はそれを示すことによって、母代の他にも狭衣と飛鳥井女君の恋の顛末を知る者がいる可能性を示している。東宮（後一条帝）が狭衣の源氏宮恋慕を知っていたように[16]。しかし、この見えない〈文目〉は、狭衣を常盤に向かわせはしたが、それ以上に物語を展開する力を持たない。既に飛鳥井女君はなく、遺児も一品宮の養子になった後であった。そして、見えない〈文目〉の中では詳細な情報を得て狭衣に伝える役割を果たした母代も、常盤尼君とつながる〈文目〉のなかでは、他の人物たちと同様に情報交換をしていない。

飛鳥井女君の物語には、ふたつの〈文目〉が存在している。表に見える〈文目〉は、情報を行き交わせる可能性を示しながらも機能せず、情報が行き交わないことによって人々を動かし、物語を展開させていた。一方、その裏の見えない〈文目〉では、情報が詳細に流れていた。このふたつが、織物の表と裏のように飛鳥井女君の物語をあやなしていたのである。

注

1 『うつほ物語』における女房・従者の機能に関しては第一章で論じた。

2 『源氏物語』に関しては安藤徹の「物語と〈うわさ〉」「隠すこととと顕すこと」など『源氏物語と物語社会』（森話社　二〇〇六）所収の〈うわさ〉に関する一連の論考がある。また、野村倫子「『山路の露』の「文」と「語り」―浮舟物語における情報回路の回復をもどく―」（『『源氏物語』宇治十帖の継承と展開』和泉書院　二〇一一）は浮舟物語後半と『山路の露』における情報伝達の問題を論じている。

3　女二宮物語に関しては次節で論じる。

4　三角洋一「飛鳥井物語小考」（『王朝物語の展開』若草書房　二〇〇〇）は三輪山伝説との話型の重なりを指摘している。また、倉田実は「〈名を隠す恋〉の狭衣―飛鳥井の君の物語」（『狭衣の恋』翰林書房　一九九九）は狭衣と飛鳥井女君との恋を〈名を隠す恋〉と捉え、「「知らせない」ことが二重三重に結構されて、飛鳥井の君の悲劇が生じていると把握できる」と指摘する。

5　鈴木泰恵「恋のジレンマ―飛鳥井女君と源氏宮」（『狭衣物語／批評』翰林書房　二〇〇七）。また、飛鳥井女君物語と源氏宮思慕の関連に関しては、萩野敦子『狭衣物語』飛鳥井女君論・序説―品劣る女との恋物語が「狭衣物語に参加するまで―」（『国語国文研究』九六　一九九四・九）が飛鳥井女君を、天稚御子事件を経て源氏宮の〈形代〉ではなく〈慰め〉を欲したところに入り込み得た存在としてとらえ、やがて源氏宮の影響下から脱していくとして論じている。

6　このあたりの経緯に関しては、三角洋一「飛鳥井の女君の乳母について」（前掲注4『王朝物語の展開』所収）が狭衣・乳母・飛鳥井女君の「三者のからみあいによって描きすすめる飛鳥井物語の一端」として論じている。

7　「別当殿の御子の蔵人少将とぞ思はせたりし」という発言であるが、引用している新編全集の深川本が「思はせたりし」とあるのをはじめ、内閣文庫本は「思はせたりければ」と、第一系統で読む限り、女房は「蔵人少将」であるというのが偽りであると判断していることになる。しかし、第二・第三・第四系統では、女房たちが、通う男が少将であると信じたことになっている。確かに、通う男が少将ではないと知っているにしてはこの後の乳母の行動には不自然な点が多く、少将であると信じたとする方が合理的なのであるが、本稿では第一系統で読むことにより、少将ではないことを知っていたはずの乳母に注目したい。

8　飛鳥井女君の乳母に関しては、注6三角論文の他に久下裕利（晴康）「『狭衣物語』の乳母たち」（『平安後期物語の研究　狭衣浜松』新典社　一九八四）「フィクションとしての飛鳥井君物語」（『王朝物語文学の研究』武蔵野書院　二〇一二）、齋木泰孝「狭衣物語における乳母―女三宮、飛鳥井女君、今姫君の物語―」（『物語文学の方法と注釈』和泉書院　一九九六）などがある。

9　井上眞弓「メディアとしての旅―恋のゆくたてを見る―」（『狭衣物語の語りと引用』笠間書院　二〇〇五）は道成の官が狭衣が身をやつした蔵人少将と大差ないことから、「仮の姿を借りた、言わば偽りの関係が、男君のすり替えによって名実とも真実の関係になってしまったのである。もしくは、男君の位置が変わらずに中身だけ変わったとも言い換えられよう。そして、その変換は飛鳥井女君の西海下りという旅の時空を現出させたのである」と指摘する。

10　ここでの「車」も含め飛鳥井女君物語における乗り物を論じたものに、鈴木泰恵「飛鳥井女君と乗り物―浮舟との対照から」（前掲注5『狭衣物語／批評』所収）がある。

11　母代が狭衣に語った説明では、乳母は相手が狭衣であることを知っていて、道成が狭衣の乳母の子であることを飛鳥井女君に隠したということになっている。しかし、母代の発言はあくまで伝聞であり、真偽のほどは分からない。

12　兄弟の間で情報が交換されないというのは、大弐の乳母・中納言典侍姉妹にも見られる。「中納言典侍、大弐の乳母など、同じき姉妹といへど、同じ身を分けたるやうに、かたみに思ひかはしたれば、この人の、つゆばかりも漏らしたらむことを、身の外に散らすべきならねど、（中略）今は若宮の御ために、誰もおろかに思ひきこえさせたまふべうはなかりけりと思へば、大弐にも、この御ことを語らざりけり」（巻四②三四〇～三四一）と、中納言典侍は若宮の父親が狭衣であることを大弐の乳母に語っていない。なお、大弐の乳母は道成・道季兄弟の母親である。

13　この兵衛督なる人物が、狭衣の偽った少将の父親である「別当殿」であろう。今姫君の母代は狭衣に情報をもたらす場面で、狭衣が「前の別当、左衛門督の子の少将」（巻三②五一）と名乗っていたことを言い当てているが、この「左衛門督」に「左兵衛督」との異同がある。

14　神田龍身「仮装することの快楽、もしくは父子の物語―鎌倉時代物語論―」（『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降―』有精堂　一九九二）、木村朗子「欲望の物語史―『狭衣物語』から『石清水物語』へ―」（『恋する物語のホモセクシュアリティ　宮廷社会と権力』青土社　二〇〇八）。

15　結局は、遺児（飛鳥井姫君）は一品宮の養女であり、狭衣の実子であることによって幸いを手にすることになり、「少将」の子とされたことはその後にまでは影響しない。そういった意味でも、狭衣と大宮の密通を創出したものの、それが問題になっていない若宮のあり方と通じるものがある。なお、

飛鳥井姫君に関しては野村倫子「飛鳥井の九州―入水と「形見」の姫君の物語―」（『『源氏物語』宇治十帖の継承と展開』和泉書院　二〇一一）が飛鳥井女君の辺境性を絶ち切っていく物語として論じている。

16　鈴木泰恵「〈人知れぬ恋心〉のはずが……―カタリの迷宮『狭衣物語』」（『日本文学』五七‐九　二〇〇八・九）および「『狭衣物語』とことば―ことばの決定不能性をめぐって―」（狭衣物語研究会編『狭衣物語が拓く言語文化の世界』翰林書房　二〇〇八）で語りの仕掛による決定不能性が論じられている。

第二節　女二宮周辺の女房・女官

はじめに

『狭衣物語』において、男君と女君との関係が生じるとき、そこには女房が介在しない。手引きする女房もいなければ、その場に居合わせる女房も誰一人としていないのだ。

狭衣が女二宮と関係を結んだときも、一品宮との噂が立ったときも、そこに女房は居合わせなかった。宰相中将妹君とも、関係を結ぶに至るときは狭衣は誰にも気づかれないように侵入している。狭衣だけでなく、宰相中将が今姫君と関係を結んだときも手引きの女房のない単独行動であった。

一方、女房に手引きを求める場合、その試みは必ず失敗に終わっている。女二宮の出家後に狭衣からたびたび取次を求められた中納言典侍や、権大納言に一品宮への仲介を求められた中納言の君といった女房たちは、これを頑なに拒んでいる。

このことは、『狭衣物語』の重大な特徴である[1]。男女関係の事件が起きたとき、誰も居合わせなかったとしても、自ら動くことのない女君に代わって動くのは他ならぬ女房たちである。『狭衣物語』では、真相を全て知る女房が誰一人としていないがゆえに、女房たちによる誤解や思い込みで物語が展開していく。本稿では女二宮に関する場面から、『狭衣物語』の方法を論じていく。

一　示される情報の違い

はじめに、狭衣の両親（堀川大殿・堀川の上）が女二宮降嫁の話を進めるように狭衣に催促してくる場面から確認する。そのときに狭衣や両親が女二宮がわへの仲介としている女房や、双方からもたらされる情報に注目してみたい。

女二宮との縁談に関して狭衣は、堀川の上に向かって、「たださばかりの御なほざりごとを、ただ大宮のめざましきことにむつかりたまひけるものを」（巻一①六八）と発言している。大宮の反対を盾にしているのだ。それに対して堀川の上は、

もの憂からんことを、あながちに、母宮のさのたまはんには、あるまじきことにこそあなれ。一日、藤三位の、上ののたまはせしさまを、語られたるを聞きて、ことさらにこそ、申しし人見んと思ひしか、かくまで御けしきのあらんを聞き過さんもかひがひしからずや、とこそあなりしか。母宮の御こと、さも聞かぬにや……

（巻一①六九～七〇）

と答えた。堀川の上は狭衣に同意しているようでいて、藤三位の伝聞を盾にとって、あくまで大宮の反対は知らないと主張している。これを、大宮の反対を知っていながら知らないふりをして結婚をつきつけている、したたかな発言であると取る見方もある[2]が、どうであろうか。それにしては、狭衣と堀川の上の接触する人物が重ならない。この藤三位なる人物はこの先一度たりとも狭衣と接触しないのである。

また、堀川大殿が「よからん日して侍従内侍のもとにほのめかしたまへ」（巻一①六六）と言ったり、堀川の上も「かの侍従内侍のもとに、御けしきほのめかしたまへ」（巻一①九二）と言ったりと、両親が共通して「侍従内侍」という人物に嵯峨帝（あるいは女二宮）との仲介をさせようとしていることが分かる箇所がある。しかし、この侍従内侍もこの先の物語に登場しない。物語は、狭衣と藤三位や侍従内侍との接触を決して描かないのである。

では、狭衣は大宮の反対を誰から聞いたのであろうか。それは、狭衣がたびたび接触する中納言典侍ではないかと考えられる[3]。彼女は次のように紹介される。

内裏にさぶらふ中納言典侍は、大弐の乳母の妹ぞかし。皇后宮も睦ましきゆかりにて、幼うより候へば、宮たちをも、ことのついでにも時々聞こえいでしかば、大将殿もをかしき御ありさまと耳とどめたまはぬにしもあらねど、かかる御けしき見たまひて後はわづらはしくなりて、同じ百敷の内ながらも、弘徽殿にはことに見ることもしたまはぬを、大弐の乳母くだりてのちは、「同じ心にてこそ」など申し置きしが、常に見、睦びきこゆれば、折々に局のわたりに立ち寄りなどしたまひけり。

（巻二①一六六～一六七）

中納言典侍は狭衣の乳母である大弐の妹であり、典侍の職にあるが大宮にも仕えているという。両親が藤三位や侍従内侍と接触しているのに対して、狭衣は乳母の妹というつながりから、この中納言典侍と接触している。

侍従内侍と中納言典侍は同じ内侍所の女官として近しいところにいる。一方、藤三位はどうであろうか。彼女はおそらく巻二で一度だけ示される「さるべき御乳母の三位たち」（巻二①二一三）に該当する人物で、嵯峨帝の乳母であると考えられる。平安時代中期以降、天皇の乳母が典侍になり、やがて三位に叙せられる例が多いとされる[4]が、この藤三位もそれに当たるのであろう。現職の典侍かは不明だが、侍従内侍や中納言典侍とは近しいはずである。

しかし、中納言典侍は、典侍の職にあるだけでなく、大宮にも仕えていた。だからこそ、大宮が反対しているという情報が得られたのであろう。そして、それは藤三位にまでは伝わらなかったのではないだろうか。狭い宮中の近しい女房たちの情報網を侮ってはならないと考える向きもあろう。しかし、例えば、女二宮の妹である女三宮周辺の女房が、狭衣が女二宮の婿がねとなっているのを知らなかったことが示されている箇所もある。狭衣は、女三宮の女房の一人が中務宮の姫君のことを「かの姫君こそ大将の具にはせまほしく見えたまへ」（巻二①一七〇）と言うのを立ち聞きしている。情報などたやすく行きかうように見える宮中だが、『狭衣物語』の、特に女二宮物語の世界においてはそうではない。誰にどのように仕える女房なのかという微妙な違いが、持っている情報の違いを生み出し、しかもそれを滞らせているのである。そして、接触する女房の違いから、狭衣と堀川の上の持つ情報の食い違いも生じたことなのではなかろうか。

二　存在しないはずの手引きの女房

狭衣は中納言典侍と接触しているが、大弐の乳母に言われて親しくしているのであり、女二宮との仲介を求めているわけではなかった。女二宮と契る事件が起こった日も、中納言典侍が大宮の供でその場にいなかったため、たたずんでいるうちに女二宮らを垣間見た。そして、夜居の僧が妻戸の鍵をかけてしまったために出られなくなり、女三宮の乳母が持病で下がったのとともに女房たちが寝入ったところで、女二宮と関係を結ぶに至る。狭衣と女二宮との関係は、あくまで手引きのない狭衣の単独行動として行われた。

翌朝、狭衣は女二宮に向かって、「中納言典侍して、思ひあまらん折々は参らすべき」（巻二①一七五）と言っておきながら、その中納言典侍にも女二宮との関係を隠そうとする。女二宮への文を託すときも、その文からの発覚を恐れて「まめやかには、これいみじうしのびて参らせたまへ。あなかしこ。大宮などの御前に散らしたまふな。恥づかし」（巻二①一八四）や「一所に御覧ぜさせたまへ。やがて、破りたまへ」（同）と言う。勿論、既に関係を結んでいることは「この人にもさやうのけしきを見せじ」（巻二①一八五）とする。

さらに、狭衣と女二宮の関係はすぐに中納言典侍の勘づくところとなってしまうが、それをほのめかされても、狭衣は「わづらはしうて、思ふままにもえせためたまはず」（巻二①一九三）と中納言典侍を仲介にすることを控えている。狭衣は中納言典侍に女二宮との関係を隠そうとし、知られてからも

決して仲介にしようとしないのである。

一方、女二宮周辺はどうであろうか。真っ先に事態に気づいたのは女房たちではなく大宮であった。大宮は「姫宮の御あとの方に懐紙のやうなるもののある」（巻二①一七七）を見つけ、女二宮の様子を見て事態を悟った。そのとき、「こは、いかなることならん、さりとも、知りたる人あらんかし」（巻二①一七八）と思う。「知りたる人」などいないのだが、そう思ったことに注目したい。

また、中納言典侍は、この間に狭衣から文を受け取っていた。狭衣は女二宮とのことを中納言典侍には言わなかったが、帰る時に詠んだ独り言の和歌が不審を抱かせた。

「あなわりなのことや。なほさりぬべき隙あらば」など、のたまひて、

逢坂をなほ行きかへりまどへとや関の戸ざしもかたからなくに

とくちずさみて立ちかへりたまひぬるを、あやしと心も得ねば、御返りも聞こえさせずなりぬ。（巻二①一八五～一八六）

『狭衣物語』に特徴的である独詠歌が立ち聞かれるという手法[5]である。中納言典侍は「あやしと心も得」なかったが、女二宮のもとへ行き、大宮が懐紙を発見したのを見て、事態を的確に察した。そして、「もしさることもあらば、我がかごとなどこそ思しめさめ」（巻二①一八六）と考えた。さらに、次のような箇所もある。

むげにしるべなくては、さることのあらんや、またあるにては、この御文をかくせさせたまふべきことかは、いかなるにかと胸もふたがりておぼつかなくあやしければ、とばかりものも言はれで、つくづくと見たてまつるに、大宮の御心のうちぞ、いといとほしき。この御方人に思しのたまはするを、必ず思し疑ふらんかしと思ふも、あぢきなく苦しけれど、とてもかくても、いまはいとどのがれがたき御仲にこそ。つひには聞かせたまひてんと思ふぞ、頼もしかりけん。（巻二①一八七～一八八）

中納言典侍の考えでは、誰かが手引きをしたことが前提になっている。そして、狭衣に文を託されたことに不審を抱きつつも、結局は大宮が自分を疑うのではないかという考えにたどりついている。

つまり、大宮も中納言典侍も「誰かが知っているはずだ」という誤解をしているのである。大宮の方は知っている人がいるはずと思い、中納言典侍は「しるべ」があるはずと思うという違いはあるが、実際には誰も居合わせなかったはずの事件が、誰かが居合わせたはずだと誤解されているのである。

三　「昔物語」という幻想

女二宮が狭衣の子を懐妊して、ようやく大宮は乳母たちを問いただす。大宮は「出雲・大和などいふ御乳母たちをしのびたるかたに」（巻二①一九八）呼びつけて、「かかることのおはしましけるを、誰も知らぬやうあらじを、などかいままでまろには知らせざりける」（同）と言う。中納言典侍は自分が疑われるに違いないと思っていたが、大宮は乳母の中に知っている者がいるのだろうと疑っていたことが分かる。これに対して乳母は「さりとも、ことのありさま知る人はべらんかし。昔物語にも、心をさなきさぶらひ人につけてこそ、かかることもはべりけれ」（巻二①一九九）と答える。

乳母も誰かの手引きがあると思っているが、その根拠を「昔物語」に求めている。後になるが、女二宮の出家後、狭衣に手引きを頼まれた中納言典侍が、

> げにあさましきことと、強ひて省ききこえん御仲の契りとは見たてまつらねど、昔物語の姫君などのやうに、中の人の言ふに従ひて、しぶしぶにゐざり出でさせたまふべきにもあらず。（巻三②九六）

と考えている箇所もある。乳母や中納言典侍には「昔物語」では姫君は女房のせいで男に逢ってしまうのだという認識がある。

ここでいう「昔物語」とは何であろうか。確かに、『源氏物語』における、光源氏と藤壺の密通の手引きをした王命婦、柏木と女三宮の密通の手引きをした小侍従などが想起される[6]が、女二宮の場合、設定は花宴巻に酷似している[7]。花宴巻で朧月夜と逢う場面では、舞台は女二宮の場合と同じ弘徽殿であり、弘徽殿女御は帝のもとへ上がっていて不在、女房たちは寝てしまい、光源氏の存在は誰にも気づかれなかったという設定である。ここに女房の手引きはない。『狭衣物語』は『源氏物語』の設定を利用しているが、女房たちの認識は「手引きがあるはず」と、『源氏物語』とは違ったものになっている。その上、『狭衣物語』は『源氏物語』の設定こそ利用するが、『源氏物語』それ自体は作中人物たちの読む物語として設定されていない[8]。「昔物語」は『源氏物語』を指すように見せながら、『狭衣物語』自身がそれを打ち消している。

また、『狭衣物語』中には「昔物語」とだけ示す例と、「「やくなきのばんさう」といひけん昔物語」（巻三②四二）と具体的な作品名を挙げる例がある。ここはただ「昔物語」とあるのだから、具体的な作品を特定するのはふさわしくないのではないか。女房たちの思う「昔物語」というのは、何を指すの

か具体的ではない、曖昧なものなのである。

『狭衣物語』は『源氏物語』の設定を利用しながら、それとは違う認識を曖昧な「昔物語」として女房たちに与えている。『狭衣物語』は「昔物語」の何らかの「型」[9]を破ろうとしているのではなく、むしろ女房たちの認識の中に「型」のようなものを作り上げているのである。女二宮周辺の女房たちは、「男女関係には女房の手引きがあるもの」という「昔物語」を幻想し、それに従って「誰かが手引きしたに違いない」あるいは「自分が手引きしたと疑われるに違いない」と思い込んで動いているのである。

四　共有されない情報

女二宮の妊娠を知り、大宮は心痛のあまり病に伏してしまう。そこで「心かしこき人」（巻二①二〇八）とされる出雲の乳母たちは大宮が妊娠したと奏上した。この偽装工作をした乳母たちも、相手が誰かまでは知らない。一方、相手が狭衣であることを知っている中納言典侍はこの偽装工作を知らされない。よって、中納言典侍を介している狭衣も、この偽装工作を知らない。互いに欠けた情報のみを持っている中、中納言典侍と出雲の乳母は立ち聞きによって半ば偶然に情報を得る。

出雲の乳母は、狭衣が女二宮の病と大宮の妊娠の見舞いに来たとき、立ち聞きによって事態を悟った。

人知れずおさふる袖もしぼるまでしぐれとともにふる涙かな

聞き分くべうもなく独りごちたまふを、中納言典侍の耳癖に、

心からいつも時雨のもる山に濡るるは人のさがとこそ聞け

と言ふを、出雲の乳母少し近く居よりて聞くに、耳とまりけり。（巻二①二一五～二一六）

このように、もとより贈答歌のつもりでないものが、聞き分けた者のせいで贈答歌になるのはこの物語に散見される趣向[10]だが、ここではさらに中納言典侍の歌を出雲の乳母が聞いていた。そして、女二宮出産の後、出雲の乳母はこれを大宮に告げる。

雲居まで生ひのぼらなん種まきし人もたづねぬ峰の若松

とのたまはするありさま、いとあはれげなり。出雲の乳母、かのありし日のくちずさみ語り聞こえさせつ。「この御顔の違ふところなきは、いとどこそ思ひあはせらるれ」と啓すれば、中納言がしわざにや、さらば、こと人よりはめやすべかるべきを、つれなきけしきなるは、頼むべきさまにはあらぬにこそはあらめ。上の御心ざしなどをことにうけひかぬさまに聞きつるは、かくにこそありけれ、この御事をも知りたらんを、かかる心がまへなどいかに聞くらんと思すは……

（巻二①二一九）

大宮がまず思ったことは、やはり「中納言がしわざにや」であった。さらに大宮は「この御事をも知りたらんを、かかる心がまへなどいかに聞くらん」と思っているが、それは誤解である。狭衣は女二宮が妊娠したことも、この偽装工作のことも知らない。それなのに、大宮は知っているはずだと誤解している。女房同士だけでなく、乳母と大宮の間でも情報が正しく交換されていなかったことがわかる。

一方、中納言典侍は、「かの峰の若松の御ひとりごとを聞きけるに、いとどされればよと思ひあはせられて」（巻二①二一〇）、ようやく真相に思い当たった。逆にいえば、中納言典侍は大宮の独り言を聞くまで、この若宮が大宮の子ではなく女二宮の子であることを知らなかったのだ。また、次のような場面もある。

御湯よりのぼりて臥したまひける御顔の、ただかの御児のほどとおぼえたまへるを見るに、大弐の乳母にこれを見せたらん、いかばかり人目も知らず喜び愛しがりきこえんと、我だにいみじうらうたうおぼえたまひて、いかで、疾く見せたてまつらんと思ひあまりて、出雲の乳母に、「空目かとよ。ただその御顔とこそおぼえさせたまへ」と言ふを、いでや、知らぬやうはあらじとつらければ、「さしも似させたまはず。よき人どちはよしなきだに似るものなれば、まして同じ御ゆかりなればこそ。されど、これはいまよりさまことに王気さへつかせたまへるさまにぞ」と言ふもをかしかりけり。

（巻二①二二一）

若宮が狭衣に似ていると言う中納言典侍に対して、出雲の乳母は似ていないと否定する。出雲の乳母は「いでや、知らぬやうはあらじ」と、中納言典侍が全て知っていると思った上で知らぬふりをしているし、一方の中納言典侍は出雲の乳母は何も知らないのだと思っている。互いに誤解したまま、ついに情報を交換することはなく終わる。

狭衣が女二宮と関係を結んだ時、そこには女房が誰も居合わせなかった。そして、誰も居合わせなかったはずであるのに、皆が「手引きの女房があったはずだ」と思いこんで動いた。特に女房たちの思い込みの根拠は「昔物語」という幻想であった。そして、乳母たちは相手の男が誰であるかという情

報が握れないままに偽装工作し、早い段階で相手の男の情報をつかんだはずの中納言典侍は偽装工作の情報を握れなかった。互いに欠けた情報のみを持つ女房同士でありながら、それぞれの情報が交換されることはなく、ただ立ち聞きによってのみ情報が収集された。さらに、立ち聞きのみで情報を得たがゆえに、誤解が解かれることはなかった。

ここでも、同じく大宮に仕える中納言典侍と出雲の乳母に、微妙な職分上の違いがあることに気をつけなければならない。中納言典侍は内侍所の女官と大宮の女房を兼ねている。しかし、彼女は「内裏にさぶらふ中納言典侍」（巻二①一六六）であり、「皇后宮も睦ましきゆかり」（同）と、あくまで主たる勤めは典侍の職なのである[11]。一方、出雲をはじめとする乳母たちは女二宮のそば近くで伺候する者である。勿論、内親王の乳母は『後宮職員令』に三人と定められているから、乳母のうちの何人かは女官のはずである。しかし、そうであったとしても、『狭衣物語』中に彼女たちが女官としての動きをみせる箇所はなく、内侍所の女官たちと同じように働いているとは考えにくい。この両者の女房として立ち入れる領域は別のはずである。それを『狭衣物語』ははっきりと区別して描いているのだ。互いに近しいところにいながら、この微妙な違いが、情報を交換させなかったのである。

既に確認してきたように、女二宮物語のはじめには、女房たちの職域の微妙な違いが、持っている情報の違いを生み出していることが示されていた。中納言典侍と乳母たちもやはりそうだったのである。そして、狭衣が親しかったのは中納言典侍の方であった。狭衣の乳母の妹であり、典侍という女官であり、大宮のもとにも仕えるという彼女の設定は重要であった。乳母の妹であるからこそ狭衣と親しく、大宮にも仕えるからこそ女二宮のことを狭衣に知らせてくれる存在である。しかし、典侍を兼ね、大宮のもとが主たる勤め先ではないがゆえに、女二宮の最側近とはならず、乳母たちの偽装工作の情報を握ることができなかった。だから彼女を仲介にした狭衣は身動きが取れなくなり、手遅れになったのだ。女二宮物語は、女房たちの微妙な職域の違いが生み出す情報の違いによって動かされていったのである。

全てが終わり、ようやく狭衣にも情報が渡ったとき、すでに若宮は大宮の子とする偽装が完了していた。この若宮は帝位につく可能性すらある皇子として認められていく。狭衣と女二宮の、確かにあったはずの関係はなかったこととして処理された。

しかし、それは狭衣と女二宮との関係がなかったことになっただけでは済まされない。偽装工作は母親を偽るためのものであったが、大宮の子とした以上、父親は嵯峨帝でなくてはならないからである。母親を偽装するために、父親までも偽装したのである（勿論、乳母たちは父親が誰と知らないままに）。それが、物語の終盤で、狭衣即位のためにこの若宮の「父親」が問題とされてしまう。狭衣即位を告げる天照神の託宣は「若宮は、その御次々にて、

行く末をこそ。親をただ人にて、帝に居たまはんことはあるまじきことなり」（巻四②三四三）と告げてしまった。最後に父親の方のみが明るみに出る結末に至ったのだ。狭衣と女二宮という、確かにあったはずの関係はなかったこととなったが、嵯峨帝と大宮という形では済まされず、最後に狭衣と大宮という関係に決着してしまったのである[12]。ありえなかった密通が生みだした、まさに「偽の冷泉帝[13]」である。

ただし、この物語はそれを問題にしない。この託宣の意味に思い当たれる者はなく、「誰も心得ずあやしう思しける」（巻四②三四四）のだ。情報がないゆえに独詠歌を聞いても何のことか思い当たれない人々が動かしたこの物語は結末に至っても「真相に思い当たれない」という展開を採用し、狭衣と大宮の密通を問題にしないのである[14]。わずかに、後に若宮（兵部卿宮）と対面した嵯峨院が「あるまじう、天照神もほのめかしたまひけんことも、あるやうありけるにこそと、思しよる方様にも、故宮の御ためぞいとほしかりける」（巻四②三八二）と思うのみである[15]。

おわりに

以上、女二宮の物語から、『狭衣物語』の方法について検討した。狭衣が女二宮と関係を結んだとき、そこには女房が誰も居合わせなかった。しかし、女房たちは「昔物語」という幻想を根拠に、手引きの女房がいるはずだと思い込んで動いた。さらに、女房たちは欠けた情報を直接に交換することもなく、立ち聞きのみで補い合う。女房たちの思い込みと実際とのずれは、情報を操作する乳母たちが、情報を共有できない典侍を「手引きの女房」に仕立て上げることによって埋められ、誤解を誤解のままにして展開していった。『狭衣物語』の世界では、互いに近しいところにいるはずの女房たちでも、誰にどのように仕えているかという微妙な違いによって、持っている情報に違いが生じ、その交換もなされない。そして、情報を握れないだけでなく、握れないまま動き、物語を展開させるのだ。

注

1　井上眞弓「あとがきにかえて―「女房文学」としての『狭衣物語』―」（『狭衣物語の語りと引用』笠間書院　二〇〇五）。

2　鈴木泰恵「『狭衣物語』とことば―ことばの決定不可能性をめぐって―」（狭衣物語研究会編『狭衣物語が拓く言語文化の世界』翰林書房　二〇〇八）。

3　前掲注2鈴木論文。

4　角田文衛『日本の後宮』（学燈社　一九七三）、加納重文「典侍」（『平安文学の環境―後宮・俗信・地理』和泉書院　二〇〇八）など。

5　石埜敬子「『狭衣物語』の和歌」（『和歌文学論集3和歌と物語』風間書房　一九九三）、神田龍身「狭衣物語―独詠歌としての物語」（『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』世界思想社　二〇〇七）など。

6　齋木泰孝「狭衣物語における乳母―女三宮・飛鳥井女君・今姫君の物語―」（『物語文学の方法と注釈』和泉書院　一九九六）など。

7　土岐武治『狭衣物語の研究』（風間書房　一九八二）。なお、久下裕利「『狭衣物語』の方法―作中人物継承法―」・「女二宮の位相」（ともに『狭衣物語の人物と方法』新典社　一九九二）などにも指摘がある。

8　巻四の蹴鞠場面で語り手は『源氏物語』の六条院蹴鞠を「その折は見しかど」（巻四②二三八）としていて、『狭衣物語』の世界は『源氏物語』と地続きであるかのように語られているからである。

9　齋木泰孝「物語文学の求婚譚の型―源氏物語以前と以後―」（『物語文学の方法と注釈』和泉書院　一九九六）。

10　前掲注5石埜論文。

11　なお、乳母出身者が典侍になる例から、中納言典侍も乳母経験者や乳母近親者である可能性を疑う必要性があり、年齢や設定から、中納言典侍の母が大宮の乳母であった可能性はある（新全集『狭衣物語』巻二①一六六頭注にも指摘がある）。しかし、それでも出雲たちとは女二宮との近しさが異なるであろう。

12　木村朗子「欲望の物語史―『狭衣物語』から『石清水物語』へ―」（『恋する物語のホモセクシュアリティ　宮廷社会と権力』青土社　二〇〇八）は「あるまじきこと」ではないはずの正統な婚姻関係が、密通を仮構することによって、皇統に対する重大な禁忌へと発展する」と指摘する。

13　神田龍身「仮装することの快楽、もしくは父子の物語―鎌倉時代物語論―」（『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降―』有精堂　一

九九二）。

[14] 鈴木泰恵「〈声〉と王権―狭衣帝の条理」（『狭衣物語／批評』翰林書房　二〇〇七）は「皇権に重なり合う王権を相対化する〈声〉の〈力〉は、あえて封ずるのだという姿勢が示されているのではあるまいか」と指摘する。

第三節　一品宮物語と『源氏物語』夕霧巻

はじめに

『狭衣物語』には様々な形での『源氏物語』引用が指摘できるが、そのなかでも夕霧の物語との関係を考えることは重要ではないだろうか。巻四の斎院での蹴鞠の場面に、このような箇所がある。

宰相中将を、大将殿、強ひてすすめたまへれば、「若々しきわざかな」とはすまへども、げに、人よりはをかしうなまめかしきさまかたちにて、数もこよなく多くあがるを、大将殿などは、いみじう興じたまうて、「ややもせば、下りたちぬべき心地こそすれ。などて、今しばし若うてあらざりけん」とのたまへば、御簾の中の人々、「まめ人の大将は、おはせずや侍りける」「さらばしも、花の散るも惜しからじ」など、口々、いと立てたてまつらまほしげなるけはひどもなり。（中略）花のいたう散りかかるを見たまひて、「桃李先散りて、後なるは深し」と忍びやかに口ずさみたまひて、高欄にをしかかりたまへるまみ・けしき・御声などは、かの「桜を避きて」とて、花の下にやすらひたまへりし御さまを、その折は見しかど、この御ありさま、また類なげにて、何事の折節も見ゆる。（巻四②二三七～二三八）

狭衣は、「ややもせば、下りたちぬべき心地こそすれ。などて、今しばし若うてあらざりけん」と蹴鞠に参加することをためらう。この発言が『源氏物語』若菜上巻の六条院蹴鞠における光源氏の発言を意識したものであるのは明らかである[1]。しかし、光源氏を意識したはずの狭衣は、周囲の女房によって「まめ人の大将は、おはせずや侍りける」と夕霧のように参加することを求められている。語り手はさらに「桜を避きて」と呟いた柏木と狭衣を比べているが、夕霧と同じ「大将」であることも含め、自身を光源氏になぞらえたにもかかわらず周囲によって夕霧扱いをされてしまう狭衣というのは注目に値する。『狭衣物語』は男主人公に夕霧性とでもいうべきものを与えているのである。光源氏でも薫でもなく夕霧というあたりに、『狭衣物語』の対『源氏物語』意識がうかがえるのではないだろうか。

そして、それとは位相の異なる形であるが、巻三における一品宮（一条院女一宮）[2]との結婚に至る展開も、やはり夕霧への意識がうかがえる。狭衣と一品宮との結婚のきっかけは、一条院を訪れた狭衣が権大納言に姿を見られたことであった。権大納言によって狭衣と一品宮との間には覚えのない噂

が立てられ、やがて結婚は不可避の状況に陥ることになる。濡れ衣によって動かされ、男君と皇女が結婚に至るというこの物語は、明らかに『源氏物語』夕霧巻と共通性と持っている[3]。『狭衣物語』は男主人公の結婚という重大な局面に、やはり光源氏でもなく薫でもなく、夕霧の物語を取り入れたのだ。一品宮物語の場合は、斎院蹴鞠の場面のような直接的な引用ではなく、物語に散りばめられた諸要素や物語を動かす力学に、夕霧巻の引用が読み取れる。たんに狭衣に夕霧性ともいうべきものがあるというだけではなく、物語の構造・方法そのものに夕霧巻が巧みに取り込まれている様が見えるのだ。

本稿では、『狭衣物語』一品宮物語を中心に、今まで指摘されてこなかった夕霧巻との関係を新たに指摘した上で、『狭衣物語』の独自性について考察していきたい。『狭衣物語』は『源氏物語』夕霧巻に、いったい何を見出したのだろうか。そして、それはどのような方法となって、独自の物語を作りあげているのだろうか。

一　噂が成立させる関係

狭衣と一品宮との関係は、狭衣が一品宮のもとに通っているという噂が流れたところから始まった。そのきっかけとなる場面をまず確認したい。狭衣は、飛鳥井女君との間に生まれた娘（飛鳥井姫君）が一品宮に引き取られていたことを知ると、一条院を訪れ、立ち聞きや垣間見をするようになった。そして、そこで権大納言とはち合わせてしまう。

臥したらん所も知らねば、たどり寄らん方もなくて、つくづくと見入れらるるも、弘徽殿の南の戸口は、まづぞ思ひ出でられたまひける。思ふままなるは、我がためも人のためも、あぢきなくもいとほしくも悔しうもあるわざぞかしと、いくらの年の積りならねど、思ひ知られたまふことなれば、わづらはしくて、やをら出でたまふに、ありつる車の人にや、烏帽子直衣なる人の、ふとさし合ひたるに、答へどころのびんなければ、袖して顔隠して、馬道の戸口に立ち帰りたまひぬれど、闇はあやなき御匂ひより始め、人にまがふべくもなき御ありさまなれば、かくこそはありけれと見出でて……

（巻三②七七～七八）

狭衣は飛鳥井姫君に会えることを期待し、一条院に立ち寄った。しかし、女二宮との一件のきっかけとなった「弘徽殿の南の戸口」を思い出し、その反省から「やをら出でたまふ」と引き返そうとしたところで、「ありつる車の人にや、烏帽子直衣なる人の、ふとさし合ひたるに」と権大納言とはち合わ

せてしまう。このとき狭衣は「袖して顔隠して」としたものの、「闇はあやなき御匂ひより始め、人にまがふべくもなき御ありさま」によって、狭衣その人であることが権大納言に知れてしまう。顔を隠しても、第一に香りから察知されるという設定になっている。

一方、狭衣を目撃した権大納言は、懇意にしている女房の中納言の君（一品宮の乳母子）にこのことを告げる。狭衣はただ自分の娘である飛鳥井姫君に会えることを期待して立ち寄っていただけなのだが、権大納言は一品宮のもとに通っていると誤解している。中納言の君に、「かかれば、さしもことの外にのたまふなりけり」（巻三②七九）と、手引きをしないのは狭衣がいるからだろうと文句を言っていることからも分かるように、自身が一品宮に言い寄ろうとしていた権大納言は、狭衣と一品宮との間に関係が既に成立していると信じ込んでいる。

これら最初の設定に、まず夕霧巻との共通性が見出せるのではないか。夕霧は落葉宮に言いよったものの、拒まれて実事のない一夜を過ごした。しかし、二人の間には関係が生じているものとして噂が立ってしまうことになる。そして、夕霧巻でも、情報は第三者の男である律師からもたらされた。律師は一条御息所に、次のように語る。

いで、あなかたは。なにがしに隠さるべきにもあらず。今朝、後夜にまうのぼりつるに、かの西の妻戸より、いとうるはしき男の出でたまひつるを、霧深くて、なにがしはえ見わいたてまつらざりつるを、この法師ばらなむ、大将殿の出でたまふなりけりと、昨夜も御車も返してとまりたまひにけると、口々申しつる。げに、いとかうばしき香の満ちて、頭痛きまでありつれば、げにさなりけりと、思ひあはせはべりぬる。（夕霧⑥三一）

このように、律師は妻戸から出てきた夕霧を目撃している。律師自身は「霧深くて」見えなかったものの、法師たちによって「大将殿の出でたまふなりけり」と告げられた。そして、「いとかうばしき香の満ちて」いることから、「げにさなりけり」と法師たちの言葉に納得した。律師は顔は見ていないものの、香りでそうだと納得しているのだ。

目撃者の男によって情報がもらされること。その男は顔を見なかったものの、香りを判断の一要素にしていること。そして何より、本人たちに実事がなかったにもかかわらず、出てきたところを目撃されたために、実事があったと判断されたこと。今まで注目されてこなかった点であるが、夕霧巻と一品宮物語には、これほど一致する要素があるのである。

ただし、夕霧巻の場合、夕霧本人は関係を結ぶことを望んでいたものの、落葉宮に拒まれたという展開である。一方、狭衣は飛鳥井姫君に会えることを期待していただけであり、一品宮を目当てにしていたわけではない。夕霧巻と重なりつつも、本人たちに思い当たる節のない噂を生じさせたところに、

『狭衣物語』の独自性があるといえよう。

また、夕霧巻では一条御息所は次のように思い悩んでいる。

「とてもかくても、さばかりに、何の用意もなく、軽らかに人に見えたまひけむこそ、いといみじけれ。うちうちの御心きようおはすとも、かくまで言ひつる法師ばら、よからぬ童べなどは、まさに言ひ残してむや。人には、いかに言ひあらがひ、さもあらぬことと言ふべきにかあらむ。すべて心幼き限りしも、ここにさぶらひて」とも、えのたまひやらず。いと苦しげなる御ここちに、ものをおぼしおどろきたれば、いといとほしげなり。気高うもてなしきこえむとおぼいたるに、世づかはしう、軽々しき名の立ちたまふべきを、おろかならずおぼし嘆かる。（夕霧⑥三三～三四）

このように法師たちから噂が広まるのを懸念するとともに、噂がたてば容易に訂正できないであろうことを嘆いているわけだが、夕霧巻において噂が広まっていく具体的な描写はほとんどない。一方で、『狭衣物語』の場合はむしろ広まっていく様を詳細に描き出している[4]。

大将の思しやりしもしるく、大納言は、いとけざやかに出でておはせしを見てしかば、ことにはばかりもなく言ふを、聞き継ぐ人のあまたになりつつ、内裏わたり、院の辺などにても、やうやう言ひ出でければ、近う候ふ人々は、「あさましきことかな。かかる物まねびなせそ」と、かたみに言ひささめけど、片端だに出でそめぬれば、「その夜、その暁に出でたまひし御車、そこそこに立てりしこと。夜深く、その事、御格子、妻戸の開きたりしは、さにこそありけれ」と、折々の立ち聞き、垣間見のほどをも、ほの見ける人々、その折は何とも目留むるもなかりけれど、かかること出で来て後は、忍びつつ各々言ひ合せなどしけり。（巻三②八一～八二）

権大納言が言い出し、そこから広まり、「内裏わたり、院の辺など」と後一条帝や女院の周辺にまで広がっていく。さらに、一条院の女房たちも、それぞれに見たもので噂を補い、納得していく。夕霧巻が描かなかったことを、『狭衣物語』は詳細に描き出すのである。

二　「少将」という名の女房

夕霧巻と一品宮物語との関係をさらに考えていくために、ここで『狭衣物語』に登場する「少将命婦」という人物に注目したい。夕霧巻にも落葉宮の女房として「小少将の君」という名の女房がいるからである。いずれにも「少将」という名の女房が登場することは注目すべき点ではないだろうか。

まず、『狭衣物語』の少将命婦であるが、彼女は巻一から登場し、狭衣の文の取り次ぎをしていた。その後はしばらく登場せず、巻三で再登場する。

大将殿は、かかる内裏住みにも、この忍ぶ草は具したてまつりてやとゆかしければ、人知れず、さるべき折々は、このわたりをたたずみつつ、けしきを見たまひけり。早うも、少将命婦とて、親しき人を語らひたまひて、御文時々たてまつらせたまふ。御けはひもほのかに聞きたまひしを、賀茂の川波に立ち別れたまひにしほどに、わざと聞こえたまふことも絶えにしぞかし。今は同じ百敷になりたまひて、おぼつかなからぬほどに、言問ひ寄りて、波の心絶えぬほどにぞ、ほのめかしたまひける。里におはします折も、若宮のものしたまふ一条の宮は、ただ這ひ渡るほどなれば、つれづれなる折々は、御文も聞こえたまふなるべし。自らも、さるべき宵々などには渡りたまひつつ、命婦と語らひたまふ折もありけり。

（巻三②七五～七六）

と、ここで少将命婦が「親しき人」であり、かつて「御文時々たてまつらせたまふ」と文の仲介をしていたことが確認されている。そして、今は狭衣が少将命婦の局に立ち寄り、「語らひたまふ折」もあったとある。

一方、夕霧巻に登場する落葉宮づきの小少将も、夕霧と落葉宮の仲介を担当していた。一条御息所の死後には、夕霧が「少将の君を、取り分きて召し寄す」（夕霧⑥六〇）とあり、女房たちの中でも特に夕霧と懇意にしていることがうかがえる。男君と女君を仲介する役割として登場した女房に同じ「少将」という召名が使われているのである。

一方で、その設定には異なるものがある。夕霧巻の小少将は、「大和の守の妹」（夕霧⑥六一）であるので、一条御息所の姪ということになる。吉海直人が指摘する通り[5]、乳母の登場しない落葉宮にとって、小少将は乳母子の役割に近い側近女房であると考えられる。だからこそ、律師から話を聞いた一条御息所はまず「小少将の君を召して、『かかることなむ聞きつる。いかなりしことぞ』」（夕霧⑥三三）と事情を聞いたのだ。そして、これに対して小少将は、

年ごろ忍びわたりたまひける心のうちを、聞こえ知らせむとばかりにやはべりけむ。ありがたう用意ありてなむ、明かしも果てで出でたまひぬるを、人はいかに聞こえはべるにか。

（夕霧⑥三三）

と実事がなかったのに誤解がある伝わり方をしてしまっていると主張する。

一方、『狭衣物語』に登場する少将命婦は親類でも乳母子でもない。先に確認したように、権大納言が狭衣のことを告げた中納言の君という女房こそが、

一品宮の乳母子であった。そして、中納言の君は母親である内侍の乳母に、権大納言から聞いたことを伝える。

母の内侍の乳母に「かくこそのたまひしか」と忍びて言へば、「少将命婦のいつぞや、かく、このころ立ち返りたまひてなど語りしに、あな、苦し、嵯峨院の宮たちをうち代り預けさせたまへど、聞き入れたまはぬに、まいて盛り過ぎさせたまひぬ、あな恥づかし、おぼろけの人見えたまふべくやはとて止みにしを、少将命婦の局になん、時々寄りたまふとぞあなりしを、人の言ひなすならん。すべて候ふ人の住むにつけてなど、かかることは出で来るなめり。またまねびをだになしたまひそ」と、むづかられて止みぬるに……

（巻三②八〇～八一）

こうして、中納言の君と内侍の乳母は、「少将命婦の局になん、時々寄りたまふとぞあなりしを、人の言ひなすならん」と、狭衣が少将命婦の局に寄っていることによる誤解であると了解した。さらに、一条御息所が小少将の君に事情を問うたように、女院は内侍の乳母に事情を聞く。

院聞かせたまひて、内侍の乳母に、「かく、世の人のことに言ふなる、いかなることぞ。むげになきことは、人の言ふにもあらぬを。さりとも知らぬやうあらじ」とのたまはするに、いとあさましうなりて、この権大納言ののたまひけることをぞ、語りきこゆるに、いで、さればよ、少将命婦のしわざにこそと思すに、いと心憂くて、胸はふたがりつつ思し嘆くに、その後とても、いちじるきけしきもなきは、いかなりける心のほどぞなどさへ、さまざまに安からず。命婦、かかることを聞くに、過ちはなけれど、はかなき御文の伝へも、さすが年経ぬれば、いと口惜しくて、をさをさ御前にもさし出でぬに、内にも聞かせたまひて、少将がしわざなりと思しめされければ、いとあさましく思ひ嘆きて、籠りゐたり。

（巻三②八二～八三）

ここで内侍の乳母は、「権大納言ののたまひけること」を伝えている。乳母はこのことが誤解だと分かっていたはずなのに、その話を聞いた女院は「少将命婦のしわざにこそ」と思っている。内侍の乳母がどのような内容を語ったのかは明らかにされていないが、少なくとも女院が「少将命婦のしわざ」であると思うような内容であったということになろう。さらに、少将命婦が出仕を控えていると、一品宮の兄弟である後一条帝までもが、「少将がしわざなり」と思うようになる。実際には少将命婦のせいではないし、内侍の乳母も誤解であると分かっていたにもかかわらず、彼女は狭衣と一品宮の手引きをしたことにされてしまったのである。

しかし、夕霧巻の小少将は、実際に手引きした女房でもある。一条御息所が亡くなり、落葉宮が一条宮に戻った後のことである。なおも拒む落葉宮に、夕霧は「少将の君をいみじう責め」（夕霧⑥七六）て手引きを求めるのだ。そして、小少将は最終的には「人通はしたまふ塗籠の北の口より、入れたてまつりてけり」（夕霧⑥八七）と夕霧を落葉宮のもとへ導くのである。夕霧巻の場合、落葉宮の側近である小少将が手引きをしたのだ。

つまり『狭衣物語』は、男君が懇意とする女房に同じ「少将」という召名を使いながら、側近の女房ではない設定にすることによって、夕霧巻の小少将とは対照的に「手引きしていないにもかかわらず、手引きしたとされた女房」にしたことになる。濡れ衣に始まったものの、実際には関係を望んでいた夕霧巻とは対照的に、結婚など望んでいなかった狭衣の物語では、女房「少将」にまで濡れ衣を着せたのである。

三　嘆く母親

確認してきたように、『狭衣物語』の一品宮物語からは夕霧巻との関係が様々に浮かびあがる。それは、細かい部分からも指摘できる。

例えば、狭衣と一品宮との間に噂が立ったとき、「まいて、なべての世には、年経にけるさまをさへ、つきづきしう言ひなす」（巻三②八二）と、世間には長年に渡ることだと言われた。この「年経にける」という表現も、夕霧巻に見られるものである。夕霧巻の場合は、夕霧が落葉宮を一条宮に迎えようとしているなか、雲居雁がた女房のなかの反応として「年経にけることを、音もなくけしきも漏らさで過ぐしたまうけるなり、とのみ思ひなして、かく、女の御心ゆるいたまはぬと、思ひ寄る人もなし」（夕霧⑥七六）とあるのだ。

また、誤解を解きたい狭衣は、少将命婦を通じて文を届ける。少将命婦は取り次いできた証拠の文までも提出し、濡れ衣であることを訴える。

少将嘆くことども啓すれば、いかなるにても、かく軽々しき御名の流れぬるを、思し乱れて物ものたまはず。文はさすがにゆかしくや思すらん、取りて御覧ず。

思ひやる我が魂や通ふらん身はよそながら着たる濡れ衣

とある書きざま、手などはしも、げに、内親王たちにおはすとも、いかでかと見えたり。いかなる心にて、かく濡れ衣にしもなしたらんと、なほ涙のみこぼれさせたまふ、さもぞ、いといとほしう見たてまつる。（巻三②八四）

女院が嘆くのは「いかなるにても、かく軽々しき御名の流れぬるを、思し乱れて物ものたまはず」と噂が流れたこと自体である。さらに、狭衣の和歌に「いかなる心にて、かく濡れ衣にしもなしたらん」と心を痛める（なお、「濡れ衣」は実事なき一夜を過ごした後の落葉宮の歌に「わけゆかむ草葉の露をかことにてなほ濡衣をかけむとや思ふ」（夕霧⑥二六〜二七）と使われていたものである[6]）。

夕霧巻でも、一条御息所は噂が立ったこと自体を嘆いていた。夕霧から二通目の文が贈られてきた場面である。

「いで、その御文、なほ聞こえたまへ。あいなし。人の御名をよさまに言ひなほす人は難きものなり。そこに心きようおぼすとも、しか用ゐる人は少なくこそあらめ。（中略）」

せくからに浅さぞ見えむ山川の流れての名をつつみ果てずは

と言葉も多かれど、見も果てたまはず。この御文も、けざやかなるけしきにもあらで、めざましげにここちよ顔に、今宵つれなきを、いといみじとおぼす。（夕霧⑥三八）

一条御息所は、立った噂を良いように訂正することは難しいと言い、和歌を見て夕霧の誠意のなさを嘆く。男の誠意のなさへの嘆きとしては、『狭衣物語』には、噂が立ち、内侍の乳母に事情を聞いた直後の「いと心憂くて、胸はふたがりつつ思し嘆くに、その後とても、いちじるきけしきもなきは、いかなりける心のほどぞなどさへ、さまざまに安からず」（巻三②八二）という女院の嘆きもある。このあたりの女院の心中思惟に関しては、諸注釈も一条御息所との共通性を指摘しているところではある[7]。しかし、それだけでなく、男からの和歌を見て、女君の母親が心を痛めるという場面設定の共通性にも注目すべきところである。

四　ありえないはずだった婚姻

こうして狭衣と一品宮の婚姻が成立することになったが、これは結婚するはずではなかった皇女の結婚である。女院は次のように嘆く。

もとより、かやうの筋には、思ひきこえさせたまはざりしを、今はいとど盛りも過ぎたまひにたり、自らの御本意深きさまに、今日明日にてもと思し定めたるを、かかる御名の隠れなくなりぬるも、いみじう思し嘆かる。（巻三②八七）

女院は一品宮を結婚させようとは考えもしていなかった上、今は適齢期も過ぎ、出家させようと考えていたのである。それにもかかわらず結婚することになってしまったことへの嘆きが語られている。

一方、落葉宮の場合はどうであろうか。落葉宮は柏木の未亡人であり、再嫁などありえないはずだった。しかも、夕霧は柏木の妹である雲居雁と結婚

しているのだから、太政大臣家のことを考えても無理な話である。

故督の君の御心ざまの思はずなりし時、いと憂しと思ひしかど、おほかたのもてなしは、また並ぶ人なかりしかば、こなたに力あるここちしてなぐさめしだに、世には心もゆかざりしを、あないみじや、大殿のわたりに思ひのたまはむこと、と思ひしみたまふ。（夕霧⑥三八～三九）

このように、太政大臣家のことを原因とした一条御息所の嘆きが語られている。事情は異なるが、ともに描かれるのは娘を結婚させるつもりのなかった母親の嘆きである。

さらに、当事者である一品宮も落葉宮も、結婚に際して自らの容姿を嘆いている。

男の御ありさまぞ、いとまばゆかりける。（中略）光り輝くやうにて見えたまへば、候ふ人々いとわりなく、顔置かん方なき心地どもして過ぐるを、まいて、宮はこよなき御年のほどを、衰へ思しめせば、ただ御衣にまとはれて臥し暮させたまふを……（巻三②一一一）

狭衣の「いとまばゆかりける」であったり「光り輝くやう」であったりする様子を前に、一品宮は「こよなき御年のほどを、衰へ思しめせば」と自分の容姿の衰えを気にするのだ。一方、落葉宮も、やはり容姿を気にしている。

男の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限りもなうきよげなり。故君の異なることなかりしだに、心の限り思ひあがり、御容貌まほにおはせずと、ことのをりに思へりしけしきをおぼし出づれば、ましてかういみじうおとろへにたるありさまを、しばしにても見忍びなむや、と思ふも、いみじうはづかし。（夕霧⑥九〇）

夕霧の「うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限りもなうきよげなり」という姿を前に落葉宮は「ましてかういみじうおとろへにたるありさまを、しばしにても見忍びなむや、と思ふも、いみじうはづかし」と気にしている。一品宮は年齢によるもの、落葉宮は夫に先立たれた憔悴によるものと事情は違うが、ふたりは、美しい夫を前に自らの容姿を嘆いている。

そもそも一品宮も落葉宮も、結婚するはずがなかった皇女たちであった[8]。『狭衣物語』が持つ夕霧巻との最大の共通性はここにあろう。結婚するはずがない皇女を、いかに結婚させるか。一品宮は、后腹第一皇女であり、一品であり、もと斎院であるという、およそ降嫁などは考えられない設定の皇女であった。それに加えて適齢期が過ぎているということまで強調されている。この条件下から結婚を成立させるという展開を作りだすには相当な力技を要する。その力学を、『狭衣物語』は皇女の再嫁を成功させた夕霧巻に見たのではないだろうか。

ひとたび噂がたてば、あとはその力を味方につけ、結婚にまで持ち込むことができる。それが夕霧巻であった。そして、『狭衣物語』は夕霧巻よりもさらにありえない結婚を作りだす。夕霧巻の場合、濡れ衣で始まってはいるものの、夕霧はもとから落葉宮を手に入れようとしていた。しかし、狭衣には一品宮と結婚する気がまるでない。そのため、噂が立った後、縁談を進めるのは狭衣本人ではなく、堀川大殿になる。

我が進み申さざらんに、あれより、いかでか、かかりけり、さはともものたまはせん。無きことにても、かばかりの人に名を立てたてまつりて、音なくて止まんは、いといと不便なることなり。（巻三②八七）

こうして堀川大殿は降嫁を願い出ることになるが、噂が立った以上は願い出るしかないという考えがそれを支えている。夕霧巻でも、

御忌など過ぐしてのどやかに、とおぼししづめけれど、さてもえ忍びたまはず、今はこの御なき名の、何かはあながちにもつつまむ、ただ世づきて、つひの思ひかなふべきにこそは、とおぼし立ちにけり。（夕霧⑥五九）

とあった。堀川大殿の思いは、この夕霧巻の「今はこの御なき名の、何かはあながちにもつつまむ」という夕霧に思いに通じるものとなっている。ここでは、夕霧の役割が当事者である狭衣ではなく父親である堀川大殿にずらされているのである。『狭衣物語』は、結婚するはずのない皇女と、結婚する気のない男という、夕霧巻よりもさらにありえない関係に噂を立たせ、当事者をまるで置き去りにして結婚させた[9]。それを成立させたものこそが、夕霧巻の力学なのであった。

五　文と噂

以上、今まで指摘されてこなかった多くの点において、『狭衣物語』の一品宮物語には『源氏物語』夕霧巻との共通性が見い出せることを明らかにしてきた。部分的な人物の設定・心中思惟はもとより、物語の構造・方法そのものにおいても、『狭衣物語』からは夕霧巻の積極的な引用が浮かび上がるのである。その上で、夕霧巻との対照によって明らかになる『狭衣物語』の独自性について考えたい。

一条御息所の死後、夕霧は一度立った噂を味方につけて婚姻を進めようとした。先に挙げた「今はこの御なき名の、何かはあながちにもつつまむ」という思いが示される箇所の直後にはこうある。

北の方の御思ひやりを、あながちにもあらがひきこえたまはず。正身は強うおぼし離るとも、かの一夜ばかりの御恨み文をとらへどころにかこちて、えしもすすぎ果てたまはじ、とたのもしかりけり。（夕霧⑥五九）

このとき夕霧は、「かの一夜ばかりの御恨み文」を盾に取ろうと考えている。これは一条御息所が夕霧に贈った文のことである。その文が夕霧には事実上の結婚の許しとしてとらえられている。実際、一条御息所自身も「何にわれさへさる言の葉を残しけむ」（夕霧⑥五〇）と証拠を残したことを悔いている。夕霧巻では、噂を後押しする証拠として、文が用いられていることに注目したい。

夕霧巻の場合、濡れ衣から始まったことであっても、夕霧は落葉宮と結ばれることを望んでいた。つまり夕霧巻における「噂」は濡れ衣ではあるものの、夕霧にとっては都合の良いもので、全く根拠のないものではない[10]。そして、その噂を証明するかのように、文が物的証拠として機能しているのである。

一方、『狭衣物語』の場合はどうであろうか。狭衣が文を送る場面を確認したい。先にも引用した場面と重なるが再掲する。

大将殿、かかることを聞かせたまふに、されば、すべてよからぬ我が心の悔しさを、いといとほしく思して、少将命婦の許へ、こまやかに書きたまひて、「御前わたりには、いかにいとどはしたなくはべらんと思うたまへらるれど、このたびばかりは」などあるを、我がもとなるも取り具して、内侍の乳母に忍びて見せて、泣く泣く誓ひ聞かすれば、御前に持て参りて、御覧ぜさせて、少将嘆くことども啓すれば、いかなるにても、かく軽々しき御名の流れぬるを、思し乱れて物ものたまはず。文はさすがにゆかしくや思すらん、取りて御覧ず。

思ひやる我が魂や通ふらん身はよそながら着たる濡れ衣

とある書きざま、手などはしも、げに、内親王たちにおはすとも、いかでかと見えたり。いかなる心にて、かく濡れ衣にしもなしたらんと、なほ涙のみこぼれさせたまふ、さもぞ、いといとほしう見たてまつる。（巻三②八三～八四）

このように狭衣は「少将命婦の許へ、こまやかに」文を書く。さらに、少将命婦は「我がもとなるも取り具して」と、自分の手元にある文もまとめて内侍の乳母に提出した。『狭衣物語』では、噂が濡れ衣であることの証拠として文が登場する。しかし、女院が嘆いているのは噂が立ったこと自体だった。文は濡れ衣であることを示す物的証拠ではあるが、それは所詮、噂を取り消す力を持たない。夕霧巻が噂を後押しするものとして文を利用したのと対照的に、『狭衣物語』は噂を取り消すことのできない無力なものとして文を利用するのである。夕霧巻と比較したとき、『狭衣物語』が噂というものの力を

いかに大きなものとして扱っているかは明らかであろう[11]。

そしてその噂の中身はといえば、全く事実とかけ離れている。そもそもの始まりからしてそうだった。夕霧巻で、律師は「昨夜も御車も返してとまりたまひにける」（夕霧⑥三一）と法師たちから夕霧の車の目撃証言を聞いた。『狭衣物語』でも、女房たちは「その夜、その暁に出でたまひし御車、そこそこに立てりしこと」（巻三②八一）と噂する。この車の目撃証言も、夕霧巻を彷彿とさせるものである。しかし、『狭衣物語』の場合、これが本当に狭衣の車であったかは分からない。なぜなら、狭衣は一条院に来た時、「いづれの殿上人の車にか、夜もすがら立ち明かしける」（巻三②七七）と車を見ていて、「ありつる車の人にや」（巻三②七八）とそれが権大納言のものであろうことが明かされているからである。とすれば女房たちが目撃した車も狭衣のものではなく権大納言のものであった可能性がある。車の目撃証言という同じ設定を使いながら、『狭衣物語』ではより信憑性の低いものとなっているのである。

また、先にも確認したように、堀川大殿は、「無きことにても、かばかりの人に名を立ててまつりて、音なくて止まんは、いといと不便なることなり」（巻三②八七）と言っていた。噂が立てば、それが「無きこと」であったとしても、それを現実にするしかないという考えである。『狭衣物語』の「噂」は、当事者の事実とするものと大きく乖離し、それでいて、ありもしなかった現実を作り出すものになっているのだ。

さらにいえば、噂と当事者の事実とするものの乖離は、この結婚そのものについても存在している。狭衣は一品宮と結婚する気もなく、一品宮も自身を結婚する身だと思ってもいなかった。しかし、このことは「世の中ゆすりて、あらまほしき御事に、世の人さへ思ひたり」（巻三②九二～九三）とされているのだ。当事者の予想通りに批難を受けた夕霧の結婚とは対照的に、狭衣の結婚は「あらまほしき御事」とされる。当事者の意識と世間の評判さえも乖離していることになる[12]。

『狭衣物語』は、「噂」を、根拠のない、事実と大きくかけはなれたものでありながら、現実を動かし、作り出していくものであると扱っている[13]。一方で、「文」は事実を証し立てる物的証拠でありながら、現実を動かすことのできないものとなっている[14]。夕霧巻が、噂を後押しするものとして文を使ったのとは対照的である。

さらに、夕霧巻との対照を考えるとき、もうひとつ注目すべき箇所がある。夕霧巻に、落葉宮の手習の反故が、小少将によって夕霧にもたらされるという場面がある。

「いとほしさに、かのありつる御文に、手習ひすさびたまへるを盗みたる」とて、なかにひき破りて入れたり。（夕霧⑥六五～六六）

小少将は落葉宮が夕霧からの文に手習をした反故を盗み、夕霧に届けたのだ。同じように、狭衣にも手習の反故がもたらされる場面がある。それは無論、巻三の一品宮物語の流れの中にある。しかし、相手は一品宮ではなく女二宮なのだ。狭衣は一品宮との結婚に対する反応を伺うかのような文を女二宮に贈る。しかし、女二宮はその文に和歌を書きつけたものの、破ってしまう。

同じ上に書きけがさせたまひて、細やかに破りて、典侍の参りたるに、「捨てよ」とて賜はせたるを、隠れに持てゆきて見れば、物書かせたまひたりけると見るに、うしろめたきやうにはありとも、いとほしくのたまひつるに、これを面隠しにせんと思ひとりて、「かかる物をなん、思ひがけぬ所にて見つけて侍りつるを、参らするはおぼろけのには侍らず。いまは思しめし慰めよ」など聞こえたり。（巻三②一〇一）

こうして女二宮の手習の反故が、中納言典侍によって狭衣に届けられる。夕霧巻の小少将にしても『狭衣物語』の中納言典侍にしても共に「いとほし」という語が使われていることからも分かるように、同情ゆえの行動である。夕霧巻と女二宮物語との関係において類似が指摘されている箇所である[15]。しかし、注目すべきは、類似する場面が一品宮との結婚をえがく流れの中にあるにもかかわらず、一品宮ではなく女二宮との関係において登場していることである。

ここから、文と同じ「書かれたもの」である手習の反故が、物語を動かす力をもたないということが徹底されていることが分かるのではないだろうか。手習は、女君の心中を示す物的証拠である。しかし、それはいま動きつつある一品宮との関係ではなく、もはや狭衣との関係において手遅れとなり、これ以上進むことのできなくなっている女二宮との関係に用いられるのだ。

書かれたものは、確かな物的証拠となるはずだ。一品宮との関係が濡れ衣であることも、女二宮の心中も示すことができるものであり、狭衣はそれにすがる。しかし、それは書かれた当時の、過去を示すものでしかなく、今現在を動かす力を持たない。一方、噂は、それがどんなに根拠のないものであっても、ひとたび流れれば人を動かし、裏づけのなかったものを現実へと変えていく、今現在を動かす力となる。

『狭衣物語』は、このように「噂」と「書かれたもの」の機能を切り離し、使い分けることによって、狭衣と一品宮という、ありえないはずだった結婚を作りあげたのだ。夕霧巻と比較したとき、ここに『狭衣物語』の独自性が見い出せるのではないだろうか。

今まで部分的にしか指摘されていなかった『狭衣物語』の一品宮物語と『源氏物語』夕霧巻との関係であったが、一品宮との結婚に至る物語全体を通

して夕霧巻が巧みに取り込まれながらも、独自の方法を見せていることは明らかである。

注

1 新編全集頭注（巻四②二三八注一）などにも指摘がある。なお、この場面から『狭衣物語』が『源氏物語』を物語世界において地続きの存在として位置づけているととらえられることは拙稿「物語における「物語」―『狭衣物語』の方法」（物語研究会編『「記憶」の創生』翰林書房　二〇一二）で指摘した。

2 本節では『源氏物語』および『狭衣物語』に登場する複数の皇女とその母親を扱うため、以下のように呼称を統一する。『源氏物語』に登場する朱雀院女二宮は通称である「落葉宮」、その母親は「一条御息所」、『狭衣物語』に登場する嵯峨院女二宮は「女二宮」、同じく『狭衣物語』に登場する一条院女一宮は「一品宮」、その母親は「女院」。また、邸の名も非常に紛らわしいが、『源氏物語』で落葉宮と一条御息所が住む邸宅は「一条宮」、『狭衣物語』で一品宮と女院が住む邸宅は「一条院」と呼ぶ。

3 倉田実は「〈濡衣の恋〉の狭衣―一品宮の物語」（『狭衣の恋』翰林書房　一九九九）で「濡衣」において一品の宮物語は夕霧・落葉の宮物語との親近性を持っていよう」とし、「濡衣」という語から一品宮物語を読み解いている。ただし、倉田論文では夕霧巻との関係に関して深入りしていない。なお、夕霧巻と『狭衣物語』に関しては久下裕利が「狭衣大将の人物造型―「源氏取り」の方法から―」（『狭衣物語の人物と方法』新典社　一九九二）において女二宮物語との関わりを論じている。

4 堀口悟「一品宮物語の状況設定―『狭衣物語』巻三、狭衣と一品宮とが結婚に至るまでの過程を中心に―」（『茨城キリスト教短期大学研究紀要』二四号　一九八四・一二）。

5 「親類の女房」（『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』おうふう　二〇〇三）

6 前掲注3倉田論文は「一品の宮の場合は、自身が「濡衣」を使用して嘆じることはなく、また、狭衣拒否の姿勢を一貫させることで独自性を主張している」と指摘する。

7 新編全集「『源氏物語』夕霧巻の落葉の宮の母の一条御息所の立場に似通っている」（巻三②八二注九）など。

8 落葉宮の結婚に関しては後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」（『源氏物語の史的空間』東京大学出版会　一九八六）が史上の皇女との係わりと共に論じている。また、史上の女一宮・一品宮と物語史上の女一宮・一品宮との関連を論じたものに一文字昭子「平安時代の女一宮―史実と物語（『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』）から―」（『国文目白』三七　一九九八・二）、勝亦志織「斎宮・斎院・一品宮、そして女院へ」（『物語の〈皇女〉』笠間書院　二〇一〇）などがある。

9 鈴木泰恵「〈声〉と王権―狭衣帝の条理」（『狭衣物語／批評』翰林書房　二〇〇七）は「当事者双方の意志に反する結婚を、不可避の事態へと追い立てていったのは、恋仲を噂してざわめき立つ〈声〉の〈力〉以外の何ものでもなかったといえるのである」と指摘する。

10 橋本ゆかり「源氏物語の「塗籠」」（『日本文学』四八‐九　一九九九・九）は「世間で〈本当〉とされてきたのは、「実事あり」ということであった。しかし、夕霧と結ばれてしまってからは、彼女にとっての〈本当〉は世間が〈本当〉としてきたことと一致することになる」とする。また、岩原真代「落葉宮試論―「夕霧」巻の「名」を中心として―」（『人物で読む源氏物語　花散里・朝顔・落葉の宮』勉誠出版　二〇〇六）は「落葉の宮の場合、噂の中の「女」像は、「世」に拡張、定着し、やがて、聖性によって保たれていた本来の同一性をも浸食し、心身を浮遊させていく」と指摘する。

11 神田龍身『狭衣物語―物語文学への屍体愛＝モノローグの物語』（井上眞弓・乾澄子・鈴木泰恵・萩野敦子編『狭衣物語　文の空間』翰林書房　二〇一四）は「噂には、一抹の真実があるというのが『源氏物語』の方法である」と指摘するとともに、『狭衣物語』の噂を「なんら事実の裏付けもないところで、大納言の狭衣コンプレックスから喋った言葉がそのままに伝播し、それは懐疑的に扱われることもなく、瞬く間に事実と化し、さらには現実をも突き動かしてしまっているのだ」とする。

12 勝亦志織『源氏物語』以後―後期物語における女一宮」（『物語の〈皇女〉』笠間書院　二〇一〇）は「この「あらまほしき」ことが、実はこの婚姻が狭衣・一品宮双方共にまったく予想外の出来事であったこととの差がここで明示される」と指摘する。

13 前掲注4堀口論文は「かような「うわさ」によって事件を進行させる設定を採用した作者は、登場人物各人に、人間関係に於ける不如意を体験させることに成功した。事態の進展に対しては、各個人の努力など、全く無力であることを仕組み得た」と指摘する。

14 松岡千賀子「『狭衣物語』に於けるフミの考察―メディアとしての特性と役割―」（『平安文学研究　生成』笠間書院　二〇〇五）は「『狭衣物語』のフミはマイナス展開の要因とはならない。正読み手のみに届く場合は勿論の事、それ以外の場合に於ても、『源氏物語』に見られたような露見・誤解が

生じることはない。そうした事態は、独り言・噂といった「ハナシ」を主な要因とし、それらが立ち聞きされ、語り継がれることによって発生する」とする。しかし、述べてきたように、露見や誤解にはつながらないものの、物語を展開させることができないという点に注目したい。

[15] 前掲注3久下論文。

第四節　女二宮物語・一品宮物語と『源氏物語』

はじめに

女二宮物語と一品宮物語は、対になる構造を持っている。第二節では、女二宮物語が女房たちの誤解や思い込み、あるいは職域上の違いから起こる情報網の機能不全によって展開することを指摘した。また、第三節では一品宮物語が『源氏物語』夕霧巻の力学を取りこんでいることを指摘したが、その過程で女房「少将」が手引きの女房として誤解されたことに触れた。女二宮物語にしても一品宮物語にしても、狭衣のあずかり知らぬところで脇役たちによって物語が動かされ、悲劇へと導かれていっているのである。それは第一節で触れたように飛鳥井女君物語にも見られることであり、『狭衣物語』が繰り返し用いる方法でもある。しかし、女二宮物語と一品宮物語を比較した時、このふたりの皇女の物語が見事なまでに対になっている構造が浮かびあがる[1]。本節では、物語の展開、狭衣と女君の関係、そして、『源氏物語』引用という三つの視点から、この背中合わせの二人の皇女の物語をとらえていきたい。

一　物語の前提と状況設定

女二宮物語と一品宮物語は、同じ方法を取りながら対照的な展開を見せる。物語の流れにしたがって、それを確認していきたい。

女二宮の場合でも一品宮の場合でも、物語は狭衣と結ばれる可能性を示しつつ、それを回避しようとする狭衣を描きだしていた。女二宮物語の場合、天稚御子を招き寄せた笛の奇瑞をきっかけに嵯峨帝は狭衣に女二宮降嫁を提案した。物語の叙述順に従えば、嵯峨帝の提案によって初めて女二宮が物語に登場することになる。しかし、実のところ、狭衣は以前から女二宮を意識していた。巻二に入り、女二宮物語が本格的に始まるにあたって、以下のような記述がある。

内裏にさぶらふ中納言典侍は、大弐の乳母の妹ぞかし。皇后宮も睦ましきゆかりにて、幼うより候へば、宮たちをも、ことのついでにも時々聞こえ

いでしかば、大将殿もをかしき御ありさま耳とどめたまはぬにしもあらねど、かかる御けしき見たまひて後はわづらはしくなりて、同じ百敷の内ながらも、弘徽殿にはことに見ることもしたまはぬを、大弐の乳母くだりてのちは、「同じ心にてこそ」など申し置きしが、常に見、睦びきこゆれば、折々に局のわたりに立ち寄りなどしたまひけり。

（巻二①一六六～一六七）

このように、中納言典侍を通じて狭衣が大宮の姫宮たちの様子を聞いていたことが明かされているのだ。「宮たち」とあるので女二宮だけを指すわけではないが、確かに「をかしき御ありさまと耳とどめ」ていた。そして、それが嵯峨帝の「かかる御けしき」、つまり降嫁をほのめかされてからは「わづらはしく」なって、「同じ百敷の内」でありながら、弘徽殿を避けるようになったのだ。この語り直しによって、狭衣が実は女二宮に関心がなかったわけではなかったことが明かされ、ふたりに関係が生じることに必然性が与えられている。一方で、その関心が既に消えていることも示されている。そして、中納言典侍の姉である大弐の九州下向と「同じ心にてこそ[2]」という伝言をきっかけに、中納言典侍は狭衣と再び親しくなり、狭衣が弘徽殿を訪れるという状況が設定される。つまり、女二宮に関心があったことを示しながら、それは既に消え、関係のない用事のために女二宮に接近するという設定を用意したのだ。狭衣と女二宮との間に関係が生じることは、必然であると同時に偶然なのである。

それに対して、一品宮の場合はどうであろうか。一品宮は女二宮より早く、巻一の序盤から登場していた。五月五日の「さるべき所々になほざりの御文」（巻一①三三）の相手として登場し、「一条院の姫宮の御けはひもほのかなりしかばにや、なべてあらぬ心地せしを、いかで御容貌よく見たてまつらんと、御心に離れねば、少将命婦のもとに、例のこまやかにて……」（巻一①三四）と狭衣から文が贈られている。そして、巻三で再登場するにあたって、女二宮物語同様、語り直しがされることになる。狭衣は常盤の尼君から飛鳥井女君の遺児（飛鳥井姫君）が一品宮に引き取られていることを知らされ、やがて姫君会いたさに接近することで、一品宮との物語が始まることになる。少し長くなるが引用する。

大将殿は、かかる内裏住みにも、この忍ぶ草は具したてまつりてやとゆかしければ、人知れず、さるべき折々は、このわたりをたたずみつつ、けしきを見たまひけり。早うも、少将命婦とて、親しき人を語らひたまひて、御文時々たてまつらせたまふ。御けはひもほのかに聞きたまひしを、賀茂の川波に立ち別れたまひにしほどに、わざと聞こえたまふことも絶えにしぞかし。今は同じ百敷になりたまひて、おぼつかなからぬほどに、言問ひ寄りて、波の心絶えぬほどにぞ、ほのめかしたまひける。里におはします折も、若宮のものしたまふ一条の宮は、ただ這ひ渡るほどなれば、つれづれなる折々は、御文も聞こえたまふなるべし。自らも、さるべき宵々などには渡りたまひつつ、命婦と語らひたまふ折もありけり。そのついでにも、

「さる人や」と、ただ大方なるやうにて問ひたまふに、誰とさだかには言はねど、ただ世に知らずうつくしき由を語りきこゆるに、ゆかしくあはれにて、この御辺りの立ち聞き垣間見など、心に入りたる、もし見つくる人あらば、宮の御ためにあぢきなきことや出で来ん、わづらはしき方もなきにあらず。（巻三②七五～七六）

このように、巻一での接触が回想されるとともに、その後、斎院となってからは連絡が絶え、退下とともに再び「今は同じ百敷になりたまひて、おぼつかなからぬほどに、言問ひ寄りて、波の心絶えぬほどにぞ、ほのめかしたまひける」と接触していたことが語られる。女二宮の場合、降嫁の話があがったことにより「同じ百敷の内ながらも、弘徽殿はことに見ることもしたまはぬ」と避けていたが、一品宮の場合は「同じ百敷になりたまひて」と内裏にいることを幸いに立ち寄ることになっている。

このように一品宮への関心が変わらずあることが語られているが、それでも、狭衣の狙いは一品宮本人ではなく飛鳥井姫君である。狭衣は一品宮づきの少将命婦と会って行方を尋ねたり、女院の里邸である一条院の「立ち聞き垣間見など」をする。そして、「もし見つくる人あらば、宮の御ためにあぢきなきことや出で来ん、わづらはしき方もなきにあらず」とあるように、一品宮との関係を誤解されかねないことへの懸念も示している。この表現が予言しているように、この後、狭衣と一品宮との間には噂が立つわけであるが、狭衣はそれを望んでいなかった。女君への関心をえがきながら、それとは違う目的での接触を作りあげるという点において、物語は女二宮のときと変わらない方法を用いている。狭衣と一品宮との関係も、やはり必然であると同時に偶然だったのである。

二　女房の不在と女房間の対立

女二宮物語の場合、狭衣は中納言典侍に会いに弘徽殿に立ち寄っていた。しかし、密通のあった日、中納言典侍は不在であった。「宮のぼらせたまふ御供に」（巻二①一六七）とあるように、彼女は大宮の供をしていて不在であった。それで狭衣はあたりにたたずんでいるうちに姫宮らを垣間見し、やがて女二宮と通じるにいたる。そのとき、女二宮周辺の女房は次のような様子であった。

少しおとなしかりつる、「例の乱り心地、悪しうなりにたり。今宵はよも起らじとこそ思ひつれ。夜毎にさへなりぬるなりけり。大宮のおはしまさぬ

ほどに、わりなきわざかな。宮も御かたはらにさぶらはせたまへよ」と言ひて、下るるは御乳母なるべし。もの言ひつる人、「三の宮の御前には中将さぶらはん」とて、御衣ひきたてまつらせなどするこそ、この宮の御乳母子ありと聞きしなりけりと思しぬる。「更けさぶらひぬるなめり。御帳参らせたまへ」と申せど、昼の御座に、うたたねにみな臥したまひぬ。（巻二①一七一～一七二）

ここに出てくる乳母・乳母子は女三宮のそれであろう。乳母は持病で下がり、乳母子をはじめ女房たちは寝てしまう。女二宮の乳母がいないのが不審であるが、中納言典侍同様、大宮についていたのだろうか。ともかく、女二宮は女三宮とともにいたのであるから、この場をとりしきるのは女三宮の乳母となっていたのだろう。その乳母が持病で退出したことをきっかけに、この場に目を光らせる者はいなくなった。こうして狭衣は、誰にも見つかることなく女二宮と関係を結んだのである。

一品宮の場合も同様である。狭衣は飛鳥井姫君に会うべく一条院で垣間見を行っているうちに、権大納言とはち合わせてしまう。そして、その日は少将命婦を尋ねているのではなかった。この場面は女二宮と関係を結んだ場面と酷似し、また、狭衣自身がそれを回想する。

臥したらん所も知らねば、たどり寄らん方もなくて、つくづくと見入れらるるも、弘徽殿の南の戸口は、まづ思ひ出でられたまひける。思ふままなるは、我がためも人のためも、あぢきなくもいとほしくも悔しうもあるわざぞかしと、いくらの年の積りならねど、思ひ知られたまふことなれば、わづらはしくて、やをら出でたまふに、ありつる車の人にや、烏帽子直衣なる人の、ふとさし合ひたるに……（巻三②七七～七八）

このように狭衣は女二宮の時を回想する。そして、「思ふままなるは、我がためも人のためも、あぢきなくもいとほしくも悔しうもあるわざぞかし」と、反省の念から引き返したところに、「烏帽子直衣なる人」である権大納言と鉢合わせてしまった。女二宮の時と違い、いや、女二宮のことがあったからこそ、狭衣は理性的に行動した。しかし、「その理性の結果が、この不幸を招いてしまった[3]」のである。

一方、権大納言がこの場にいたことは次のようにある。

御乳母子の中納言の君といふ人に、心ざしあり顔を見せつつ通ひけるを、今となりては、ほのめかし出でつつ責めわたるを、いとめづらかにあさましき心地して、今はをさをさ対面することもせぬに、昨夜は、いとど、宮は留らせたまひて、院も内裏に入らせたまひて、母の内侍の乳母も風邪にわづらひて、え上らずなりにしかば、「代りに御かたはらにとて参りたまへ」と言ひしを、「かかる人少なるほどにて、近きわたりにしるべせよ」と、よき折にとうかがひて、あやにくに取りこめて、責め明かしたまひつれば、御かたはらにも参らずなりにしなりけり。（巻三②七八～七九）

この設定に注目したい。この日は一品宮の母親である女院が参内で不在、乳母が風邪で伺候していないという状況であったのだ。これは狭衣が女二宮と関係を結んだ日と見事に一致する。一品宮物語は、確かに女二宮物語と同じ方法を用いているのである。

しかし、同じ状況であるからこそ、狭衣は過去を回想し、その場から引き返そうとした。状況の重ね合わせは、似ているからこそ差異を際立たせるものとなる。そして、女二宮物語と一品宮物語の最大の差異は、女君との関係がないことである。女二宮との関係はあったのに秘匿された。一方、一品宮との関係ははじめから存在しないのに、権大納言の流言によって、あったこととなってしまう。その時、ふたりの皇女の周辺の女房たちは、どのように動いていただろうか。

女二宮物語の場合、妊娠の偽装をしたのは出雲の乳母で、狭衣を手引きしたと誤解されたのは中納言典侍であった。第三節において論じたが、そこには、乳母と女官という職域の違いから起こる情報網のずれがあった。乳母たちと中納言典侍は情報を交換することなく誤解や思い込みのまま行動し、情報を操作する乳母が、情報を共有できない典侍を手引きの女房に仕立てあげたのであった。

これと同じことが、一品宮物語にも起こっている。一品宮物語の場合でも、やはり内侍の乳母の情報操作によって少将命婦が手引きの女房に仕立てあげられた。ここでも物語は、乳母と女官という職域上の違いを用いたのではないか。内侍の乳母の「内侍」は中宮内侍のことであろう。つまり彼女は、内侍所の職を持ちながら中宮づきとして出向した女房[4]であり、やがて一品宮が生まれるにあたって乳母になったことが想定される。「内侍の乳母」という呼称は、彼女が女院・一品宮双方に仕える最側近であることを示している。一方、少将命婦の「命婦」はあくまで天皇近侍である[5]。だからこそ、「内にも聞かせたまひて、少将がしわざなりと思しめされければ、いとあさましく思ひ嘆きて、籠りゐたり」（巻三②八三）と、噂が後一条帝の耳に入ったことを嘆き、出仕できなくなったのだ。また、狭衣も、父堀川大殿に弁解するとき、「少将命婦といふは、早うより知る人にしはべるを、内裏わたりにて、時々物語などしはべる折もあるを、言ひなす人の侍るにや」（巻三②八五）と言っている。少将命婦と狭衣が接触する場として「内裏わたり」が挙げられている。少将命婦は女官として宮中にいる時間があったからこそ狭衣との窓口になり得、また、乳母にとっては犯人役を押しつけやすかったのだ。中納言典侍と出雲の乳母の関係性に近いといえよう。

これら女房たちの動きが、ふたりの皇女の物語を動かした。そしていずれの物語でも、その先にあったのは密通の捏造であった。女二宮物語の場合、大宮の妊娠という偽装が行われた。それは若宮の両親を嵯峨帝と大宮とする偽装であるはずであったが、巻四に至って、父親が狭衣であることが告げら

れてしまう。乳母の偽装は、狭衣と大宮という密通を創出し、それが狭衣を帝位にまで押し上げた。一品宮の場合でも、狭衣と一品宮との関係など初めからなかった。しかし、世間は「年経にけるさまをさへ、つきづきしう言ひなす」（巻三②八二）という有様で、長年にわたって狭衣と一品宮が通じていたとされ、結婚が成立してしまう。しかし、これにより狭衣は後一条帝の姉婿となり、天照大神の信託の後に後一条帝の「わが御皇子にならせたまひて」（巻四②三四四）から帝位につくという道が開かれる[6]。狭衣帝がこのふたつの密通に支えられていることは間違いない。そして、そのいずれもが、このように捏造されたものだったのである。

三　女君との交流手段

女二宮物語と一品宮物語は、同じ方法を用いて、重ね合わせて作りあげられている。しかし、同じであるからこそ、そこにある差異が際立つ。実際、権大納言にはち合わせた日、狭衣は過去を回想してその場から引き返そうとした。狭衣自身が同じ状況であることを自覚し、同じ展開を避けようとしたのだ。

また、いずれの場合でも乳母による情報操作が行われ、女官である女房が手引きの女房に仕立てあげられた。しかし、その過程は対照的である。女二宮物語の場合は誰も真相を知り得ず、ただ欠けた情報を持ったまま動いただけであり、主人公である狭衣のもとに情報が届いたときには全てが手遅れであった。一方、一品宮物語は噂が広まるところから始まり、独り歩きした情報が次々と補われて形となった。女二宮のときは何もできなかった狭衣も、珍しく積極的な動きを見せ、必死に誤解を解こうとした。しかし、そんなことは無意味であり、噂が立った以上はその通りの形になるしかないというのが一品宮物語であった。

さらに、いずれの場合でも、最後には密通が創出されたが、姫君と狭衣との関係にしぼって考えればいささか違う。狭衣と大宮という関係が女二宮物語の捏造した密通であるが、その過程で、狭衣と女二宮という、確かにあったはずの関係はなかったことにされているではないか。

女二宮・一品宮というふたりの皇女の物語は、状況を重ね合わせ、同じ手法を取りつつも、対照的に展開しているのだ。そしてこのふたりと狭衣との関係も同じく対照的である。女二宮は物語の最後の場面まで狭衣に思慕され続けるが、一品宮と狭衣の結婚生活は破綻に終わる。このふたりの皇女は、

背中合わせともいうべき関係で物語に存在しているのである。

それでは、この背中合わせのふたりの皇女は、狭衣とどのように向き合っているのだろうか。女二宮は、一切の沈黙を貫いた女君であった。狭衣が何を試みても女二宮は拒否し、その姿勢は徹底している。その徹底ぶりたるや、女二宮はついに一度も狭衣に向かって言葉を発しない。巻三にはこうある。

いま一度け近きほどの御けはひを聞くわざもがなと思ひわびては、中納言典侍をのみ恨みたまへど、かひなき由をのみ聞こゆれば、心憂しや。夢のやうなりし夜な夜なも、泣きたまふよりほかの御けはひは聞かで止みにき。一くだりの御返りは見すべきものとも思したらざりしも、我が心のあながちに尽しそめてし一方よりほかには、嘆きの森に枝さし添へじと、せちに思ひ離れし心にて、これをしひて恨めしかるべきものとも思はざりしか、よろづに取り所なく悔しきことのみ尽きせぬままには、今更に日に二度三度書きつめつつ、恨みきこえたまふさま、海人の浜屋にも見べき物とも思したらずと聞くは、過ぎぬる方の報いにやと、つらく心憂し。

（巻三②二四）

狭衣は関係を結ぶときですら、女二宮の泣き声以外の声を聞いたことがなかったという。さらに文の返事もない。この状態は徹底して貫かれ、狭衣は最後まで声を聞くことも文の返事をもらうこともない。狭衣から送られる度々の文は「まいていまさらに御覧ずるものとも思したらず」（巻二①二五九）「御覧ぜさすれど、例のかひあらんやは」（巻三②九二）と見向きもされない。返事がないのはたとえ嵯峨院が催促しても同じである。狭衣は嵯峨院に見られることも想定して二度ほど文を送っているが、いずれも嵯峨院が返事を書くように勧めても女二宮は従わなかった。また、次のような場面もある。

かうのみ積る御文の数、さだかに御覧じ続けねば、なかなか何とも知らせたまはぬにや、床の上の形見などは残りなく聞きたまひてけりと思すに、なべての人にてこそあらざらめれど、よその人は何かはかくも言ひ聞かせん、中納言なども、その折は知らぬとこそ思ひしかなど思すに、その折の御心惑ひにも劣らず、一重にもあらず。

（巻三①三一〜三二）

このように、なぜ狭衣が若宮の出生を知っているのか、その情報網に疑念を抱いているのだ。情報網の目の中にいた女二宮は、そのために沈黙し、心を痛め続けている。

また、女二宮が沈黙するのは狭衣に対してだけでない。中納言典侍はこう評する。

いかが思しめすらんと、御けしきの見えはべらぬなり。よき人と申す中にも、あさましうおはしますなり。されど、はかなき御手習にこそは、御心の中も見たてまつり明らめはべりしに、今はただ仏に向ひきこえさせたまひて明かし暮したまへば、世の中のよしなし物語、御前にて申す人もはべ

らず。　（巻三②九五）

このように、女二宮が女房たちにさえ沈黙をしていることが、中納言典侍によって知らされるのである。しかし、同時に、この発言は狭衣にとって重大な意味をもたらすことになる。ここに、今はほとんどしていない「手習ひ」にはその「御心の中」が見えるということが明かされているのである。この後、狭衣は中納言典侍に文を託す。そして、その文に対して、女二宮からの予期せぬ返事が、思わぬ形で返ってくる。

狭衣からの文を見せられた女二宮は、「筆のついでのすさみに」（巻三③一〇〇）、その文の片端に手習を三首も書きつけてしまうのだ。しかし、「同じ上に書きけがさせたまひて、細かに破りて、典侍の参りたるに、「捨てよ」と」（巻三②一〇一）する。しかし中納言典侍はこの破れた手習いを狭衣に届けてしまう。こうして、狭衣は「せちに継ぎつつ」（巻三③一〇二）読むことになる。その三首とは、次のようなものである[7]。

夢かとよ見しにも似たるつらさかな憂きは例もあらじと思ふに　（巻三②一〇〇～一〇一）

下荻の露消えわびし夜な夜なも訪ふべきものと待たれやはせし　（巻三②一〇一）

身にしみて秋は知りにき荻原や末越す風の音ならねども　（同）

これらの歌は果たして、「かつての不誠実さをひたすら糾弾するもの[8]」「怒りにも似た非難と反発[9]」であろうか。いや、糾弾・非難・反発があることに異論はない。しかし、それだけであろうか。一品宮への同情は、同時に自分がかつていかに辛い思いをしたかを表明してしまっている。それは、「身にしみて秋（＝飽き）は知りにき」という辛さであるという。飽きられる辛さは、恋心がないところには生まれまい。無論、この時点での女二宮に狭衣の恋心があるといいたいわけではない。狭衣との関係が絶えた当初にあったことが、事後的に明らかにされたわけである。この三首は「関係時には描かれなかった姿、狭衣に愛を傾ける姿[10]」が明らかにされたものと取るべきではなかろうか。

これが、『狭衣物語』中で女二宮から狭衣に発せられた唯一のものである。無論、女二宮が狭衣に宛てようと思ってしたものではない。手習いであり、独詠歌である。しかも捨てようとしたもので、狭衣の手に渡ったのは半ば偶然である。しかし、先に中納言典侍は狭衣に向かって「はかなき御手習ひにこそは、御心の中も見たてまつり明らめはべりし」と言っていた。狭衣はこの独詠歌がいかなる返事よりも女二宮の「御心の中」が吐露されたものだと知っているのだ。だからこそ異常な執念で読んだ。

その後、法華八講の終わった日に狭衣は若宮を使って女二宮のもとに侵入する。そこで狭衣は「見しにも似たるとありし反故の破れを見はべりしを」

（巻三②一七九）と反故を見たことを知らせてしまう。それで女二宮は「はかなりし手すさびも、見しやうに聞こえたまひし後は、うしろめたうて、御心のうちよりも漏らしたまはざりけり」（巻四②二一六）とついに手習いすらしなくなる。女二宮は完全に沈黙する女君となった。

女二宮は、最後まで狭衣に声を聞かせないし、文の返事もしない。最初から最後まで、狭衣と女二宮は交流することがない。その中で唯一例外的に狭衣のもとへ届いたのは、手習いの反故だった。しかし、皮肉にもそれは、女二宮が狭衣をたしかに想っていたことが吐露されたものであった。完全に沈黙する女君から与えられた唯一のものが、女君自身が絶対に見せたくなかった想いの吐露である手習いの反故。これは、『狭衣物語』が生みだした究極の愛の媒体とはいえないだろうか。狭衣の思慕は源氏宮から女二宮に転換したともいわれている[11]が、この手習の存在は大きい。

では、一品宮はどうであろうか。女二宮とは対照的に、一品宮は狭衣との会話がえがかれる。しかし、それは非常にネガティブな形となって現れる。たとえば、次のような場面がある。

武蔵野の霜枯れに見しわれもかう秋しも劣るにほひなりけり

同じ花とも見えねば、口惜しきわざかなと、心の中に思ひ続けられたまふにも、人聞かざりし所にて、心に任せられたりし独り言さへ、口ふたがりぬるを、なほいとあさましう思ひあまりたまひて、「冬深き霜枯れの雪の朝、この色はをかしけれ。このごろはあまりおとなしくぞありける」とのたまふを、「あなあぢきなの言や」と耳留りたまひて、引き被きたまひぬるを、いとほしくて、心解けたらぬ御けしきに、何に聞こえつらんと、なまわづらはしければ、言少なにて、つくづくと眺め出ださせたまひて、臥したまへる、御心の中、いとものすさまじ。（巻三②一一六～一一七）

狭衣は一品宮の地味な衣装を見て、同じ地味な色目でも映えた源氏宮と比較してしまう。その思いを心の中で独詠歌に詠むが、「人聞かざりし所にて、心に任せられたりし独り言さへ、口ふたがりぬるを、なほいとあさましう思ひあまりたまひて[12]」と、衣装の批判を口に出してしまう。狭衣は結婚によって「独り言」を封じられたことに不満を持っている。そして、それでも我慢できずに一品宮の衣装の批判を口にする。発言するという行為自体が狭衣にとって「独り言」の下位に置かれていることに注意したい。

この後、狭衣は子供たちの遊ぶ声を聞いて、一品宮と会話をする。

宮に、「幼き人のものしたまふと、聞こえはべるは。など見えたまはぬ。この足音はもしそれにや。つれづれなるにこなたに渡したまへ」と聞こえたまへば、「いつのほどにか。さまでは」と、まれまれほのかに答へたまふを、「幼き人は必ずほどあるかは。御心ならひに、うとうとしくもてなさせ

たまふなめりな。いかなるも、幼きはゆかしくはべるを。見せさせたまへ」と聞こえたまへば、「いさや。馴れぬるは悔しきとかや聞けば」とて、扇の側より見おこせたまへる、目尻、らうらうじげにわづらはし。「あなうたて。いと軽々しき言をも知らせたまひたりけるかな。八重立つ山のなどこそ言ひけれ。心憂」など、うちなよびたまへる容貌、けはひなどは、心あらん女、高きも短きも、いかが見知りきこえたまはざらん。

（巻三②一一七～一一八）

衣装の批判をした直後、狭衣は飛鳥井姫君のことを問う。重ねて飛鳥井姫君に会いたいということを伝える狭衣に、それをかわす一品宮と、表面上は会話が成立しているようでもある。しかし一品宮の様子は「まれまれほのかに答へたまふ」とされている。狭衣に対して普段あまり返事をしない一品宮が、「ほのか」に答えようとしている。目の前の夫に対して無理して会話しようとする一品宮の姿が浮かびあがる。

飛鳥井姫君の袴儀が催される場面もさらに分かりやすい。狭衣が姫君の袴儀を若宮と一緒に行いたいと考えていることを察した一品宮は、この機に姫君を堀川邸に引き取らせ、狭衣の足を遠のかせようと考える。一品宮は女院に相談し、堀川邸で袴着を行うように取り計らう。その袴着の前日は、次のようにえがかれている。

明日になりて、「その姫君は、今日や渡したまふ」と聞こえたまふに、「日ごろさものたまはざりつるに、にはかにはいかに」とのたまふ。「皆、思ひ設けたれば、何事かは。ここにては、わざと思ひ立たんもうるさきに、敢へなんとこそ、院ものたまはすれ」とのたまふも、からうじて言続けても聞きたまふに、皆、聞きたまひにけるにこそと思ふに、あまえいたくて、「ついでならずとも、年返りても。かく見きこゆれば、自ら一人こそ、同じ心に思ひたまふれ。他所へは、たちまちに、さらずとも」と申したまふを、またはいかに心得たまふにかと思せば、返す返すもえのたまはせで、「いと心もとなげに、思ひたるものを。院の御方に、忍びやかにても敢へなん」と、独り言にのたまはするをも、「などかは。わざとだに、院の御前に、女子は手触れさせたてまつらまほしけれ。かしこには、誰かは」と、事無しみに言ひなしたまひけるに、思し立ちたる事はかひなかるべきを、うちつけの便りならずとも、難かるべきならねど、今は我しも扱ふべきにもあらず、さぞ事無しみに言ひなすとも、いかばかりもてなさまほしからんものを、ひき忍びたるも、なほあぢきなくやはと思せば、院にも内々の事は聞こえたまはねば、「かくまで、思ひ立ちぬとならば」とのたまはせて、御腰結に、自らの代りにとて、大殿に聞こえさせたまへれば、渡りたまひてぞ、着せたてまつりたまひける。

（巻三②一二七～一二八）

狭衣に答えるのは「まれまれ」とされていた一品宮であったが、ここではふたりの会話にかなりの文量が割かれている。しかも、狭衣からではなく一

品宮からの発言に始まっている。この会話でも一品宮は「からうじて言続けて」とあるようにかなり無理をして狭衣と会話を試みている。しかし、その無理が逆に狭衣に「皆、聞きたまひにけるにこそと思ふに、あまえいたくて」と思わせることとなってしまう。そして意に反して無理に堀川邸で行わなくてもよいと言う狭衣に、一品宮は「またはいかに心得たまふにか」と戸惑い、「返す返すもえのたまはせで」と、繰り返しの主張もできず、ついに「独り言にのたまはする」と、正面からの対話を避けて独り言にしてしまう。狭衣も「事無しみに」と何気ないふうに装い、これで会話が終わってしまう。

一品宮は結局、狭衣との会話で結論を得るのではなく、女院との相談で決めることになる。

このように、一品宮と狭衣の会話はかなり無理のあるものとしてえがかれている。会話をしたところで、結局のところ何も生みだせないのだ。ついに狭衣対して声を聞かせなかった女二宮と対照的に、一品宮は狭衣と何度も会話をする。しかし、それは交流不能を浮かびあがらせてしまうものでしかない。

そして、会話をする女君という側面を持ちつつも、一品宮が狭衣の情報を得るのは、常に間接的にであった。一品宮が飛鳥井姫君の父親が狭衣であることを知るのは、女房の立ち聞きのためである。狭衣は飛鳥井姫君を抱いて、

忍ぶ草見るは心は慰まで忘れがたみに漏る涙かな　（巻三②一二〇）

と詠んだ。それを中将という女房が聞いていたのである。

「忘れがたみに」とありし御独り言を、宮の御乳母子の中将といふ、障子のつらにて、いとよく聞きけり。宮の御前に語り申せば、さはこの児は、なにがしの少将のと聞きしは、あらざりけるにこそ、これによりて、このわたりにはあながちに尋ね寄りにけるにこそ、いみじう物思ひたるさまなるも、このことにこそ……　（巻三②一二三）

一品宮は狭衣と会話する人物でありながら、肝腎なことは直接の会話では得られない。そして、間接的に情報を得ることによってますます一品宮は心を閉ざし、やがて「夫婦関係が破綻する[13]」に等しい状況となる。

さらに、立ち聞きによって思い当たるというのは、女二宮物語でも取られた方法であったことに気をつけたい。女二宮物語では、出雲の乳母の立ち聞きで大宮が女二宮の相手を狭衣と知るのであった。ここでの一品宮は、女二宮物語における大宮の位置にある。女二宮物語と重ね合わせることによって、一品宮は思慕の対象ではなく、あくまで飛鳥井姫君の母代わりにすぎないことが示されているのではなかろうか。

また、巻四で狭衣の出家未遂も、

何事も世の中の事隠れなくて、おのづから聞く人々もありて、まことしう剃りやつしたまへらんやうに、惜しみ悲しがりきこゆれば、宮も聞かせたまひて、いとど心憂く思しめすこと限りなし。（巻四②二一六）

と、やはり一品宮は噂で聞くことになるのである。

そして、狭衣に一切の声を聞かせないなかで手習の反故を渡してしまった女二宮とは対照的に、狭衣と会話をする一品宮は、文や手習といったものでの交流をしない。そもそも、巻一の時点でも、狭衣は一品宮に文を贈っていたが、その返事が物語に登場することはなかった。また、初夜の後朝でも一品宮が送ってきたのは「物も書かれざりける」（巻三②一一〇）白紙の文であった。一品宮が狭衣に文を送るのは最終盤、狭衣が即位した後に「御物恨みの限りにもあらず、過ぎにし御ありさまどものやうに、いつとなく悩ましう思さるる」（巻四②三五七～三五八）という体調不良のために「物心細うて、御返りなどばかりは、なかなかなつかしげに」（巻四②三五八）するという箇所のみである。ここでは一品宮は参内も「思し絶えて」（同）おり、もはや即位した狭衣と逢うことはない。実際、一品宮はこの次に登場した箇所で病没する。それまで一品宮と狭衣との間には文や手習などを媒介した交流はえがかれない[14]。

狭衣との交流という点でも、女二宮と一品宮は対照的であった。女二宮は一言も声を聞かせない、沈黙の姫君である。しかし、だからこそ想いを吐露した手習が価値を持ち、その反故を手にした狭衣にますます思慕される。噂の力によって狭衣と結婚することになった一品宮は、狭衣と直接に会話し、また、様々な情報を立ち聞きや噂で得る、声と耳の姫君である。しかし、狭衣との会話からは何も得られず、間接的な情報を得ては苦悩する。やはりふたりは、背中合わせの皇女たちなのであった。

四　『源氏物語』とのかかわり

女二宮と一品宮は、たしかに背中合わせの皇女たちであった。しかし、二人の物語は、絡み合って展開されている。そして二人の物語をつなぐ糸のひとつとなっているのが、『源氏物語』である。

今一度、狭衣が女二宮と関係を持つ場面を振り返りたい。あの日、中納言典侍は大宮が「のぼらせたまふ御供」、つまりは上局にあがる供に出ていて不在であり、まわりの女房たちも寝入っていた。第二節でも触れたが、これは『源氏物語』の花宴巻をふまえている[15]。花宴巻で光源氏が朧月夜に逢う場面はこうである。

上達部おのおのあかれ、后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明うさしいでてをかしきを、源氏の君、酔ひごこちに、見過ぐしがたくおぼえたまひければ、上の人々もうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、かたらふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口あきたり。女御は、上の御局にやがてまうのぼりたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の枢戸もあきて、人音もせず。かやうにて、世の中のあやまちはするぞかし、と思ひて、やをらのぼりてのぞきたまふ。人は皆寝たるべし。（花宴②五一～五二）

藤壺に逢えなかった光源氏は、そのまま弘徽殿に立ち寄り、朧月夜と出会うことになる。舞台が「弘徽殿」であること、そこの主（この場合では弘徽殿女御）が「上の御局にやがてまうのぼ」るため不在であったこと、そして、周囲の女房たちが「皆寝たる」ために光源氏の侵入は誰にも気づかれなかったことが、女二宮と逢う場面と一致するのだ。光源氏はそもそも藤壺に逢うことを期待していたが、狭衣の場合は中納言典侍に用があった[16]。藤壺への思慕が中納言典侍への用にずらされている形を取っているが、藤壺との逢瀬を期待していたにもかかわらず朧月夜と逢った光源氏と、源氏宮を想いながら女二宮を抱く狭衣の姿は重なるものがある[17]。女二宮物語は、光源氏と朧月夜の逢瀬をふまえて始まったのだ。

しかし、その後の展開は朧月夜のようにはならない。既に指摘がなされているように、花宴巻をふまえて始まったはずの女二宮物語は、皇女の密通（と思われる事態）に心を痛めた母親を死に至らしめるという点において、夕霧巻のような展開を見せる[18]。とはいえ、そこに第四節で指摘したような一品宮物語における夕霧巻引用のような親近性はない。女君の母親を死に追いやる狭衣は確かに夕霧的であるが、密通の末にやがて帝位をもたらす若宮を得るあたりには光源氏の影がつきまとう。女二宮物語は、花宴巻をふまえて始まりながら、藤壺との密通と冷泉帝誕生を彷彿とさせ、やがて夕霧巻のような展開をもたらすという複雑な『源氏物語』引用がなされているのである。

それに対して、一品宮物語はどうであろうか。度々の引用になるが、狭衣が権大納言と鉢合わせした日、狭衣は次のような行動を取っていた。

臥したらん所も知らねば、たどり寄らん方もなくて、つくづくと見入れらるるも、弘徽殿の南の戸口は、まづ思ひ出でられたまひける。思ふままな

るは、我がためも人のためも、あぢきなくもいとほしくも悔しうもあるわざぞかしと、いくらの年の積りならねど、思ひ知られたまふことなれば、わづらはしくて、やをら出でたまふに、ありつる車の人にや、烏帽子直衣なる人の、ふとさし合ひたるに……（巻三②七七～七八）

傍線部のように、狭衣は女二宮と関係を結んだ日を思い出した。そこにわざわざ「弘徽殿」とある。女二宮物語において花宴巻をふまえていたことを示す場の名前を、ここで再び挙げるのである。久下裕利は、一品宮が「藤壺に御局」（巻三②七五）を得たことを示すことや、女二宮物語の鍵語が示されることをふまえ、『狭衣物語』の一品宮物語の顛末は、女二宮密通事件との対応を持たせることによって、『源氏物語』の藤壺と朧月夜とを結ぶ密通の相関構図として丸ごと組み込んだのであった[19]」とする。しかし光源氏の禁忌を取りこみながらも、一品宮物語が夕霧巻をふまえて展開することに注目したい。

一品宮物語は「弘徽殿」を思い出す狭衣をえがき、また、母親の不在・乳母の病気といった設定を用意することで、女二宮物語と重なる。しかし、狭衣は「弘徽殿」を思い出したからこそ引き返そうとした。物語は狭衣に花宴巻を回避させたとは言えないだろうか。わざわざ思い出させ、それを回避させようとすることで、物語は再度の花宴巻引用を捨てたのである。そしてその代わりに取り込んだのが、夕霧巻であった。

第三章にて指摘したように、一品宮物語は夕霧巻をふまえている。それは設定・細かな表現・女房の呼称から物語を動かす力学にまで至る。『狭衣物語』でここまで『源氏物語』を巧みに取り込んだ箇所は他にないのではないか。そしてそれは、花宴巻を捨てて行われた。ここに至って、狭衣は光源氏ではなく夕霧になったのである。

さらに、一品宮との婚儀が迫るなか、狭衣が女二宮の手習の反故を読むという場面があった。これも明らかに夕霧巻をふまえたものである。夕霧巻の力学を取りこんで狭衣と一品宮の結婚を成立させようとしているさなかに、物語はもうひとつの夕霧巻引用として女二宮物語を用意するのだ。一品宮物語の始まりでは「弘徽殿」を思い出す狭衣を描くことで、花宴巻引用としての女二宮物語が呼びこまれていた。しかし、夕霧巻をふまえた一品宮物語を進行させるなかで、女二宮物語をも、夕霧巻引用として位置づけ直したのではなかろうか。

おわりに

以上、物語の展開・狭衣との交流・『源氏物語』引用という三つの視点から、女二宮・一品宮物語を考察してきた。女二宮物語と一品宮物語は確かに対になる構造を持っている。それは状況や、物語を展開させる動力としての女房たちの設定を重ね合わせつつも、対照的に展開するものとなっていた。展開だけでなく、ふたりの皇女たちも背中合わせともいうべき形で、狭衣と向き合っていた。

重ね合わせつつも対照的に展開したのは、狭衣自身が回避しようとしたことがきっかけであった。女二宮のときを思い出し、同じ展開を回避しようとする狭衣。この主人公の動きが、背中合わせの展開を生み出した。そのとき狭衣が思い出していたのは「弘徽殿の南の戸口」（巻③七八）であった。それは次の展開を生むだけでなく、女二宮物語と一品宮物語をつなぐ『源氏物語』引用のあり方を示すものとなった。狭衣は、光源氏ではなく夕霧なのだ[20]。

しかし、狭衣自身の意識においては、実はそうではない。『狭衣物語』はしばしば物語の登場人物名を挙げることがあるが、「光源氏」とある箇所を挙げると、次のようになる。

・光源氏、身も投げつべし、とのたまひけんも、かくやなど、独り見たまふも飽かねば……（巻一①一七）

・光源氏の須磨の浦にしほたれわびたまひけんさへぞ、うらやましう思されける。（巻二①二五四）

・「これや、昔の跡ならん。見れば悲しとや、光源氏ののたまはせたるものを」とはのたまはすれど、御覧ずるに、自ら描き集めたまへりける絵どもなりけり。（巻四②三九七）

「光源氏」とあるのは、第一系統で読む場合、以上の三か所のみである。冒頭では夕映の庭先を眺めて、「身も投げつべし」と言った光源氏に思いを馳せている。巻二では飛鳥井女君の扇を見て、入水した地を尋ねに行くこともできない我が身を嘆き、光源氏の須磨退去をも「うらやまし」く思う。巻四、物語の終盤では、飛鳥井女君の遺品を前に、紫の上を失った光源氏を思う。これら三か所の「光源氏」引用は、全て狭衣の心中思惟もしくは発言であり、狭衣が自分の境遇を光源氏と比べたり重ね合わせたりするために用いられている[21]。『狭衣物語』において、「光源氏」は常に、狭衣が自らと比べる者として存在しているのである。また、巻四の斎院蹴鞠の場面はこうであった。

宰相中将を、大将殿、強ひてすすめたまへれば、「若々しきわざかな」とはすまへども、げに、人よりはをかしうなまめかしきさまかたちにて、数もこよなく多くあがるを、大将殿などは、いみじう興じたまうて、「ややもせば、下りたちぬべき心地こそすれ。などて、今しばし若うてあらざりけん」とのたまへば、御簾の中の人々、「まめ人の大将は、おはせずや侍りける」「さらばしも、花の散るも惜しからじ」など、口々、いと立てたてまつら

まほしげなるけはひどもなり。「そのいたう屈じたる名ざしこそ、よそへつべかめれど、こよなう見くらべたまはんが、妬ければ」とて、うち笑みたまへる愛敬、花の匂ひよりもこよなうこそ勝りたまへれ。（巻四②二三七～二三八）

諸注指摘するように、「ややもせば、下りたちぬべき心地こそすれ。などて、今しばし若うてあらざりけん」は六条院蹴鞠における光源氏の「かばかりの齢にては、あやしく見過ぐす、くちをしくおぼえしわざなり」（若菜上⑤一二五）という言葉を引くものであり、ここでも狭衣はやはり光源氏と自分を重ねているのである。先に挙げた三か所の「光源氏」と同じように、狭衣は光源氏を装いたいのだ。しかし御簾内の女房たちは「まめ人の大将は、おはせずや侍りける」と夕霧のように蹴鞠に参加することを勧める。狭衣が光源氏を装おうとしても、周囲からは夕霧にされているのだ。

『狭衣物語』には様々なレヴェルでの物語引用がなされている。物語の構造・方法において他の物語をふまえるようなこともあれば、引歌はじめ表現において引用することもあり、また、登場人物名を具体的に挙げることもある。作中人物の心中思惟や台詞で他作品の具体名を挙げることと、物語の方法に他の物語が踏まえられていることは、レヴェルを異にする問題である。しかし、夕霧引用は、その両面において行われているのである。いずれの場合でも、狭衣は自身を光源氏にしようとしている。弘徽殿を舞台にした密通という展開が用意され、自身も何度も光源氏を意識した発言をする。しかし、一方で、物語は一品宮との婚姻に夕霧巻の力学を用い、花宴巻引用に始まったはずの女二宮物語までも夕霧巻引用として取り込んでいく。さらに、周囲の女房という登場人物の発言レヴェルでも、狭衣を夕霧扱いする。『狭衣物語』における対『源氏物語』意識というものがあるのだとしたら、それは狭衣に対する光源氏なのではない。実は、非光源氏であり、夕霧だったのである。

注

1　女二宮物語と一品宮物語とのかかわりを指摘しているものは、堀口悟「一品宮物語の状況設定―『狭衣物語』巻三、狭衣が一品宮と結婚に至るまでの過程を中心に―」（『茨城キリスト教短期大学研究紀要』二四　一九八四・一二）、片桐利博「一品宮物語について」（『物語文学の本文と構造』和泉書院　一九九七）、鈴木泰恵「『狭衣』一品宮物語の方法―過去と現在の接触をめぐって―」（『中古文学論攷』八　一九八七・一二）、久下裕利『狭衣物語』の方法―作中人物継承法―」（『狭衣物語の人物と方法』新典社　一九九三）などがある。

2　誰のどういう言葉なのか、解釈が揺れているところである。新編全集は「中納言典侍を私と同様にお考えください」という大弐から狭衣への伝言と

取る。しかし、狭衣の心を「御心」ではなく「心」とすることに不審があるとし、「（私と）同じ気持ちで（狭衣さまにお仕えなさい）」と大弐が中納言典侍に伝言したと取る全註釈の説に従いたい。なお、他系統では「申し置きし」にあたる箇所がなく、中納言典侍の言葉となる。このあたりの異同は全註釈Ⅱ七一頁注一一に詳しい。

3 注1堀口論文。

4 増田繁夫「平安中期の女官・女房の制度」（『評伝紫式部―世俗執着と出家願望―』和泉書院　二〇一四）によれば、中宮内侍は内侍司に所属していて、中宮に出向している兼任の掌侍であるという。

5 命婦に関しては、令外官として取る加納重文「命婦」（『平安文学の環境―後宮・俗信・地理―』和泉書院　二〇〇八）と、四位五位の女官女房を指すとして職階ではないとする前掲注4増田論文の説がある。

6 堀口悟「狭衣即位の意義―『狭衣物語』の主人公の天皇即位を考える―」（『論叢狭衣物語2歴史との往還』新典社　二〇〇一）。

7 内閣文庫本は後二首の順番が逆、流布本は三首目の上句が「憂き身には秋も知らるる荻原や」と、諸本に異同があるが、大意に変化はない。

8 森下純昭「狭衣物語の贈答歌―その変則性について―」（『岐阜大学国語国文学』一二　一九七六・二）

9 石埜敬子『狭衣物語』の和歌」（『和歌文学論集3和歌と物語』風間書房　一九九三）。倉田実「〈逢ひて逢はぬ恋〉の狭衣―女二の宮の物語」（『狭衣の恋』翰林書房　一九九九）もこれに従っている。

10 前掲注1鈴木論文。

11 森下純昭「狭衣物語の人物関係―「らうたし・らうたげ」をめぐって―」（『岐阜大学国語国文学』一三　一九七八・三）、久下晴康（裕利）「『狭衣物語』の構造」（『平安後期物語の研究』新典社　一九八四）、鈴木泰恵「恋のからくり―源氏宮思慕をめぐって」・「思慕転換の構図―源氏宮から女二宮へ」（『狭衣物語／批評』翰林書房　二〇〇七）。

12 「思ひあまりたまひて」のところ、内閣文庫本は「思給て」。流布本は深川本と同じ。「思ひあまり」とある方が狭衣の独り言を封じられた苛立ちが際立つ。

13 倉田実「〈濡れ衣の恋〉の狭衣―一品の宮の物語」（『狭衣の恋』翰林書房　一九九九）。

14　飛鳥井姫君の袴儀について意思を探り合う「おもふより」の贈答は流布本では「書きつく」となっている。第一系統は「かきくつす（かき崩す）」あるいは「かきつくす（かき尽くす）」であるので、こちらを取る。

15　土岐武治『狭衣物語の研究』（風間書房　一九八二）、阿部好臣「『狭衣物語』主題攷―月と心深しの構図」（『物語文学組成論Ⅱ―創生と変容』笠間書院　二〇一一）、久下裕利「女二宮の位相」（『狭衣物語の人物と方法』新典社　一九九二）など。

16　なお、この典侍が「中納言」であるのも、朧月夜づき女房に「中納言の君」がいることと無関係ではあるまい。前節にて指摘した一品宮の少将命婦と落葉宮の小少将との関係と同じである。

17　前掲注15久下論文は、「意図的な花宴巻との符号」とするが、「藤壺への満たされぬ思いが朧月夜との君との偶発的な出会いを導いたのとは違って、ここでは狭衣は源氏宮の影を引きずってはいない」と指摘する。しかし、藤壺への思いをきっかけに朧月夜との逢瀬が始まる光源氏に対して、狭衣は女二宮を抱いて「かの室の八島の煙立ちそめにし日の御手つき思ひ出でられて」（巻二①一七四）と源氏宮を思い出す。最愛の女君を思う順序が逆になっているのであり、そうした『狭衣物語』の引用のありかたに注目したい。なお、狭衣が女二宮の感触に源氏宮を重ねていることは、鈴木泰恵「〈形代の変容〉―認識の限界を超えて」（『狭衣物語／批評』翰林書房　二〇〇七）で指摘されている。

18　久下裕利「狭衣大将の人物造型―「源氏取り」の方法から―」（前掲注1所収）。

19　前掲注1久下論文。

20　萩野敦子「『狭衣物語』―男主人公狭衣と『源氏物語』（『人物で読む源氏物語　光源氏Ⅰ』勉誠出版　二〇〇五）は女二宮に対する狭衣の恋愛態度に夕霧や柏木の影響を指摘し、「夕霧や柏木は、光源氏的心性の男主人公から薫的心性の男主人公への橋渡し的な役割を果たしているとみなされるので、『狭衣物語』が「光源氏」に主人公としての枠組みを依拠しつつも、その内面性については「光源氏以降」の男君たちに依拠したことが、ここでも確認できる」とする。

21　後藤康文「もうひとりの薫」（『狭衣物語論考　本文・和歌・物語史』笠間書院　二〇一一）はこの三か所を「『狭衣物語』作者の『源氏物語』を積極的に取りこんでゆく創作態度の一端をうかがわせるもの」と指摘している。

第一節　漂流譚―『うつほ物語』を起点に

はじめに

『うつほ物語』は遣唐使として旅立った清原俊蔭の漂流譚から始まる。遣唐使として旅立った俊蔭は波斯国に漂流し、そこから西へと向かう中で秘琴と天女からの予言を得て帰ってくる。漂流こそが物語の始発になっているのだ。また、藤原の君巻には良岑行正の渡唐経験が語られる。行正の渡唐は誘拐によるものであり、『うつほ物語』内における俊蔭漂流譚の変奏となっている。

史上、遣唐使はたびたび漂流した。新羅と関係が悪化してから東シナ海を横断する危険な南路を取るようになったことに加え、乗員の増加にともなう遣唐使船の大型化が原因として指摘されている[1]。なかでも、結果的に最後の派遣となった承和三年（八三六）に始まる第一九次遣唐使[2]は、遭難・漂着や原住民による殺戮があり、二百数十名の犠牲者を出した[3]。『うつほ物語』の俊蔭漂流譚の背景には、命がけの航海であった遣唐使の事跡がある。

一方、『うつほ物語』と同じく渡航譚を持つ『浜松中納言物語』や『松浦宮物語』では、主人公は漂流せず易々と唐に渡っていく。多くの犠牲を払った遣唐使が廃止されて久しいことが影響しているのだろう。しかし、これらの作品は漂流譚こそないが、俊蔭漂流譚の影響を確かに受けているように思われる。本稿では俊蔭漂流譚を他の物語における渡航・渡唐譚との影響関係から考察する[4]。

一　『竹取物語』の場合

『うつほ物語』以前、『竹取物語』にも二つの漂流譚がある。くらもちの皇子が語るものと、大伴御行の大納言のものである。『うつほ物語』への影響を考えるために、初めにこれらを考察する。

（1）くらもちの皇子――偽の漂流譚

蓬莱の玉の枝を要求されたくらもちの皇子は、工匠たちに偽物を作らせて、それを自ら旅して得てきたように偽装した。そして竹取の翁に「いかなる所にかこの木はさぶらひけむ」（三〇～三一）と問われ、偽の漂流譚を語る。

この偽の漂流譚は苦難の連続である。「むなしき風にまかせて歩く」（三一）という旅で、「ある時は浪荒れつつ海の底に入りぬべく、ある時には風につけて知らぬ国に吹き寄せられ」（三一）たり、「来し方行く末も知らず、海にまぎれむと」（三一）したりしたという。ここには遣唐使の危険な航海の様子が反映されている[5]。

さらには、「鬼のやうなるものいで来て、殺さむとしき」（三一）や、「いはむ方なくむくつけげなる物来て、食ひかからむとしき」（三一）という目に遭ったという。これにも、史上、斉明天皇五年（六五九）の第四次遣唐使、天平五年（七三三）の第十次遣唐使、天平勝宝四年（七五二）の第十二次遣唐使、そして、時代も近く『竹取物語』のみならず『うつほ物語』への影響も指摘されている承和三年（八三六）の第十九次遣唐使などが、漂着先の住人からの攻撃で死傷者を出したこととの関わりが指摘されている[6]。

しかし、蓬莱の山を目指したとするくらもちの皇子が語るのは史上の遣唐使たちと同じような現実的な漂流譚ではない。史上の遣唐使たちが出会った相手は異国人とはいえ同じ人間であったのに対して、彼が出会ったのは「鬼のやうなるもの」（三一）や、「食ひかからむ」（三一）とする「いはむ方なくむくつけげなる物」（三一）である。「食ひかからむ」（三一）とされたと語る以上、恐ろしい異国人を比喩的に表現しているわけではなく、人外のものであると言いたいのだろう。そうすることによって苦労話をいっそう大きくし、唐ではなく仙郷たる「蓬莱の山」を目指すのにふさわしい話に仕立て上げている。

くらもちの皇子は、「海に漂ひて、五百日」（三二）で蓬莱の山らしき山にたどり着いたという。二、三日ほど様子見をしていると、「天人のよそほひしたる女」（三二）が出て来て、そこが蓬莱の山であると教えてくれ、ここでかぐや姫に言われた通りの玉の枝を得て帰国したとする。あれほど苦労した往路に対して、復路は「追風吹きて、四百余日になむ、まうで来にし。大願力にや」（三三）という。出会った天女の加護であるとでも言いたげである[7]。

勿論、全てはくらもちの皇子の創作である。蓬莱の玉の枝を得るための漂流譚は、かぐや姫を得るための偽りの漂流譚である。結局、工匠たちが乗り

込んできたことによって偽りは露見する。しかし、逆にいえば、工匠たちが乗り込んでこなければ露見しなかった。史上の漂流譚をふまえ、仙郷への旅にふさわしい内容につくりかえて語らせたこの漂流譚は、信じられるに値するものとしてえがかれている。

（2）大伴御行――漂流なき漂流譚

龍の頸の玉を要求された大伴御行は、任せた家人たちから音沙汰がないことにしびれを切らし、自ら難波に出向いて船に乗り、「筑紫の方の海」（四五）に出る。しかし、「疾き風吹きて、世界暗がりて、船を吹きもて歩く。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入りぬべく吹き廻して、浪は船にうちかけつつ巻き入れ、雷は落ちかかるやうにひらめきかかる」（四五～四六）という目に遭う。楫取は「御船海の底に入らずは、雷落ちかかりぬべし。もし、幸に神の助けあらば、南海に吹かれおはしぬべし」（四六）と泣く。良くて南海漂着という事態である。

この原因を、楫取は「龍を殺さむと求めたまへばあるなり。疾風も、龍の吹かするなり」（四六～四七）と言う。それを聞いた御行が「をぢなく、心幼く、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」（四七）と何度も祈ると、ようやく雷がやんだ。これに対して楫取は「これは、龍のしわざにこそありけれ」（四七）と言う。龍は海竜王として信仰の対象であり、海路の安全を祈る存在であった[8]。その龍を殺そうとしたことで、このような災難に遭ったのだ。

雷がやんだ後、風はなおも吹くが、それは楫取によれば「よき方の風」（四七）であった。その風に三、四日吹かれ、船は「播磨の明石の浜」（四七）に着く。つまり、御行の一行は、難波から「筑紫の方の海」に出て、そこから明石に戻ったにすぎない。しかし、御行は明石に着いても「南海の浜に吹き寄せられたるにやあらむ」（四七）と思っている。楫取に「もし、幸に神の助けあらば、南海に吹かれおはしぬべし」（四六）と言われていたのだから無理もない。しかも、「南海」の浜は前節で挙げた史上の遣唐使たちが漂着し、現地の人々に襲われた地でもある。『竹取物語』は当時の人々が知っている「南海」に流されることの恐怖を利用しているといわれており[9]、御行にその恐怖があるのだ。ただし、ここでは、実際には南海に漂着したわけではないことが重要なのではないか。そこは明石であり、ほとんど瀬戸内海を往復しただけの旅であった。それを御行の頭の中で、史上の遣唐使と同じような南海への漂流譚にしてしまっているのである。御行の物語は、御行の中だけの、漂流なき漂流譚なのだ。

『竹取物語』は史上の遣唐使の影響を受けて、二つの漂流譚をえがく。しかし、ひとつは全くの作り話であり、もうひとつは漂流したと思い込んだだけの話であった。実際には漂流譚もなければ、何も得られず、かぐや姫を得ることもできなかった。それに対して、実際に漂流して重要なものを得てくるのが『うつほ物語』の俊蔭漂流譚である。

二　『うつほ物語』の場合

俊蔭は幼い頃から「才のかしこき」（俊蔭　九）人物であったため、「殊に才かしこき人を選びて、大使・副使と召す」（俊蔭　九）遣唐使に任命される。しかし、「仇の風吹きて、三つある船、二つは損はれぬ。多くの人沈みぬる中に、俊蔭が船は、波斯国に放たれぬ」（俊蔭　一〇）ということになった。ここから先、様々なものたちに導かれ、俊蔭は西へ西へと進んでいく。その中で秘琴と、俊蔭が「天の下に、琴弾きて族立つべき人」（俊蔭　一四）になり、天女の子の生まれ変わりを孫に得るという予言を得る。

この俊蔭漂流譚にも、やはり史上の遣唐使の影響がみられる。既に指摘されているように、承和三年（八三六）、結果的に最後の派遣となった第十九次遣唐使の影響が大きい[10]。六国史に残る記録や渡航者の卒伝と俊蔭漂流譚との関連が指摘されている。

第十九次遣唐使は最初の渡航失敗の際に全ての船体を破損した。特に第三船は船を壊して筏を作って漂流したため完全に使えなくなり、この後は修理できた三隻のみで出航している。俊蔭の場合も「三つある船、二つは損はれぬ」（俊蔭　一〇）と三隻での出航となっていて、物語世界でもこれが最後の派遣だったことを暗示しているともいわれている[11]。

また、出航にあたって大使藤原常嗣と争って副使小野篁が乗船拒否したことは有名である。この藤原常嗣に「遣唐の大弁、南蔭の朝臣」（祭の使　二三一）であった藤原季英（藤英）の父親との類似を指摘するとともに、小野篁に関してはその遣唐使の是非を問う姿勢が『うつほ物語』の遣唐使観の背景にあるとする論もある[12]。

さらに、第二船は帰路で南海に漂流し、原住民との戦いになって多くの死傷者を出した。その中で命を落とした良枝清上のことは、『日本三代実録』に載る笛の弟子和迩部大田麿の卒伝に記され、非業の死を遂げた笛の師とその弟子という両者の関係が俊蔭と藤原仲忠の関係に類似すると指摘されている

[13]。生還者の中では、やはり『日本三代実録』に載る良岑長松と菅原梶成の卒伝に俊蔭漂流譚との関連が指摘されている[14]。特に菅原梶成は卒伝に記される漂流譚が詳細で、俊蔭漂流譚と類似しているとされる。笛の名手であった良岑長松は、俊蔭への影響だけでなく、その姓から良岑行正との関連も指摘されている[15]、

良岑長松は元慶三年（八七九）十一月十日条の卒伝に「長松無他才能。以善弾琴。配聘唐使」（巻三十六　四六三）とあり、漢詩文の才を示すと考えられる「才」はなく、琴の名手であることから遣唐使に任ぜられたことが分かる。また、漂流した第二船の乗員ではなかったが、藤原貞敏も貞観九年（八六七）十月四日条の卒伝に「貞敏无他才芸。以能弾琵琶。歴仕三代」（巻十四　二二二）と似た評価がされており、俊蔭への影響が注目される[16]。彼らはいずれも、漢詩文の「才」ではなく音楽の名手として遣唐使に選ばれた人物であった。

この貞敏は琵琶の名手として成果をあげたようである。その記述は卒伝に詳しく記され、俊蔭との関連が最も注目される。先に挙げた卒伝によれば、貞敏は「少耽愛音楽。好学鼓琴。尤善弾琵琶」（巻十四　二二一）という人物で、唐で劉二郎という琵琶の名手に砂金二百両を贈って教えを乞い、二三ヶ月で習得し、「譜数十巻」を贈られた。このとき劉二郎の「君師何人」という問に対して貞敏は「是我累代之家風。更无他師」と答えている。また、劉二郎の娘と結婚し、この娘からも「新声数曲」を習っている。さらに帰朝に際して劉二郎は送別の宴を開き貞敏に「紫檀紫藤琵琶各一面」を贈った。帰朝後、『続日本後紀』承和六年（八三九）十月一日条には「令遣唐准判官正六位上藤原朝臣貞敏弾琵琶」（巻八　九三）とあり、仁明天皇の御前で琵琶を弾いたことがわかる。俊蔭が嵯峨帝の御前で琴を弾いた場面の背景には、この貞敏の例があると考えられる。第二船で帰路に漂流した琴の名手良岑長松と、唐で学んだ楽を帰朝後に御前で披露した琵琶の名手藤原貞敏。俊蔭はこの二人を合わせたような設定になっているのだ。

ただし気をつけねばならないのは、第十九次遣唐使と俊蔭の遣唐使との間には根本的な違いがあることである。第十九次遣唐使には、長松や貞敏をはじめとして学問以外の名手が多くいた。彼らの他にも、先に挙げた菅原梶成は医学に通じた人物であったし、碁の名手である伴須賀雄もこの遣唐使で派遣されている。学問以外の技芸の名手たちに唐で磨きをかけさせる任務を与えて遣唐使に加えたことが第十九次遣唐使の特徴であったともいわれている[17]。一方、俊蔭の遣唐使は「殊に才かしこき人を選びて、大使・副使と召す」（俊蔭　十九）ものであり、俊蔭は「才のかしこき」（俊蔭　十九）人物であるから選ばれた。俊蔭の場合は遣唐使に任じられた時点では、音楽の才には全く言及がない。俊蔭の音楽の才は栴檀の蔭で琴を弾く三人の人に会ったところで初めて「俊蔭、もとの国なりし時も、心に入れしものは琴なりしを」（俊蔭　一〇）とされる。あくまで「心に入れし」（俊蔭　一〇）という程

度のもので、俊蔭の琴の才はこの漂流譚の中でこの世ならぬ者たちから後天的に与えられていく。もとより「累代之家風」を持っていた貞敏と対照的に、俊蔭は漂流を経て「琴弾きて族立つ」（俊蔭　一四）ことになる。長松や貞敏の事績を摂取しながらも、後から得ていく物語にしたところに俊蔭漂流譚の特徴がある。

波斯国に漂着した当初、俊蔭は自分が遣唐使であるということに自覚的であった。栴檀の陰で三人の人に名を問われた俊蔭は「日本国の王の使、清原俊蔭なり」（俊蔭　一三）と名乗っている。また、阿修羅に出会い、やはり名を問われたときも「日本国王の使、清原俊蔭」（俊蔭　一一）と名乗っている[18]。これが、阿修羅の守る木を得られることになり俊蔭が「天女の行く末の子」（俊蔭　一一）であることが明かされると、俊蔭は「日本国王の使」であることを名乗らなくなる。これ以降、天女に名を問われたときは「その木賜はれる衆生なり」（俊蔭　一四）と、七つの山の最初の人に名を問われたときはただ「清原俊蔭」（俊蔭　一五）と名乗る。確かにここには「「天人の子」としての自覚から来る天皇の権威の相対化[19]」が読み取れる。しかし、さらに注目すべきは、この後、俊蔭自身が名乗らないのにもかかわらず、天人の側が俊蔭が日本の者であることを言うことである[20]。

先に挙げた天女は、「その木賜はれる衆生なり」（俊蔭　一四）と言われて、俊蔭に「天の掟ありて、天の下に、琴弾きて族立つべき人になむありける」（俊蔭　一四）という予言を与える。そして、七つの山にいる子に会い「その人の手を弾き取りて、日本国へは帰り給へ」（俊蔭　一四）と言う。これはつまり、「日本国」で「琴弾きて族立つ」人になれということではないか。天人は遣唐使という日本の代表であった自覚を捨てた俊蔭に「日本国」の人である新たな意味を与えたのではないだろうか。この後も俊蔭は七つの山の最初の天人に「清原俊蔭」（俊蔭　一五）とだけ名乗ったのにもかかわらず「日本の子と見れど」（俊蔭　一五）と言われたり、仏にも「日の本の衆生」（俊蔭　一七）と言われたりするのである。

俊蔭漂流譚は、秘琴を得るとともに、俊蔭が「天の下に、琴弾きて族立つべき人」（俊蔭　一四）になり、天女の子の生まれ変わりを孫に得るという予言を得る旅であるが、それは天人と日本とを結ぶものでもある。俊蔭は阿修羅の木のもとで「天女の行く末の子」（俊蔭　一一）であることが告げられる。一方、「この山の族、七人にあたる人を、三代の孫に得べし」（俊蔭　一八）という予言も得る。「山の族」は「忉利天の天女」（俊蔭　一七）の子である。つまり、俊蔭は天女の子に転生し、天女の子は俊蔭の孫に転生するということである[21]。転生によって、俊蔭一族と天女の一族の交換が行われるのだ。そして、天女の子が俊蔭の孫になることは「日の本の国に契り結べる因縁あるによりて」（俊蔭　一八）起こることであるとされる。つまり、「日本国」の「族」と天女の一族が転生によって交換される因縁が予言されたわけである。俊蔭漂流譚はこの因縁を告げられるためのものであった。

なお、この漂流譚の展開には、先述した『竹取物語』の漂流譚と共通する点がいくつか指摘できる。くらもちの皇子は「鬼のやうなるものいで来て殺さむとしき」（三一）や、「いはむ方なくむくつけげなる物来て、食ひかからむとしき」（三一）という目に遭いながらも蓬莱の山にたどり着き、そこが蓬莱の山であることは「天人のよそほひしたる女」（三二）が教えてくれたと語っていた。俊蔭は阿修羅に「ただ今食まむと」（俊蔭　一三）とされながらも、「天女の行く末の子」（俊蔭　一三）である因縁から救われ、さらに、その天女によって導かれていく。『竹取物語』のくらもちの皇子漂流譚と類似した展開である。

また、俊蔭は「交易の船につきて」（俊蔭　一九）帰国する。復路はあまりにあっけない帰国だが、阿修羅に「日の本の父母に向かふべき便りを与へむ」（俊蔭　一二）と、天女に「日本国へは帰り給へ」（俊蔭　一四）と言われた以上、これらの加護があったことは察せられる。この点も、「追風吹きて、四百余日になむ、まうで来にし。大願力にや」（三三）としたくらもちの皇子の漂流譚と共通する点である。

『竹取物語』に語られる二つの漂流譚は、ひとつは偽の漂流譚であり、もうひとつは漂流したと思い込んだだけの話であった。要求された物を得て、かぐや姫を得るためのものであったが、何も得られず、かぐや姫を得ることもできなかった。しかし俊蔭は確かに漂流し、秘琴と予言を得て戻ってくる。しかも『竹取物語』の貴公子たちは月の住人であるかぐや姫と関係を結ぶことができなかったのに対して、俊蔭は転生によって天女と一族が交換されるという因縁を告げられる。共通した枠組みの中で対照的な物語になっているのである。

三　平安後期・中世王朝物語の場合

俊蔭のような漂流譚は、その後の作品にはほとんど見られない。『うつほ物語』自体にしてもそうである。「藤原の君」巻には行正の渡唐経験が語られる。彼は誘拐されて唐に行く。俊蔭がたどり着けなかった唐に、誘拐という偶然でいとも簡単に渡ってしまう。しかも、書と楽を学び、八年で「交易の船につきて」（藤原の君　九三）帰ってくる。『竹取物語』や俊蔭漂流譚も復路はあっけないが、それは神仏の加護によるものであった。行正の場合、何かの加護のようなものが描かれないにもかかわらず苦なく帰国している。往路も、誘拐という出来事そのものは苦難であるが、航海自体の苦難はなかった。

平安後期物語には渡唐譚を持つものがいくつかあるが、そのいずれも俊蔭のように漂流することはない。しかし、俊蔭漂流譚の持つテーマは確かに受け継がれていると考えられる。

（1）『浜松中納言物語』

『浜松中納言物語』の巻一は、次のように始まる。

> 孝養のこころざし深く思ひ立ちにし道なればにや、恐ろしう、はるかに思ひやりし波の上なれど、荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る心地して、もろこしの温嶺といふところに、七月上の十日におはしまし着きぬ。（巻一　三一）

中納言はあっさりと唐にたどり着く。ここに俊蔭のような苦難に満ちた漂流譚はない。しかし、この一文から、『浜松中納言物語』の『うつほ物語』への意識がうかがえる。「俊蔭」巻で、俊蔭は阿修羅に向かって次のように言っていた。

> その父母、紅の涙を流してのたまはく、『汝、不孝の子ならば、親に長き嘆きあらせよ。孝の子ならば、浅き思ひの浅きにあひ向かへ』とのたまひき。さるを、俊蔭、仇の風・大いなる波に会ひて、輩を滅ぼして、一人、知らぬ世界に漂ひて、年久しくなりぬ。しかあれば、不孝の人なり。（俊蔭　一二）

俊蔭は「汝、不孝の子ならば、親に長き嘆きあらせよ。孝の子ならば、浅き思ひの浅きにあひ向かへ」（俊蔭　一二）と言われていたところ、何年も漂流してしまったため、自らを「不孝の子なり」（俊蔭　一二）とする。

一方、中納言は「荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る心地」（巻一　三一）がするほどの旅であった。俊蔭の「仇の風・大いなる波」（俊蔭　一二）とは大違いである。そしてその理由を物語は「孝養のこころざし深く思ひ立ちにし道なればにや」（巻一　三一）とする。これは、俊蔭の両親の言った「汝、不孝の子ならば、親に長き嘆きあらせよ。孝の子ならば、浅き思ひの浅きにあひ向かへ」（俊蔭　一二）に対応するのではないだろうか。遣唐使によって不孝の罪を犯した俊蔭に対して、亡き父の転生に会うために渡唐する中納言は、渡唐そのものが孝行であり、そのために平穏に海を渡ることができた。『浜松中納言物語』の中納言の渡唐は俊蔭を逆手に取っているのである。

中納言は唐の都にたどり着き、亡き父の生まれ変わりである三の皇子に会い、旅の目的を果たす。しかし、唐での物語はこれで終わりにならない。中納言は唐后と恋に落ち、子を授かる。生まれた子を見て中納言は「われながらも、心強く思ひ立つかな、と思ふ道を、この契りに引かれにけるにこそ」（巻一　一〇五）と思う。三の皇子に会うための旅であったはずが、后と結ばれて子を授かるためであったのだと思うのである[22]。これも、遣唐使であったはずが、天女の族との因縁を告げられて帰ってくる俊蔭の旅と同じである。また、俊蔭は自身が「天の下に、琴弾きて族立つべき人」（俊蔭　一四）であるという予言を得たが、『浜松中納言物語』の場合は唐后の夢に、生まれた子が「これはこの世の人にてあるべからず。日本のかためなり」（巻一　一一一）という予言を得る。

さらに、俊蔭は天女によって転生の予言を与えられたが、この転生というモチーフが『浜松中納言物語』において重要であることは言うまでもない。そもそも物語の始まりが亡き父の転生であった。さらに、物語終盤では、唐后が吉野の姫君腹に転生するという予言がなされる。唐后はまず昇天し、そのことが天の声によって中納言に告げられる。その後、中納言の夢に唐后が現れて転生を予告する。このあたりのことを『無名草子』は、

> 『河陽県后、忉利天に生まれたる』と空に告げたるほどだにいとまことしからぬに、また、かの后、吉野の君の腹に宿りぬ、と夢に見たるほどなど乱りがはしく、忉利天の命はいと久しくあなるを、いつのほどにかたまさることはあらむ　（二三九）

と評する。『浜松中納言物語』の現存本文に「忉利天」の語は見えない。中納言に告げる天の声は「河陽県の后、今ぞこの世の縁尽きて、天に生れ給ひぬ」（巻四　三六一）とあり、「忉利天」とは告げていない。しかし、『無名草子』の作者の見たものでは、唐后が昇天した先は忉利天となっていたようだ。とすると、唐后が転生する吉野の姫君腹の子は、忉利天の者の転生でもあることになる。俊蔭漂流譚で転生によって俊蔭一族と因縁を結ぶ天女は「忉利天の天女」（俊蔭　一七）であった。ここにも、『浜松中納言物語』の俊蔭漂流譚への意識がうかがえる。

さらに、『浜松中納言物語』の転生は、日本人である中納言の父が唐の皇子に転生し、唐后が日本の吉野の姫君の腹に転生するという、日本と唐の間での交換である[23]。これも、俊蔭漂流譚における転生と同じである。天女の予言は、俊蔭が天女の子に転生し、天女の子が俊蔭の孫に転生するというものであり、転生によって俊蔭一族と天女の一族の交換が行われるからである。もっとも、『浜松中納言物語』の場合には日本人の母を持つ唐后をはじめとする混血の問題もあり、「事態はより複雑怪奇[24]」である。

（2）『とりかへばや物語』

『浜松中納言物語』において俊蔭漂流譚のような渡航の苦難が描かれないことは先に述べた。一方、『浜松中納言物語』には『うつほ物語』には見られなかった理由での渡航のためらいが描かれている。それは女子の渡航である。唐后は秦の親王を父に、上野の宮の娘（吉野の尼）を母に持つ。秦の親王は生まれた娘を連れて帰国しようとするが、

させまろといひける者、うなはしといひける人を率て渡りけるに、海の中の竜王のめでて、船をとどめけるにわびて、海の中に畳を敷きて置きてけるのち、女は通ふ例なし。いかにせむ、と思ひわびて、五年がほど、筑紫に過ごして、なほとどめむをかなしくおぼえければ、海の竜王に、多くのことを申し乞ひける夢に、「早く率て渡れ。これはかの国の后なれば、たひらかに渡りなむ」といふ夢を見て、よろこびつつ、五つといふ年率て渡りて……

（巻一　四三～四四）

とある。「させまろ」という者の先例から娘を連れての帰国をためらうが、海竜王に念じ、予言と加護を得て渡航に成功したという。この時に日本に残された妻が巻三以降に登場する吉野の尼である。この「させまろ」の先例と吉野という地など、『浜松中納言物語』の要素のいくつかは『とりかへばや物語』にも登場する。

『浜松中納言物語』では唐后の母が吉野に住んでいたが、『とりかへばや物語』では吉野に渡唐経験を持つ皇子が住んでいる。吉野の宮と呼ばれるこの人物は、

この世にあまり過ぎて、昔は遊学生とて十二年に一度唐土にさるべき人渡し遣はしてかの国の才を習はされけり、末の世となるままに、人の容面、根性いとわろくなりゆくにより唐に渡る人絶えにたるを、「我渡らん」と切に申し請ひて渡りたまひにければ……

（巻一　二二七）

と、志願して唐に渡っている。唐で一の大臣の一人娘と結婚して二女をもうけるが、この妻とは死別する。その後、様々な縁談を断っていると、逆恨みによって命を狙おうとする者が出てきたために帰国を決意する。その経緯は次のようにある。

この女君たちを見捨てんもいみじくかなしきに、唐土の海になにしうと言ひける人をさせまろが率て渡りけるにえ渡らずなりにけるより、女通はぬ道と聞けど、いかがはせん、船止むる海竜王もあらばやがて我も旅の空に命を捨てん、惜しからず、とひたぶるに思しなりて、亡くなりにし大臣の

子どもらに語らひて、逃ぐるやうにて帰りおはしけるに、悪しき竜王のいかに心変はりける世にか、船のよどむ時なく、思ふ方の風ことさらに送るやうにて帰りたまひにけれど……　（巻一　二二九）

ここでは『浜松中納言物語』同様、「させまろ」の先例を引き合いにして、娘を連れての帰国を躊躇っている。しかし、「思ふ方の風ことさらに送るやうに」（巻一　二二九）帰ることができた。この表現は、『浜松中納言物語』における往路の「思ふかたの風なむことに吹き送る心地」（巻一　三一）に類似している。

また、吉野の宮に対応する『浜松中納言物語』の秦の親王は、海竜王に念じ、加護と予言を得て渡航に成功した。一方、『とりかへばや物語』の場合、吉野の宮は「船止むる海竜王もあらばやがて旅の空に命を捨てん」（巻一　二二九）と思って帰国を強行したのに無事であった。そしてその理由を物語は「悪しき竜王のいかに心変はりける世にか」（巻一　二二九）とする。先に、この物語は遣唐使がないことも「末の世となるままに、人の容面、根性いとわろくなりゆくにより」（巻一　二二九）としていた。「末の世」であることが海竜王すら心変わりさせているという意識である。『浜松中納言物語』と類似した展開でありながら全く違う意識がある。『とりかへばや物語』では、命がけの航海や漂流といった展開を持つ渡唐譚とは遠く隔たった世界にある。

（3）『松浦宮物語』

『浜松中納言物語』や『とりかへばや物語』が遣唐使廃止後の渡唐譚を描くのに対して、『松浦宮物語』は時代を「藤原の宮の御時」（巻一　一五）に設定し、主人公橘氏忠を「もろこし舟出だし立てらるべき遣唐副使になしたまふべき宣旨あり」（巻一　一三）ということで渡唐させる。『浜松中納言物語』や『とりかへばや物語』に比べ、より『うつほ物語』に近い設定である。

この物語でも、やはり俊蔭のような漂流譚はなく、「思ひしよりも雨風のわづらひなくして」（巻一　二九）無事に到着する。しかし、この後の展開は俊蔭漂流譚の影響が色濃い。氏忠は八月十三夜、老翁陶紅英によって「人の国に琴の声を伝へ広むべき契りによりて、父母を離れて、我が国に渡れり」（巻一　三六）との予言を得るとともに、紅英の推薦で華陽公主から秘琴伝授を受ける。このあたりの展開は明らかに『うつほ物語』をふまえている。

しかし、氏忠の唐での物語はこれだけでは終わらない。文皇帝が崩御し、燕王の反乱がおこり、氏忠は鄧皇后らとともに未央宮を出て都落ちすること

になる。そして神仏の加護を得て敵の大将軍宇文会を惨殺する。その後、戦が終ってから氏忠は鄧皇后と関係を結ぶに至るが、この経緯は全て因縁のあることとして鄧皇后によって以下のように語られる。

宇文会と言ひし、まことは阿修羅の身の生まれきて、すでに我が国を滅ぼすべき時至れりしを、先王、文皇帝おぼし嘆きし余り、玄奘三蔵を使ひとして、天帝に度々愁へ申したまひき。我は第二の天の天衆にて、さらに下界へ降るべきゆゑなかりしかど、天帝このことをあはれびたまふによりて、天上に時の間のいとまをたまはりて、この国に生を享けて、乱を治め、国を興すべき御使ひに降り来たり。この国に、いささかのゆゑあるによりて、このことに選び当てられしかど、女の力にてはかりがたきにより、その人を定められし時、そこには天童の身として、天帝の御前にさぶらひしを、『汝、我が弓矢をたまはりて、阿修羅の化身を打ち砕くべき』よし仰せられしに　（巻三　一二三～一二四）

氏忠は阿修羅の転生たる宇文会を倒す因縁があったというのである。しかも、鄧皇后は忉利天（第二の天）の天衆の転生で、氏忠は忉利天の天衆である鄧皇后を助けるために選ばれた天童であった。この阿修羅・忉利天の天衆といったものたちは俊蔭漂流譚で俊蔭が出会うのと同じである。俊蔭は阿修羅に殺されそうになりながらも、忉利天の天女との因縁で助かる。氏忠もまた、阿修羅の転生たる宇文会と対峙した。俊蔭にしても氏忠にしても、阿修羅との対峙が忉利天の者との因縁を告げられる前の試練として設定されているのである。また、鄧皇后は氏忠に「『琴の声にかかづらひて、下界にとまるべきゆゑあり』とこそ、かたへの人も言ふなりしか」（巻三　一二六）と言う。琴に関する予言はすでに巻一でされていたが、鄧皇后から改めてなされる。この鄧皇后＝忉利天の天衆は予言を与える者として、俊蔭漂流譚における忉利天の天女の役割と同じなのである。

俊蔭漂流譚では、俊蔭と忉利天の天女は転生よって族の交換がなされるという因縁になっていた。氏忠と鄧皇后は天帝の天童と忉利天の天衆であったが、転生によって地上で人間として関係を結ぶ。『松浦宮物語』は俊蔭漂流譚を変奏させている。『松浦宮物語』に漂流そのものは描かれないが、戦による都落ちが漂流にあたるのであろう。都を落ち、逃れていく中で阿修羅と対峙する、それが俊蔭漂流譚を摂取した『松浦宮物語』の漂流譚だったのではなかろうか。

おわりに

以上、『竹取物語』から『松浦宮物語』まで、物語に描かれる渡唐譚を俊蔭漂流譚との関係から考察した。近い時代の遣唐使の悲劇をふまえて漂流譚を描いた『竹取物語』と『うつほ物語』に対して、遣唐使が廃止されて久しい時代に作られた平安後期・中世王朝物語には漂流譚は描かれない。しかし、そこには確かに俊蔭漂流譚への意識が存在している。幾重にも変奏しながら、俊蔭漂流譚は王朝物語文学史の中で息づいていた。

注

1 佐伯有清『最後の遣唐使』（講談社学術文庫　二〇〇七　もとは講談社現代新書　一九七八）。

2 本稿では遣唐使の派遣年次は、渡航に失敗して再出発した例でも最初の出発年で示すこととする。また、派遣次数も研究者によって様々であるが、本稿は東野治之『遣唐使』（岩波新書　二〇〇七）の「遣隋使・遣唐使年表」による数え方に従う。

3 前掲注1佐伯著書に詳しい。

4 王朝物語における渡唐譚を横断的に論じたものに三角洋一「渡唐譚の系譜」（『国文学』四三-二　一九九八・二）がある。

5 河添房江「『竹取物語』と東アジア世界―難題求婚譚を中心に」（『源氏物語へ　源氏物語から』笠間書院　二〇〇七）。

6 網谷厚子「竹取物語の漂流譚―遣唐使船の史実からの再検討―」（『解釈』三八-二　一九九二・二）、前掲注5河添論文など。

7 東望歩「『竹取物語』蓬萊訪問譚の再検討―典拠・話型・主題―」（『中古文学』八〇　二〇〇七・一二）は帰りに漂流の困難が描かれない原因を「うかんるり」との問答にあるとし、「帰還におけるもっとも大きな障害をこのやりとりによって克服していたためだろう」とする。

8 前掲注5河添論文。

9 前掲注5河添論文、注6網谷論文。

10 田中隆昭「『うつほ物語』俊蔭の波斯国からの旅」（『日本古代文学と東アジア』勉誠出版　二〇〇四）には、天平五年（七三三）の第十次遣唐使からの考察がある。

11 江戸英雄「長編の序章、俊蔭の物語の誕生―入唐僧の文学との関わりから」（『うつほ物語の表現形成と享受』勉誠出版　二〇〇八）。

12 岡部明日香「良岑行正―清原俊蔭との違いと独自性―」（『日本古代文学と東アジア』勉誠出版　二〇〇四）。

13 三田村雅子「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉―繰り返しの方法をめぐって―」（『東横国文学』一五　一九八三・三）。

14 前掲注12岡部論文、注13三田村論文など。

15 石川徹「宇津保物語の著作年代と作者」（『宇津保物語新論』古典文庫　一九五八）

16 前掲注13三田村論文など。

17 前掲注12岡部論文、前掲注1佐伯著書。

18 佐藤厚子「家の神の子の物語―俊蔭漂流譚の思想―」はこの名乗りを「俊蔭の旅の内実を表すものではない」とするが、そう名乗っていることと、名乗らなくなることに意義を見出したい。

19 前掲注13三田村論文。

20 江戸英雄は「うつほ物語と〈仏国土意識〉―俊蔭漂流の物語と奄然入唐願文との比較から―」（『日本文学』四四‐二　一九九五・二）でこれを〈仏国土意識〉から考察している。

21 益田勝実「物語の成長期（3）―構想を支える思想―」（『日本文学』一五‐一〇　一九六六・一一）はこれを〈開かれた輪廻〉と評価している。

22 ただし、松浦あゆみ『松浦宮物語』における〝破綻〟の方法―『浜松中納言物語』を前提とした再構成検証―」（『日本文学』五二‐一二　二〇〇三・一二）が指摘するように、この渡唐の意義の位置づけが中納言自身の中で生み出されている点は気をつけねばならない。

23 神田龍身「『浜松中納言物語』の転生―日本と唐の『とりかへばや物語』―」（『国文学　解釈と鑑賞』五七‐一二　一九九二・一二）。

24 前掲注23神田論文。

第二節　『狭衣物語』と陸奥の合戦―飛鳥井女君物語から

はじめに

『狭衣物語』巻一で、狭衣は仁和寺威儀師に誘拐された飛鳥井女君を救出し、家に送り届け、契りを結ぶ。その後、狭衣は素性を隠して通うことになるが、乳母は飛鳥井女君の処遇に悩む。

その後、威儀師は音もせねば、あさましう、かかる心のありけると、うとましう思ひながら、さすがに、たちまちにこれにうとまれんは、世にあらんこともいかが、と思へば、いとほしうて、人遣りけれど、返事をだにせねば、思ひ嘆くこと限りなし。「この人にかくて止みはべりなば、御前の御扱ひもいかが仕うまつらん。いみじきわざかな……」（巻一①八六）

乳母は生計を威儀師に頼っていたのであり、彼と連絡がつかなくなったことによって、飛鳥井女君の世話もままならなくなることを憂慮しているのである。そこで「はやはや源氏の宮の御内裏参りにとて、やんごとなき人多く参り集まりたまふなり。御前の御容貌ばかりの人はおはせじ。参りたまひね」（巻一①八六）と飛鳥井女君に源氏の宮への出仕も勧めるが、乳母自身は自身で身の振り方を考えている。

「……年老にてはべれば、行く末のことも思ひはべらず。東の方へ人の誘ふにやまかりなまし、と思ふも、誰に身譲りたてまつりてかと、よろづの絆にぞおはしますや」など言へば、「いづくなりとも、おはせん所へこそは。さらでは、いかが見おきたまはんも、安らかにやは思すべき。思ひかけぬありさまは、いかにもあるべきことならねば」とのたまふも、げにいみじう心苦しけれど、まことに知る人もなく頼りなきに思ひわびて、陸奥の国に将軍といふ者の訪るるを、さてや往なまし、と思ふなりけり。（巻一①八七～八八）

このように乳母は「東の人」、具体的には「陸奥の国に将軍といふ者」に誘われていたので陸奥に下向しようと考えているのだ。そしてそれを聞いた飛鳥井女君も、共に行くことを望む発言をしている。

この陸奥下向という構想には、前九年・後三年合戦という史実と、前九年合戦において陸奥守兼鎮守府将軍であった源頼義が、『狭衣物語』作者とされる六条斎院宣旨（源頼国女）と同族であるといった背景から出たものであるとされてきた[1]。しかし、それを読みに積極的に取り込もうとする指摘はさ

れてこなかったのではなかろうか。「将軍」だけでなく、巻一には「荒るる夷」「衣の関」といった陸奥の合戦に関わる表現が存在する。実際の戦闘が描かれることのないなかで、陸奥の合戦を想起させる表現を持つ意味は何なのか。それを考えることは、『狭衣物語』の世界がどのように形作られているかを明らかにすることになろう。本稿では、こうした問題意識のもと、飛鳥井女君物語に存在する「将軍」「荒るる夷」「衣の関」について考えたい。

一　鎮守府将軍

先に挙げたように、飛鳥井女君の乳母のもとには「陸奥の国に将軍といふ者」（巻一①八八）が訪れている。しかし、この「陸奥の国に将軍」は異同があり、検討が必要な箇所でもある。中田剛直『校本狭衣物語　巻一』（桜楓社　一九七六／以下「校本」と略す）によれば、新編全集[2]が底本とする深川本は「みちの国にさうく」であり、新編全集はこの「さうく」を「将軍」としているのだ。内閣本は「みちのくにの将軍（さうくうん）」であり、これを底本とする大系は「陸奥の将軍」とするが、この内閣本のルビに関しては全註釈の「「さうく」からストレートに「将軍」の語が当てられないためか」（Ⅰ三八四頁注二三）とする指摘がある。全註釈はさらに三谷榮一執筆の【鑑賞・研究】欄において校本の異同を参照した上で「分布から見ると「将軍」とする蓋然性が高いようなのだが、これら本文の乱れがあるのは、書写年代から見て、鎌倉・室町幕府の「将軍」名に憚りがあったことによるかと推測される」とする。

一方、元和九年古活字本は「みちのくにのおくのさうくん」とあり、これを底本とする全書は「みちのくにの奥の佐官」とし、古活字本に近いとされる春夏秋冬四冊本を底本とする集成も「陸奥の国の奥の佐官」とする。全書は補注において「入紐では「さうくん」といふ本文により、鎮守府将軍の意に解してゐるが、「さうぐわん」の方がよい」とし、国司ならば「目」、鎮守府ならば「軍曹」となる四等官であることを指摘し、

ここは「陸奥国の奥の」とあって、辺境守備隊と解されるから、永承六年（一〇五一）から始まつて康平五年（一〇六二）乃至康平六年まで十二、三年かかつた所謂前九年の役の頼義・義家配下の軍曹が、たまたま将軍の凱旋等に従って上洛し、帰任に際して京の女を妻として任地に伴なつて行つた事等があつたのに基いて書いてゐるのであらう。

とする。

また、須田哲夫は「この場合「将軍」が訪れるというのも仰山でなじまない。もっと個人的な勧誘のように見える」ということや、後に乳母が「東男をも尋ねいでて、往なむ」（巻一①一一八）と言うことから、「奥の将軍」ではなく「奥のさうくわん」とし、荘園管理を任された地方豪族である「荘官」とする説を提唱している[3]。

以上のように本文の乱れと解釈の割れがあり、深川本「さうく」が何を示すのか難解な箇所であるが、同系統の内閣本「将軍（さうくうん）」、平出本「将軍」に従い、ここは鎮守府将軍を指すと取りたい。飛鳥井女君の乳母は、もとは鎮守府将軍と同じ従五位上相当の「主計頭といふ者」（巻一①八五）の妻であったのだから、相手として何ら不相応ではない。無論、他の王朝物語には存在しない「将軍」を登場させることへの違和感はあろう。しかし、その違和感こそが重要なのではないか。なにしろ、『狭衣物語』の成立期においては、鎮守府将軍という官そのものが極めて異例のものであったからである。異例の官である「将軍」と取ることによって、その背後にある陸奥の合戦を呼び込む読みが可能になるのだ。

『狭衣物語』の成立に関しては諸説あるが、前九年合戦が勃発した後冷泉朝より前を上限とするものはない。また、近年では後藤康文が「承保元年（一〇七四）末から承暦三年（一〇七九）の間であろう」[4]としている。この時期とすれば、後三年合戦こそ始まっていないものの、康平五年（一〇六二）終結の前九年合戦はまだ記憶に新しいところであろうし、近いところでは延久二年（一〇七〇）合戦もあった[5]。そして、これらの合戦と鎮守府将軍という官にかかわったのは、『狭衣物語』の作者とされる六条斎院宣旨と同族の武者たちであった。

そもそも、『国司補任』によると、鎮守府将軍は万寿四年（一〇二七）の藤原頼行を最後に、源頼義が天喜元年（一〇五三）に任官するまで、二十六年にもわたって不在であった。樋口知志によれば、十一世紀初頭以来、陸奥守と鎮守府将軍の間では、しばしば利害の対立による武力衝突があり、それを解消するために、鎮守府将軍の権限を陸奥守に移譲させるという策が取られ、鎮守府将軍は廃絶されたという[6]。それは安倍氏台頭の契機ともなったが、やがて永承六年（一〇五一）に、前九年合戦の発端となった安倍頼良と陸奥守藤原登任との合戦が起こると、登任の後任として頼義が陸奥守となり、天喜元年（一〇五三）には鎮守府将軍を兼官した。つまり、鎮守府将軍とは前九年合戦の安倍氏追討のため二十六年ぶりに復活した異例の官だったのである。

そして、前九年合戦終結後の康平六年（一〇六三）二月、源頼義の後任として鎮守府将軍となったのは、出羽山北の清原武則であった。在地の者が鎮守府将軍に任官されるのも、また異例のことである。さらに、延久二年合戦の後には、その功績により武則の孫である真衡が任官した。真衡に関しては

諸説あるが[7]、とにかく清原氏から続けて鎮守府将軍が出たことに違いはない。そしてこの先、康和元年（一〇九九）に藤原実宗が陸奥守と兼ねて任官するまで、鎮守府将軍の存在は確認できないのだ。

つまり、鎮守府将軍とは、前九年合戦のために頼義が任官されるまでは廃絶されていた官であり、合戦の終結後には在地の清原氏が任官することになった官である。この時期に都から下向した鎮守府将軍は、頼義ただひとりだったのである。厳密にいえば頼義も陸奥守として在庁中に兼官となったわけであるから将軍として下向したわけではないが、『陸奥話記』では「拝為陸奥守、兼鎮守府将軍、令討頼良」（一三八）と頼義を最初から将軍として扱っている。飛鳥井女君の乳母が「将軍」と言った時、そこには鎮守府将軍として陸奥に赴く頼義像が浮かびあがる。

なお、前九年合戦の後、清原氏の者たちが鎮守府将軍となったことは、源氏にとって許し難いものであったことが推察される。源頼俊が讃岐守任官を望んだ応徳三年（一〇八六）正月二十三日の申文[8]では、延久二年合戦のことと思われる軍功に触れ、清原真衡が鎮守府将軍を拝任したにもかかわらず「大将軍頼俊」である自身には恩賞がないことを訴えている。この「大将軍」は総指揮官の意であるが、鎮守府将軍となった真衡よりも自身の方が本来は「将軍」として上なのであるという意識も読み取れよう。また、『奥州後三年記』には、金沢柵陥落後、捕われた清原武衡に対して義家が「武則、夷の賤しき名をもちて、忝く鎮守府将軍の名を汚せり」（二四一）と言ったことが記されている。義家は延久二年合戦の時に国府の印鎰を奪った散位基通を捕縛しており、これによって頼俊は陸奥における追討の停止を命じられる（『扶桑略記』延久二年八月一日条）という、大和源氏頼俊・河内源氏義家の争いをうかがわせるものがある[9]が、「将軍」に対する意識は同じ源氏の武者として通じるものがあったのだろう。なお、頼俊、義家と六条斎院宣旨は、祖父同士が兄弟という関係にある。宣旨の弟である頼綱は承暦三年（一〇七九）の延暦寺強訴において頼俊とともに都の警備にあたった。作者の問題に深入りするつもりはないが、『狭衣物語』が源氏の武者たちの世界と近接するところで生まれたということは、やはり念頭に置いておく必要がある[10]。

こうした背景のもとで飛鳥井女君物語をとらえてみれば、陸奥下向というのはきわめて危険の大きいものであったことが分かる。乳母が頼ろうとしている「将軍」はもはや受領官ではなく、『陸奥話記』でいうところの「追討将軍」「征伐将帥」としての役目を負った鎮守府将軍なのである。合戦さえなければ、陸奥はきわめて実入りの良い地である。『陸奥話記』にも、安倍頼時（頼良の改名）が頼義に対して「傾首給仕、駿馬金宝之類、悉献幕下、兼給士卒」（一四〇）と陸奥の特産である駿馬や金宝を捧げる様が描かれている。飛鳥井女君の乳母は「主計頭といふ者の妻にて、なま頼りあるが、思ひかしづきて、年頃過しけるを、その男失せて後は、いとわりなきありさまにてありければ」（巻一①八五）と、初登場時から困窮が語られていた人物であり、

陸奥下向を考えたのも、仁和寺威儀師と連絡がつかなくなったことによる生活の不安からであった。「将軍」からの誘いは、この状態を抜け出す好機だったのだ。しかし、ひとたび合戦が始まれば、女たちも安穏としてはいられない。頼義配下から安倍側に寝返った藤原経清は、その離反の際、「頼時、遣軽騎、出於間道、将攻国府取将軍妻子云々」（『陸奥話記』一四三）との流言を用い、官軍を混乱させた。これにより頼義は妻子のいる国府に引き返すまでの事態になっている。頼時によって人質にされかねない「将軍妻子」は、飛鳥井女君の乳母がそうなるかもしれなかった姿である。そしてそれは、「かくよろづにところせき身を、いかにも具しならひたまひてこそ、いづくへも」（巻一①八九）と同行を望んだ飛鳥井女君にも同様に降りかかるかもしれなかった運命であった。

飛鳥井女君の乳母の「東の方へ人の誘ふにやまかりなまし」、「陸奥の国に将軍といふ者の訪るるを、さてや往なまし」という言葉は、こうした過酷な世界を物語に呼び込む。『狭衣物語』の世界には確かに陸奥の合戦がはりついているのだ。そして飛鳥井女君は、そこに身を投じようとしているのである。

二　荒るる夷

飛鳥井女君の陸奥下向という設定は、合戦の世界を物語に呼び込むものであった。飛鳥井女君が向かおうとしている先は、きわめて危険な世界である。しかし、陸奥下向を決めてからも、飛鳥井女君はそれを狭衣に伝えようとはしない。

さらば幾日こそは、と数へられたまひて、心細ければ、とかくこそは、とほのめかさんもつつましうて、何となく思ひ乱れたるけしきのみ増さればと、下向が近づいても伝えず「思ひ乱れたる」のみである。その様子に狭衣は、「かくおぼつかなきありさまの頼みがたさのつらきにや、と心苦しけれど、かく思ひがけぬありさまをば、しばし人にも知らせじ」（巻一①九〇）と、自分のせいであると心を痛めつつも、あくまで飛鳥井女君との関係を隠しておこうとする。そして素性を打ち明けないまま、「我が御心ざしの浅からぬを、遂になど、思し頼みて、行く末遠く契りたまふ」（巻一①九〇〜九一）のである。（巻一①九〇）

こうした狭衣と飛鳥井女君の関係を描いた直後に、物語は源氏の宮を登場させる。狭衣が源氏の宮のもとを訪れると、宮は堀川の上と碁を打っている

ところであった。

宮は草の香の単衣たてまつりて、向ひきこえさせたまへるに、小さき御几帳も押しやられて、いとはればれしければ、はしたなく思して、碁をうちさして、碁盤に少し傾きかかりて、扇をわざとなく紛らはしたまひて、母宮の見たまへば、いちじるくもえ背きたまはず、いとわりなし、と思したる御顔のうつくしさは、千代を一夜にまもるとも、飽く世いつか、と見えたまふにも、飛鳥井の宿りは、戯れにもあさましうぞ、思し続けられたまひける。

（巻一①九一～九二）

源氏の宮の美しさに、直前に描かれていた飛鳥井女君との契りは「戯れにもあさましう」と捉えなおされてしまう。さらに、「少しも劣りたらん人を見ては、何しに世にはあるべきぞ、このこと違ひはてなば、いかにもあれ、あるべきことかは」（巻一①九二）と思い、「例のもろき涙」（巻一①九二）がこぼれそうになる。一方で堀川の上からは、女二宮との結婚話を進めるよう催促される。そしてここに、注目すべき表現がある。

「昨夜は、内裏より尋ねさせたまひしかど、おはし所知りたる人もなくてこそ。かの侍従内侍のもとに、御けしきほのめかしたまへ。あまり若々しきやうなれ、とこそあれ」と聞こえたまへば、その御答へはなく、「殿の例ならぬ御けしきなりつれば、この勘当にこそありけれ。いさや、はかばかしかるまじき身にこそはべるめれ。かく常に便なき者に思しためるは」とて、うち涙ぐみたまへるまみ、けしきは、荒るる夷もなびきぬべき御けしきしたまひたれば……

（巻一①九二～九三）

狭衣の心を占めているのは源氏の宮への想いである。女二宮との縁談に乗り気でない狭衣は、話をそらしつつ涙ぐむ。その狭衣の姿を、物語は「荒るる夷もなびきぬべき御けしき」とするのである。

さらに、この後、几帳に姿を隠してしまった源氏の宮に想いはつのり、狭衣は和歌と漢詩句を誦じるが、その様は、

いひ知らぬ武士なりとも心やはらぎ、あはれかけきこえぬは、あるまじげなれば、ただかやうにてさぶらふ人々も、馴れ仕うまつる限りは、思ふことなきやうにてぞさぶらひける。

（巻一①九六）

とされる。流布本系の場合は、堀川の上に対する狭衣の返事が異なり、先の「荒るる夷もなびきぬべき御けしきしたまへば」という表現は存在しないが、代わりにこの「いひ知らぬ武士なりとも心やはらぎ、あはれかけきこえぬは、あるまじげなれば」が「荒き夷も泣きぬべき御さまなり」[11]となっている。

諸注指摘するように、「荒るる夷」は陸奥の合戦を物語に浮かび上がらせる表現であり、心動かす「夷」たちは『狭衣物語』だけでなく平安後期物語に

しばしば登場する表現である。

・涙を浮けてつくづくとながめたまふ気色、いみじき夷といふとも、見たてまつらば、かならず涙落ちぬべき御有様なり。（『夜の寝覚』巻一　八三）

・顔に袖をまぎらはしてうち泣き給へるさま、いみじからむ荒蝦夷も泣きぬばかりに……（『浜松中納言物語』巻四　三七八）

・なまめかしう、心深げに聞こえつづけたまふことどもは、奥のえびすも思ひ知りぬべし。（『堤中納言物語』逢坂越えぬ権中納言　四三九）

・ほのかなる灯影に、いとど身もなくあはれげなるさまにて、髪はいと長くうち添へて腹はいとふくらかにてうち臥したまへる、この世ならざらん武士・奥の夷と言ふらんものにてだにうち見んあばれおろかなるべくもあらぬを……（『とりかへばや物語』巻三　三三六）

「夷」それ自体であれば、『伊勢物語』に「陸奥の国」の「なでふことなき人の妻」に「さるさがなきえびす心」（一五段　一二七）という表現が見られたり、『源氏物語』にも常陸介北の方である浮舟の母君が「わが娘は、なのめならむ人に見せむは惜しげなるさまを、夷めきたる人をのみ見ならひて」（東屋⑦三〇三）と発言したりしている。しかし、先に挙げたように、憂いを帯びた人物の美しさを表す際の引き合いとして使われているのは、平安後期物語の特徴である。『源氏物語』においては「いみじき武士・仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさま」（桐壺①三〇）と、「武士・仇敵」と表されていたところに、東北の合戦を背景に「夷」という語が登場したのだろう[12]。そういった意味では確かに「当時の流行語」[13]であっただろうといえる。

一方で、『狭衣物語』の場合は、他作品と同様にとらえるわけにはいかない。「荒るる夷」という表現が巻一の、しかも、飛鳥井女君の乳母が「将軍」と共に陸奥に下向しようとしている場面の後に用いられていることにこそ意味がある。

飛鳥井女君の乳母が「将軍」と共に陸奥に下向し、女君もそれに同行するという展開は、女君が陸奥の合戦に巻き込まれる可能性を示すものであった。そのとき女君を危険にさらす存在こそが、この「荒るる夷」なのではないか。頼義は治暦元年（一〇六五）のものとされる申文で「爰奥州之中、東夷蜂起」「今頼義之征東夷也」（『本朝続文粋』巻六・一〇三）と、自らが戦った相手を「東夷」と呼んでいるし、延久元年（一〇六九）に後三条天皇は「頼義征討東夷之故」（『皇代記』四七四）に、大般若経の供養を行っている。また、頼俊は延久二年（一〇七〇）十二月二十六日の解文に「荒夷発兵、黎民騒擾」（『朝野群載』巻十一・二八五）と、まさに「荒夷」という表現を用いている。さらに、先に挙げたように後三年合戦において義家が「武則、夷の賤しき名をもちて、忝く鎮守府将軍の名を汚せり」と言ったという逸話もある。「荒るる夷」とは、まさに飛鳥井女君らが出会わんとしている存在なのである。

こうした陸奥の合戦の過酷な世界を導入しておきながら、物語は「荒るる夷」を「荒るる夷もなびきぬべき御けしき」と狭衣の美しさを表すために用いる。狭衣に「なびきぬべし」とされる「荒るる夷」は、飛鳥井女君たちが出会わんとしている存在と、あまりにかけ離れてはいないだろうか。この落差こそが問題である。

しかも、物語が「荒るる夷もなびきぬべき御けしき」と表現した時、狭衣の心にあるのは飛鳥井女君ではなかった。源氏の宮をひとたび見れば、狭衣は「飛鳥井の宿りは、戯れにもあさましう」と思ってしまう。堀川の上は女二宮との縁談を口にし、乗り気ではない狭衣の心はますます源氏の宮で占められる。この場面の後、

日の暮るるままに、色々の紐解きわたす花の色々も、袖より外にわたす露もたまらぬにや、となが め入りて、とみに立ちたまはず。虫の声、野もせの心地して、かしがましきまで乱れ遊びたるを、我だにものをと、をかしう思されて、月出で、夜更けゆくけしきにぞ、かのほどなき軒にながむらんさま、思し出でらるる。（巻一①九七）

と、狭衣は飛鳥井女君を思い、彼女のもとを訪れることになる。しかし、逆にいえば、「月出で、夜更けゆく」まで、狭衣の脳裏に飛鳥井女君の姿はなかった。

「荒るる夷もなびきぬべし」という表現は、こうした飛鳥井女君不在の中で用いられた。飛鳥井女君は、「将軍」とともに陸奥に下向しようとしているのであり、「荒るる夷」の現実的な脅威に直面しようとしていたはずだ。しかし、飛鳥井女君を忘れ去り、源氏の宮を想う狭衣を描くとき、物語は「荒るる夷」を狭衣の美しさを強調するために用い、合戦からはおよそかけ離れた世界を作り出す。飛鳥井女君の直面しようとしている過酷な世界を骨抜きにして、狭衣のいる世界（源氏の宮のいる世界）は存在しているのである。

三　衣の関

狭衣と飛鳥井女君はすれ違い続ける。もとより素性を知らせずに始まった恋だが、それに加えて飛鳥井女君には、狭衣に陸奥下向を知らせないというさらなる隠し事が加わった。狭衣には飛鳥井女君の「いみじう物思はしげなるけしき」（巻一①九七）の原因が分からない上に、「袖うちかはして」（巻一

①九七）語らいながらも、「昼の御ありさまふと思ひ出でられたまひて」（巻一①九七）と源氏の宮を思い出す有様である。飛鳥井女君は涙をぬぐう狭衣の姿に、「これはなほ、音に聞く人にこそおはすらめ、我が身のほどを思ふにも、なほ頼むべきありさまにはあらじ」（巻一①九八）と、正体に気づいたからこそ頼ることができないという考えにいたる。そして、「花かつみかつ見るだにもあるものを安積の沼に水や絶えなん」（巻一①九八）と陸奥の歌枕である「安積の沼」を入れて陸奥下向を暗示する。しかし、その意は通じず、飛鳥井女君が狭衣の想いに対する不安を抱いているのだと思った狭衣は「年経とも思ふ心し深ければ安積の沼の水は絶えせじ」（巻一①九九）と返し、言葉を尽くして想いの深さを語るのだった。飛鳥井女君は「なほかくなどや、ほのめかして、御けしきをも見まし、と思へども、思ひ立つ方とても、少しはかばかしきことにてもあらず、なかなか、思しやらん東路旅の、あさましう恥づかしければ、ただ行く末なくて止みなん」（巻一①九九）と、陸奥下向を言おうかと思うものの、結局は隠したまま行方知れずになろうと決意する。その後、女君は懐妊するが、それも「げに、かくさへなりにけるを、つゆ知らせで止みなんと、いみじうおぼゆれど、かけても、まいて、言ひ出づべきならねば、日を数へつつ泣き嘆くより外のことなし」（巻一①一一六）と隠したまま陸奥下向の日を待つことになる。

しかし、飛鳥井女君が陸奥に下向することはなかった。狭衣の乳母子道成が、狭衣の想い人とも知らずに求婚してきたからである。道成は「親の送りに、筑紫へ下るに、さうざうしきに、さるべからん人の、をかしからんをがな、率て下りて、やがて我が国へも行かばや」（巻一①一一八）と考える。大宰大弐となった父の任地下向に同行するのに、連れていく女を求めているのである。これにより乳母は陸奥下向を取りやめて、「まことに思すことならば、しばし、君にも知らせたてまつらじ。下りたまはんほどに、みそかに迎へたてまつりたまへ」（巻一①一一八）と、飛鳥井女君に知らせずに道成に連れて行かせることにする。飛鳥井女君は乳母に謀られて、陸奥とは真反対の筑紫へ連れ去られることになったのである。

やがて乗せられた舟で、飛鳥井女君は道成が狭衣の乳母子であることを知る。そして、「などて、たださし離れたる賤の男にてだにあらで、親しく、よろづ聞き合せたまふべき、ゆかりしもありけん」（巻一①一四一）と、よりによって狭衣の関係者であったことに絶望し、「ただいかにしても死ぬるわざもがなと思へば、かくて、五日になりぬれど、水などをだに取り寄せず」（巻一①一四一）と死を望むようになる。

何も知らない道成は、飛鳥井女君に求愛をし続ける。

この大夫、衣の関を恨みわぶれど、同じさまにのみ言へば、さすがに情だつ人にて、弱げなるさまを心苦しうて、近うも寄らぬなりけり。

（巻一①一四九）

頑なに拒み続ける飛鳥井女君に、道成はさすがに近寄らなくなるが、ここにも注目すべき表現がある。陸奥に代わって筑紫下向となったこの場面において、「衣の関」と陸奥の歌枕が用いられているのだ。

「衣の関を恨みわぶれど」は「直地ともたのまざらなん身に近き衣の関もありといふなり」（『後撰集』巻十六・雑二・よみ人知らず）のように、男女を隔てる衣を関にたとえ、飛鳥井女君に共寝を拒まれていることを恨む表現である。しかし、「衣の関」には、『後撰集』の例だけでなく、「衣」の縁語「裁つ」に「発つ」が掛けられることによって、陸奥へ下る人物との離別歌にも用いられる例がある。和泉式部が旧夫橘道貞の陸奥守下向に際して贈った「もろともたたましものを陸奥の衣の関をよそにきくかな」（『金葉集』三奏本・巻六・別離、『詞花集』巻六・別、『和泉式部集』）や、自らが陸奥守となって下向した藤原実方の「なににかは君にむつれて年をへば衣の関を思ひたたまし」（『実方集』）がそれである。実方には同集中、他にも「別るとも衣の関のなかりせば袖濡れましや都ながらも」との詠もある。歌枕の中には実際の地名との結びつきが薄れ、和歌的観念のもと使われるものも少なくないが、「衣の関」は実際の陸奥の衣川関を示し、そこへと去っていく人を思いおこさせる語なのだ。

そして、この「衣の関」が指す陸奥国の衣川関は、やはり合戦においても重要な地であった。ここは前九年合戦における激戦地なのである。天喜四年（一〇五六）、阿久利川の辺で起きた人馬殺傷事件で、頼義は安倍貞任に嫌疑をかけた。それに対して頼時は貞任の身柄を引き渡さず、「不如、閉関不聴」（『陸奥話記』一四〇）と言い、家来たちは「請、以一丸泥封衣川関」（『陸奥話記』一四〇）と応じた。家来たちの発言から分かる通り、防衛のために封じようとしたこの関こそが、衣川関なのである。それだけでなく、『陸奥話記』は冒頭から「子孫尤滋蔓、漸出衣川外」（一三六）と安倍の勢力が衣川の外に及んだことを語り、また、安倍に寝返った藤原経清が私的な徴税符で税を収奪する様を「率数百甲士、出衣川関、放使諸郡、徴納官物」（一五三～一五四）とする。また、康平五年（一〇六二）に衣川関が陥落する際には、ここを「過崤函之固」（一六七）と崤山や函谷関にも勝るとしている。衣川関が防衛ラインとしていかに重要な地であったかが分かろう。前九年合戦における激戦地は衣川だけでなく、官軍が大敗した黄海や最終決戦となった厨川といった地もあるのだが、貞任と義家が連歌した話（『古今著聞集』巻九）や、頼義が「我が往生極楽の望み、決定果し遂ぐべし。勇猛強盛の心、昔、衣河の館をおとさむと思ひし時に違はず」（『古事談』巻四　四〇七～四〇八）と語ったという話など、やがて説話の世界では専ら衣川が前九年合戦の地として描かれるようになる。

とすれば、道成の「衣の関を恨みわぶれど」も、やはり前九年合戦における激戦地としての衣川関を背後に抱えた表現ということになるのではないか。

飛鳥井女君は乳母とともに「将軍」について陸奥に下向する可能性があった。この「将軍」とは陸奥の合戦を平定する任を負った異例の鎮守府将軍であり、女君の行く先にあるのは「荒るる夷」の待つ戦場である。しかし、物語はその展開を捨て、道成の筑紫下向への同行を選んだ。ここで用いられる「衣の関」は、物語が回避した飛鳥井女君の末路を再度呼び起こすものとなろう。「衣の関」＝衣川関は、飛鳥井女君が巻き込まれるかもしれなかった陸奥の合戦を象徴する地名である。「衣の関」は合戦の地を呼び起こし、飛鳥井女君の死を必然のものとしながら、しかし、男女の隔てをいう歌言葉として、合戦とは無関係の道成に用いられることによって、飛鳥井女君に全く別の死をもたらすことになったのだ。それは同時に、物語が陸奥の合戦の世界を用意しつつも、そこには行かないのだという線引きをしたことになる。戦場としての「衣の関」はあくまで可能性にとどまり、物語の描き出す世界の外に追いやられたのである。

おわりに

『源氏物語』は、その準拠を十世紀前半におきつつも、『将門記』の世界を喪失し[14]、承平・天慶の乱を徹底して〈忘却〉しているという[15]。一方で空蟬の夫伊予介や浮舟の継父常陸介が「伊予」「常陸」といった戦乱の地の名を負うことから、物語が「隠蔽」した暴力や地方の反乱を「わずかな隙間から表面化させている」との指摘もある[16]。

では『狭衣物語』はどうであろうか。『狭衣物語』は『源氏物語』のように成立期から離れた時代を準拠としない。そして、生々しい同時代の記憶である陸奥の合戦を、隠蔽もせずに存在させてしまう。この時代にとって異例の官であった鎮守府将軍を存在させることによって、物語の世界に陸奥の合戦があることを確かに示している。しかし、飛鳥井女君の陸奥下向はあくまで可能性にとどまり、実現されることはなかった。浮舟と違って、飛鳥井女君は陸奥には行かない。飛鳥井女君を「行かせない」ことによって、物語は自らの世界の外縁を決めたのである。陸奥の合戦は確かに存在するが、あくまで物語の世界の外側にある。そして、その内側、物語が描きだす世界では「荒るる夷もなびきぬべき御けしき」「衣の関を恨みわぶれど」と、類型表現・和歌的観念によって陸奥の合戦が骨抜きにされる。陸奥の合戦の世界を用意しておきながら、内部に抱え込むのではなく、外部にはりつかせることによって、『狭衣物語』の空間は作りあげられていたのだ。

注

1 石川徹「狭衣物語の定位」（『国語と国文学』三六‐四　一九五九・四）、須田哲夫『『狭衣物語』―その社会意識と歴史意識について―」（『論叢狭衣物語2歴史との往還』新典社　二〇〇一）。なお、久下裕利「フィクションとしての飛鳥井君物語」（『王朝物語文学の研究』武蔵野書院　二〇一二）は橘為仲の陸奥守任官との関係から論じている。

2 参照した諸注釈書は以下の略称で示した。新編日本古典文学全集（小学館、底本は深川本）＝新編全集、日本古典文学大系（岩波書店、底本は内閣本）＝大系、『狭衣物語全註釈』（おうふう、底本は深川本）＝全注釈、日本古典全書（朝日新聞社、底本は元和九年古活字本）＝全書、新潮日本古典集成（新潮社、底本は春夏秋冬四冊本）＝集成。

3 前掲注1須田論文。

4 「『狭衣物語』の成立時期」（『狭衣物語論考　本文・和歌・物語史』笠間書院　二〇一一）。

5 この合戦は大規模なものであり、入間田宣夫「延久二年北奥合戦と諸郡の建置」（『北日本中世社会史論』吉川弘文館　二〇〇五）などにより、前九年合戦と後三年合戦の間が決して平和な時期ではなかったことが明らかにされている。六条斎院宣旨とは親戚である源義家・頼俊が関わっている合戦であり、『狭衣物語』の背景を考える上で見逃せないものである。

6 「前九年合戦と後三年合戦」「奥六郡主」安倍氏について」（『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』高志書院　二〇一一）。

7 源頼俊の応徳三年（一〇八六）正月二十三日の申文は「清原貞衡」と読めるが、小田雅史「延久蝦夷合戦をめぐる覚書」（『中世日本の政治と社会』吉川弘文館　二〇〇三）や前掲注5入間田論文などの説に従い、これを真衡と取った。ただし、野口実「十一～十二世紀、奥羽の政治権力をめぐる諸問題」（『中世東国武士団の研究』高科書店　一九九四）や樋口知志「延久二年合戦について」（前掲注6所収）のように海道平氏の清原貞衡であるとする説もある。

8 『御堂摂政別記裏文書』。『青森県史　資料編古代1文献資料』（二〇一一）を参照した。

9 斉藤利男「安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変貌―奥大道・防御性集落と北奥の建郡」（『十和田湖が語る古代北奥の謎』校倉書房　二〇〇

六）。

10 野中哲照「河内源氏の台頭と石清水八幡宮―『陸奥話記』『後三年記』成立前後の時代背景―」（『鹿児島国際大学国際文化学部論集』一四-三　二〇一三・一二）は石清水信仰の隆盛と河内源氏台頭との関わりを論じたものであるが、『狭衣物語』の作者圏の問題にも触れ、「河内源氏の武力に依存したい意向が先に朝廷にあって、それが一方では石清水信仰の隆盛に繋がり、もう一方で『源氏物語』の影響作品が次々出現する時代相をもたらしたといえる」と指摘する。

11 集成より引用。

12 佐伯真一「「朝敵」以前―軍記物語における〈征夷〉と〈謀反〉―」（『国語と国文学』七四-一一　一九九七・一一）は『陸奥話記』に関して「国家の重要事たる〈征夷〉を朝廷や将軍の側から描くことが一つの伝統たり得たこと、しかし、「夷」の異民族性が薄れるにつれ、「夷」への共感・同情も次第に流入して、〈征夷〉の視点も変化していったことなどを確認しておきたい」と述べている。後期物語における「夷」を引き合いにした表現は、こうした「夷」への眼差しの変化とも関わりがあると考えられよう。

13 三谷榮一「物語の行方」（『国語と国文学』三六-四　一九五九・四）。

14 藤井貞和「「文学」と「詩国」―古代文学の文学観―」（『立正大学文学部紀要』二六　二〇一〇・三）。

15 高木信『『平家物語』を読む〈紫式部〉、あるいは混線するテクストたち―インターテクスチュアリティの中世」（『〈紫式部〉と王朝文芸の表現史』森話社　二〇一二）。

16 伊勢光「物語における脅威としての地方／受領―伊予介と常陸介を中心に」（『源氏物語〈読み〉の交響Ⅱ』新典社　二〇一四）。伊勢は物語史における「伊予介（守）」像を追い、『石清水物語』で源氏の棟梁のイメージと相まって主人公となる過程を論じているが、この系譜上に『狭衣物語』も位置づけられるかもしれない。天稚御子降臨事件を堀川大殿に知らせたのは「伊予守某朝臣」（巻一①四七）であった。点描されるに過ぎない人物であるが、『狭衣物語』が抱える陸奥の合戦をふまえたとき、ここにも源頼義の影がよぎるのだ。なお、頼義は前九年合戦の後、伊予守に任官したが、このとき降人である安倍宗任・家任らを伴っていて、戦後処理の一環であったことがうかがえる。その後、頼義の任期終わりで宗任・家任は陸奥に帰還しようと企て、大宰府に再流された（『百錬抄』康平七年三月二十九日条）。純友の乱だけでなく、前九年合戦の延長としての「伊予」という存在があり、それがや

がて「伊予守」が東国の乱を平定するという『石清水物語』を生み出していったのではなかろうか。

第三節　『狭衣物語』における「物語」

『狭衣物語』は先行物語を様々なレヴェル取り込んでいる。ひとつには、しばしば『源氏物語』との関係を中心に論じられる、話型として〈見えない〉形で引用されるものがある。しかし、本節は「光源氏」や「仲澄の侍従」などと、先行物語の作中人物名が具体的に挙がっている箇所から考えていきたい[1]。これら〈見える〉形で先行物語が登場するとき、そこから『狭衣物語』のどのような〈見えない〉ものが見えてくるであろうか。

まず、『狭衣物語』の中から先行物語名あるいは作中人物名が挙がる箇所を確認したい。初めに「〇〇物語」と明記されないものを挙げる。

①光源氏、身も投げつべし、とのたまひけんも、かくやなど、独り見たまふも飽かねば……（巻一①一七）

②早うは仲澄の侍従、宰相中将などの例どももなくやは。（巻一①二〇）

③よそこの東宮亮の隠れ蓑もうらやましくなりたまひて……（巻一①二八）

④源氏の女一の宮も、いとかくばかりえこそおはせざりければや、薫大将のさしも心留めざりけん、とぞ思さるる。（巻一①五七～五八）

⑤「みづからくゆる宮腹の一人女のやうにやあらん」（巻一①六四）

⑥「いみじからんかぐや姫なりとも、そこの思はんことは避るべきやうなし。仲澄の侍従の真似するなめり。人もさぞ言ふなる」（巻一①七三）

⑦光源氏の須磨の浦にしほたれわびたまひけんさへぞ、うらやましう思されける。（巻二①二五四）

⑧宮もいみじうめでたう思さるれど、あまりならはぬ心地するを、隠れ蓑の中納言のまねにや、撥さしたまひつ。（巻二①二七一）

⑨もし唐国の中納言のやうに、子持ち聖やまうけんと、我ながらまれまれひとり笑みせられたまひけり。（巻二①二七七）

⑩大津の皇子の心の中をさへおしはかりたまひて……（巻二①二八一）

⑪なほなほ、かくまで見たてまつりなしつる悔しさは、「八千度の悔ひ」とか、名につきたりし大将には、やや優りたるを、神もいかに御覧ずらん、いでや、かくのみさすがに離れずおぼえば、さらにはかばかしからじと、自らの心にだに、ことわられたまふ。（巻三②一五〇）

⑫「まめやかには、昔より頼みきこえたるを、見知りたまはぬさまなるこそ、心憂けれ。竹の中にも尋ねて、世にしばしかけ留めさせんと、思した

らぬよ」と恨みたまへば、「いで、その翁も、この定にては、いと無徳にこそはべらめな」（巻三②一六九）

⑬「かの聞こえし竹取の翁、なほ語らひたまひてんや」（巻三②一六九）

⑭「竹取にほのめかしはべりしかど、いとありがたげにこそ。仲忠には、思ひおとされさせたまへるにや」（巻三②一七〇）

⑮玉の緒の姫君のやうなる、屍の中にても、かの御ありさまに、少しもおぼえたる玉の光に通はば、袖に包みても、見まほしう思し願ひつるに……（巻四②二八一）

⑯「あなおぼつかなのわざや。蝙蝠の宮にや」（巻四②二八三）

⑰「隠れ蓑の中納言にやおはすらん」など、口々戯れに言ひなせど……（巻四②三〇二）

⑱北山のわたり、法音寺とかや、袖濡らす宰相の通ひたまひし所などは、をかしかりしこと、思しめし出でらるるに……（巻四②三七六）

⑲「これや、昔の跡ならん。見れば悲しとや、光源氏ののたまはせたるものを」とはのたまはすれど、御覧ずるに、自ら描き集めたまへりける絵どもなりけり。（巻四②三九七）

これらから、作品名を出さずに作中人物名のみを出すという例が非常に多いということに気づかされる。光源氏は三例、全て狭衣が心中あるいは言葉に出して自身と比較するような場面に登場する。物語の冒頭である①「光源氏、身も投げつべし、とのたまひけんも、かくや」に始まり、⑦に挙げた巻二の「光源氏の須磨の浦にしほたれわびたまひけんさへぞ、うらやましう」、⑲に挙げた巻四の最終盤で飛鳥井女君の日記を手に「これや、昔の跡ならん。見れば悲しとや、光源氏ののたまはせたるものを」という場面だ。

これらは「光源氏」が『源氏物語』の作中人物であることを明示せず、ただ「光源氏」とだけ出している。無論、光源氏を「源氏の物語の光源氏」とは表現しないだろうから、決して表現として不自然ではない。しかし、作中人物名のみを出すという、この方法に注目してみたい。なぜならば、それが光源氏に限ったことではないからだ。

例えば『うつほ物語』の源仲澄も「うつほ物語の仲澄の侍従」ではなく、ただ「仲澄の侍従」とされている。②に挙げた、「仲澄の侍従、宰相中将などの例どももなくやは」と、⑥に挙げた狭衣に向かって東宮が言う「仲澄の侍従の真似するなめり」というのがそれだ。なお、②に挙げた「仲澄の侍従、宰相中将」とある「宰相中将」というのは『源氏物語』の薫を指しているといわれているが、『狭衣物語』中には④のように薫を「薫大将」とする表現が

あり、「宰相中将」という呼称には不審が残る。そのため「在五中将」の転化本文なのではないかという説もある[2]。深入りすることは避けたいが、それだけ「宰相中将」が何者を指すのかが分かりにくい表現になっているのは確かなのではないか。

他の例の多くは散逸物語と考えられるが、やはり作中人物名のみを出す例が多い。③の「よそこ[3]の東宮亮の隠れ蓑」や、⑤の「みづらくゆる宮腹の一人女のやうにやあらん」や、⑪の「八千度の悔ひ」とか、名につきたりし大将」などという箇所だ。

一方で、作中人物を示しているのか、作品名も併せて記しているのかが曖昧な例も存在する。⑮には「玉の緒の姫君のやうなる」とあるが、これが何らかの物語に登場する作中人物そのものを指すのか、あるいは『玉の緒』という散逸物語があって、それに登場する姫君を指すのかが分からない。ただし、これに関しては『玉の緒』というような作品が『風葉和歌集』や『無名草子』などの他資料に見えないことから、「玉の緒の姫君」は散逸物語『屍たづぬる宮』の作中人物ではないかといわれている[4]。

そうなると、同じような例はどう考えればいいのだろうか。例えば⑯の「あなおぼつかなのわざや。蝙蝠の宮にや」という箇所は、『風葉和歌集』に『蝙蝠』という物語が見えることから、『蝙蝠』という物語の「宮」だと解されている。しかし、『蝙蝠』という物語の「宮」であったとしても、その物語の誰なのかを特定するのは難しい。『蝙蝠』という物語の「宮」と考えるよりは、「蝙蝠の宮」という名で特定の作中人物を指していると取るべきではないだろうか。

他にも、⑨の「唐国の中納言[5]」や、⑧や⑰と二度出てくる「隠れ蓑の中納言」も、『唐国』とか『隠れ蓑』といった散逸物語があったらしいということから、その物語を指していると考えられるが、作中人物それのみを指していると解することもできる表現だ。

結局は物語が散逸してしまったために解するのが難しくなっているわけだが、それだけではなく、表現そのものに曖昧さがあり、混乱を生じさせるもとになっているともいえる。

次に、「〇〇の物語」などとなっている箇所を確認したい。

⑳いとあやしう「やくなきのばんさう」といひけん昔物語に、幼かりし折、なま老人の語りし心地して、いみじうをかしきに、その折の答へは、またいかが聞こえけん、忘れにけるぞ、口惜しきや。（巻三②四二）

㉑「……何物語ぞや、かかる事のあるよ」と言へば、「それのみぞ多かる。『葦火焚く屋』の親の心こそ世に憎けれ。少将もあまりなれども、男、男

親に従ひたるぞとよ」など言ふを、母宮聞きたまひて、物語にてだに、さばかり心づきなきことを、今は限りになりぬる御ありさまを、いとかくせちに思ひ嘆かせらるるも、人はいかに思ふらんなど、思しけり。

（巻三②一〇四）

㉒『袖濡らす』といふ物語の承香殿女御は、あはれなる心ばへを見つめたまひければにや、「根にさはる」とも言ひ出でたまひけん、これは世をおぼろけならず思し捨ててしかば……

（巻三②一八一）

㉓「まろが侍らざらん後のことは知らず、見きこえんほどばかり、かかる事なのたまひそ。『大井の物語』のやうならずは、限りの心地にも見捨てたまはじ」

（巻三②一九四）

以上、『狭衣物語』の中には極めて少ない例として、「〇〇物語」と、はっきりと物語だと示す例がある。㉑は巻三で一品宮との結婚に乗り気でない狭衣の様子に女房たちがひそひそと話をしているところだが、一人が「何物語ぞや」と言った後の答えの「葦火焚く屋」は『葦火焚く屋』という物語だと分かる。同じく、⑳の狭衣が思い出す「「やくなきのばんさう」といひけん昔物語」、㉒の女二宮に対して語り手が引き合いに出した「『袖ぬらす』といふ物語の承香殿の女御」、㉓の堀川上が狭衣に向かって言う「『大井の物語』のやう」といった例もある。

しかし、実際に「物語」という語を使って先行物語を挙げる用例はこれが全てであり、あまりに少ない。『狭衣物語』には「〇〇の物語」や「〇〇という物語」という表現もあるのに、そうではない例の方が極めて多いのだ。『狭衣物語』は先行物語の作中人物名を挙げるとき、その人物が登場する物語の名前を出そうとせず、出したとしても、物語とは表現せずに物語名を指すのかどうか曖昧な状態にしていることが多くなっている。

無論、これは『狭衣物語』を生み出した祼子内親王サロンでの物語享受の一端を示しているといえよう。物語合などを催し、先行物語に対して造詣が深かった集団の中でならば、作中人物名を出すだけで何者を指すのか十分に分かったのだろう。しかし、この方法によって『狭衣物語』の世界にもたらされたものがある。

それが明かされるのが、巻四で描かれる斎院での蹴鞠の場面である。

宰相中将を、大将殿、強ひてすすめたまへれば、「若々しきわざかな」とはすまへども、げに、人よりはをかしうなまめかしきさまかたちにて、数もこよなく多くあがるを、大将殿などは、いみじう興じたまうて、「ややもせば、下りたちぬべき心地こそすれ。などて、今しばし若うてあらざりけん」とのたまへば、御簾の中の人々、「まめ人の大将は、おはせずや侍りける」「さらばしも、花の散るも惜しからじ」など、口々、いと立ててまつら

まほしげなるけはひどもなり。「そのいたう屈じたる名ざしこそ、よそへつべかめれど、こよなう見くらべたまはんが、妬ければ」とて、うち笑みたまへる愛敬、花の匂ひよりもこよなうこそ勝りたまへれ。花のいたう散りかかるを見たまひて、「桃李先散りて、後なるは深し」と忍びやかに口ずさみたまひて、高欄にをしかかりたまへるまみ・けしき・御声などは、かの「桜を避きて」とて、花の下にやすらひたまへりし御さまを、**その折は見しかど**、この御ありさま、また類なげにて、何事の折節も見ゆる。（巻四②二三七～二三八）

蹴鞠をしない狭衣に対して御簾内の女房たちは、「まめ人の大将は、おはせずや侍りける」と言う。「まめ人の大将」というのは『源氏物語』の夕霧を指すのだろう。この場面は『源氏物語』若菜上巻での六条院での蹴鞠場面を引いている。

しかし、そればかりではない。「かの「桜を避きて」とて、花の下にやすらひたまへりし御さまを、その折は見しかど」とあるのは注目に値する。「桜を避きて」と言って休んでいたのは柏木だが、それを見たとしているのだ。語り手は『源氏物語』の作中世界に存在する六条院で行われたはずの蹴鞠を「見しかど」と言っているだ。この語り手の言説によって、『源氏物語』は『狭衣物語』と地続きの世界に存在することになるのではないだろうか。

つまり、この表現によって、狭衣が心内でたびたび思っていた「光源氏」は、『源氏物語』というテキストの作中人物ではなく、『狭衣物語』の世界の中で過去に実在した人物になるのだ。少なくとも語り手はそのように語っている。

先に挙げた④には、狭衣の心内語で「源氏の女一の宮も、いとかくばかりえこそおはせざりければや」という微妙な表現があった。「源氏の女一宮」とは、『源氏物語』の女一宮」と解するのが穏当であろう。しかし、この巻四の蹴鞠場面で六条院の蹴鞠を「見しかど」と言い、『源氏物語』の世界を『狭衣物語』と地続きにした語りには、例えば「光源氏の子孫の女一宮」とでも解したくなるような力がある。何しろ「源氏の物語の」とせず、あくまで「源氏の」とするのだから。

そうなると、先に確認してきた例も、別の見方ができるようになる。「光源氏」が『狭衣物語』の世界で過去に実在した人物であるならば、光源氏と同じように名が挙げられる「仲澄の侍従」や「よそこの東宮亮」や「みづからくゆる宮」といった人物たちも、『狭衣物語』の世界で過去に実在した人物であると解することが可能になるのだ。『狭衣物語』において、先行物語の作中人物名を出すときに、作品名を出さなかったり「物語」としなかったりする方法が、それを可能にしているのではないだろうか。

一方で次のような箇所がある。

さるは、人目も心弱くやと、思し忍ばぬにはあらねど、ただうち聞く集、物語、古歌なども、我が思ふ筋なるは、こよなう目留まりて、あはれにおぼゆるわざなればなるべし。（巻三②一四〇）

狭衣は「ただうち聞く集、物語、古歌なども、我が思ふ筋なるは、こよなう目留まりて、あはれにおぼゆる」人物であると設定されている。先に確認したように、狭衣は様々な人物に自分を重ねていた。『狭衣物語』中の作中人物の設定として、狭衣はよく物語の作中人物と自分とを重ねる者とされ、多くの先行物語を知っているのだ。「光源氏」や「よそこの東宮亮」や「唐国の中納言」などというのは、一見、この「ただうち聞く集、物語、古歌など」に該当する箇所であるようである。

しかし、確認してきたように、『狭衣物語』は「光源氏」をはじめとする人物たちを、先行物語の作中人物ではなく、『狭衣物語』の世界に過去実在した人物として扱っている。つまり、『源氏物語』をはじめとする先行物語は、狭衣が知っているとする先行物語に該当しないのだ。

『狭衣物語』の語り手は『源氏物語』の六条院での蹴鞠を見たとしている。そうすることで、『源氏物語』を『狭衣物語』と地続きの世界にし、また、先行物語を挙げるときにことさら物語というのを避けることで、その他の多くの先行物語の世界をも『狭衣物語』の世界と地続きであるかのようにしてきた。それは同時に、それら先行物語を、物語として扱わない、ということになるのだ。

それからもう一例、物語であることをことさらに避けた例がある。

例の、涙も落ちぬべきに、紛らはしに絵どもを取り寄せて見たまへば、在五中将の日記をいとめでたう書きたるなりけりと見るに、あぢきなく、一つ心なる人に向かひたる心地して……（巻一①五八）

狭衣がついに源氏宮に思いを告白する場面だが、ここで源氏宮は絵を見ている。その絵を『狭衣物語』は「在五中将の日記」としている。この場面が引いていると指摘されている『源氏物語』の総角巻は、次のようになっている。

在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん、すこし近く参り寄りたまひて……（総角⑤三〇四）

匂宮が目にしたのは、「在五が物語」の絵だ。『源氏物語』を引きながら、そこでは「在五が物語」とされていたものを『狭衣物語』は「在五中将の日記」としているのだ[6]。「物語」を「日記」とすることによって、実在の在五中将を呼び込む物語の論理があるといるが[7]、ここで呼び込まれた在五中将は、今われわれが「昔男」と呼ぶ、妹に恋をした在五中将だ。「在五が物語」を「在五中将の日記」とすることで、実在の在五中将ではなく、昔男として

の在五中将を、『狭衣物語』と地続きの世界に過去実在した人物として呼び込んだのだといえるのではないだろうか。

なお、ここで「日記」が登場したが、『狭衣物語』の中でも日記は作られている。

その頃の言ぐさに、ただこのことをのみ言ひののしる。公も日記の御唐櫃開けさせたまひて、天稚御子のこと、中将の作り交したまへる文ども、書き置かせたまへり。（巻一①五六）

世になべての人のすることとも見えず、ありがたかりける筆の立ち処は、いづれも見所ありてをかしき中にも、我が世にありけることども、月日たしかにしるしつつ、さるべき所々は絵に描きたまへり。我が、時々も、御覧じそめしほどよりのことどもは、今少しの目とまらせたまひて、あはれに悲しう思しめさるること限りなし。自らのありさま、我が御かたちなども違う所なうて、忍びつつ立ち寄りたまひし夜な夜なの月の光、風の音なひ、宵・暁の空のけしきなども、我が心に、をかしうもあはれにも目とまり、心をしめたまひける折々を描きあらはしたまへる、よろづよりも、かの、御心にもあらず、筑紫へ下りたまひけるありさま、目のみ霧りふたがりて、はかばかしうだにもえ御覧じやらず。歌どもは扇に書かれたりしなど、同じことなればとどめつ。（巻四②三九七～三九八）

挙げたように、狭衣が笛の音によって天稚御子を降臨させたことは「公」の「日記」に書き留められた。また、飛鳥井女君がたどってきたことは、彼女が書いた日記となって狭衣の目にすることとなった。『狭衣物語』では、語られたことが物語内で日記となって存在するに至っている。これもまた、在五中将と『狭衣物語』の世界を同次元に置く方法なのではないだろうか[8]。

以上のように『狭衣物語』には先行物語を物語として扱わず、『狭衣物語』の世界に過去実在したものとして扱おうという姿勢があることがいえる。

では、そうしようとする『狭衣物語』の論理とはどのようなものなのだろうか。

作中人物が先行物語を引き合いにするとき、気になる表現がある。実は彼らは物語を「見る」のではなく「聞いて」いる。

いとあやしう「やくなきのばんさう」といひけん昔物語に、幼かりし折、なま老人の語りし心地して、いみじうをかしきに、その折の答へは、またいかが聞こえけん、忘れにけるぞ、口惜しきや。（巻三②一〇四）

さるは、人目も心弱くやと、思し忍ばぬにはあらねど、ただうち聞く集、物語、古歌なども、我が思ふ筋なるは、こよなう目留りて、あはれにおぼゆるわざなればなるべし。（巻三②一四〇）

このように、「やくなきのばんさう」という昔物語を「なま老人の語りし心地して」とあったり、「ただうち聞く集、物語、古歌など」とあったりする。無論「こよなう目留りて」ともあるが、まず「聞く」ものとしてとらえられているのだ[9]。

また、次のような例もある。

尼になりなんと思ひたまひて、櫛の箱なる鋏を取り出でたまひて、髪かき越して見るに、常よりもこのころ繕はれて、をかしげなるが、さすがに悲しけれど、昔物語に、憂きことのあるには、さこそしけれと、ほの聞きし思ひ出でらるれば、泣く泣く、ここかしこしどけなく削ぎ落としたるに……（巻三②七三）

『狭衣物語』の作中人物たちは物語を聞くもの、語られたものとして知っている。その一方で、『狭衣物語』は具体的に挙げられた先行物語とおぼしきものは物語として扱おうとせず、『狭衣物語』の世界に過去にあったこととして処理しようとしている。『狭衣物語』には、書かれたテクストとしての物語が存在しないのだ。

それならば、それを語ってきた『狭衣物語』自身はどうなのだろうか。既に指摘がある通り、『狭衣物語』は書かれた物語として存在している[10]。次に内閣文庫本に存在する跋文[11]を挙げる。

あはれにもをかしくも、若き身の上にて思しみにける事どもをぞ、片端も書き置きためる。これは、はかばかしく故ある事を。見ぬ「蔭の朽木」になりにければ、つゆばかりもみどころあるべきやうもなきに。「ただ、男の心は薫大将、かばね尋ぬる三宮ばかりこそ、あはれにめやすき御心なめれ」と、からうじて、思ふ給へつれど、「男も女も、心深きことは、この物語に侍る」とぞ、本に。（巻四・四六七）

ここには「あはれにもをかしくも、若き身の上にて思しみにける事どもをぞ、片端も書き置きためる」とある。さらに、これは「はかばかしく故ある事」とも述べている。つまり、『狭衣物語』は自身を、事実を書き記した記録として扱っているのだ。そして、それを「男も女も、心深きことは、この物語に侍る」と、「物語」としている。

『狭衣物語』は先行物語を過去の事実として扱い、また、『狭衣物語』中の作中人物は物語を聞くものや語られたものとして触れている。『狭衣物語』には書かれたテクストとしての物語が存在しないのだ。そして、『狭衣物語』は自身を、過去の事実となった先行物語も、作中人物が聞いた語られた物語をも書き留めたものであり、「物語」であるとする。『狭衣物語』は、語られた物語も過去の事実も書き留めた、唯一の書かれたテクストとしての「物語」

なのであると、そう高らかに宣言しているのではないだろうか。

注

1 作品名や作中人物名を直接挙げるような表現を論じたものとして、丸岡誠一「狭衣に引用された散佚昔物語について」（『王朝文学』一　一九五八・一一）、三谷榮一『『源氏物語』の『狭衣物語』への影響―『狭衣物語』の創造性―」（『古典と近代文学』二　一九六八・三）、久下裕利（晴康）『『狭衣物語』の形成―「源氏取り」の方法から―」（『平安後期物語の研究　狭衣浜松』新典社　一九八四）、後藤康文「もうひとりの薫」（『狭衣物語論考　引用・和歌・物語史　笠間書院　二〇一一）、井上眞弓「先行物語の引用について―『在五中将の日記』と『隠れ蓑』の場合―」（『狭衣物語の語りと引用』笠間書院　二〇〇五）が挙げられる。

2 前掲注1後藤論文。

3 内閣文庫本「よそかの中宮亮」、他系統では「かのよしかた」などの異同がある。

4 散逸物語に関しては三谷榮一・関根慶子校注『日本古典文学大系　狭衣物語』（岩波書店　一九六五）の補注に詳しい。

5 他本では、「大将」「中将」などの異同がある。

6 この部分、『源氏物語』・『狭衣物語』ともに細かい異同が存在するが、『源氏物語』が「物語」とし、『狭衣物語』が「日記」とすることに異同はない。

7 『狭衣物語全註釈Ⅰ』（おうふう　一九九九）二三六～二三七頁「在五中将の日記」注に詳しい。

8 『狭衣物語』の「日記」を論じたものに、井上眞弓「書物―「行為」と「記憶」のメディア―」（『狭衣物語の語りと引用』笠間書院　二〇〇五）がある。

9 藤井日出子『『源氏物語』以後の「昔物語」と「物語」」（『国際関係学部紀要（中部大学）』九　一九九二・一〇）に「昔物語」の口承性が指摘されている。一方「物語」は「作り物語」であるとするが、「作り物語」であることで口承性が否定されるものではないと考える。

[10] 三谷邦明「狭衣物語の位相・「時世に従ふにや……」―狭衣物語の語り手あるいは影響の不安とイロニーの方法―」（狭衣物語研究会編『狭衣物語が拓く言語文化の世界』翰林書房　二〇〇八）。なお、『狭衣物語』における「パロール／エクリチュール」の問題を扱った論に神田龍身「狭衣物語―独詠歌としての物語」（加藤睦・小嶋菜温子編『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』世界思想社　二〇〇七）がある。

[11] この抜文は諸本によって持たないものもある。引用してきた新全集にも取られていないため、古典文学大系（岩波書店）から引用した（表記は一部私に改めた）。新全集は西本願寺旧蔵本（深川本）を底本とするが、この本は最善本ともいわれる一方で、巻四を欠いている。そのため新全集は巻四を平出本で補っているが、この平出本には跋文が存在しない。ただし西本願寺旧蔵本・平出本と同系統に分類される内閣文庫本には跋文が存在するため、内閣文庫本を底本とする大系から引用したのである。なお注意が必要なところではあるが、『狭衣物語』の物語としてのあり方がよく現れている箇所でもあるため、考察の対象としたい。

終章

以上、三章十節にわたり、女房たちの機能を中心に『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』の三作品について論じてきた。

第一章では、『うつほ物語』における、女房をはじめとした脇役の機能について論じた。『うつほ物語』のあて宮求婚譚においては、固有名を持つ女房はあて宮づきの者しか登場せず、あて宮と求婚者たちの媒介に終始した。しかし、後半部に入ると兵衛の君・孫王の君といったあて宮側近女房たちは、かつて仲介した実忠・仲忠の物語後半部におけるあり方と連動するように大きな役割を果たすようになる。

また、立坊争いの物語では、女房や男性の乳母子といった脇役たちに詳細な設定が付され、それに応じて情報の媒介者をしての役割を果たすようになる。しかし、複雑で過多な情報網のなかで主要人物たちはそれを使いこなすことができない。立坊争いの物語は、脇役たちの情報網が「使えない」ことによってネガティブに支えられていた。脇役の機能に注目することによって、『うつほ物語』の方法とその進展を明らかにすることができた。

第二章では、『源氏物語』宇治十帖を女房の固有名に着目して論じた。

宇治十帖に登場する「中将」（浮舟の母君）・「侍従」「右近」（浮舟づき女房）、「弁」（薫に出生の秘密を語る老女房）がそれぞれ負う名は、正篇において一定の造形がなされているものであった。「中将」は正篇において、貴公子のお手つきとなる女房の名であった。そして彼女らの「その後」であるかのように、浮舟の母君は八の宮のお手つきだったという過去を持って登場する。しかし、浮舟の母君は結局は「過去」の遺物たる浮舟を捨て、「現在」である常陸介北の方の役割を全うする。それは宇治十帖が自らの過去である正篇を捨てた瞬間であると位置づけられる。

「侍従」「右近」も、若く思慮が浅い「侍従」と、堅実な「右近」という正篇からの造形を継承して登場する。さらに「侍従」「右近」はともに側近女房の名であった。彼女たちが浮舟物語を大きく展開させることになるが、しかし、最後に「侍従」は実は側近でなかったことが明かされる。「侍従」も「右近」も、いかにも正篇の「侍従」「右近」らしく登場してきたが、実は身分も立場も大きく違っていた。その落差でもって、浮舟物語が正篇といかに異質なものであるかが示されているといえる。

また、「弁」は秘密にかかわりながらも加担しきれない女房であり、柏木の乳母子である弁（弁の尼）も同様であった。「弁」は「柏木の乳母子」という「過去」にとらわれたまま、弁にとって柏木と等しい薫の恋を何度でも叶えようとする。しかし、「弁」は最後まで秘密に加担しきれず、物語の「過去」

をも克服できないのであった。

彼女ら「中将」「侍従」「右近」「弁」の機能により宇治十帖と正篇との距離や落差が顕在化することを明らかにした。なお、弁の尼に源典侍の後身としての役割があることも指摘した。宇治十帖と正篇とのかかわりは、今後も様々な角度から考えていく必要がある。

第三章では、『狭衣物語』を情報網の機能や『源氏物語』引用といった視点から論じた。

『狭衣物語』では、登場人物同士が近くにいるにもかかわらず、情報が交換されないことによって物語が展開する。飛鳥井女君物語の場合、狭衣は飛鳥井女君に対して素性を隠してはいたが、狭衣が飛鳥井女君のもとに通っているということは、人物同士のつながりからいくらでも明るみになる可能性があった。しかし、狭衣の乳母子の道成・道季兄弟をはじめ人物同士は情報交換をしない。情報網があるにもかかわらず機能しないことが悲劇を導いたといえる。

また、『狭衣物語』では男女の関係が成立するとき、そこに手引きの女房が登場しないことが徹底されている。女二宮物語の場合もそうであった。しかし、物語は女房たちに「昔物語」という幻想を与え、「手引きがいるはず」「手引きをしたと疑われる」といった思い込みで展開させていく。そして、飛鳥井女君物語と同様に情報が交換されないことで、悲劇が作られる。そこには女官を兼ねる女房と乳母との職域上の違いが介在することも指摘した。

一品宮物語は、『源氏物語』夕霧巻の方法をふまえているということも指摘した。部分的な人物の設定・心中思惟はもとより、物語の方法・構造そのものに夕霧巻の積極的な引用があり、その力学が、狭衣と一品宮の結婚を作りあげている。一方で、『狭衣物語』は「噂」と「書かれたもの」との機能を切り離し、使い分けることによって、その独自性も見せていることが明らかである。

そうした一品宮物語であるが、女二宮物語と背中合わせとも言うべき形で展開するものでもあった。それは女官を兼ねる女房と乳母との職域上の違いといった問題ともかかわるものであった。さらに、女二宮物語は花宴巻をふまえて始まるが、一品宮物語はその場面を想起させつつ夕霧巻をふまえて展開する。そこから、狭衣の非光源氏性／夕霧性という対『源氏物語』意識が見えることを指摘した。

『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』はそれぞれの物語で女房はじめとする脇役たちを機能させ、物語を展開させている。物語の方法は、女房の機能を起点にとらえることが可能なのである。

なお、補遺として三篇の論考を組み込んだ。これらは前三章と直接かかわりのない既発表論文である。『うつほ物語』や『狭衣物語』を対象に、いずれ

も他作品や歴史的事象とのかかわりを論じたものだ。第一節では『うつほ物語』の俊蔭漂流譚が王朝物語史の中で変奏を重ねながら息づいていることを通史的に論じた。第二節では、『狭衣物語』の飛鳥井女君物語における陸奥の合戦を思わせる表現に注目し、『狭衣物語』が陸奥の合戦の世界を存在させながら、その物語空間の内部ではなく外部にはりつかせていることで、世界の外縁を定めていることを明らかにした。第三節では、『狭衣物語』で先行物語の名が具体的に挙がるとき、それらが「物語」として扱われていないことを指摘し、『狭衣物語』が自らを唯一の書かれたテクストであると装っていることを見出した。

いま、我々の前には多くの物語が現存している。それらは互いにかかわりなく作られたものではないし、我々も、他作品の存在を脳裏におかずに読むことはできない。補遺に収めた三篇は、本論とは関係ないようではあるが、一方で考え続けるべき問題を扱ったものである。王朝物語とは何なのか、それを作品と作品とのかかわりから見出していけないだろうか。そういった意識のもとで、この補遺を入れた次第である。

初出一覧

序……書き下ろし

第一章　『うつほ物語』論

第一節　『うつほ物語』女房論

・原題「女房論」（学習院大学平安文学研究会編『うつほ物語大事典』勉誠出版　平成二十五年二月）

第二節　「蔵開」「国譲」巻の脇役たち―情報過多の世界の媒介者

・原題『『うつほ物語』「蔵開」「国譲」巻の脇役たち―情報過多の世界の媒介者―』（『学習院大学大学院　日本語日本文学』第十号　平成二十六年三月）

第二章　『源氏物語』論

第一節　「中将」と浮舟の母君

・原題『『源氏物語』における女房「中将」―宇治十帖とその「過去」たる正篇』（『古代中世文学論考』第二十六集　新典社　平成二十四年四月）

第二節　「侍従」「右近」とふたりの女房

・原題「浮舟物語と正篇世界―女房「侍従」「右近」から―」（『物語研究』第十四号　平成二十六年三月）

第三節　「弁」と弁の尼……書き下ろし

第四節　源典侍と弁の尼

・原題「源典侍と弁の尼―亡き父へとつながる〈昔語り〉の女房」（源氏物語を読む会編『源氏物語〈読み〉の交響Ⅱ』新典社　平成二十六年九月）

第三章　『狭衣物語』論

第一節　飛鳥井女君物語の〈文目〉をなす脇役たち

・原題同じ（井上眞弓・乾澄子・鈴木泰恵・萩野敦子編『狭衣物語　文の空間』翰林書房　平成二十六年五月）

第二節　女二宮周辺の女房・女官

・原題『『狭衣物語』の女房たち―女二宮物語から」（物語研究会編『記憶の創生』翰林書房　平成二十四年三月）

第三節　一品宮物語と『源氏物語』夕霧巻

・原題『『狭衣物語』と『源氏物語』夕霧巻―一品宮物語を中心に」（『日本文学』第六四巻第九号　平成二十七年九月）

第四節　女二宮物語・一品宮物語と『源氏物語』……書き下ろし

補遺　王朝物語論

第一節　漂流譚―『うつほ物語』を起点に

・原題「漂流譚」（学習院大学平安文学研究会編『うつほ物語大事典』勉誠出版　平成二十五年二月）

第二節　『狭衣物語』と陸奥の合戦―飛鳥井女君物語から

・原題同じ（『物語研究』第十五号　平成二十七年三月）

第三節　『狭衣物語』における「物語」

・原題「物語における「物語」―『狭衣物語』の方法」（物語研究会編『記憶の創生』翰林書房　平成二十四年三月）

終章……書き下ろし